秋江隨筆

近松秋江著

金星堂出版

秋江隨筆

近松秋江著

本間文庫
文庫 14
D 1019

秋江隨筆

近松秋江著

1923

金星堂出版

目次

東京及關東

郊外小景……一
初雪……一一
郊外より……二三
日に暖かく……三三
深川雜興……四七
立食ひ……六九
春の關東平野……七五
日光湯元より……九三
男體の暮色……一〇五

文庫14
D1069

秩父紀行……一一九
木曾の明月……一三七
關ヶ原あたりの春……一四七

京都及關西

京都の冬を懷しむ……一五一
京の女と西鶴……一六五
西鶴の描いたる貧と富……一七三
西鶴の名品……一八五
光悦寺……一九三
畿内の春……二〇三
京の夏……二〇九

煙霞……二二五

社會評論一束

年の暮れ文士貧富論……二三七
有島武郎氏の財産放棄に就いて……二五一
予の勞農主義……二七一
安田善次郎の横死……二八五
文士の觀たる普選運動並に議會解散……二九五
近事偶感……三一一
軍縮會議の一考察……三一九
小說商賣の產業化……三二五
山茶花の陰より……三三三

梨園の落葉

近松が背景を成せる時代姿……三四三
新富座の近松記念興行……三五三
片岡我童の忠兵衛……三六五
吉野山その他……三七五

文藝雜感

西行の歌……三八七
「狂亂」樂屋話……三九九
本年の自作に對する世評……四一一
二十歳時代の不安と迷妄……四一五

竹内秀才の心事を悲む……四二一
文壇偶語……四四一

女子問題と教育

昇格問題……四六一
女子の高等教育……四六七
女子の爲めに……四七三
上品な女と羽織……四八三

人物の印象

岩野泡鳴氏……四九五
田中王堂氏……五〇三

無類の善人長江夫子……五一九
小川未明氏……五二七
牛門の二秀才……五三九

秋江隨筆

近松秋江著

東京及關東

郊外小景

嫩竹

東中野へ些やかな假りの庵を構へて、庭に僅かばかりの空地があるので、貸家ではあるが、植木を少し許り入れてみた。中でも竹と芭蕉はこの夏の炎暑に思ひの外よく生育して、植木屋が持つて來た時二本白い象牙の如き小さい筍が芽を出してゐたが、親竹の根を深く土中に掘つて植えたゝめに筍は長い間土の中に隱れてゐたが、とても出はすまいと格別期待もしなかつたのが、やがて一と月も立つうちに、いつしか土に龜裂を生じたかと思ふと、そこから思ひがけもなく二本の筍が現はれて來た。私はそれと知らずして買つた牝が子を產んだ如く雀躍りして喜び、一日に何度となく近づいて見て物尺をあてゝ、それが一日の間に、いか程伸びるかを測つてみるほどに大事にしてゐると、一本の方はぐん〳〵生長するに反し一本は地上に三寸ばかり芽を覗けたまゝ腐れてしまつた。一本は六月の半から七

月の半一と月ばかりの間に二本の親竹と同じくらゐに伸び上り軒の上尙ほ四五尺の高さに達し枝を翳した。三竿の竹、淸風明月の宵など緣先に端居しながら、さや〳〵と若葉に音をしてゐるのを聽いて喜ぶのも侘しい借家住ひの儚ない一興である。

芭蕉

芭蕉をぜひ植えたいと思つたが、その植木屋になかつたので、何處かにありはせぬかと心掛けてゐるうちに幸ひほかの家にあつたのを分けてもらつて植えた。これも思ひのほかよく生育して、三株の莖から伸びる芽が、初は棒の如く長く卷葉をぬき出で〻、それが半日一日のうちにも眼に見えて成長し、柔かい薄みどりの卷葉はやがて二尺から二尺五寸ぐらゐになると、そこで始めて固く卷いてゐた葉を少しづ〻端の方から披いた。そして一旦披きはじめると、一日のうちにすつかり濶葉を披いてしまふ。柔かい涼しい綠の葉は五尺から六尺くらゐに伸びて少しの風にも大きな靑い葉は輕く煽られてゐる。九十五度六度の炎暑に惱殺されてゐる時に緣先に芭蕉の靑葉が搖れてゐるのを見るのが何よりの慰めであつた。

しかし私はその芭蕉を夏日の慰めとしてよりも來る秋の雨夜の樂みとして植えたのである。此の間は今年はじめてのひどい野分がした。まだ殘暑がきびしいといつても郊外の夜はもういくらか凉味を覺えるやうになつて、夜の搔い卷の肌觸り心地よく、折から時雨の音づれる聲にふと眼を覺ますと、雨戸のすぐ外なる芭蕉の葉に降りそ〻ぐ雨が聽こえるのであつた。

野分して盥に雨を聽く夜かな

の古句の味のしみ〴〵と思はれるのもこの頃である。秋やうやく闌けるにつけ、いづれの夏の花樹よりも纎弱なる芭蕉は秋を傷むのも早い。

芭蕉葉の何となれとや秋の風

つれなく吹く秋の風は終日芭蕉の葉を吹き搖すつてゐる。やがてさしもに夏の綠を緣先一ぱいに翳してゐた濶葉の端から、だん〴〵に末枯れてゆく頃、軒端に折瀝たる秋の聲にじ

いつと獨り思ひ入る日を待つてゐる。

柿

東中野から落合のあたりは柿の木の多い處である。以前農家の籬落にまじりて朱き熟柿の色、田圃の寂びたる晩秋に情景を點出してゐたものである。今は東京の人の住宅地の垣の中に取り入れられて、その粗朴な樹の形、初夏の頃蒲枝の嫩葉は暗綠色の凉蔭を軒端につくつてゐる。柿は最も多く私をして田園の粗朴なる生活を聯想せしめる。一つは、自分の故鄕の家に柿の古木が屋敷のまわりに四五本もあつて、幼少の時、晩秋木の葉は殆ど枝から落ちてしまつた時分、高い處にある梢頭に攀ぢて烏とともに熟柿を取つた田園の樂しみを思ひ起すからであらう。去來が嵯峨の落柿舍の侘びたる生活も偲ばるゝは郊外の籬落にまじれる柿の實の紅である。秋闌くるにつれてその色倍々冴え、その味いよ〱甘熟する。

私は三坪ばかりの庭に似合ふほどの柿の木をも一本植えた。それは甘い實の成る柿であると先の持ぬしは云つてゐたが、私は味を目的としない。五月の頃の柔かい嫩葉の綠陰をめで、晩秋の頃の冴えたる朱玉の色を愛でゝである。

東中野の郊外は秋寂びたる庭に柿の實の赤く夕陽に照つてゐるのを見るに必ずしも不適當の地ではないが、京都の嵯峨の在所の侘びたる田園には比べられぬ。東京の郊外は京都の近郊ほど人を落着かしめぬからでもあらうか。

雁來紅

雁來紅こそぜひ庭に欲しいと思つて、市中の草花屋などを方々往つて訊いてみたが何處にもゝう苗はなかつた。そして種を買つて來て蒔いた。二つ葉は蒔いて五六日も立つとすぐ可愛い芽を覗けたが、丁度その時家を近い處に移したので、無數の二つ葉は土と一緒に大きなボール函に載せて引越した今の處に持つて來たが、とても育ちさうな見込みがないので放棄してしまつた。新宿の終點の草花屋にはそれがあるかも知れぬと思つて往つてみる

と、大きいのでやうやく三四寸ぐらゐの苗があつたので、買つて來て入口の生垣の際などに植えた。その頃近づきになつた西隣の家は主人が私と同縣の人であつた。家主も同じく、井は別であつたが板垣の開きから始終出入りして互の庭など見てゐた。そこには私の望むとほりの眞紅と黄色と斑になつた雁來紅が五六本あつて威勢よく育つてゐた。私はそれが羨ましくつて、自分の處の心細いのと、日に幾度となく見比べてゐた。私はそれでも根よく朝夕水を灌いでゐた。すると見込みのないと思つた雁來紅はその中二本ばかり八月の炎天に多少發育して、尖の方に猩々緋の小さい葉を出して來た。そして種類は少し異ふが隣家のを淩ぐゝらゐの大きさになつた。その頃隣家のは、ふと蟲がついて段々いぢけてしまつた。隣家の主人と私は二人でひどくそれを惜んでゐた。

すると、吾々の家とは檜葉の生垣に沿ふた道を一つ隔てた前の家の生垣の內、軒下の羽目板の脇などに、私共のとは、とても比べ物にならぬほどの大きな葉鷄頭が無數に生えてゐるのを前から時々見てゐたが、一日、夕方表の庭や通りに撒き水をして猿股一つの肩裸

體になつてゐる時、自然と口をきゝ合ふやうになつたのを機會に、そちらの庭を座敷の方に廻はつていつて見ると、これは驚くまいことか、まるで雁來紅の叢である。幾百本と數知れぬ雁來紅は、いづれも人の胸まで達くほどに伸びて、そこら一面眼覺むる如き猩々緋の雲が棚曳いてゐるかと思はれる。私と私の隣家の主人とは今更に自分達の庭の葉鷄頭の身すぼらしきを思つて、やゝ暫くの間、感嘆の餘り口もきけなかつた。私達は何とかして、その餘りに數多い雁來紅を、せめて一本づゝでもいゝから貰ひたかつたけれど、さすがに露骨にそれをいひ出し得なかつた。そして、欲しくつてほしくつて堪まらない心持ちでゐることがそこの家の御飯焚きの婆さんから主人に通じた。主人はまだ獨身で、何處かの學校へ行くらしい書生が四五人合宿してゐた。皆勉强してゐると見えて、いつも、近所中でも最も靜な家であつた。私の不在中に主人が訪づれて、

『鷄頭を大變御所望のやうですが、いくらでも上げますから取りにいらつしやい。』といつてくれた。後になつて其主人は、一つ橋商大の敎授Y氏と知つた。

欲しいほしいと思つてゐる此方の心が向うに通じて、さういはれてみると、年にも似ず子供のやうに嬌羞を感じたが、此の頃の炎天つゞきに移植して折角貰つたものを枯しでもすると惜しいと思つて機を待つてゐた。ある雨模様の夕方、雁來紅の主人は自分で、一本群を抜いて大きなのを掘つて私の庭に移植してくれた。高さは五尺にも達し、鮮紅眼を眩するばかり、しなやかに反を打つて伸びた葉の形は丁度石橋の踊りの獅子の頭を聯想せしめる。新竹と芭蕉の緑の中に一莖の雁來紅を點じて庭の眺めが俄に賑やかになつた。

これもやがて晩秋初冬の候鴻雁のおとづれる頃になつたらば、その色倍々霜に冴えて寂びたる庭を飾るであらうと、それを今から樂しみにしてゐる。（大正十一年八月二十日、時事新報）

初雪

初雪

十二月の四日から此處に來てゐます。二日に秋聲氏と一緒に來る約束をしてゐたのですが、その日は私の持病の頭痛の發作が起つたので、秋聲氏はその最中に見舞かた〴〵私の樣子を見に來てくれました。で、秋聲氏も一日延ばし、翌日三日は朝から大雨でしたが、氏はその雨の降る最中をこゝにやつて來たのでした。私はその又翌日四日の午後から東京を立つてきました。こゝは東京から來るのに電車の便の惡い所です。京濱電車を降りてからも二十町ばかりの田舍道を海岸まで車に乘らなければなりません。

東京から彼是れ二時間ばかり費して夕方ここに來てみると、秋聲氏のほかに上司小劍氏も來てゐました。氏は私達のはじめ來る日であつた二日に來たのださうです。これで三人が一つ旅館に偶然落ち合つたわけです。

秋聲小劍二氏は今まで一寸々々來た處ですが、私には初めての土地なのです、四邊はもうすつかり蘆荻の葉も褐色にうら枯れ、平潤な水田に小波が立つてゐるのも寒さうで、田圃の中につゞいてゐる悒せき田舍家の間を縫うて俥に搖られながらゆくと、海近い冬の風が遠くから强く吹きつけて來ました。この沿道のわびしい光景を見て、私は何とも云へない寂しい心地になつてゐました。やがて旅館に辿りつくと兩氏がゐるので大に心が引立つたわけです。東京の私達の知人は大抵知つてゐる土地のやうですが、現に故人の岩野泡鳴氏がよく來てゐた部屋はあそこだといつて、上司氏は私に指して敎へました。

その翌日は夕方になつて久米正雄氏と岡榮一郎氏が東京の何處かの崩れから押寄せて來て、私達の風呂に入つてゐるところへ飛込んできました。久米氏は新年物の稿に追はれて、途中で原稿用紙とペンなどを用意して來たのでした。そこで五人大一座になつて、私達先着の三老人は一滴もやらない方ですが、若い二氏は共にそれがなくてならぬので、ぽつぽつ始めかけてゐるところへ又ひよつくり中村武羅夫氏が鵠沼への歸途を秋聲氏を訪ねてやつて來ました。遂に六人といふ大一座。ちやうど今夏の箱根のやうな繁昌です。老人三人はやりませんが、若い三人はいづれも酒豪なので、かなり遲くまで秋聲氏の部屋で酒盃を手にしながら談論風發をやつてゐました。秋聲氏は流石に落着いたもので、山の如く眼の前に控えてゐる年末年始の仕事がありながら卓を前にして二十年も年の若い文壇の新鋭を對手に、いつまでも論談するのが聞えてゐました。私の部屋はその隣り、その又となりが廊下を一つ隔てゝ上司君の部屋。私と上司君とは一旦銘々の部屋に退却。流石に談話ずきの私も頭痛の持病の發作が、さういふ時に得て起り易いので自分の部屋に戻つて額をもみながらじつと寢てゐました。やがて久米、中村、岡の三氏は今夜一と晩一緒に自分達にきめられた、向うの方の二階に退散していつたやうでしたが、私も、あとで其等の若い人達の元氣のいゝ氣焰が聽きたくつて、又起き上がつてそつちの方へ行つてみました。久米氏はビールを飮みながら、ある新聞に送る小說をさらさらと書いてゐました。その傍で火鉢を圍みながら中村、岡の二君と私は遲くまで又愉快な話をしてゐました。久米君は耳のそ

ばで喧しい話をするのを聞きながら平然として書いてゐるのでした。

翌日午頃に三人は歸つて行きました。久米君は出直して仕事に來るといつてゐました。

私達年寄りは又靜かな三人になりましたが、その日はその前の二三日とはちがつて穩かな暖い天氣でした。部屋の外の廊下に立つて見渡すと、海岸の平らな荒蕪地の先に枯れ草の生ひ茂つた防波堤が長くつゞいて、育ちの惡い小松がところ〲に立つてゐる。別莊風の家もその間に一つ二つ見えてゐます。土堤の彼方に鼠色の帆のさきが、いくつも動いてゆくのが坐ながらに見えてゐる。ほかに何の物音も聞えない靜かな午後、さうして部屋の中にじつとしてゐると、その土堤の彼方の海の上を發動汽船（モーターボート）が荷物船を曳いてゆくのであらう、タツタツタツタツといふ單調なリズムをなした音が響いて來るのが、一層あたりの閑靜さを思はしめる。今はもう日每に溫度が降下して酷しい寒さが加はるばかりですが、やがて春さきになつたら、どんなに長閑だらうといふことが思はれます。土堤には黃色い蒲公英の花や眞紫の菫が咲きこぼれて、靑草の萠えそめた土堤の向うには白帆が半分ほど見えて荒れた畑のところ〲には芝居の作り花のやうに菜の花も咲くでせう。

私はそんなことを思ひながら、昨日は一日、お互に皆の部屋から部屋へと渡り歩るくのみで、外に出なかつたので、お腹ごなしに少しそこらを歩いてみたくなつたので、ほかの二人を誘つてみましたけれど、二人とも今が時よと原稿紙に向つて頻りにペンを走らせてゐる最中でしたから、强ひて同行を求めないで、ひとり、ぶらりと出てみました。午後の冬の日は室の中からみると暖かさうに照つてゐましたが、それでも戶外に出ると、さすがに襟頸に冷くしみつく樣である。私は旅館の屋敷のまはりをぐるりと廻りながら、向うの海の見える土堤の方に上つていつてみたが、寒い海は灰色に濕つて、ひた〲と濁つた波が石垣に打ち寄せてゐました。左の方は品川から東京の方につゞいた汀が遠くのびて、ごちや〲した海岸の工場地の建物がどんより曇つて見えてゐる。それでも右手の方には汚い海の沖に遠く松林が延び出てゐるのが見える。それは穴守の方です。滿目悉く荒寥としてゐるのに堪えかねて私は暫く土堤を歩いてゐたが、今度は違つた道を步いて枯れ蘆の一ぱい

立つてゐる池の脇をまた旅館の方に戻つて來ました。つまらないと云へばつまらない處ですが、相應に部屋數などのありさうな小綺麗な旅館が、そつち此方に十軒ばかりもありませうか。湯といつても鑛泉を沸かしたもので、黄濁の色をしたものだが、箱根などの湯に入りつけた者には、はじめは心地が悪いが、それでも此の五六日入つてゐるうちに、私の身體には何より腸の爲に好いことが分つてきました。十一月の末に近く、一日急に冬らしい冷い雨が降つた時あてられて大腸を悪くして淡い赤い色のまじつた粘硬さへ出てゐましたが、尤もそれは二三日養生をして服藥してゐるうちに治癒したやうであつたけれども、まだ何となく便が固まらなかつたのが、こゝへ來てから毎日二三度入浴してゐる間に段々良くなつたやうです。これが普通の白湯であつたら、たとへ一日に三度入つてもそんな効果はありません。

神經の疲勞の甚だしい私は、その夜たつた新聞を一回と半分書きかけたのみで、十一時にがつかりして床に就きました。兩隣りの二人は尙ほ遲くまでペンを走らしてゐました。

でも上司氏は何かゞ几帳面で、大抵起臥の時間は一定してゐるやうですが、明けて五十一歳の秋聲氏は、その夜殆ど徹夜をして五十枚からのある物がまだ三十枚くらゐ殘つてゐたのを書き上げてしまつて、なほその上に毎朝午前中に書くことになつてゐる新聞のつゞき物を一回書いてしまひ、翌朝私が八時に眼を覺して起きいでた頃には、もう朝湯に入つて、一と仕事あがつた後の、のんびりとした好い氣持ちになつて、溫かさうな褞袍に着ぶとりながら縁側の障子をあけて私の部屋を覗くのでした。

私はその朝は一寸東京へ行つて來る豫定で昨夜寢たのですが、昨日あまり暖かかつたせいか、昨夜々半から縁側の雨戸がこと〳〵と搖れるのに時々寒い夢を覺まされてゐたが、曉方になつて氣が付くと軒廂に雨の音が聽えてゐました。「あゝ雨だな。これでは東京ゆきも斷念だ。」と思つて、私は寢溫もつた床の中に、もぐ〳〵してゐると、一緒に東京にゆかうといつてゐた上司氏も縁側から私の部屋を覗きながら、

「近松君、今日は東京へはゆけないよ。」と、いふ。

「うむ、雨だらう。」
「雨ぢやないよ。起きて見たまへ、雪だよ。」
十二月七日は、今年の初雪でした。
「あゝさうか。隨分早い雪だな。」と、私は床の中から答へながら、ほつ〱起き上りました。さうして縁側に立ち出てみると、なるほど冷い雨にまじつて大きな雪がチラ〱飛んでゐます。でも海に近いせいか、雨の爲めに雪は降るあとから後から消えてゆきました。
私達三人は朝も晝も晩も大抵誰れかの部屋で一緒に食事をするのでしたが、その朝秋聲氏の部屋で朝食を濟まして話してゐると、女中がやつて來て、障子のところに手をつきながら、
「あの、今日はお寒うございますから、皆さまお炬燵をこしらへて差上げませうか、いかゞでございますか。」と、いつて訊く。
秋聲小劍二氏は言下に、聲をそろへて、

「いや、炬燵は入らない」
と、云つてのけたが、私だけは、大悅びで、
「うむ。こしらへておくれ。」
と、早速命じました。やがて女中は私の部屋に一枚敷布團を伸べて、その上に大和炬燵に炭團をいけて、溫々とした炬燵をこしらへてくれて、
「かうして置きますから、ぢきに暖かになります。」といつて、退がつていつた。しばらくしてから私は机の脇から蒲團の下にそつと、足を入れてみると炬燵はほか〱するやうに暖くなつてゐる。
「どうです？　あなた方來ませんか。」といつて、呼ぶと、秋聲小劍の二老は、
「どれ一つ炬燵に入つてみようかな。」といつて、障子をあけて私の部屋に入つて來ました。
そして三人炬燵につかまりながら障子の中のガラスから縁側の方を眺めると、冷雨にま

じつて、綿のやうな大きな雪片が靜かに舞ひ落ちてゐました。（大正九年十二月八日誌、早稻田文學）

郊外より

山茶花

毎年山茶花の咲く頃になつたら思ひ出す。今日は丁度、數年前文壇の導師の一人であつたエスが死んでからまる四週年になる。四年前の十一月五日の夜エスは、晩年彼の支配してゐた劇團に附屬してゐた、ある小い劇場裏の樂屋で、その秋流行した惡性のインフルエンザに罹つて寂しく死んだのである。去る者日に疎しといふ例のとほり、生前あれほど世人の視聽を動かしたエスも最早世を去つて五年の今日となつては、何等か特別の事情でもない限り彼の事を憶ひ出してみる機會は、彼と親交のあつた多くの人達の心からも逸してしまつたのである。

彼が、その頃彼と提携して新劇壇の明星（スター）と歌れた女優のエムと同棲するやうになつてからは勿論のこと、彼がその女優と四十過ぎての戀愛事件で一世を騷がしてゐた時分よりも

まだずつと前からもう私は、エスとは餘り深い交はりはしなかつた。エスは私の先輩であつて、彼のために私の啓導せられたことも決して少くはなかつたが、私自身の考へが段々發達して來るに從つて、どうかするといろ〱文藝上のことで全く從來のまゝにエスの意見に盲從することが出來なくなつたのが、私の、段々エスから離れていつた最大の理由でもあつたが、とにかく、私の頭の中に段々分化發達して來る私自身の思想傾向は遂にエスの其等とは容易に一致し難いものであることが分つたのであつた。

しかしそれにも係はらず、早い頃のエスは、私に取つて何といつても懷しい人の一人であつたに違ひない。エスとは疎い間柄となつてしまつたが、……何となればエスは古い妻子でさへそのとほり女優エムのためには棄てゝ顧みないくらゐであつたから その他の知友、先輩、後進などは女優エムの穿いた古い靴ほどの價値もない物となつてしまつたのである。――彼が演劇の仕事に携はらない時分、西洋から歸つてまだ間もなく牛込の奧の方に居て早稻田大學の教師として講義の準備にいそしむ、書齋の人であつた頃のことが、今

でも尙ほなつかしく私には思ひ起されるのである。…………

エスは丁度今時分のやうな、晩秋初冬の頃、靜かな日かげを浴びて明々と植込みの片ほとりに咲いてゐる山茶花の花が好きであつた。

「僕は山茶花の花が好きですがなあ。」と、何かにつけて嘗て私に語つたことがあつた。「あの寂しい秋の日を浴びて、薄暗い處に侘しさうに咲いてゐる山茶花の赤い色が妙に眼に付く。」といつたのは、宛ながらエス氏その人の風貌語音姿態などの寂しい、靜かなところに何處となく似通つてゐるのであつた。

エスは、西洋から歸ると、間もなく牛込の片隅に敷地を求めてそこに居宅を新築した。その頃自分は關係してゐた仕事のことでよくエスの宅へ訪問した。やがて間もなく自分はその方の仕事と關係を絕ち、もう餘りエスの處へは行かなくなつた。それから何年立つたか覺えぬが、數年後にエスは先の邸宅を人に讓り渡し、此度は郊外の方に出て、戶塚の諏訪の森に又新に敷地を買つて新宅を建てた。ある時訪問すると、まだ畑を拓いた間もない前

庭にずつと建仁寺の垣根を結ひ圍らし、その垣根に沿ふて彼の好む山茶花を數多く植ゑてゐた。私は二階の書齋に隣る客間に通されて、そこから遠くの森や野原を見渡したり、又其等の山茶花の植はつてゐるのを見下ろしたりしながら、

「ほゝう山茶花を澤山植ゑましたね。」といふと、

「えゝ、山茶花といふ花は好い。」と、いつて、主人公はうすら寂しい微笑を洩しながら、頭を回へし、後方を見るやうにして、

「今日は見えるか、どうか。西の窓から、ずつと秩父の連山が望める。富士もあのあたりに見られる。」そいつて、主人公は新居に滿足の體であつた。…………

兎に角エスが、あの戸塚の原で晩秋初冬の頃建仁寺垣のほとりに山茶花の寂しく咲いてゐる幽靜な風趣を味はひながら、どこまでもその行き道を徹底して一筋の路を辿つて迷はなかつたならば、たとひ四十八を一期として他界しても、もつと文學的により好き物を遺したことであつたらうと思ふ。尤もエスが、その女優に、中年過ぎての熱烈なる――寧ろ凄味のあるほど強い戀をしたゝめに、晩年に不思議に情趣あり深味のある短歌を少しばかり遺してゐるが、私は、あのエスの靜かに山茶花を愛した心持ちが惜しいと思ふのである。彼は餘りに野心、覇氣、功名心に焦せり過ぎた。（大正十一年十一月五日の日誌より）

寒木瓜

人生既に五十に垂んとしてまだ自分の家さへないといふのは、之を前にいつたエスの新宅の記事に思ひ比べても乏しい境遇である。何も、そんなことをエスに引合はすのではないが、丁度前の記事から考へ及ぼしたのである。エスは牛込の奥の新宅と、戸塚原の新邸と二度の新築をした上に、藝術座の小劇場を新築した。よく普請道樂の人間は、少しくらゐ病氣をしてゐても、好きな普請をすると病氣が癒るといふが、私などはまだ普請をして樂むといふ幸福な境涯になり得ない。「中央公論」新年號所載の德田秋聲氏の「初冬のころ」といふ隨筆――小說欄には收めてあるけれど――を讀むと、氏の例の筆で趣味的の事もい

つてあるが、要するにいろ〳〵の愚痴を溢してあるのだが、その愚痴が最後の二三行に至つて幾らか、ほぐれて來て、丁度來年の今頃になつたら、家族と離れて自分だけの天地を成す別宅を邸内に新築しようといふのを樂みにしてゐるといつて、隨筆を結んでゐる。

私などは、まだその樣な樂しい境涯になり得ないのである。それで僅かに、しがない借家住居を、いろ〳〵の條件の許す範圍内で、出來るだけコンフォテーブルなものにして朝夕を慰めてゐるに過ぎないのである。

わづかに膝を容るに足りるばかりの陋屋ではあるが、幸ひに東と南を受けた八疊には朝から晩まで一日陽が當つてゐるので、つく〴〵太陽の難有味を感謝してゐる。それに座敷をぐるりと取卷いて廻緣が付いてゐる。緣先の庭は、あまりに家主が地所を切り詰めて家を建てたために狹苦しくて見場はないが、その廻り緣にガラス障子を自分で入れた。上の溝は取付けてあるが、ガラス戸は自分持ちといふので爲方なく自分で辨じたのだ。日がよく當るところへガラス戸を入れたので、寒氣を防ぐには十分である。私はその緣側を溫室にすることを思ひ付いてそれから日本橋の方に行つて蒲莚を買ひ求め、それを長い緣側一ぱいに敷き詰めた。そして、そこへいろんな冬季の花卉の鉢を置いたり、熱帶産の草花で、長く葉や花を垂れた物ならば天井から吊したりした。簡素な溫室のことゝてスチームを通はす術とてないが、天の惠は平等に貧家の軒にも射しかけて、スチームなくたも幸ひに吾が花卉を溫めてくれる。中でも昨年の暮に白木屋で買つた寒木瓜は枝振りも賑かで、紅白取り交ぜた滿枝の朱唇白蕾がもう早いのは三つ四つ開いてきた。嚴寒の最中に時ならぬ青苔が滑かに鉢の土を掩ふてゐるのも眼を樂ましむるに十分である。そのほかケンチヤの幹と葉のすいとしてゐるのも厭味がなくて好く、ベコニヤの懶惰なる姿して、だらりと垂れ下りたるも愛するに足る。

支那水仙は、之も去年の十二月半ばに有樂町の停留場の草花屋から買つて來て、書卓の脇に載せて置いたが、餘りの嚴しい寒さに夜中室内に置く水鉢に薄氷が張りつめて、動もすれば萎びんとするのを、痛はり〳〵夜寢る時火鉢に殘つた炭火の眞紅になつたのを深く

灰の中に埋め、五徳の上にその水鉢を載せて置くやうにしてゐた。すると、萎びかけた青葉と蕾とはやうやく勢ひを加へて、買つて來て一と月ばかりにして此の頃少しく黄蕾を含んで來た。

吾生漸く五十の定命に近づかんとして、顧みて誇るべき功なきを耻づといへども、年とともに諸の業欲の焔も亦た次第に寂滅に近づいて、わづかに寒木瓜の朱唇紅蕾を座側の机上に眺めて、妖魔美女が口邊の一笑に換へて樂むことが出來るといふのも、此の心境、徒らに人の說によりて然るに非ず、已れが敗殘の生涯が自から體得させてくれたのであると思へば、却々に尊い心持ちであると、貧者相應の道理を思案した。(大正十二年一月八日夜誌早稻田文學)

日に暖かく

二月十五日

一月下旬の嚴寒に引比べて、今月に入つてから非常に暖かくなつたので蘇生の思ひがしてゐる。寒中でも最も險惡な月と覺悟して、この一と月を無難に經過したら、又來冬までは生き延びうると思つてゐた二月が此の通りでは、も少し此の世の月日が拜まれさうだ。

殊に、暖いほどあつて、二月にはいつてから降雨の時々あるのも咽喉などに良くつて誠に好ましい。昨夜からの雨で、今宵もまだ降つてゐる。何となく、もう寒雨といふよりは春雨といふにふさはしい軒滴の音である。

こゝ森ケ崎大金旅館の離れの六疊一と間。意氣な客なら連れ込みに持つて來いの座敷を野暮な私が、殆ど去年の一月から一年以上にわたりて占領してゐるのは宿の迷惑と察してはゐれど、浮世の事を思ひ棄てた半僧半俗の身が孤獨默想にもまたふさはしい一室である。

昨日は市村座の『保名物狂ひ』を見てくれと、東京なる某演藝雜誌社からの依賴で、その爲め、わざ〳〵下谷の二長町まで出掛けていつたが、市內電車の混雜に、身體がひどく疲勞れて今日は一日雨に閉籠つてゐた。とても、市街電車には乘れない。市街電車に乘るとすぐ持病の頭痛の發作が起るので決して乘らないと決心してゐたが、近頃少し健康になつたので、元氣を出して乘つてみたが、やつぱり可けない。

混雜の甚だしい東京に行つた疲勞を、かうして春雨らしい軒滴の音を聽きつゝ、來客に襲はれる不安もなく、靜に火鉢に凭つて、焙じ茶に湯をそゝいで飮み、輕い菓子を摘んで手數の掛らぬ生活裡に無念無想の境に彷徨してゐる心地といふものはない。こんな心持がもつと精練されて、幽玄の境に入つて行つたならば、老莊の哲學に到達するのではあるまいかなど思つてもみる。さう思つてゐると、何だか、支那のある頃の人生哲學が無上に慕はしくなつてくる。

毎日日課にしてゐるマッサージの療治が濟んだあとは、いゝ心地の疲勞が出て、ぐつたりとなつてしまひ、寢床に橫はつて晚まで又無念無想の行をつゞけてゐると、もう慾も得もない。春雨のやうな雨は夜に入つても止まない。

しかし、宿屋生活も何だか腰掛けのやうな氣がするので、何處かへ一軒借家をしようかと思つてゐるのだが、さて方々、彼處こゝと考へて見ても、何處にも住んで見たい、懷しみを覺える土地がない。地球の上に何處にも住んでみたい處がないとは困つたものである。

東京市の中なら、やつぱり牛込麴町兩區の山の手省線に沿ふた牛込驛から四谷驛に至る區間が好ましいなどゝ思つてみるが、自分の土地があつて、自分で家を建てようといふのでないから、好い鹽梅に空家でもない限り、何時になつてそれが實現されるか確な當のない事であると思つて、そんな空想も思ひ止まる。京橋區の築地の邊もよいと思ふが、それも同然の空想に止まる。且又、もう不精になつて、そんな借家を探すのも面倒である……と思つてゐると、今から十五年二十年前の、まだ元氣のよかつた時分、借家を探しに方々步き廻つた時分の事などが、ふと思ひ浮んで來る。四十にしてならばよいが、五十にして家を

成さないといふ、普通人の常規を逸した境遇が、遂々自身の身の上に發見されたと意識して、ふと自分を省みて憮然とする。しかし、もう此のまゝで一生の終りにしても殘念でもないと思ふ。この頃は社會奉仕だの、無產階級の爲めだのといふことがはやるが、自分などはそんな他人の事など思つてやつてゐる心の暇がない。

湘南には、借家が東京よりも有る率が多いやうだが、さて湘南の松林の中の家も惡くはないが、假りにも家でも持つてしまふと、つまらぬ配慮の爲めに、其處に囚へられてしまつて、行雲流水の如き生活が出來にくゝなるのが、却て殘念でもある。そして月が瀨の溪あたりの溪山が又しても懷しく思ひ浮んで來る。自然の運行、季節の循環は、殆ど無意識のうちに人の心を移してゆくのが道理のやうで不思議である。今年は、こんなに早く暖くなつたので何となく梅を見る心地をそゝられる。月が瀨の溪の梅が好からうと思ふと、その梅よりも溪山の容に雅致があるので、頻りに行つてみたくなつた。あの溪、それから木津川の溪あたりの山の上に人家が轉在してゐるのは、私の時々懷しい空想を寄せる處であるが、あんな處に隱棲してみたいなどゝ思ふ。すると、もう東京にも相州の海岸にも借家をしたくなくなつてくる。

私にとつて東京は、新橋から日本橋に到るまでの區間さへあればよい。そのほかは入用ない。

……十六日

かうしと／＼雨が降つて暖氣なのはよい。一日此の雨に降り籠められて、寢床の中で默想に耽つて何人にも妨げられずに過すといふは、萬金にも換へ難い幸福である。三十餘年前愛讀した志賀矧川先生の「日本風景論」の中の昔の清貧の徒の生活が偲ばれる。

冬の雨も一日は可いが、今日も亦雨とは、すこし惡毒い。そのためか、又は急に春暖を催したせいか、何だか身體が怠くつて節々が疼痛をおぼえるほどぐつたりしてゐる。今日もまた何にもせずに、一日寢床の中に横たはつたり、又起き上がつて火鉢の傍に凭つたりして、物臭い氣持でゐる。雨が横さまに潮吹いて、宿の廊下が濕つぽい。腕や脚が火照つ

てゐるやうで筆を執ることは固より新聞を讀むのさへ物憂い。今月もまた無念無想の休養をしてゐる。そして何處へ行つて住んでゐたら、徹底した生き甲斐を感ずるであらうかなど思つてもみる。金があつたら、書畫や梅や蘭などを看て樂むかも知れぬなどゝも思ふ。そして此頃は何となく好い書が見たいやうな氣がする。書では黃檗僧の書も好きの一つである。來月又京都に行つたら黃檗に行つてみようと思ふ。

雨は晩になるに從つて風さへ吹き添ひ、夜に入つて次第に吹き募り暴風雨になつて來た。海岸の方から東南風が劇しく吹き付けて雨戶に當る音が物凄い。宿の者が仕切りなしに長い廊下を警戒しつゝ、時々來て、顏を窺け、

「お寂しくはございませんか。」とか「畏くはございませんか。」とか訊ねてくれる。

「いや寂しくはないよ。こはくもないよ。」私は全く平氣である。そこの離れは宿の帳場から一町以上も長い廊下を行つた奧の方にある。死んだ岩野泡鳴も此室に時々來てゐたことがあるさうだが、そんな聯想も起らぬ。暴風雨は夜の闌けるとゝもに、いよ〳〵劇しくなつて來た。冬半ばの二月の雨とは思へない、まるで六月か九月頃の霖雨のやうである。二三日過ぎて後、果して此の冬の半の雨に、前代未聞の溺死人が福島の方に二百人からあつた。

……十七日

風雨は止んだ、暖い早春の日が照つてゐる。二日間雨に閉ぢ籠められてゐたので、運動不足になつた。昨夜の暴風雨は意に介しなかつたが、運動不足の結果消化不良で熟睡が不能であつた。この四五日遊んでゐるので書く仕事は急ぐが、一日何處か、こゝと違つた東京の郊外に往つてみよう。畏くも明治神宮へまだお詣りしてゐない。そこへもまゐつても可い。それとも井の頭の公園もまだ知らない。更に又久し振りに、そつちの方へ行つた序田山花袋氏をお訪ねしてみようか。今から二十年前は實に屢々氏の牛込の宅へ訪問したものであつた。二十年前。……私は二十一年前から氏との知り合ひである。當時西洋近代文學について少からず氏から誘導開發されたものであつた。

支度をして森ヶ崎を出ると、一時納まつた風が又出て來て、晴れた空の處々に薄墨色の

雨雲を付けてゐるのがいかにも早春の感じである。そして、それは大抵三月の今時分に屢々見ることの出來る空模樣で、丁度一ヶ月ほど早い。あまりに雨後の暖氣で少し頭痛がする。

大森驛から省電に乘つて、品川で乘り換へた。省電に、東京櫻木町の外は二等室がないのが、實に實に私の生活を不愉快にする。その爲めに、東海道方面への他はうつかり郊外生活も出來ない。それであの溪山の眺めに雅致に富む伊賀の國の山の中へでも隱遁しようかなど思ふのである。山の手線も市街電車と同じ樣に込んでゐて、眼に見る人間が何だか多くは野卑で、私をして厭世觀を起さしめる。此の頃ブルジョアとかプロレタリアとかの藝術、文學に區別があるやうな說が盛に論ぜられてゐるやうであるが、私の理想をいはしむれば、世界の人類の悉くをブルジョアにしたいのである。世界にプロレタリアが一人でも存在するのは、世界の不幸である。少くとも私自身は、財產などは厘毛も所有しなくてもブルジョアの積りで生活しようと思ふ。そして、それを決して悲まない。そして、吾々日本人の長く深い傳統的教養、趣味からいつても、一旦、ある程度の洗練された趣味に深く入つていつてゐるのを、此の頃新開地の地ならしをするやうに掘り下げ切り崩して低い處に持つて來る必要もないし、それはとても故意に人爲に出來るものでもあるまい。

成程王朝時代の『源氏物語』や德川時代の『西鶴の草紙』と明治時代の『一葉全集』とは、各々時代色を異にしてゐるけれど、それは外的物質的の變遷に由來するよりも、むしろ人間の本性に對するポイント、オブ、ビュウの變遷であつて、且つ又偶々創作の取材の舞臺が異つてゐるのみである。無產とか有產とかいつたやうな、外的の條件で支配されない、もつと深い人間の個性に發足してゐるのが文學なのである。有產とか無產とかいふ如き事は、今日の有產者も一變して明日は無產者になることもあれば、又今日の無產者とて明日は有產者になれることもあるのだ。そんな外的の事情で、人間の本性から發足する文學が、多く異なる物を產み出す道理がない。

山の手電車も、どうか有產階級ばかり乘るやうな電車を仕立てゝ、運轉さしてもらひた

い。そして、段々さういふ電車ばかりになつて來ると卽ち地上に黃金世界が出現したのだ……などゝ電車の中で獨りで空想してゐた。電車の窓から沿線を窺いて見てゐると、何年にも見ない間に何處も彼處も郊外に市街が擴がつてゐるのが驚くばかりである。丁度二十五年ばかり前、澁谷から世田ケ谷村の方に步いて行つたことがあつたが、その頃の雜木林に埋もれてゐた山は、跡方もなく開拓されて人家が建つてゐる。國木田獨步君が「武藏野」に書いてゐるやうな處はもう東京の近郊には見られさうもなくなつた。

蓊鬱とした庭樹に隱れた中に田山氏の家があつた。氏の家へも六七年往訪しなかつたやうに思ふ。その日氏は在宅であつた。會ふのも去年の四月以來久し振りであつた。二三時間も雜談をしてゐた。丁度先刻一人で電車の中で思つてゐたやうな文學談などをした。そして、「吾々はまあ、何にもいはない方が可いんだなあ。」といふやうなことにも意見が合つた。少くとも吾々の文學には、有產も無產も、そんな衣服のやうな物はない、吾々の思つてゐる文學は人間でいふならば衣服を脫いだ人間の本性を對象として取扱はねばならぬ。

長く話し込んでゐる間に深い植込に埋もれた家の中が薄暗くなつたと思つてゐたら又空模樣が危くなつてゐたのであつた。それを知らずに長座をしてゐて、辭して外に出て來ると、又空は持ち直してきたが、風が强い。田山氏は去年の晚秋初冬の頃に吉野に行つてみたと話してゐた。吉野の秋は春よりも好からうとは、自分もかねて思つてゐたら、氏は旣にそれを行つて見てゐるのであつた、流石に自然の愛好者であるなど思ふ。自分も吉野の奧にでも往つて居つてみようかなど思ひながら新宿まで步いて、もつと先きの東中野驛まで電車に乘つて、そこから郊外住宅地の方を一と廻り步いて、考へてみると、その邊へも六七年來なかつた。眞に歲月は流れるやうに過ぎてゐる。その邊の樣子もすつかり變つた。低い田圃の跡にも、高い雜木山にも新しい家が建つてゐる。ブルジョアの人は銘々、分相應の安住の場所を造つて落着いてゐるやうに思はれる。早春の寒風が乾いた道路に颯と砂塵を卷き揚げて、步いてゐる私の袖を吹き煽つた。

『どれ〳〵假りの宿りに早く歸つて休息しよう。』と思ひつゝ私は大久保の停車場に步を急

いだ。（大正十一年二月中間誌、時事新報）

深川雜興

富士

近頃不思議に水に緣がある。

去年の暮から品川灣に臨んだ森ケ崎の海岸に市塵を避けて四月あまり五つ月ほどを、そこに過し、三月の半ば過ぐる頃より大川を前に控へた深川の巷衢にいさゝかの因緣ありて暫く浮島のうき身を寄寓することゝなつた。机に凭りて水の上に眼を放てば、白鷗しきりに群れて餌を漁り、百貨を積載した船舶が舳艫をふくみて絕えず上下してゐるのも、さすがに大江戸時代からの隅田川の繁昌を偲ばせる。

一日緣側に立つて見るともなく向岸の中洲の家並の方に眼を放つてゐると、折柄、まだ冬の名殘りの寒い北風が吹いて空氣がめづらしく冴えてゐたので、蠣殼町の家並の隙間から甲州境の山が蒼く見えてゐたが、ふと、その中洲の上空を見るともなく眺めると、そこ

には眞白な富士が遠く塵寰を超越せるかの如く立つてゐるのが眼に入つた。

これは思ひも掛けない景物と、私は階下の人々に聲をかけた。家は凡て近ごろ東京に來れる地方の者のみであつたので、たれも彼れも緣側に走り上つて美しき富士の遠景に見入つた。大川には百貨を積んだ船が上下してゐる。

私は行李の中を探して諸方の繪葉書などを入れたる手匣を取り出し、その中から北齋、廣重などの描いた江戸名所の富士の風景畫を見付けた。それは、富嶽三十六景の中、武陽佃島より眺めた富嶽の風景である。それによつて見ると、その頃の佃島は畵家に多少の誇張もあつたらうが名のとほりに島であつたものと見えて、四方水に圍まれて、今日の相生橋はない。勿論今日とても島には相違ないが、蘆荻の生ひ茂れる洲渚には帆柱や網干し竿が林立してゐて貨物を積んだ船が遠く品川の高臺の彼方に富嶽を望んだ圖である。

私達はしばらく緣側に立つて飽かず眺めてゐた。それは四月の四五日の頃であつたが、それから水蒸氣が多くなり、曇天が多くて遂に中洲の待合の家並の上に秀麗なる富嶽を望むことは出來なくなつた。もう、又今年の初冬まで待たなければなるまい。月の二十二日は一日、春雨とも思はれぬほどの豪雨であつたが翌日は晴れて習々と北風が吹いた。甲州境の連山が濱町の家並の上に淡蒼く見えてゐるので、今日はどうかと思ふと、中洲の上空白雲の頻りに動く彼方を望むと、それでも白扇を倒さまにしたやうな山の形が一としきり糢糊として見えて、又すぐ薄墨色の雲に隱れてしまつた。

錢湯

深川に來て日はまだ淺い。深川の特色といふほどのものもまだよく分らない。殊に近來工場などが建ち增して工場地と化してしまつたので、昔は江戸つ兒の一番多いといはれた深川も今日では他國の田舍者が多く住んでゐる。錢湯なども汚い。が、錢湯といへば本鄉の追分に暫く滯在してゐた時分は困つた。追分あたりの湯に入る客は多く學生で、少し熱くなつたかと思ふと、あとから來る浴客が直ぐ水を、ジヤア〳〵入れて微溫くしてしまう。

そして掃除の屆かぬ汚い湯であつた。あんな湯に入ると心細くなる。

何でもゆき付けた處へ行くのが安定を感ずるものであるが、人間のその心は大切であるとゝもに、進取の氣象も從つて衰退する。一處に安定して異鄕に踏み出す元氣のない國民や人間は發展しないで衰滅する。そこで勇敢進取の發展的國民でなく、又人間でなくとも一處定住はやがて、現世の執着となり、最期往生の妨げなること夥しい。それゆゑに私は不安不定の中に暫しの安定を得て滿足しようと努めてゐる。大に省れば大厦高樓に棲む者と雖も、いづれか最後の離脫往生を免がれうべき。

風呂のはなしが、つい橫道にそれたが、深川も高橋の通りは、なか〳〵賑かである。そこに近い橫町には一寸した錢湯もある。思ひ做しにか、やつぱり刺靑を施した人間を多く見るやうである。

橋

深川も永代を渡つた通りの附近からずつと八幡樣にかけて、あのあたりは意氣な飮食屋なども昔の江戸の名ごりを偲ばすものがあるが、新大橋をこちらに渡つた附近は最もいけない處である。工場か倉庫か、さもなければ貧民窟といつたやうな處。それでも少し高橋の電車通りの方に入つて行くと、名物の堀割りの水は縱橫に通ひ、從つてそちらにも此方にも橋が架つてゐる。橋を渡つてみるのは、何となく興のあるものである。私はまだ深川の新參者であるが、當分此處にゐて深川を見て步きたいと思つてゐる。牛込や小石川あたりに架つてゐる橋とちがひ、潮が退くと汚い溝泥の水がぶつ〳〵沸いてゐるが、大川に潮が滿ちると、水は汚いが、さすがに町裏と町裏とに狹まれた小さい堀割りにも船が幾艘となく繋つてゐるのが風情がある。

昨日は春雨とも思へぬ豪雨で一日降り込められてゐた怠屈さに手拭さげて風呂にゆく途中狹い堀割の橋を渡ると、濛々として降りこめた雨の中に、苫をした荷船から夕餉を炊ぐ烟の淡く立ち上つてゐるのを見た。晴天ならば丁度滿月の夜頃、私は朧月の影を踏んでそ

こちの板橋をたづねて渡つて歩くのである。

堀割りに沿ふた裏町づたひに行くと、貧民窟の先きには思ひもかけない大きな問屋がつづいてゐて、暗薄い頑丈造りの店の構への奥には、背のすらりとした美しい丸髷の内儀などのゐるのがちらほらと見えたりする。

壽司

これは深川と限らぬが、私は壽司が好きである。本鄕にゐた時分少し驚いたね。

女といふものがお壽司や汁粉が好きであることは白木屋や三越の食堂へ行つてみてゐると殊によく分る。私は、いつか夏の眞盛り殊に飲食に氣を付けてゐる季節であつたが、白木屋の食堂に入つてゐると一連の女があつて、盛に飲食してゐた。お汁粉を散々食べたあと、此のあとは何にしようかと考へた揚句が壽司だ。子持ちは蛇さへ恐れるといふが、私も恐れた。

そのとほり女は一體よく壽司を好むものであるが、本鄕には旨い壽司がない。西片町といへば良い衆の多く住んでゐる土地でありながら、それがない。西片町あたりの奥さん達は、壽司のやうな古い趣味の物を食べないであらうか、とも思つた。妻君が自家手料理の洋食に旦那樣は舌つゞみを打つのであらう。これは固より結構なことであるが、本鄕の大學附近から西片町駒込の方にかけて壽司の好いのがないのにも不便を感じた。

牛込にはそれがある。私は本鄕よりも、やつぱり牛込の方が好きである。牛込の神樂坂から肴町、通寺町の通りは散歩をするにも電車が通つてゐなくて、なか〳〵好い土地である。壽司もあそこの都壽司は下町にもなか〳〵無い好味である。それは私ばかりがいふのではない。下町の物を常に食べつけてゐる食ひ道樂が云つてゐる。近年、その、私の第二の故鄕なる牛込の地に、とかく遠ざかりて、都壽司を常食する機會乏しきは東京に住みながら殘念の一つである。

川舟

こゝは、もとの新大橋の東袂になつてゐたところにて、今は川蒸汽の發着所になつてゐる。机に凭りて硝子障子を通して、川舟の上下するを眺めてゐるのも一興である。

昨日は一日沛然たる春雨に油の如き川面濛々と烟りて靜かに降り暮したる雨の日を、尙ほ五大力船に天幕を張り苫を蔽ひ、舵を操る船頭はしるしの入つた雨傘を翳し、船中より盛に三味線に伴れてさんざめきの聲を河水に流しつゝ下つてゆくのもあり、或は曳き船に曳かれて流に溯るもある。花見船は四月の第二日曜日の十日を最も頂上とし、第三日曜日の十七日も相應に出た。十日は殆ど花見船でさしもの川が一杯になるかと思はれた。長く東京に住んでゐても大川のほとりに縁遠き山の手にゐたので花見船の盛なることは谷崎潤一郎君の『幇間』で知つてゐるのみであつたが、今春の花見船の盛なるを見て、『幇間』の形容の人を欺かざるを思ふた。

自分は、その花見船にあらねど、去る十九日に一日小舟を雇ひ新大橋下より流れを下つて大森、森ケ崎の海岸まで行つた。森ケ崎から引揚げて來るのに荷物を持ち運ぶは交通甚だ不便の處とて、自働車にて山谷より戻らんかなど工夫せしが、幸ひ此の大川沿ひに暫し浮鳥のうき身を寄することゝなりしより、かくて川舟を賃して往きは自分も共にその舟に乘りて森ケ崎まで赴き、歸航も風穩かなれば、やつぱり乘りて戻るつもりなりしも、その日は東風にてお臺場沖より波高く舟搖れたれば、歸りは電車にてかへる。

船頭は『よく暈ひませんなあ。』と、いつたが、一度持病の頭痛の發作起る時は、その船暈の劇しく起れる時の如くなるにもかゝはらず、平氣なる時は不思議に、さる持病ありながら船暈せず。今少し長く乘りたらば如何なりしや測られざるも、無事に森ケ崎の海岸に漕ぎ着いた。

新大橋の畔、今は工場と倉庫とのみにて殺風景此の上もなき土地なれども、昔は芭蕉が深川の草庵も此の近きあたりに有りし由にて、丁度今の淺野セメント工場のあるあたりがその跡なりといへば、げに桑田碧海のためしに洩れず。その眞向うは中洲にて、水樓の灯影夜更けて一と際鮮かなるは待合つゞきなるよし。葭町の藝者の出場所にて、近松の翁に傚ふて、向の二階は何屋とも覺束情け最中と書くには、少し川幅廣過ぎて眼も遠けれど、夕暮れ六時頃川蒸汽の通ひ絕え、百船の往來止みて夜に入り、十五夜の月も朧ろに、潮のさし入りたる時は、漫々たる川幅殊に廣く、下流は白く靄に烟りて、水樓の灯影夢の如く淡く、永代橋を走る電車の火光も自から畵中の景となり來る。その時自分は寢に就かんとして戶外に立ち出で、川蒸汽の發着所の棧橋に出でゝ、夜の水面を眺めつゝ、放尿してかへるのである。

大川に尿して寢る夜の夢安し

（大正十年四月二十三日誌、入間）

立食ひ

立食ひ

近頃珍らしい梅日和なので、外套を何處かへ無くしてゐる丑之助には、外出に持つて來いの暖い午後であつた。五日の晩には屹度といつて斷つてある家賃を持つて行かねばならぬので、珍らしく昨夕は遲くまで、今朝はまた早く起きて、やつと今しがた書き上げた二十枚ばかりの原稿を、ペンを投げると同時にそれを四つに折つて懐に入れて、それから電車賃もないので、家を出がけに、古雜誌だの、古本などの積み重ねてゐる奥の板の間に入つて其處から五六十錢になりさうな古本を二三册抽き取つて、それをも原稿と一所に懐中にしてそゝくさと家を出て行つた。表に出ると一寸眉目の邊を顰めるやうにして、彼は日の照つてゐる大空を仰いだ。

それから毎時も行き付けの肴町の武田に行つて其家の主人と喧嘩をするやうな戲談口を

利きながら、袂から鐚一文種錢の入つてゐない小さいがま口を取出しながら、

パチツと明けて、

『ヘイ此ん中へ！』

と、それを主人の鼻前へ突きつけた。

主人は笑ひながら、その中へ、

『これだけです。』

といひながら五拾錢銀貨を一つと、貳拾錢のを一つと入れた。

丑之助は、

『滅法安いなあ。そんなに貧乏人を踏み倒すと、今に社會主義が起つたら、僕は一番驅けに此處に來て、何も斯も叩き潰すぞ。』

と、笑ひ〳〵捨て臺辭をいつて通りへ出た。

丑之助は、神樂坂の下から電車に乘つて、これから博文館に行くんだが、今日は餘り無理を賴めない人の處に持つて行くんだから、直ぐ現金にして貰へるか、何うか、それを腹の中で心配してゐる。家主には今日晚までに遣らねば、ひどく、自分に對する先方のイリユジョンを破らせることになる。何うか間に合はしてくれゝば好いが。

用事の人間に會つて原稿を見せて、先日の口約もあり、賴みの筋をいふと、口數の少い物靜な編輯係は、簡單に、唯、承知したが、明後日にしてくれといふ。

ひどい神經衰弱で、一寸したことにでも、直ぐ不健全な刺激を腦に感ずるので丑之助はそれを聞くと、丁度山葵を嘗め過ぎた時の樣に腦天がヅキ〳〵ツとして、眼が眩むやうであつた。前に、書き直すといつて遣つてゐる原稿が一つ行つてゐる上の少し無理な賴みであるから、餘り請求がましいことはいへない。といつて今日現金にして貰へねば、自分の家へ歸られぬやうな氣がする。生憎また家主が眼と鼻との間に在るのだから

『ぢや明日にして頂けませんか……私も矢張り困つてゐるものですから……』と、さも遠慮勝ちにいつた。

さうすると『宜しい明日にして差上げませう。』

と、口数の少い編輯係は承諾した。

でも丑之助は恰も三十圓是非入用の金を三十圓貸してくれと賴んでも二十圓しか貸して貰へなかつたやうな不足の失望を感じたけれど、どうも仕方がないと思つて諦らめて、折から其處の應接室に來合した二三の文士と久し振りに、表面だけは陽氣になつて、色々な雜談をして歸つた。

彼れは、屢く此館に原稿料を戴きに上る度に、毎時もその三階の帽子掛けの處から、螺旋形になつてゐる階段の曲りくねつた間から遙に透して見下される空間を高く覗いて見て、此處から飛び降りたら一と思ひに死んで了へるだらう。困つてゐる文士が、大きな書肆の三階から飛び下りて死んだとしたら變なものだらうと思つて、原稿を取つて貰ひに來るのが厭さに時々其樣なことを思ふのであるが、今帽子を取つて冠りながら、その眼の眩むやうな高い空間を仕切つた欄干に添ふて歩きながら、彼れは忽ち暗い死といふものに誘はれ

たやうな氣がした。それを靜と堪らへながら、グラ〱する眼を瞑つて漸々に降りて來た。

何うせ歸らねばならぬ自分の家ながら、錢を持たずには、暗くなるまでは歸られないやうな氣がするので、まだ早いし、天氣は暖かし、何處か歩きたい。此處の藥品の臭ひのする生藥屋の前を左に行けば、以前此處から直ぐ其方へ足を向け〱した人形町の方に行かれるのだが、近頃は其樣な氣はなくなつた。何處か清淨に暇を潰す處はないかと考へながら大通りへ出て、それから電車に乘らないでブラリ〱日本橋の方に歩いて行つた。

暫らく魚河岸の壽しを食つて見ない。此の頃彼れは朝と晩との二食にしてゐるのだが、珍らしく外に出て歩いたものだから丁度好い加減に腹も減つて來たやうだ。一つやつて見やうと思ひながら、毎時も汚く濡れてゐる横丁に曲つた。

汚れた紺納簾を頭で分けて入ると、そこの臺の上には、丑之助の好きな赤貝の紐があつた、あなごの大きな奴もある。

『一つ紐を握つておくんなさい！』

『えゝ今！』
と壽しやのお爺は景氣の好い返事をしながら、飯櫃の蓋を取つて、まだ暖い飯を握つてまづ一つだけ前に並べて、番茶の熱い奴を汲んで出した。それが丑之助の咽喉にごくりと音をさせるやうにして入つて行つた。それから鮪にはだを三つ四つつまんで其處を立去つた。

　それからブラリ〱日本橋を南へ渡りながら、丑之助の頭には、これから國民新聞社にSを訪ねて見やうといふ考へが浮んだ。橋の南詰の空地には、村井本店建築用地と書いた大きな杭の立つた板圍の上の方に、凄いほど大きな鐵材を高く組合はせて、その上を腰に繩切れを挿した仕事師が猿のやうに身輕に渡り歩いてゐる。丑之助は、其處等に見てゐる連中と同じやうに、道に立つてそれを見上げた。彼れは此の頃東京に大きな鐵骨の家屋の建築されるのを見る每に何だか自分は弱い、打碎かれた人間であるやうな感じがするのである。さうしてまた其樣な原因から眩暈を感じながら、賑かな街を彼方此方眺め廻したり、

兩側の人道を歩いてゐる女の頭髮の形から、衣服の縞柄地質などに見惚れたり、中にも馬鹿に大きくない丸髷にコート姿のすらりと身長の高いのが、何の裾か紅い裾裡を返しながら、眞白い外行きの足袋を詩的に、しなやかに運んで歩いてゐるのが眼に止まつた。さういふのになると、彼れは往復の頻繁な大道の眞中をも忘れて、立ちとまつて振返つて、その姿が見えなくなるまで眺めるのであつた。さうしながらまた白木屋のショウ、ウインドウの前に立つたり、大西白牡丹の縱覽室に入つて見たりした。丸善の筋向に在る大島物と薩摩物とを專門に商なつてゐる家の飾店は、わけても丑之助が好きで〱溜らぬ處であつた。此の頃では專ら冬物の大島ばかりを飾つてゐる。派手な女物を見ると、あゝいふのを着せるものが欲しいと思つた。さうして着せ得たいと思つた。その店は夏になると、薩摩上布を出してゐる。丑之助は、もう何年か每年のやうに其の前に立つて眺めるのであるが、其處の眞白い雪のやうな上布を肌に着けることが出來ないのである。

　で、そんなことを思ひ返し〱丑之助は我が世の不如意なるに、またしても屈托心地に

なつて、また歩を運ばすのであつた。

竹川町の停留場の處から右に曲つて、直ぐまた左に折れて、丁度料理店花月の裏の內田靜枝と小い標札の出た巴屋といふ軒燈の付いた入口の狹つた藝者屋の前を通り掛つた。それが眼に着くと、丑之助はあゝ此處だな、例の評判の文學者の情婦の家はと思つた。

その通りを出外れて、また右に曲つて、も一つ左りに折れると、すぐ國民新聞社はある。

Sは生憎ゐなかつた。が、懇意な、社員の畫伯がゐて、それが久し振りだ、話しませうといつて、すぐ隣家のカフエー、プランタンに連れて行つた。

其家は有名な小說家や畫家を定連に持つてゐるので、藝術界の逸話などを生む處になつてゐる。牛込の矢來の片隅に朝から晩まで燻つてゐる丑之助は、何うした風の吹き廻しか今日は朝から種々な餘所行きの心構へにならなければならぬやうな人間や環境や舞臺の上に立たさせられたり、接觸させられたりしたので、さうなくつても此の頃また頭が惡くつて視力が鈍つてゐるのに、一層眼が眩くなつたやうな氣がするのである。

やがて暮れかゝつたので、丑之助は歸りたくない步調を羊のやうに運ばせてそこを出た。

山下町の停留場では冷い風が澱んだ堀割の水の上を渡つてゐた。

錦町の三丁目で降りて久し振りに醫者に寄つたら『大變に良くなつた』といつた。けれども彼れは別してそれを福音とも思つて聞かなかつた。

病院を出て、外濠線に乘つて神樂坂の下で降りた。平常なら江戶川行きに乘つて、水道町で降りるのだが、今日は其處で降りたといふのは、丑之助、腹に一物あるのだ。それは何でもない。今日はおやつを魚河岸の壽しと洒落れた、何うせ家に歸つたつて、一尺八寸の膳を九寸づゝとか分けて食べるといふ女房が、夕飯の膳を拵らへて待つてゐるといふではなし、堅氣の紳士には味の知れない立食ひといふ奴は、こちとらには立食と讀むのだ。今日は一つ夕飯も立食にしてやれ——先達つて森田草平と佐藤春夫とで來た毘沙門前のお

でんやに寄つた。

『すぢと芋を』といひながら、彼は太い不細工な竹の箸を取つた。いつこく屋と自分でいつてゐるおでんやのお爺は、色の黒い不愛相な顔を、默つたまゝ、グツ〳〵と音を立てゝ、豆腐だの、こんにやくだの、竹輪だの、色々な物が盛んな湯氣を立てゝ甘さうに煮えてゐる中から、芋とすぢとを皿に杓くひあげて差出した。彼れは、それに竹のしやじで辛しを塗つて、フウ〳〵吹きながらベロ〳〵食べた。

あんまり甘いので『飯を貰はう』と、いつた。

遂々小さい茶碗に山盛りにした飯を二杯食つた。それを食べてゐると、かうしておでんやで立食ひをしてゐるといふ一種の氣さくな心地が浮んで、輕い境涯だ、妻もなければ子供もない、夕飯も斯うしておでんやで甘く濟まされるかと思ふと、しみ〴〵放浪者の心が味はゝれるやうであつた。放浪の味は止められない。

丑之助は温まつて、滿腹して九錢投げ出して其處を出た。さうして、又ブラリ〳〵と神樂坂を歩いて戻つて來ると、時計屋で蓄音機が義太夫を唸つてゐるのを耳にした。聽き濟すと、それは彼が戀する呂昇のお俊傳兵衛のさはりであつた。

『……そりや聞えませぬ傳兵衛さん……』と、長く引張る處を、何うかしてうまく、此の一時を外さず覺え込まうとして、一心になつて聽き惚れてゐると、直ぐ後から、

『……お言葉無理とは思はねど……そも逢ひかゝる初めより……』と、何ともいふにいへない、好い節廻しが續々として追つ掛ける。『思はねど……』と切つて、少し間を置いて、それから『そも逢ひ……』と出る、その『そも……』の處の、ほんの一寸の間に千金の價値がある。聲音といふものも、斯うも氣高い美しい快感を人の感覺に生ぜしめるものかと思ふ。その音樂の調子に乘つて、丑之助は腹の中で、自分の好きな閨秀藝術家は一葉女史、豐竹呂昇と二人だなど聯想する。さうしてゐると、もうその一節は了つて、時計屋の小僧はレコードを取換へに立つた。

尚ほ聽き濟してゐると、今度は、八陣のさはりらしい。『そのお心とは露知らず、都でお

別れ申してより……』といふのが、又何ともいへず好い。これは丑之助が子供の時分に、屢々自分の家で、父親が兄や姉に教へて居つた處であつた。彼れは今それを聞いてゐて、寒い冬の街路に立つてゐながら、温かつた子供の時分の家庭の有樣を歷々と現在眼に見るやうに思つた。さう思つてゐると、また最うその一節も了りに近づいて、二十幾年の昔の遠い甘い夢幻は蓄音機の針が圓板を擦る音と同じやうにかすれて了つた。それから『三つ違ひの兄さんと……』『私は元中國生れ……』など續々として止まない。彼れは好い加減にして其處を去つた。

　牛込亭の前まで來ると、明進軒横丁に、毎時のての字が最う夜店を張つてゐる。その火光を見ると、何時でも丑之助は夕飯を濟した後でも立ち寄らねば氣が濟まぬのである。

ついと頭で紺ののれんを分けながら『おゝ寒い！』といつた。

『寒がすねえ。』と、此の頃は大抵倅の方である。

海苔卷きを摘みながら『どうだね？　森田君は來るかね？』

『えゝ昨夕も遲くなつて、いらつしやいました。』

　紅葉、鏡花、春葉、青果などのよく立ち寄つたといふ手の字は、今、森田草平などの立ち寄る處となつてゐる。

　丑之助は、そこで勘定をすると、先刻古本を賣つた七拾錢のお足が丁度空つぽになつた。（明治四十五年四月誌、新潮）

春の關東平野

春の關東平野

櫻の咲く春が來て、何となく、廣々とした自然の味はれる廣野へ出てみたくなつた。關東の平野は、どちらへ向いて出ても、それぞれ異色のある趣があるが、私は、もう此間から北武藏から兩毛の平野へ行つてみたかつた。同じ東京附近でも、上野口から東北に出てゆくのと、新橋、品川口から東海道方面に出てゆくのと、野の趣が、まるで異つてゐる。荒川の鐵橋を渡つて、汽車が次第に埼玉の野を駛つてゆくと、左窓の野の果に甲州境の連山の上に富士が白く秀でゝゐるのが見える。荒川堤に櫻の咲く頃になると、春靄遠く武藏野を罩めて、その秀麗な姿もやうやく朧になるが、まだ秩父颪の寒い〳〵風が關東の平野を吹いてゐる時分に、その方面を行く汽車の窓から望む富士の姿は、それを品川口の東海道方面から望む山の色とひどく相違して、雪の肌も純白に冴えてゐる。そして、あのわた

りの野の色も東京の南郊の土とちがつて、黑く肥えてゐるのが氣持ちが好い。もし晩秋初冬の頃ならば、黑い畑に取り殘された大根の葉が眞靑に霜を凌いでゐるのも眼に快感を與へる。私は氣候さへ南郊と違はなかつたら、むしろ東京の北郊、荒川を渡つて、埼玉の縣域に入つたあたりに居を卜したいくらゐに思つてゐる。

三月の三十一日、一日冷い春雨の降りこめた翌日、いよ〳〵月が變つて四月の一日になると、昨日の雨は名ごりもなく晴れて、櫻は恰度滿開である。もうこの二三日を見過して、春雨となつたら、見頃は過ぎてしまふ。櫻は俗の花のやうで、やつぱり俗ではない。俗でもあり、非俗でもあるところに櫻が花の中の花といふ價値がある。櫻はそれ自身よりも、むしろ春の季節を代表して、春風に駘蕩たる點に於て實に春そのものである。

その日、上野から汽車に乘つて東京の北郊を出離れ、だん〳〵武藏の野を過ぎ、埼玉縣の領域を通過してゆくと、到る處の驛々にある櫻は爛熳として今正に咲き盛つてゐる處である。汽車の窓に蔽ひかぶさるばかりに枝を翳してゐるその大樹を見上げると、滿枝の花の彼方の空は薄墨を流したやうに花ぐもりに黑く曇つて、やつと咲きそろつたばかりの花の壽命が、今宵一夜のほども氣づかはしい。

驛々の花を見てゆくと、平潤な野の面はまるで靑い絨毯を敷き展べたやうに靑麥の畑が眼も遠くつづいてゐる。そして、ところ〴〵に夢のやうな黃い菜の花が少しづつ咲いてゐるのが、もうそれだけで春そのものゝ如き色彩である。櫻はどこまで行つても眞盛りである。

やがて栗橋と古河——埼玉と栃木との縣界を劃してゐる大利根の鐵橋を向うに越してゆくと、遠い靑麥の野の果、碧蕪籬落の斷續する彼方に、筑波山が霞の如く見えてきた。彼は右窓に凭つて其等の遠景近景に眼を遊ばしてゐると、汽車の進行につれて、此度は左窓に遠く日光の雄偉なる山塊が見えて來たではないか。日光の山、それは、暫く見なかつた山の姿である。私はふと振顧つて過ぎて來た年月を思ひ出してみると、今からもう六年ば

かり前に見たきり見なかつたのである。大正五年の夏は殆ど一と夏日光にゐた。あれきり日光へは行かなかつた。日光の山水よ、汝は私の生活に缺くべからざる崇高優美なる山水である。私が日光を見ることが出來なかつたら、どんなに私の生活は不幸であるか知れない。私は夏季炎暑に苦しむ時に「日光があるから」といふ意識に、いかに私の生活を安らかならしめるか知れない。

今度は左窓に凭つてきて、そちらの方に眼を放つてゐると、男體、大眞名子、赤薙の諸峰は歴々として指すことができる。殘雪が山の中腹のあたりまでの皺襞を被てゐて、遠い野末の裾山の上に、泰然不動の姿勢で靜かに天につかへるやうに見えてゐるのが、何ともいへず懷しい。兩毛の國は、此のとほりの平野と、あの如き雄偉なる山とを有してゐる。何といふ、いゝ國であらう。など、思つてみる。汽車はステーション毎に滿開の櫻を旅客の眼に振舞ひつゝ、綠麥の野を駛せて行く。ステーションを通過するたびに、左窓の日光の山塊も倍々明かに認められてくるし、右窓の筑波の山の色も次第に鮮かになつて來る。

私のその日の豫定は、かねてから一度行つて見たいと思つてゐた下總の結城の町へ行つて見るつもりであつた。結城の町は東北本線の小山驛から、水戸線に分岐して、すぐ次の驛である。結城は、結城つむぎの織物を産するので古來有名な土地である。結城つむぎは、殆ど、私の年中身に着けてゐる着物である。地方の農家で、農業の片手間に長い手間をかけて産出する堅實で古風な絹織物である。素樸な此の地方の農家から、都會人が愛好する、あんな澁い織物が、どうして出來るであらう。この地方の風土が、なんとなく見てみたかつたので、私は結城の町にいきたかつたのである。

それと、も一つは、結城地方は南北朝時代に南朝の忠臣結城一族の根據地であつた處である。太平記や日本外史の愛讀者であつた私は少年時代から南朝の忠臣を憧憬してゐた。楠氏はいふに及ばず、伊勢の北畠氏、肥後の菊池氏、關東の結城氏などに對しては少年の純眞な同感を持し、渇仰の情を抱いたものであつた。歴史に彼等の存在するといふことが、直に人道いまだ全く地に落ちざるの感じがしてゐた。私はその結城一族を以て日本歴史上、

關東の野に咲いた一と叢の花と見る。それから又、馬琴の八犬傳は、この結城氏の殘黨から、その空想を引き出してゐる。

小山驛で白河ゆきの汽車を乘り棄て、プラットフォームを向うに渡つて水戸ゆきの小さい車室に入つた。汽車はそれから黑く肥えた平野を橫ぎつて東に向つて駛つて行つた。關東の平野は、東京からこゝまで北へ入つて來てもまだまだ山に迫つてゐないといふ感じがする。結城はすぐ次の驛である。ステーションを出て町の中心まで步き、とある鄙びた商人宿に一泊することにした。

翌日ステーションに來るまでに、一寸町を步いてみると、平野の中にある田舍の一古邑に過ぎないが、さすがに古めかしい結城紬の問屋がさきぐ\にあつたり、その他小さい町に比して割合に染物屋だの、吳服屋などの多いのが眼につく。南朝の忠臣結城朝光の墓も近い處に在ると、ステーションの揭示に誌してあつたが、旅程を急ぐので不參にして、とある問屋で結城の單衣を一反買ふ約束をして直に停車場に行つた。

四月の二日、空は碧く晴れて、眞に春風駘蕩としてゐる。綠麥の野のつゞきに林があつて、そちらにも此方にも櫻花が今を盛りに爛熳と咲いてゐる。汽車はそこから下館の方に行くのである。そちらに乘つていつて、平野を流れる鬼怒川の白帆を見ようか、それとも小山に引返して上州の方に行つてみようかと迷ひつゝ、下館にあたる方向を眺めると、向うに櫻花の滿開してゐる野の彼方に筑波山が昨日の汽車から眺めたよりもずつと近くなつて春靄の中に靉靆として長く裾を曳いてゐる。それは結城紬の藍の色よりも尙ほ匂やかである。西洋の繪畵に、春の女神が林の陰で踊つてゐる處などを見るが、あの繪畵は決して藝術家の空想ではない。綾羅を裝つた女神が筑波山の頂の方から舞ひ降りて來はせぬかと思はれる。

やつぱり上州の方に行つてみるに決して、又小山驛まで引返した。今日は日光の山塊も昨日の夕方よりもよく見えてゐる。殘雪が淡藍色の山の肌にくつきりと彩取つてゐる。小

山から汽車は平野を左に入り、日光山臺につゞいた前山一帶を前景にしつゝ進んでいつた、櫻花は兩毛の野まで來ても、どこまでも滿開である。思川の清流を渡つて、平野の中に在る栃木の町を過ぎると、車道は右窓に方つて連亘する低い山つゞきに接近しつゝ進んで行く。

野には目の覺めるやうな麥が青く伸び、櫻花は到る處の野の畔、山の麓、停車場のほとりに爛熳と咲き盛つてゐるが、山々の雜木はまだ多く冬のまゝで、新芽をつけてゐないのが、却て南畵めいた瀟洒とした色彩を表はしてゐる。それにしても兩毛は好い國である。北に山又山が重疊して、南に至るに從ひ平野が開展してゐる。春風の野に犂鋤を携へて農夫は桑廠の畑を耕してゐるのが汽車の窓から眼に入る。彼等は畑の畦に腰をのして休息しつゝ四邊を眺めてゐる。さうして利根川、鬼怒川の諸流は其等の深山幽谷に源を發して、ひたく\と兩岸の平野を浸しつゝ流れてゐるのである。むべなるかな足利新田の豪族が是等の國土より崛起せる。

佐野の驛に來て、武士道の精粹を謠つてゐる「鉢の木」を聯想し、佐野源左衛門常世の事が考へられた。日本の武士道が時勢と共にその倫理的標準たる資格を失つたといふは皮相の見解である。なるほど武士道の外的條件は、以て今の世の倫理的標準とする譯にはゆかぬが、その精髓には紳士の精神が存してゐる。且夫れ、斯の如き精神――倫理思想史を辿つて日本民族といふ國民は儼然として地球の上に命脈を保ち、發達して來てゐるのである。兩毛の平野と、北方に連らなる山群と、鬼怒、利根の長江大河とを思へば是等の土地に常世や、高山彥九郎の如き國士があつたといふことが不思議でなかつたやうに思はれる。

私は、上州の太田までの切符を持つてゐる。太田へ行くには足利で乘り換へることゝばかり飲み込んで、そんなことを空想してゐて、やがて佐野の町を通過して足利に着き、そこで驛員に訊ねると、太田へ行くには佐野で乘換るのであつた。それは結城で買つた切符に、ちやんと、さう記してあつた。驛員は、それを間違へる人が多いといつて、丁寧に

數へてくれた。そこで佐野まで、誤乘にして又引返へすよりも、足利驛から渡良瀨川を挾んだ向岸の足利町驛まで十町ばかりの道を、ぶら〳〵歩いて、そこから太田ゆきに乘ることにした。それは私設の東武鐵道で淺草驛を出發して上州伊勢崎との間を往復してゐるのである。

春は今、此の山國に一時に押寄せて來たと思はれて、昨日上野を出はづれると、王子飛鳥山の櫻花も滿開であつたが、この足利市でも向うの山の上でどん〳〵煙花が揚がつて、渡良瀨川の河原では、五色の旗を春風に吹き靡かして何か競技を催してゐるらしい。

私はこれから太田を經て、藪塚驛に近い西長岡の鑛泉に一浴しようと思つてゐるのである。それとゝもに上州の野から赤城の殘雪を望まうとするのである。足利を西に出はづれて、汽車が桑畑の只中を駛つてゆくと、北の方に當つてその赤城山がどんよりとした春霞の彼方に見えて來た。赤城の山もゝう何年となく見なかつた。それは日光の山よりもまだ長いこと見なかつた。思ひ起すと今から十五六年前の夏伊香保にいつてゐた頃に每日見て

ゐた以來、ずつと見なかつた。前橋方面の平野から眺めた赤城の姿は美しい。太田から藪塚へ行く平野からは、やゝ遠過ぎるのと、今は春霞が深いのとでいくらか物足りない。太田で乘り換へた汽車は大きなボギイが一車臺きりで、三等車である。太田から三つ目の驛が藪塚であつた。荒寥とした砂地の桑畑の中に鄙びたステーションがある。赤城颪の北風が吹く頃の寒威が思はれるやうな處である。そこから十六七町の道が小山の麓をめぐつて長岡の鑛泉のある淺い谷の間に入つてゆく。道の傍に小さい三つの溜池があつて、三段に重なつてゐる。その堤に櫻樹が澤山立つて、こゝでも、もう七分どほり開いてゐる、片山里の春といふ感じがする。日の暮れ方になつて、空氣の肌觸りが薄ら寒い。

鑛泉旅館は一軒きりで、建物はなか〳〵大きい棟が二三連らなつてゐるが、室の構造など、まるつきり田舍風の、不意氣で、襖を一枚隔てゝゐるきりであるから、とても吾々には安心して旅の疲れを休めることなど出來ない。

この數日來、森ケ崎にゐながら、時々東京の郊外に近い宿屋へ一泊二泊してみたが、稻毛の海氣館が一等優れてゐる。それは、私の京都大阪などの見聞を標準にして比較しても、稻毛の海氣館はなかなか好いところがある、そして可なり上品である。――と、飛んだ處で海氣館の提灯を持つて置く。

長岡の鑛泉では、宿料その他が安くつて、氣も張らなかつたが、高くつてもよいから、行き屆いた待遇をせられて、室の設備の安らかな處でなければ旅の情趣を大半滅却してしまふ。二晩も寢處が變つたので、もう東京大森の定宿に歸りたくなつた。

翌日は、蛟塚の停車場まで、ぶら／＼歩いて、そこから淺草行きの例の一臺きりかない三等車に乘つた。赤城はどうかと思つて、そちらの方を見ると、大分曇つてゐるので、山の姿も鈍く曇つてゐる。太田で伊勢崎から來る列車に連結して東京へ行くので、たゞ太田で二等に轉乘さへすればよいのだが、新田義重の創立した義重山新田寺、通りの名は呑龍樣へ參詣して見る氣になつて、太田で一應下車し、停車場から乘合自動車で呑龍樣へまゐる。朝のうちは曇つて薄寒かつたのが、次第に晴れて陽氣になつた。呑龍樣の廣い寺域にも大變な人出である。寺の庭の櫻樹は爛熳として、そこに建つた二基の鐘樓を花で埋めてゐる、寺域を一廻りして背後の金山の方を見ると、松林を以て蔽はれた山の姿が京都の近郊に見る山に違はない。何となく京都にいつたやうな感じがする。汽車の時間を急ぐので、すぐ又自動車で引返し、午後二時の汽車に乘る。

二三日薄寒かつた陽氣がだん／＼暖かくなつて、汽車の中に凭れて、うつら／＼と快よい假睡をしてゐるうちに、足利から、尚二三のステーションを通り過ぎて、やがて館林驛まで來た。遠くの空は暖く花曇りに曇つて、やゝ暑いやうな日の色が廣濶な野邊に漲つてゐる。ステーションのプラットフォームに並んでゐる滿開の櫻花が、春の暖氣に蒸息れて、溢れて落ちさうに危なつかしい。こゝで一と雨あつたら、今年の花は果敢なく散つてしまふのだが、この空模樣では、明日の天氣が氣づかはれる。

私は、クションに凭れて、春の煖氣に又しても眠りがちになる。そして、うと〳〵としてゐるうちに上野行きに乘換ねはならぬ久喜驛に來た。そこで下車して三四十分間待ち合はし、此度來た上野行きに乘らうとすると、さあ大變、とても乘れはしない。もう二等三等の區別などあつたものではない。乘降臺のドアの內側に凭れて、三日の旅程の疲勞を醫すべくもなく、疲れのうへに疲れねばならぬ。こゝから上野まで尙一時間半以上の時間をかうして立つてゐなければならぬことかと、とう〳〵觀念してしまつた。これなら、いつそ先の汽車で淺草驛まで乘りつゞければ可かつたと思つたがもう爲方がない。そのうへ、次から次のステーション每に乘客は押込んで來る。乘降臺の上も一杯人で詰まつてしまつた。これで、もし汽車に椿事でも出來したら鐵道省は、何とするのであらう。又例の不可抗力で責任を免れようとするのか。私は、その乘降臺から、遂にはみ出されてしまひ、とう〳〵、車臺と車臺とを連結した、舌の形をした鐵板と鐵板との喰ひ違ひになつてゐる、車橋（ブリッヂ）の上に立つことになつてしまつた。遂にいつまでも立つてゐられないので、そこに渡し架けて置いてあつた大きなトランクの上に腰を下ろし、車臺の鐵柱を、まるで機械體操をする如くしつかりと握り締めてゐた。片時も氣が許せない。そして下を見ると、下の鐵道の砂利や、レールの鐵がまるで博多帶の縞目の如く連續して走つてゐる。赤羽で荒川の鐵橋を渡る時、見ると、下には深碧の水が見えてゐる。私は鐵板と鐵板とは容易に喰ひ外づれないといふ信仰によつて、そこに腰を掛けてゐたが、他の人間は、そこの乘降臺に押込んで來た無鐵砲らしい印半纒の男でも、それは、やらなかつた。やつと生命拾ひをしたつもりで夜の八時宿に安着し、その翌日の新聞を見ると、京都の嵐峽で汽車顚覆の椿事があつたのは、恰度自分が赤羽の鐵橋の上で一生懸命鐵棒に取り縋つてゐた時刻であつた。こんな世の中では人間は每日生きるにも、まさしく生命がけでなければならぬ。

（大正十一年四月八日誌す。東京朝日新聞）

日光湯元より

十五日の午後四時五十五分の汽車で上野を立つて、たうどう日光奥の湯元まで暑を避けて來ました。私は毎年夏何處か涼しい處へ行くのですが、いつた先きで、日々新聞に出る前日の溫度表を氣を付けて誌し取つて置くのですが、東京の溫度は盛夏に九十度といふ記錄は滅多にありません。あつても一と夏に二日ぐらゐで、三日と九十度といふ氣象臺の報告を新聞で見たことはない。然るに本年度はその九十度以上九十五度六度に及ぶ日もあり、さなくも九十度以上が七月の末土用半から八月に入り倍ゝ高く、ずつと廿日間もぶつ通しにつゞけて照り付け、雨らしい雨といつては七月の初に降つたきり、あとは庭掃水ぐらゐなもので、却つて蒸暑さを增すやうなものでした。しかし、その炎暑を八月の十五日までずつと東京にゐて耐えたのは、暑氣に意苦地のない私にしては又めづらしいことです。幸ひにしてそんな暑さにもかゝはらず一日も飯がまづいといふこともなく、三度々々の飯をうま

く食べてゐました。その代りに毎日朝つぱらから猿股一つの眞裸體で暮してゐました。日課は朝起きるとまづ蚊帳を疊み、薄い夜具を形づけ、八疊の座敷を一間だけ自分で掃除し、郊外なれば深い井水のポンプを汲み上げるのが腕を働かすので何より好い運動でした。一日に冷水で何度身體を拭くか知れぬ。そのたびにポンプを汲み上げる。夕方五時頃になつて緣先の水甕の水を植木に灌ぎ、それからバケツで庭や生垣の外の往來などに打ち水をしてゐました。そんなことが隨分好い運動になつたせいか、二十日以上も打ち續いた九十度の炎暑にも割合身體が耐えられました。けれども腦神經が可なり疲勞して來てゐるのは段々覺えて來たので、此の上もう餘り遲くならぬうちに早く出掛けなければならぬと思つて心を焦りました。毎年未だ梅雨の明けぬうちから涼しい處へ往つて、いつも屢々濕けに會つてゐるくせに、今年の如き私の一生に未曾有の炎暑に今年暑期の峠を越すまで東京にぐづ〳〵してゐたのは馬鹿らしいやうだが、一生にはじめて經驗する炎暑を東京で身に感じてみたのも强ち無用の經驗ではなからうと思ひます。

今年はもう、かねてから日光の湯元と極めてゐました。箱根は一番便利で急用があつても安心なのですけれど、いかにも諸式が高いのと、且その風景に見飽きました。日光の湯元は不便で遠いが、涼しいことは輕井澤も富士見も及ばない。それに湖水があり溫泉がある。涼しい風は吹いても成金風が吹かないのが何よりも好い。私の今まで行つた、かういふ處でまだ座敷に石油ランプを用ゐてゐるのは此處ばかりだ。自炊の湯治客は前世界の如き古風な種油の行燈を用ゐてゐます。まだ立たない前、上野驛から此處まで來ることの勞を思ふて幾たびか躊躇しましたが勇を皷して遂々やつて來ました。しかし途中日光の町に一泊して來てみると、遠いは遠いが愉快でもありました。汽車、電車、腕車、中禪寺湖を一里半舟に乘り、そのあと戰場ケ原の一里半を歩いて來た。見渡す限り夏草茫々たる二里四方の廣原は寂として鳥の聲さへなく頭の心まで氣が澄むやうである。ところ〴〵落葉松が立つてゐるばかり、折から魔界の巨人の如き男體山の頂に灰色の雲がかゝつて來たと思

つてゐると、遠くの方から夏草の野にさゝやくやうな雨の音がして、白い夕立が通つて來た。私は中齒の下駄に尻を端折つて歩いた。この道は八年前大正三年に歩いた以來久し振りに往くのである。山中の道遠く四圍の山々寂として心細しといへども先年二十日ばかりもゐた、質朴で氣の置けない宿はもう葉書の往復で定まつてゐる。連日九十度の東京の暑熱もこの太古の如き大きな自然の中へ深く入つて來ればもう大丈夫である。

馬返しから中禪寺湖まで男體山腹を繞つてゐる道路は八年前通つた時にも平坦で好い道だと思つたが、今度は更に好くなつてゐた、俥に乘るのが勿體ないくらゐ、涼しいく\緑蔭を九十九折りして登つて來た。中禪寺湖の畔には上司小劍氏が此の間から陣取つてゐるので丁度晝食時刻そこへ腕車を着けた。

上司君は東京が九十五度といふ炎暑に、こゝでは褞袍を着てゐた。湖水を隔てゝ男體山を正面に眺めながら一緒に晝飯をしたゝめ、もう此處まで來れば、あとは晩までに向うにゆき着けばよいので、食後ごろりと横になつて、二時間ばかり休息し菖蒲ヶ濱まで一里半の水上をモーターボートにしようか和船にしようかと考へたが、儉約と趣味とから和船にして乘つてゆくと、好い鹽梅に南風を受けて、十六七の小者が熟れた手で操る帆一つで舟は走る如く水の上を滑つていつた。私は船べりに例の寫眞機を置いて男體山を寫した。めづらしい炎暑に湯元も客は滿員である。東京の客が多い。

東京を立つ二三日前に永井荷風氏から春陽堂を經て、近著「雨瀟々」を贈られた。これは丁度好い物を貰つた。日光に往く時持つていつて讀むに好いと、樂みにして一寸本の體裁と著者自筆の口繪とを披らいて見たまゝ奥は見ずに置いた。此方に落着いてから昨日今日湯の湖の緑蔭にボートを漕ぎ寄せて涼しい水の上で靜かに繙いてゐると、興いふばかりない。八年前の夏中禪寺湖に來てゐた時分もよくボートに乘つて水涯の緑蔭を追ふたものであるが、湯の湖は中禪寺湖よりも遙に小可愛くつて親しみ易い。君、湯の湖の岸を繞れる涼しき緑蔭の美と快とを知れりや、私は、のんどりと油を流した如き靜かなる水の上を、人の

舉から最も遠ざかつた向うの山岸にボートを漕いで往き、大きな落葉松や白樺や搠や楢などが蔽ひ被さつて暗緑色の涼しい陰を水の上に浸してゐるあたりにオールを休め、そこで靜かに物を思ふのである。かうして唯々物をはつきりと思つてみるといふことは私に取つては、せずにはゐられないことである。平常倉皇の間にしてゐる事は、いづれも餘りに事物に接近し過ぎてゐて當面の部分的の事しか思ふ遑がない。それだけでは自己が生活に使役せられてゐる感がある。假し狹義の生活に使役せられるのでないまでも他人のために使役せられる。分裂した自我、街頭の自我に使役せられる。かうして今靜かに自分を思ふ時始めて自己と自己以外の萬物との關係がはつきり眼に觀られる。永劫無窮の一秒時を占めてゐる自己の時間的存在が考へられる。自分は何を目的に生きてゐるか、自分は生きてゐて何をしたらば可いのか？……

かういふ心の傾きになつてゐる時荷風氏の「雨瀟々」を、幽邃な湖涯の緑陰に繙いてゐ

ると氏の人生觀が、一入はつきりと私の胸に共通して來るやうに思ふ。物質的の境遇、趣味、見解、性情等の相異も可なりあるが、又ひどく傾向の共通してゐる點を發見する。

「雪解」は明星掲載當時からリアリズムの藝術品として夙に文學の高級理解者の間に嘆稱せられたものである。巻頭の「雨瀟々」は「新小說」掲載當時一度讀んだことがあつたが今又繰返して讀んで見ても興が深い。

けれども私は、蕭洒たるこの小册子の中では多少物語りめいたもの、筋のあるものよりも「寫況雜記」の小品を最も愛讀した。「雨瀟々」の冒頭にも、偏奇館漫錄の書き出しにもさういふ小品めいた感情追懷の名文がある。「寫況雜記」は目黑、夜歸る、冬至、落葉の四小品である。中でも冬至と落葉の二つは私の心にぴたりと共鳴を喚起する。是の如き趣味は往々隱遁的とか退嬰的とか云つて、粗笨なる頭の人から無下に斥けられるが併し今日でも新しい詩人の群には十分よくこの趣味を解してゐる人達があるやうである。物質的社會主義や階級闘爭を云々した物は決して、永劫に亘りて人生を縱斷した物の見方ではない。無

論かういふ心境や趣味からは積極的活動は生まれて來ないが、生まれて來なくつても少しも氣使ひはない。世界の人類が悉くそんな心持になりはせぬ。ヴェルレェヌや芭蕉の如き人はさう澤山あるものではない。落葉の趣味は私も嘗て小品に書いて舊著に收めてゐる。

一年の中で冬至の頃の好ましいことも亦極めて同感である。荷風氏もいつてゐられるとほりに私も實際、時日は接近してゐながらも正月よりも何となく冬至の方が懐しく忘れがたく、そして何となく氣分が落着く。全く荷風氏の言のごとく冬至だといふと何となく老いたる人の平穩靜安な生涯を聯想する。南縁暖日に大根を切つて干してあるのが眼に浮ぶ。机の傍に圓火鉢を引寄せて書を讀みながら柚味噌を煮る樂みも十二月であると荷風氏はいつてゐられる。その柚味噌のことも亦私は某雜誌の隨筆の中に書いて置いたことであるが、荷風氏は私よりも遙に貴族らしい。實際私は自身で禪僧の如く柚味噌を煮る勞を意に介しない。今度東京の西郊に些かなる假寓を構へて、僅ない借家の庭に少しばかりの花樹を植

ゑた時芭蕉と竹とを植ゑることを忘れなかつた。そのほかに柿を植ゑた。そして柚の樹を希望したが、植木屋は今年はもう移植の季節を遲れたといふので斷念した。柿の木も實は無理であつた。

冬至の頃になり、秋漸く寂びて、戸の外は武藏野を吹いて來る風の寒さを厭ひ、炭櫃持つ手も急がしく水口から家の中に驅け込むやうにして火の傍戀しくなる時柚の實の藁屋の背戸に靜かな冬の日を浴びて黄色く照つてゐる光景を我が庵に實現せんと欲したが、時季既に過ぎて一年待たなければならなくなつた。(十一年八月二十三日、日光湯元温泉にて。時事新報)

男體の暮色

ある年の八月の半ば、日光の中禪寺湖からまだ三里の山奥にある湯元に行つたことがあつた。

私はその夏七月の初、中禪寺湖に來て十分湖邊の夏を樂むだ。ボートといふものを、もう何年か漕いでみなかつたが、そこにゐる間に少しづゝ試みてゐるうちに段々に熟練して、初は湖に臨んだ旅館から一丁も遠くへ出ぬところを漕いでゐたが、後には大膽になり湖水に親しみが生じて、あの物凄い深碧を湛えた水の上を隨分遠くの沖まで獨り漕ぎ出すこともあつた。宿の三階から向うの左方の岸にあたる歌ヶ濱の觀音にその年勤めてゐた日光輪王寺の僧侶と知合になつて、そのお坊さんと二人で始終ボートで乘り廻はつてゐた。ある時などボートで日光から足尾の方に越す對岸の方までいつたり、中宮祠畔から二里もある菖蒲ヶ濱までも往つた。湖水は宿の三階から見渡したのではさまで美しくはないが、一た

び舟に乘つて水の上に出離れると風景は一段づゝ次第に壯美の大觀を增すのである。瀲灔たる煙波に身を委せつゝ、漂蕩として搖られ〳〵てゐると、宛として身は繪畫の中にあるやうである。男體山をはじめ四圍の翠巒が影を涵し、碧く晴れた大空には眞白の閑雲がふはふはと峰から湧き出でゝは、いつとなく天心に消え去る。私は此方の岸から一番近い處にある向うの出鼻のフランス大使館の別莊の下の綠蔭に先づボートを漕ぎ寄せて、そこから涼しい木蔭の汀をオールを弄びながら、歌ヶ濱から更に英國大使館のある岬の方まで往く。そこら邊まで往くと、男體山を仰ぎ視る距離が適度である。中天に聳え立つ頂から、長い美しい傾斜の一線が澱みもなく湖水の岸までずつと延いてゐる。暑い夏日を浴びて水蒸氣が日光に反射してゐる加減で綠の山の肌が淡紺色に白く汗ばんで見える。私はオールを舟の緣に載せて波のまに〳〵身をまかせながら仰向にボートの中に寢そべつて波光に浴してゐた。遠くの湖頭の方を見ると、突兀とした白根山の頂が眼に入る。湯元は丁度その麓の處にあるのだ。白根山は上州と下野との國境に立つてゐる。その山の奇怪な形が妙に注意を惹くのである。

湯元に行くには菖蒲ヶ濱から湖岸に別れて途は戰場ヶ原の茫々たる草原に出て來る。そこから仰ぐと圓錐形を成した男體山の逢つた側がすぐ眼の上に聳えてゐる。荒涼として夏草の生ひ茂つた平野の果てに眞靑な峰が四周を取卷いてゐる。白根山は湯元の左方に高く聳えてゐるのが次第に近く見えて來た。すると今往く道の正面に方つて深い夏木立の中に白く帆を張つたやうなものが眼に入る。それが湯瀧である、道は原の中ほどに來て右と左と二つに岐れてゐる。右の方にゆくと日光の裏山にある金山に通ふ道である。左方を取ると湯元に行く。それは茫々として雜木や夏草の生ひ茂つた中に荒れた道がつゞいてゐて、西洋人などによく出會ふ。だん〳〵湯元に近くなるに從ひ西洋人の男女が子供を伴れたりして其處らを散步してゐるのを見る。彼等は海外萬里の異域に來て、しかも日本人自身さへ餘り多く入つて往かない深い山中に來て、そして自然の壯觀の中に強い深い呼吸をして人生と自然を樂んでゐる。私は箱根や日光にゐて、西洋人がいかにも快活な生活を享樂し

てゐるのを見ると感心してしまふ。
道は次第に山毛欅や白樺の深林に入つてゆくと、暫く阪道になつて丁度湯の瀧の落ち口の側面に登つてゆく。道の左側から懸崖を覗くと數十間の瀧が急傾斜を成して落下してゐる。それはすぐ上の湯の湖から流れ落ちるのである。道はその湖水の右岸に沿ふて半圓を描き乍ら涼しい靜かな老杉の樹蔭に入つてゆく。一條の道路は銀座街よりも平坦である。
中禪寺湖の湖尻から遠く望まれた白根山の突兀たる山嘴は湯の湖の向岸に聳えてゐる。私は、そこらあたりの風景を好む。深碧を湛へた湖水の岸には密生せる樹木が暗い陰影を翳して太古の如き靜寂が湖を掩ふてゐる。やがて老杉巨檜の木下暗を向うへ出抜けると、どこからとなく硫黄臭い溫泉の香がして、湖水の縁から濛々と湯氣が上騰してゐる。尙ほ少し行くと湖水の盡きた、いき詰つた山際に數個の人家が立てゐる。そこが湯元である。此處には日本人より西洋人の方が多いくらゐであつた。それでも箱根や日光の町あたりと違つて、宿料などさう高くない。日本人の客も近來大分華族や富豪などが來るが、多くは

近縣の在鄕人である。
私はこゝに八月の半ばから九月の初まで二十日ばかりも滯在してゐた。東京が九十度を越す炎暑の時分でも夕方には綿の入つた褞袍ぐらゐを引掛けてゐなければ薄寒いほどである。朝に夕に深い靄雲がふはり〳〵と軒端に這ひ絡はつて、座敷のランプの光を朧ろにする。座敷からすぐ眼の前に立つてゐる前白根の突兀を眺めてゐると、眞靑に夏草の生ひ茂つた山の草木が一本々々數へられるほど大氣が澄んでゐる。空の色もまた飽くまで透明で、見てゐれば見てゐるほど何處まで遠いか知れない紺靑の天空に、前白根の奇峰の向うから純白な閑雲が、あとからあとから湧いて出る。私は座敷の障子際に仰臥してその靑山と白雲を無心に眺めてゐるのである。ふと氣がつくと、山の裾にもう何の木か一本大分紅葉してゐるのが眼に入る。五千尺の山の上では秋が近づいてゐるのだと思ふ。
その湯の湖が落ちて湯瀧となる處の山の鼻に出ると戰場ケ原の廣い草原が遠く見渡される。左方にあたつて男體山の巨姿が眉の上に聳えてゐる。聳を出して何か物でもいひさう

に思はれる。夕方になると西洋人の妻君達が多勢子供を伴れてそこの芝生の上に蹲んだり脚を投げ出したりして暮靄に包まれてゆく山の姿を眺めてゐる。夕陽を浴びた男體山は山頂の岩の形まで明かに見えてゐるが、やがて日が西方の山に影を沈めると、男體山の肌は初は黃色に夕榮えてゐるが、やがて淡紫に染まつて、それから次第〳〵に暗くたそがれてゆく。西洋人の女達はそれが黑くなつてしまふまで見てゐる。私も見てゐる。そして日本人の女には、とてもさういふ無邪氣な好奇心でと、敬虔な心で自然の美觀に見惚れるやうな人間は少いであらうと思ふと、いよ〳〵彼等の生活の內容が豐かである事を思はしめる。

ある晚夕飯を濟まして、湖水の岸に繫いであつた舟を漕いで水の上に乘り出すと、湖面から滴るやうに冷氣が肌を裝ふて來た。舟の中から頭を廻らして前白根の方を見上げると、五日ばかりの夕月が突兀とした山の端に懸つて、無數の星くづが靜に瞬きしてゐる。涼風は絕えず水の面から湧いて來た。

九月の初湯元を降りて來た時の戰場ヶ原の轡雲の美觀を忘れることが出來ぬ。九月の三日四日の頃といへば東京でももうそろ〳〵初秋の風が吹く頃である。まして五千尺の高原の爽涼の氣はいふまでもない。私はその時、後から湯元に私を訪ねて來て一緖に滯在してゐた洋畫家のオー氏夫妻と同伴であつた。湯元の宿の主人は質朴であつたが湯の湖の落口——湯瀧の上のところまで私達を舟で見送つてくれた。それから阪道を降りて廣い戰場ヶ原の眞中のあたりまで戾つてくると、原の前面左方に聳えてゐる男體山も、もう後方になつた前白根につゞく山岳も悉く峰の腰のあたりまで濛々たる灰白色の雲霧が盛に蔽ひ被さつて、それが急な速力で橫に這ひ廣がつてゆくのもあれば、吹き上げるやうに高く天を指して奔騰してゆくのもある。前白根の頂は男體山よりももう幾分距離も遠くなつてゐるのと、夕陽の關係で山の肌は暗く藍色に染まり、名狀し難い陰欝な感じがしてゐる。

男體山はと見ると、これは午後四時頃の太陽が西の方の雲霧の中にあるので、その光線を受けて前白根より鮮かに淡紫色の山の姿がすぐ眉の上に落ちかゝつて來さうに仰ぎ見られる。太陽の方を見ると、丁度火事の夜明るい黃橙色の焰の腹に無數の火の子が渦卷いて

ゐるのを見るやうに、濛々たる雲霧の渦を巻いて奔騰する彼方に太陽は輪廓だけはつきりと見えてゐる。

男體山は仰ぎ見れば見るほど魔界の巨人の如く靜寂として、暗紫色を呈して聳り立つてゐるのが威壓するやうで、何處か懐しいやうにも思へる。七八合目の肩のあたりに灰白色の雲霧が絶えず動いてゐるが、それは大きくもならず小さくもならない。

洋畫家のオー君は欣喜雀躍しながら、早速肩に掛けた繪具箱を取りおろして道傍の草原の上に開きながら、刻々に變化する自然の壯景を遺憾なくスケッチして取らうとするのであつた。

何といふ自然の壯美であらうと、私はたゞ凝乎と其等の四圍の大觀に見入つてゐるばかりであつた。

やがてオー氏は二三枚小い板にスケッチしてしまふと山々の姿を殘り惜しさうに振返へり〳〵又涼しい道を急いだ。戰場ケ原が盡きて、道は暫く森林の中を往つてゐると、山毛欅や杉の林の中から、今度は今の先き原の中で見たよりは又ちがつた形の男體の巨姿がぬうつと覗いて來た。丁度何處までも人間を追ふて來てゐるやうに思はれる。圓かに肥へた山の一角が手を伸せば屆きさうに眼近に見える。

やがて林を出拔けて龍頭の瀧から菖蒲ケ濱まで來ると、そこの淸渚に、今朝早く湯元から此方へ荷物を運んで來た人夫にいはして置いた船が用意して待つてゐた。私達三人は荷物と一緒にその船に乘込んだ。菖蒲ケ濱から中宮祠まで水上二里近くある。可なり大きな和船で二人の船頭が櫓を押してゆく。船頭は、

「えつち、おつち！」

と掛け聲をして力一杯櫓を押してゐるが、のんどりとした暗碧の水は重さうである。それでも試みに船べりから、そつと水に手の先を入れてみると、急瀨の如く瀨切る。この時夕陽は對岸の峰に沈みかけてあたりは朱を流したやうに夕榮えて、灰色の暮雲の奥に大きな紅玉の如く輝いてゐる。男體山は湖岸から急勾配をして直ちに天に盛り上がつて見えて

ゐたが、それも段々暗い暮色に包まれた。

そして二十日ばかりもゐなかつた中禪寺湖の畔に戻つて來てみると、雨の多い山の上にも似ず、その年は各地共近年稀なる酷暑で、七月の半ばから八月の半ばにかけて一ケ月ばかり降雨がなかつたので、さしもの中禪寺湖も水が減じ、華嚴瀧さへ落下する水勢がいくらか少くなつたくらゐであつたが、湯元にゐる間八月の後半に入つて二度ばかり二日續きの豪雨があつたので、湖水の水も眼に見えて又多くなつたが、それとゝもに著しく私の眼についたのは男體山の山の色であつた。日光は山が深いから氣象も荒い。從つて秋が訪れるのも早い。此間中二度の豪雨と暴風とのために山の木の葉がすつかり傷んで、先頃中は遠く湖上から仰ぐと青霞に霞んでゐた山がすつかり黄褐色に變色してしまつた。そしてあれほど、七月の初から四十日ばかりといふもの毎日のやうに水の上に出て遊んでゐた私が、氣候はまたなか〳〵暑いにもかゝはらず、どういふものか少しも湖上に乗り出す氣分が失せてしまつた。山の色の變つたと同じやうに水の色も思ひなしかに寂れて來たやうである。遠くの對岸の足尾の方に越すといふ峠の方も同じやうに眞夏の頃の青かつた山の色がすつかり黄褐色にうら枯れてしまつて見える。

その頃は私はひどく暑氣を厭ふたもので、私はよく云つた。自分は轉地によつて夏といふ四季の中の一季を一年の中から除いてしまうのだと。それくらゐであつたから、それから尚ほ一月くらゐも中禪寺にゐて、到頭湖邊を辭して下りて來たのは、大平(おほだひら)には早い木にはほつ〳〵紅くなつたのが眼につく頃であつた。中禪寺を下つて、その夜は神橋の畔の某旅館に宿り、湖水で知合になつた輪王寺の僧侶がその時もう下山して東照宮の山内にゐたのを、夕飯を濟ましてからぶらぶら歩きながら訪問すると、氣の輕い交際好きのそのお坊さんは、私を西町の方のとある一寸した料理屋に案内して、私が、長く留守にした東京の食べ物殊に鮪のすしを食ひたがつてゐることを話してゐたので、「日光にもなか〳〵東京に負けぬのがあります。一つ御案内しませう。」といつて、すしを御馳走してくれた。

高い山の上ではもう東京で十一月の中ごろくらゐの寒さで少し陽氣ちがひの加減で變で

あつたが、三千尺山下の日光の町では十月の二日の今が丁度東京で十月の中ごろの氣候で、清涼の氣候は何ともいへず快適であつた。肌がすうと輕くなつたやうで、頭の中が清く爽かになり、何を考へても想つても、それが精しく續けて思考することが出來る。そして酒など少しは飲んでみたいやうな快い食欲を覺えしめるのであつた。お坊さんと話しながら神橋の畔から大谷川に沿ふた道を日光の西町の方に上つていつた。

折しも丁度田母澤の向うの 高い峰の頂邊には 中秋十五夜の 明月が 一山に遍く 照り輝いて、深い川霧の白く立罩めた大谷の溪流は水聲高く兩岸の山に反響しながら月光を玉と碎きつゝ流れ落ちてゆく。霜露を含んだ冷涼の夜氣がしと〳〵と衣を霑ほす

私は頭を上げて今日下りて來た、七月初から三ヶ月に渡つて淹留してゐた中禪寺湖はあそこぞと高い峰の重疊した方を見上げると、大きな圓錐形をした男體山の一角が白い月光を浴びて糢糊として白く煙つてゐる。盛夏三ヶ月はまるで夢のやうに思ひ返される。

（大正十一年八月六日誌す。改造）

秩父紀行

私が秋聲君や中村武羅夫君などのやうな地主さんや家主さんとお交際をするのは、丁度百石取りの小身者が十萬石の大名とお交際をするやうなもので、すこしく氣が張るのだが、二人ばかりぢや面白くない、君が行かぬと話がはづまぬ、何處かへ往つて、飯でも食つて一日氣樂に話さうぢやないか、一晩泊まるやうな處なら尙ほ面白い。それはよからう。箱根は便利だがめづらしくない。伊香保でも好いが、少し本物の避暑になりすぎる。日光はあまり仰山になつて見物する方に急がしい。ぢや秩父の長瀞に往つてみようぢやないか、遠さも丁度いゝ加減だし、鮎も食べられる。それで六月の二十六日少しくらゐ雨が降つても却つていゝ、午前十時までに森川町の秋聲氏の宅に出會ふことに一週間ほど前からハガキで協議が纏まつた。

人の心はいひ合はさねども皆同じものなのであらうか、いみじくも又奇しき因緣は、す

ると、その前晩の新聞の夕刊は、此度畏くもわが第二皇子の宮御成年につき宮中にては新に宮號を宣賜ありて秩父宮と稱し奉るといふことを報じた。その由緣は、武藏國は明治大帝陛下が始めて皇居を定めたまひし地であつて、帝都より遙に西北の方を眺むれば、遠く王城を繞りて、さながらに長城鐵壁を築いてゐるかの如くに見えてゐる秩父の連山は、萬世國家鎭護の表象である。卽ちあの豪健にして男性的な靈山の名に因みて、わが二の宮の宮號に選定あらせられたるは最も自然の意に叶ひたるものである。

大方の、自然に對して感受性を有つてゐる人達は誰でもさうであらうと思ふが、私自身にとつても秩父は懷しい山である。同じ武藏野から仰がれる山の中でも秩父は富士よりも筑波よりも親みが多い。その理由は、富士や筑波は餘り東京から距離が遠う過ぎるので何處からでも自由に見ることが出來ないのと、も一つは遠望であるがためにあまりにピクチユアエスクであつて、山岳といふ感じに乏しい。まして、私ども長く東京の西北隅に住馴れた者には富士や筑波に親む機會は少いが旦に夕に秩父の連山に親む機會は多かつたのである。私はもう十數年の間一處不住であるけれど、以前に牛込の赤城に住んでゐた頃には、その二階から丁度秩父の山を望むに好かつた。それは今から十五年も遠い以前のことである。私は、ある他の目的の爲にそこの家を借らうと思つて見に行つて、二階に上がつて見ると、思ひがけもなく眺望が好くつて、江戸川に沿うた牛込の低地から遠くは早稻田、雜司ケ谷の森つゞき、その高い杉の群木立の彼方に蜿蜒たる秩父の連山を望んだ時には、その家が、他のある肝要なる目的に適するや否やを十分に考慮することを忘れて一途にその家の二階の眺望が氣に入つて、どうしてもそこを借らずにはゐられなかつたことを覺えてゐる。それは秩父の連山が紫紺色に匂ふ晩春初夏の頃であつたが、段々夏になるにつれて、暑い朱色の太陽はその山脈のずつと北端の嶮岨な峰の肩のところに沈んでいつた。

その年八月の二十日頃、もう街には靑い唐辛賣りの呼ぶ聲が聞かれる時分であつた。一日一夜豪雨のあつた翌朝早く起きて西の窓際に凭ると、洗つたやうに天地が透明になつて、眞夏の間暫く見なかつた秩父の山々が藍を染めたやうにくつきりと西北の空に渡してゐる

のを見た時の涼しさ、それから山の色は日増しに鮮かになつて來た。どうかすると手に取る如くはつきり見えることもある。晩秋初冬の頃になると一層美しい。そして十一月に入つて、都に住んでゐる者にも、急に冬らしい寒い一夜があつてその翌朝起きて秩父の方を見ると、果して薄く雪を被つてゐる。やがて十二月になり一月になつて、都にも雪が降るやうになると、秩父は全山白皚々として、山勢宛として白馬の群が馳せてゐるかの如く連亘して見える。

寒い〳〵秩父颪しが眞正面にそちらの方から吹いて來て、武藏野は人目も草も枯れ盡してゐる。さういふ時に遙に秩父を眺めると冬の寂しさが犇々と胸に迫るやうであるが、どうかすると又そんな冬の最中でももう春が循つて來たかと思はれるほど暖い和かな日が續くことがある。青磁色に晴れた麗かな大空に明るい日が照ると、雪の秩父は朝日を浴びて茜色に輝いて見える。富士よりも筑波よりも秩父は何となく傍に近寄つて行つて見たい山であつた。國木田獨步が國境の連山懷しくと歌つたのは、武藏野から遠く秩父の山を眺めた時の感懷であつた。隅田川の上流荒川はその秩父の山中に源を發してゐるのだ。熊谷から左折してまだ十數里も山の奥に入つて往つた處に秩父の舊い部落が散在してゐる、今日でこそ交通の便が開けたが、鐵道の架らない時分にはどんな桃源鄉であつたらう。

いよ〳〵二十六日は、その前夜から梅雨らしい雨で、その日になつてみると雨はあがつたがひどく蒸々する。十時に會合の約束が少しく遲れて十一時に森川町に往つてみると、もう鵠沼の住人中村君は來てゐて、二人で私の來るのを待つてゐる處であつた。

「さあ往かう。」と秋聲氏が早速に身支度をする。上野十二時三十五分發に乘車して段々北郊を出はづれると梅雨上りの山野は綠の色濃く遠くから車窓に吹き入る風が心地よく顏を撫でる。閑話がそれからそれへと絕ゆる間もなく續くのであつた。

左窓から梅雨ぐもりの空の下に秩父の連山が幽かに見えてゐる。それにつゞいて赤城、日光の諸山も車窓の左右に見えつ隱れつする。人間の本能は勝手なもので、私は、夏になると、ひとりでに東京の上野口から乘車する汽車がなつかしい。そして九月の中旬そつち

の方の避暑地から戻つて來て、仕事をするにも遊ぶにもいゝ都會生活のシーヅンの急がしさに暫く旅の事を忘れたやうになつてゐるが、やがて十一月十二月になつて嚴つい冬が近づいて來ると此度はもう上野口の汽車はたゞ思ひ出してみるさへ慄然とするほど寒くつて、頻に東京驛又は新橋口よりする豆相あたりの避寒地が無上に懐しくなつて來て、色々な小說的生活が空想に湧いてくるのである。秩父、赤城、日光の山々、其等はやがて來る夏季の清興を樂む舞臺である。何となく懐しいはそれ等の山である。汽車が北へ〱と進むにつれて空氣の觸覺が倍々爽涼になつて來て興趣果つべくも思へず、何時の間にかもう熊谷に來てしまつた。そこで秩父線に乘換へるのであるが、一時間ばかり待たなければならぬので、その間に驛構外の熊谷堤へ出て櫻の並樹の蔭など歩いて見る。秩父の群山はもうすぐ西の方に現前してゐる。右方その北寄りに遠く霞んで見えてゐるのが妙義の奇峰らしく、又その少しく北に當つて大きく圓かな形をして梅雨曇の下に半ば雲を被いでゐるのが淺間山と見えた。もう何方を向いても山に近づいて來たことが思はれる。夏季は清涼飲料を渇望すると同じやうに山巒の氣は人間の本能的欲求である。

熊谷から秩父まで從來は他の鐵道と同じく蒸汽の動力を用ゐてゐたが、つい一二箇月前から電氣動力を用ゐることになつたのである。熊谷を發車して十哩ばかりの區間は行く手に方つて秩父の山巒を眺めながらも割合に平凡な田野の間を往つてゐたが、寄居町までさしかゝつて來ると、秩父の前山はすぐ車窓の左右に迫つて來た。そして左窓より覗くとすぐ眼の下に荒川の溪流が磊々たる兩岸の岩に激して流れ落ちてゆくのが見える。その清い流れに沿うて峰と峰との間に稍廣い田畑が切り拓かれ、桑の葉が茂り籬落が點綴してゐる。折柄農繁季節で山中の農夫は僅ばかりの水田を耕し今しも稻の植付けにとり掛つてゐるところと見える。車窓から見てゐると、鐵道と卽いたり離れたりしながら一と條の坦々たる街道が桑の葉蔭になり或は人家に隱れたりしながら遠く秩父の方に入つて往つてゐる。それは秩父古成層岩の、雨が降つても決して泥濘にならぬやうな道であつた。中村君は車窓らか覗いて頻にその道を讃嘆し、

「どうです、好い道ぢやありませんか。」といつてゐる。川は處に從つて或は清瀨となり、或は急流となり、或は碧潭を湛へつゝ流れながれてゐる。鮎を捕るのであらう、眞裸體の男が木の箱の如き物を頭から被いで、どぶんと渦巻く急潭の中に眞逆さまに飛込んでゐるのが見える。淺瀨のやうな處に舟が二三艘繋ぎすてゝある。車窓が流れに沿うて溯るにつれて兩方の峰は次第に嶮しく青くなり、それとともに空氣はいよ〳〵清涼になつて來た。今晩一泊の豫定地である長瀞は寄居から四つ目の寶登山といふ驛で下車すると、すぐ二丁溪流の方に出た處にあるのである。

向うに着いたのはまだ五時に一寸前であつた。旅館兼料理屋は長生館といふのが、そこに一軒ある。設備が完全であるとはいへぬが、それでも決して我慢出來ぬといふほどでもない。先づ、その家に落着いて、丁度風呂が出來たところで一浴して後、いづれも身體を痛はる人達ばかりなので、うつかりすると風邪を引くといつて、貸浴衣の上にトンビを被り長瀞の碧流、所謂秩父赤壁に臨んだ岩石の上に出て見た。秩父は地質學者が多く研究に來る處で地質學上研究の資料に富んだ處であるといふことだが、吾々には其の事は分らぬけれど、赤壁の兩岸を疊んで削立した絕壁は水蝕の爲めに清く洒されてゐる。一つは近ごろ降雨の少かつたせいでもあらうが水量もさう凄いといふ程でなく、ところ〴〵岩の根方に渦を巻いてゐるところもあるが、全體の感じが極めて明るい氣持ちのする處である。深い處まで川底の小石が見え透くほどの清い水で、兩岸の峰が青い影を涵してゐる。旅館の座敷から見ると、すぐ眼の前の向岸に沿うて疊まれてゐる大きな戰鬪艦程の一塊の岩山は丁度婚禮の時の島臺の大きいのと思へば少しもちがはぬ。清く洒らされた岩の上にいざり松やその他いろ〳〵の雜木が青く生えてゐる。それは水量の少い今は淺い沙底によつて向う岸の陸地と續いてゐるのであるが、少しく水量が増すとすぐ島になるのである。岩島の此方に面した側は高く水の上に削立してゐて、その屏風の如く曲折した處に深い水が突き當つて緩く澱み流れてゐる。岩壁のところ〴〵に猿が腰を掛けるほどの平があつて、里の子等が丁度浦島の子の如く釣魚をしてゐるのが見える。入日が今しも西の山の端に傾きかゝ

つて明るい夕榮えが眞正面にその島臺に照り付けてゐたが、吾々が此方の岩石の上を歩き廻つてゐるうちに、釣魚をしてゐた里の子等はやがて岩の上に着物を脱ぎ棄てゝ、岩壁から碧流を目がけて、どんぶとばかり飛び込むのであつた。

涼しい夕風は水の上から湧いて來て、夕陽がすつかり峰の蔭に姿を隱してしまふと四邊はいよ〳〵靜かになつて刻一刻と夕暮れてゆく。子供は陽が落ちてもまだ水の中で游んでゐたが、そこへ遠くの座敷から見てゐると、旅館の女中であらう。淡紅色の腰卷一つになつた若い女が眞白な裸體になつて河原を傳ふて水の中へ入つて行つた。そして膝の上あたりまでの處にいつて顔や乳のあたりを洗つてゐる。淡紅色の腰卷の裾が流れに絡んで浮いてゐる。まるで人魚が半身を現はしたやうである。彼女はやがて鬢を搔き上げなどして、しまひにその一つの腰卷も取つてしまひ、一旦磧まで上がつて來て、乾いた腰卷を身にまとひ、先の濡れた方を流れの中で振り雪いだ。そのうちにも夕暗は次第に水の面を蔽うてきた。里の子供もいつの間にかもう岩の上に見えなくなつた。川の向岸には山の根まで桑畑がつゞいて、その中に養蠶をするらしい大きな家が散ばつてゐる。また汽車の通はない時分秩父街道はそつちに通じてゐたので、今でも舊道には自働車や人車が往復してゐるのである。小學校の女教員らしい海老茶の袴を穿いた女が、薄い色の蝙蝠傘を翳して桑畑を見え隱れにゆくのがその翌朝座敷から見られた。そちらの岸の川上の方に、なか〳〵人家が群がつてゐるのである。向岸の人家に灯が點つて、水の上がとつぷり暗くなつてしまつた。

「あゝ腹がへつた、腹がへつた。飯の持つて來やうが遲いぢやないか。」

と二三度も繰返した後、やつと階段を踏む音がして膳を運んで來た。秋聲氏は頻りに鮎のことをいつてゐたが、鮎は少し貧弱でフライと魚でん、そのほか鹽辛い味噌の鯉こく、鯉の洗ひといつた品々であるが、料理はさすがに鄙びてゐる。武羅夫氏も身體の健康を思つて近頃酒はほんの少しばかり、二三杯で乾杯にしてあとは飯をその代り幾杯か代へて、腹の蟲がやつと滿足すると、そろ〳〵眠くなつたところで繪葉書などを書き、やがて無事に枕を三つ並べて寢床に横はつた。

翌日は、晩には少し小早に東京まで歸着する豫定で、十時過ぎの電車でそこから停車場をまだ四つ五つ奥の秩父の町までちよつと入つて往つて見やうとて朝食を濟ますとすぐ宿を出立つた。停車場の茶店などでは頻に今回秩父宮の御宣下のあつた噂をして喜悦してゐるのも、この地方の淳朴の民俗が見えてゐて、私の樣な愛國者には氣持ちが好い。

電車はそれから又桑畑や森つゞきの中を分けて高い峰と峰との峽を西南に向つて馳せた。眼近の山と山との重なつた奥の方から、嶮岨な大きな峰巒が、時々ちよつと顏を覗けてはすぐ見えなくなつてゆく。秩父山塊はさまで高い山ではないが、山岳が隨分奥深く重疊してゐることを思はせる。そこで古來交通の不便であつたそんな深い山の中にもかゝはらず不思議に此の地は早くから舊記に乘つてゐるのである。和銅もはじめてこの山の中から出來た。日本武尊の東征の遺跡も歴存してゐる。

やがて電車が秩父の町に近づいて來ると、左窓にあたつて一つの眞黑な巨山の姿が突兀として眉端に迫つて來た。頂上の七八合目あたりまで灰色の雲を付けて、見るから只ならぬ山姿である。中村君は早くもそれを認めて、

「あの山を御覽なさい。」といふ。

私は振顧つて窓の方を見ると、それだ。その左方にもまだ奥深く藍鼠色の嶮しい峰が折重なつてゐるのが見えてゐる。山巒の氣が頻に其等の峰のあたりに動搖してゐる。

「好いなあ、好い山だなあ。」と吾等は繰返へしていつた。それは、後で町へ往つてから訊くと武甲山であつた。私が都から幾年仰望してゐた秩父山群の主峰の一つなのである。

秩父山中には古來物産が多い。材木や石材なども産出するが、殊に秩父銘仙はおなじみの織物である。町を歩いて見るのに、そんな奥まつた山の中であるにもかゝはらず物産が多くつて住民自から所を得、恒心がある爲めか、何となく町が落着いて人氣も好さゝうに見える。そして相應な手廣く商賣をしてゐるらしい問屋や店舗が軒を續けて本通りの街幅などなか〱廣い。そして一と筋町でなく小綺麗な裏通りが二つも三つもあるのは馬鹿にならぬと思つた。秋聲君と武羅夫君とは、

「そしてなか〳〵別嬪がゐるぢやないか……あれ」

といつて、道を往く襷掛け銀杏返しの二十ばかりの娘が、豆腐屋へ味噌漉しをさげて買ひ物にゆく姿を立ち止まり振顧つて目送したりしてゐた。店頭に坐はつて、舊式な枠車を繰り廻はしながら繭から糸を撚つてゐる女にも、なか〳〵垢脱けのした愛嬌の好ささうな女がゐた。朝に夕に武甲山の頂を徂徠する雲を眺めて大きくなり、都の風にも染まずに一生を老いる彼女達は愛すべきである。

街の中程に延喜式内秩父神社が祀つてあるのも此の山の中の町のいかに舊くから開けた土地であることを思はしめるに十分である。秩父の町から尙ほ一里餘り奧に入つて往くと影森村がある。そこが電車の終點になつてゐて三峰山神社に登山するのもそこから上つてゆく。金仙寺などいふ臨濟宗の名刹も此處にある。その他舊い神社佛閣が多いのも此の山中の町が今日の東京より早く開けてゐたことを思はしめるのである。

何だかまだ見殘した物があるやうな氣持がしながら十一時十四分の電車の時間に間に合ふやうに停車場に引返へして來た。

歸路。昨夜の殘夢のあとを追うて私は電車の中で野を吹いて來る青い風に弄られながら心地よくうと〳〵としてゐた。間もなく熊谷に來て其處から又汽車に乘り換へて無事に上野驛に歸りついたのはまだ日のある午後の四時一寸過ぎであつた。(大正十一年七月二日誌す

サンデイ每日)

木曾の明月

ある年の夏ももう終に近づいた八月の二十四日か五日の頃東京を後にして關西の方に旅立つたことがあつた。朝九時頃牛込驛から汽車に乘つて中央本線を往つた。東京には歸つてくるには來るが、いつ歸るとも豫期するところがないので、これが暫らく東京の見收めであると思へば、いくらか後髮をひかれる思ひもしたが、實のところその頃大分東京の街の散歩にも飽いてゐたのであつた。年中東京にゐるのもあまりに氣がきかなさ過ぎる。それに牛込の矢來でもう去年の九月からたつた一人で家を持つて自炊生活をしてゐた。それにも飽いたのである。

汽車が新宿驛を發してだん／＼東京の西郊に出離れると近頃常に市中にばかりゐた眼には清々しい綠の武藏野を渡つてくる風が涼しく窓に流れて、新鮮な田畑の色や雜木林につづく松杉の木立などに眼が覺めるやうであつた。多摩川の鐵橋を渡つて八王寺をも過ぎ、

汽車が小佛だの笹子などのトンネルを通過する頃は日の暑い盛りで、煤煙と蒸熱さとに堪えかねたが、甲府驛で生温るいプラットフォームの水を手拭に浸して襟のまわりに黒くなつた煤と汗を拭ひ取り、紫の露の雫の葡萄を二た籠ほど買つてそれをすゝりつゝ、追々車窓の眺に入つてくる甲斐が嶺の奇趣妙景に覺えず眼を奪はれてゐると、獨り旅の寂しい旅情も向うの山々の白雲と同じく消えてゆくのであつた。

富士見の高原を馳せてゐるあたり、左窓にあたり、天に支えたやうになつて魁偉な姿をして聳えてゐるのは甲斐の駒ヶ岳、地藏岳の諸峰と見えた。やうやく西に傾いた太陽を山の彼方に受けてゐるので、汽車から見える方は眞黒で、絶えず頂點から肩のあたりを搖曳してゐる水蒸氣樣の薄い雲霧が金色の光線に映えて、丁度金粉を撒いたやうに渦巻いてゐる。まるで黒い巨牛の背の如き感じのする山は暮色の彼方に深沈としてゐる。

眼を轉じて此方の右窓の方を眺めると、それはまるで變つた外景である。八ヶ岳は碧く晴れ渡つた大空に鮮かなる全姿が高く緩く浮きでゝゐる。駒ヶ岳地藏岳の峻嶮近づくべからざる感じのするに反し八ヶ岳は婦人の如く明媚親しみ易い感じを與へてゐる。私は日野春、富士見の驛々でフォームに降り立つて高原の風に吹かれた。

鹽尻で名古屋行きの列車に乘換へると、これはまたひどく侘しい二等車で、電燈がなくつて極めて舊式の石油ランプが薄暗く點つてゐるばかりであつた。(尤も今から十一年前のことだから)乘客も自分のほかには一人しかなかつたが、それは二つ三つの驛を乘つてすぐ降りてしまつた。夜に入るとゝもに晝間の苦熱は次第に薄らいで來たが、列車が信濃川の源流である犀川と木曾川の源を成してゐる鳥居峠の分水嶺に分け入つてゆくとゝもに山中の冷氣もまた窓を襲ふて來た。折柄七月十五日夜の滿月が木曾駒ヶ岳の峻嶮の眞上のところに懸つて、水のごとき清光は隈なく山と谷を照らしてゐる。月の光の明るいとゝもに物の蔭は一層小暗くて木曾川の水の音のみは高く聽かれるが川は何處にあるやら定かには分らない。車窓から高く眼を上げて眺めると、夜の更けるにつれて月の色はますます冴へ、しとゞ露を含んだ天も山も谷も凡ての物が蒼茫と夢の如く白んでゐる。宮の越驛のプラッ

トフオムを見ると、附近の名所を掲示した立札に木曾義仲の菩提寺德音寺がこゝから二丁と記してあるのが蒼白く照らす月の光に讀まれるのも何となく懐古の感が深い。その晩は豫定のとほり次の驛の木曾福島に下車して一泊した。晝の如き月影は夜中雨戸を閉さぬ障子にさしかけてゐた。木曾川もそこまで來るともう大分大河の上流らしい凡水ならぬ感じがしてゐる。

翌日は正午から立つた爲に木曾の溪を出離れて名古屋に着くまでまるで釜の中に居るやうに暑熱に苦められたが、名古屋の暑さは又格別ひどかつた。私は眩暈を覺えるばかりであつたが、それでも夕景から名古屋を立つてゆくと、見渡すかぎり一面の青田から吹いて來る風は涼しく車窓に吹き流れた。そして行く手の關ケ原から伊吹山の方にあたつてたゞならぬ黑雲をつけてゐると思つてゐると、忽ち大粒の雨滴がばら〳〵と窓ガラスを斜に濡らしてきた。伊吹山の頂邊に懸つてゐた黑雲は見るみる間に尾濃の平野を掩ふて暗黑となり、野を渡る强風は千頃の稻田に青い波を揚げてゐる。窓を打つ雨滴の音は次第に繁くなつたと思つてゐるうちに急雨は沛然として青田に水煙を立てゝ降つてきた。汽車の屋根から瀧の如き雨垂れが窓枠を傳ふて流れた。

やがて昨日から即いたり離れたりして來た木曾川の長江を渡つて岐阜、大垣を過ぎてゆく頃には驟雨は晴れて冷々とした風が肌を吹いた。今日正午木曾福島を立つてからの汽車の中の苦熱が洗ひ流されてしまつた。雨後の伊吹山は黑く藍に染めたやうにくつきりと見えてきた。肩のあたりには、尚ほ未練らしい灰白色の霧が搖曳してゐる。自分は窓から首をさし覗けて認か涼風に吹かれながら其等の野や山を見入つてゐた。そのうちに漸く暮色がかゝつて來た。

近江の平野を走つてゐる頃には右窓にあたつて、遠く湖東の亂山の頂邊を離れた十六日の月が蒼茫として水煙りに煙つた青田のうへにまるで水の底にでもゐるかと思ふやうな青白い光を隈なく漲らしてゐる。自然はどうしてかうまで美しいであらうと思ふと、私のやうな神を信ぜぬ者にも天地の奇工を讃美し、それを感謝せずにはゐられなかつた。自分は

思はず月の色に浮かれて、獨り車窓に肱を載せて何か知ら獨吟してゐた。その夜は大津の町に泊つてみた。

寢苦しい一夜を大津の見知らぬ旅籠屋に明かして翌日は赫々日の照る下を三井寺などを見物して廻つた。辨慶の力餅を賣つてゐる寺の境内の見晴し茶屋に腰を掛けて遠くの琵琶湖を見渡したり、比叡の峰を眺めたりしてゐると、そこへぞろ〳〵上がつて來る子供を伴れた一連れの女達があつた、一人は五十餘の老婦人で一人は三十になるかならぬくらゐの女房であつた。若い方は丸髷に結つて、紺無地の白い地肌が見え透くやうな透綾の單衣を着てゐる。茶屋の店に腰を掛けて何か口を利いてゐるその滑らかな京言葉を聽き、白い肌の色、容姿のいゝ風俗を見ると、私ははじめて身は遠くの關東から、京都に近づいて來てゐるのだと思つた。そこで今日比叡山に上るつもりであつたのだが、それを中止してこれから直ぐ京都に入らうと決心した。

その晩方大津を立ち京都驛に下車して烏丸通を電車に乘つて行くと、廣く透いてゐる電車の窓から冷いやうな涼しい風が吹流れて、とても東京の夜では味はれないやうな初秋めいた感じがするのであつた。やがて加茂川の畔に出て四條の大橋の上に立つと、涼しい川瀨の音が先づ耳に快い響きを傳へてそこからも凉氣は湧き上がつて來るのであつた。川の上下を見渡すと、河原にはずらりと軒を並べて家毎に凉床が架かつてゐて、明媚な無數の灯が幽暗い夜を彩どつてゐるのであつた。やがて私は輕い空腹を覺えたので橋の袂のとある洋食屋に入つて、川の上に架け出した食堂の椅子に凭れて二三の淡い食べ物を取り、冷いビールの泡を口にしてゐると、暗の中の川瀨の水は兩岸の燈火を映して金銀の玉を碎いて流れ落ちてゆく。涼しい夜風は絶えず川の方から湧いて來た。一昨日の朝東京を立つてから此處まで遠く來た途中の苦熱の記憶が夢のやうに薄れてゆくのであつた。そして東京ではとても味ふことの出來ぬ水邊の清興が私の心を新なものにしてしまつた。（大正十一年八月七日誌。改造）

關ヶ原あたりの春

東海道を汽車の窓から眺めながら旅をして、關ケ原附近ぐらゐ、私にとつて感傷的な氣分に耽らしめる處はない。それは、單に意味深い史跡を以つて裏付けられてゐる土地であるばかりではない。山や田野の布置形勢が何となく私の興味を惹着けるのである。あの邊は雪の深い處であるが、從つて春の來るのも遲い。東京を八重櫻の咲いてゐる頃に夜行列車で立つてゆくと、早曉狹霧の中に一本の山櫻が寂しく山の麓に咲き殘つてゐたりする。

伊吹山はそのあたりの野末に聳えて見える。冬枯れの頃北國に近い雪模樣の空に立つてゐるのを見ると、何となくうら悲しい旅情をそゝられる。そして又晩春初夏の頃に見ると、靉靆として朝顏のやうな匂やかな藍色に染まつてゐることもある。

あゝ、感慨に滿ちたこの邊の野の色、山の姿よ。

京都及關西

京都の冬を懐しむ

しばらく京都の陋屋に歸つてゆかぬのも京都を愛するからである。大正七年の四月に東京を去つて京都にいつてから九年の五月の末までも東京に戻つて來なかつたのも、東京を愛するからであつた。一つ處に長くゐると、アラが眼についていけない。京都も去年の五月に上京して以來、九月の初に一寸往つて二三日ゐたきり行かないと、此の頃になつて大分懷しさが蘇つて來た心地がする。

早く京都に往つて、そして此度は淨瑠璃を稽古したい。あちらにゐて現實の人間を見てゐると、厭になることも多いが、長くあちらに往かないでゐて、そして獨りでフイ〳〵口淨瑠璃を口ずさんでゐると、自分の聲から湧いてくる淨瑠璃情調を通して、いろいろ彼方の懷しさが想ひ起される。

今の世にお俊のやうな女も梅川のやうな女もゐないのであるが、下手な口淨瑠璃でも口

ずさんでゐると、何となくそんな女が存在するやうに思はれて爲樣がないのだ。否！そんな女がゐないのだと思ふと、もう堪らない失望を感ずる。無いことはない、あるのだ。

近世の藝術は現實を複生することに專らであるが、理想主義の藝術は現實の陷缺を、藝術によつて埋め合はせようとしてゐた。

私は到底現實複生の藝術ばかりでは、とても息詰まるやうで生きてゐられやしない。

玉手御前のやうな熱烈なる戀の女、お園の如き古い婦女庭訓の生んだ女。

「爺さまの一徹で無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七樣、嫌はれるはみんな私が不調法。鈍に生まれた此の身の科、今から隨分お氣に入るやうにいたしませうほどに、やつぱり元の嫁娘と仰有つて下さりませお二人さま。」

婦人が選擧權を要求して運動するやうな女ばかりになつたら、もう一生女は無くつてもいゝ。淨瑠璃の女に懸想して過し、現實に女を持たうとは思はない。

空想も亦た嚴密なる意味の現實そのものではないが、現實の人間は、理想を空想しうるのだ。現實に求めて得られない諦めから、空想を追ふて生きるのも强ち不滿足ではない。

今、此の冬に閉ぢ籠つてゐるにつけ、私は去年の丁度今時分の事どもを、あれこれと種々思ひうかべてゐると、その時はさほどに思はなかつたことも、今になつてみると、すべての事物がたゞ懐しい。

流行感冒が恐ろしいので、夜はいふまでもなく晝でさへあまり外出しないで一日家に閉ぢ籠つて暮してゐたが、それでも自炊をしてゐたので相當に身體の運動はしてゐた。訪ねて來る人の絕えて無いといつてもいゝくらゐに獨居を騷がす者のなかつたのも却々心が落着いてよかつた。

まづ、朝七八時頃眼を覺ますと、暫く床の中にじつとしたまゝ仰向いてゐるが、やがて上半身を伸び上つて枕頭の大きな火鉢に昨夜寢る前忘れずに埋けてあつた炭團を掘り返へしてみると、赤紅になつて、中くらゐの蜜柑ほどのやつが殘つてゐる。それに炭をつぐと、忽

ち熾つてくる。それから藥罐の水が煮沸してくる。やがて炭が眞赤になつた時分に、又伸び上がつてそれを炬燵に入れて長く暖まつてからやつと十時頃になつて床を離れるのだ。そして藥罐の湯を持つて階下に降りていつて水道の處で顏を洗ふ。水道が露地内の共用で戸外にあるのが難儀だつたが、それも馴れてしまふと、我慢が出來るのであつた。顏を洗つて戻る時新聞を持つて來る。その時間になると東京の「時事」や「讀賣」も來てゐる。

少し快い空腹を覺えて來たので、若狹鰈や鯛の子の唐辛漬のやうな物などで茶漬を食べるのだ。

お茶は好きでよく飲むが、番茶よりほかの茶はあまり好かぬ。いつも祇園町の宮田といふ店で買つて來る川柳といふのを焙じて飲む。

寒くならない間は起るとともに潔く寢床を上げたが、一月から二月は一旦床を上げてからすぐ炬燵をして蒲團を掛けて置いて、一寸起き出でゝ用をすると、すぐ又それへ入つて横になつて何か見たり書いたりしてゐた。

部屋の掃除もあまり寒くならない間は毎日八疊と六疊との二た間を清淨に掃いて、それから雜巾掛けをして机の前に坐はると、何ともいへず氣持ちがよかつたが、嚴寒の間は、なるべく部屋を汚さないやうにして、掃除は二日置きくらゐにしてゐた。雜巾掛けも五六日置きにした。

さうしてゐると、存外一人きりでも寂しいとは思はない。結句獨りの方が氣が散らけなくつて好ましい。好きで好きで堪らないやうな女があつて、向うからも共鳴してくれゝば一處にゐても可いが、あまり好きもしない女と我慢して同棲せねばならぬほど女の必要を感じはせぬ。

蒲團にあてゝゐる白い布が汚れると、はづして、すぐ前の洗濯屋に持つてゆき、出來てくると、自分で針を持つて縫ひ付けたものだ。

米も自から炊ぎ、お茶も自から工夫する。私は酒を飲まぬが、糟汁が子供の時から大好物である。田舍で又酒を造りはじめてゐるので、よく板糟を取り寄せた。そいつを冬の夜

長に獨りで忘屈すると、火鉢に金網を載せて狐色に燒いて食べたが、糟汁を屢々拵へた。

するとと今思ひ出しても可笑しいのは、狷性の潔癖から、フウ〳〵息をしながら、やつと二た間を清淨に掃き出して、久し振りに冷い水で雜巾掛けをして、暖かい御飯も炊き、甘さうな糟汁も出來て、さて之れから獨り喰ひの甘さ、火鉢の傍に餉臺を置いて、そろ〳〵初めようとして、何かまだ不足な物があつて、それを取つて來やうとして急いで立つて行かうとする機會に火鉢に掛けた糟汁の鍋をすべらして、忽ち、信濃なる淺間山の如き灰神樂を上げたこと、正に一再に止まらなかつたことである。その時自分は、たゞもう唖然として天井を仰いで歎息の聲を發するのほかなかつた。噴火口から吐き出した如き灰は忽ち一面天井を蔽ふて、そこら中に指先きで文字の書けるやうに降つて來るのであつた。

その時こそ私は誰れに當りつける者もないので、獨りで怨み、獨り悲み、獨りで諦めるより他はなかつた。ひとりで拳固で自分の頭を毆らうか思ふくらゐ腹が立つのであつたが、どうすることもできなかつた。しかし、淺間山の噴火にも譬ふべきひどい灰神樂を二度か三度上げてから、私も、つく〴〵骨身にしみて懲りたものだから、後には非常に起居を愼むやうになつた。あの東山義政から最も三昧に入つたといはれる茶の湯といふものは無論茶事そのものにも閑寂の興趣があるには違ひないが、あれは行儀を練るによい。それからは、自分は、たつた獨り、傍に見てゐる者はなくつても何一つ動かすにも靜かにしづかに物を取扱つた。

京都は冬が東京よりもひどく凌ぎにくいやうに、かねてきいてゐたが、實際は必ずしもさうではない。何より東京よりも雪が少いのが案外であつたし、第一風塵が立たないのが好い。嚴冬でも暖かい日にはトンビを着ないで外に出ても肩のあたりが風塵で白くなるやうなことはない。そして東京地方ではどうかすると、冬に雨が四五十日も降らぬやうなことがあつて、空氣がひどく乾燥して、それがために咽喉を惡くしたりするが、京都では、ほとんど一週間おきくらゐに降雨があつて、空氣が適度に濕潤されるから、そんな憂ひも

なかつた。

でも、晝間午後一二時ころ一番暖かい時を見て私は運動の爲に外出した。それは何處へゆくかといふに、大抵五條坂から清水の方へ陶物を見に出掛けるのであつた。私は陶物が好きである。そして冬になると私はいつもよく火鉢が眼に付く、火鉢が好きだ。平岡萬珠堂の二階にもよく上つて見た。三年坂の處にある、風雅な茶器など賣る店があつて、そこでは五條坂の六兵衛の拵へた物ばかしを賣つてゐた。隨分値も高いが好い物があつた。

私は、その前の年の冬にも京都にゐたから、その時も段々寒くなつた時だつた。一つ支那の海鼠の火鉢を買ひたいと思つて京都中をぶら〳〵見て歩いてゐると、上の方のある骨董屋の店頭でそれを發見した。無論支那出來の海鼠の火鉢は市中到る處に在つたけれども自分の氣に入つた大きさと形とのがなかつたのだ。すると、その店には丁度自分が欲しいと思つてゐるくらゐの大きさのがあつたのだ。

火鉢は思ひきり大きくないと暖かくないし、第一氣分が落着かない。

私は、よく何處にでも流れていつて、そのまゝそこに尻を据える習慣があるが、もしそんな時が、これからそろ〳〵寒さに向はうといふやうな時でもあると、何よりも先づ火鉢が懐かしくなつてくるのである。そして氣に入つた火鉢さへ傍に置いてあれば、當座そこに落着くことができるのである。

で、私はその火鉢を買ひたいと思つて、その店頭に日を變えて何度行つて立つたか知れなかつたが、それだけの金の工夫が出來なかつた。無理にして出來ないこともなかつたがそれまで數年の間あんまり好きな女の爲めに無理をして、疲れにつかれ拔いてゐた時であつたから、自分ながら可哀さうになるほど、ひどく意氣沮喪してゐて、僅か二十圓にも足りない火鉢を買ふにすら、幾度か躊躇したり思案するやうに臆病になつてゐた。此男、さうでなかつたら、尻の下まで無くしても乾坤一擲の勇氣を持つてゐないこともないのだが。

そして四五度見にいつてゐる間に、終には、たうどう店頭になくなつてしまつた。訊いてみると、昨日人が買つていつたといふ。それ以來そのとほりの火鉢を又見て歩いたが、

遂に見付からなかつた。

又その次の冬が循つて來た。私が又京都の市中を火鉢を見て歩く時候になつた。北山時雨がして、西山空に侘しい、世を諦め顔の千切れ雲が垂れ下るやうになつて、つゞいて叡山と鞍馬の溪合から遠く此方に眞白に雪を被つた比良の峰が、四條の橋の上に立つて望まれるやうになると、私は寂しい冬の晝夜をたゞ氣に入つた火鉢を唯一の伴侶として過すのである。

五條坂の陶物師の店では、去年の春の、あの崩落までは、丁度祇園町の新畫屋と同じやうに鼻息が荒くつて、とても錢無しでは寄り付かれなかつた。その前の年に火鉢を買ひはぐつた例の骨董屋の店頭へも無論時々立寄つて見た。京都は狹い土地だから、自分の寓居からそこまでは、牛込の中心から神田の中心まで行くくらゐのものであつたが、それでも可なり遠く思はれたけれど、又しては行つて覗いて見た。けれども去年のやうな火鉢は見付からない。そのうち又年が明けて――それが去年――正月になつて、暫く鄕里の方にいつてゐて、此度歸つてきて、又行つてみると、店の間のも一つ奥の間で主人が鐵瓶の湯を沸らせながら傍に置いてゐる大きなおほきな火鉢がある。いふまでもなく支那出來で、二た抱えもあるやうな大きな胴に以つていつて、……雲龍風虎と龍の躍つてゐるやうな四字を燒き付けてある。私は正に垂涎三尺であつたが、とても賣る品ではあるまいと諦めて訊きもせずに戻つて來た。それから又十日ばかりして此度行つてみると、此度は店の間に据えて灰もあけてゐる。賣るのかと訊くと、賣り物ですといふ。値段を問ふと、老人の主人がゐて三十四圓といふ。私はたゞ欲しさうに撫でまはして戻つて來た。それから又一週間ほどしていつてみると、やつぱり有る。その日は若い主人がゐて、又値段を訊くと三十圓ですといふ。老人の方がいけない。と思ひながら、その時は、まあ上れといふから、上つて茶を飲んだりして長い間撫で廻はして見たりした。しかし三十圓の金も考へた。

すると土間の方にも、それは海鼠だが一寸氣に入つた捻ぢ形の物が同じやうなのが四つ五つも置いてある。それにもよく見てゐると、なか〳〵氣に入つたのがあるやうだ。その

方は三十圓の丁度半分だといふ。私は随分迷つた。

この雲龍風虎を座敷の中央に据えて、しやん〱鐵瓶の湯を沸らせながら、どつさり火を注いでそれに倚りかかつてゐたならば、吾れ一人で天下の冬を領してゐる氣分になれるであらうと。

さま〲に思ひ迷つて見たが、今の疲弊の場合に火鉢に三十圓は惜しいと、馬鹿に小膽になつてしまつて、空しく又數日を過し、それでも遂々しまひに清水の舞臺から後飛びするほどの度胸を極めて、三十金を懐にして、此度やつていくと、嗚呼空しいかな、雲龍風虎の影失せて遂に無し。

又「昨日賣れました。」といふ。

それでその半金を投じて遂に海鼠のを一つ買ふことにした。

そんなことをいろ〱考へてゐると、此の冬も京都に行つて火鉢を探して歩きたいやうな氣がして來た。（森ヶ崎にて、十年一月二十一日夜誌す。人間）

京の女と西鶴

今更めかしく京を稱ふるは事古いが、自分のやうに始終京に行きつけてゐる者にでも、久しぶりに京の街に入つて、第一に氣の付くことは、京といふ處は、何といつても小綺麗なところであるといふことだ。

文化の進んだ都ほど美しい男女が多いといふことだ。今日の日本では、東京に最も美しい人間が多い筈である。また實際東京にそれが多い。そして自分はかう思ふ。以前は銀座を歩いてゐて、美しい都會人によく出會はしたものだが、今日は銀座通りよりもむしろ日本橋の白木屋前の十字街殊に白木屋の飾窓から西川、伴傳などの大商店の立ちつゞいたあの飾窓の前の人道に最も多く都會人らしく洗練された美しい男女を見るやうに思ふ。故に自分は此の頃では最も都會らしい華美な、そして生活をエンジョイしたいやうな心地にならされるので、白木屋の入口のあたりを、廣い東京の中でも最も多く興味を持つ地點とし

てゐる。

東京のことをいふのではなかつた。が、丁度そんな意味でいへば、京都では四條の大橋の東西のあたりが京都の繁華と人間の美しさとを觀るに最も好いところである。假し京都は、近代の文化や流行では遙に東京に比して遲れてゐるとしても、東京が一朝一夕にして企て及ばない千有餘年の古い傳統的の都會美の洗練を繼承してゐる。

平安朝の文學を引證するまでもなく、西鶴を見ても德川時代の京都の文化がいかに洗練の極爛熟頽廢してゐたかは十分に想像に浮ぶのであるが、五人女姿の闘守の中に、

年のほど三十四五と見えて、首筋立ちのび、目のはり、りんとして額のはえ際自然とうるはしく、鼻おもふには、すこし高けれども、それは堪忍頃なり。下に白ぬめのひつかへし、中に淺黃ぬめのひつかへし、上に樺ぬめのひつかへし、本紿に書かせて、左の袖に吉田の法師が面影、ひとり燈のもとに、古き文など見てのもんだん。さりとは子細らしき物好。帶は敷瓦の折びろうど、御所かつぎの取まはし、薄色の絹足袋、三筋緖の雪駄、音もせずにありきて、わざとならぬ腰のすはり、あの男めが果報と見る時、何か、下々へ物をいふとて口をあきしに、下齒壹枚ぬけしに戀を覺ましぬ。

今の世の姿の闘守は、四條大橋の上に立つて、西へ東へと步いてゆく人の容姿風俗を見てゐるに如くはない。

前文の西鶴が「わざとならぬ腰のすはり、あの男めが果報……」は少し猥褻であるが、自分が近い頃の夏の初め、四條大橋を步いてゐて、向うから來る一人の女を見た時に、すぐさま聯想に浮んだのは、この西鶴の文章に書かれた京の女であつた。そしてそれとゝもにその古い聯想は、又反射的に、その時見た女を、幾世紀の長い傳統的洗練なしにはありうべからざる人間だと思はしめた。

その女の年の頃二十七八。水の垂れるやうな丸髷に結つた頭髮にはおくれ毛一と筋も見せず、紫紺の勝つた千すぢの結城紬の、仕立ておろしてまだ間のないのを、すらりとした身に纏ふて、帶はたしか薄い染出し模樣のある羽二重に黑繻子の腹合はせ。梅雨の頃で加茂川には水嵩が增してゐた。雨は晴れてゐたが、素足に高い足駄、華奢な蛇の目の傘を疊

んで持つてゐた。丁度加茂川の岸に立つてゐる柳のやうに細い腰のあたり、きり〳〵と纏ふた着物の裾前が、小いそぎに歩みを運ぶはづみに、心もち、からげたやうに高く引つ吊つて、そこから白い友禪縮緬の蹴出しがほのめいてゐる。見たところ祇園町か、でなければ先斗町か、いづれ町方の女房ではない、廓の女ではあるが、仲居か。お茶屋のおかみにしては少し化粧が濃すぎる。歩く樣子に滴るやうな色氣があつた。

西鶴の同じ文章のつゞきに、美目容は人並優れて美はしけれど、その日のたつきに追はれて諸事心にまかせず、身に襤褸を纏ひ、多くの人の花見に綺羅を飾りて、行樂に永き春の日の尙ほ暮るゝに早きを惜みて遲々として行く中に立ちまじりて、脇目も振らずひとり道を急ぐ女を敍して、

………身に樣子もつけず獨りたのみて行く

と、書いてゐるあたりの前後の文章は、自分には古くから、なんとなく春の悲哀といふ如きものを感ぜしめた文章で、いつまでも印象に殘つてゐるのであるが、今云つた四條大

橋の上で見たその女の脇目も振らずに獨りを賴みて急ぎゆく風情が、今でも尙ほ鮮かに記憶にのこつてゐる。

一體京都は、東京大阪などに比べて繁華の度が低く、人の往き交ひが少く、目に立ち易いせいも一つはあるだらうが、空氣がいかにも澄明なので、何によらず眼に映る物の印象が鮮かで美しく見えるのは爭はれない。まして西鶴の美しい、印象派風の文章を通して京都の山水や人の風俗を心に思ひ浮べる時は一入さういふ氣がせられる。

この間も友達が三四人偶然久し振りに顏が會つたので、場處を變へて夜遲くまで酒を酌み閑談に時を移した。折柄連日の秋霖に惱まされてゐるのであつたが、その夜はさまで雨も邪魔にはならず一層氣分を落着かせてよかつた。その中の二人は鎌倉に家があるので、どうしても十一時少し前までには停車場へ行かねばならぬといつて又しては氣にして懷中時計を取出して見てゐたが、秋の夜は長うして、淸興はいつまでもつゞいた。肴はもう烏

鍋の煮食ひがうまくなる時分、そのほか格別に燒松茸の木酢を註文せしに、傍に青松葉を二三本あしらひ、さながら松の木山の香を食膳のうへに移したるはゆかし。それより話は又京都の今の季節にうつりゆきて、祇園も島原もない、今十月十一月の二た月ばかりの間は京都の生活そのものが好いといふことになつた。酒は甘美、松茸は好味、四圍の山々の眺めは飽かない。この秋は京都に行つて、久し振りにこれだけの顔を合はさうぢやないかといふことになつた。（大正十年十月十日誌。改造）

西鶴の描いたる貧と富

古書を通して今の世と思ひくらべ、往昔に變る桑田碧海の跡を偲ぶほど心を悲ましめるものはない。

京都に近い山城の伏見といふところは、今は酒造家など多くあつて、可なり繁昌してゐる土地であるが、その昔豊太閤が桃山に邸臺を築いてゐた頃を全盛の絶頂として、豊臣氏歿落の後の哀れに淋れたる有樣は、西鶴の簡潔にして味ある筆によりて最もよく想察することができる。

> 都につゞく伏見の里、通り筋の外今の淋しさ。殊更秋は物哀れに、垣根に咲たる朝顔の茶の湯の沙汰も絶えて、手釣瓶の繩をたぐりて捨てかけたり。萩は見る人もなき晝の錦、玉芙蓉の枝に泣く子の襁褓などほしける。むかしの春は日暮しの御門と眺めし所も、間引菜の畠となり。兩替町といひし所も、今は錢が百ありさうなる家もなく、三文が油一文づゝが鹽賣り、赤鰯さへ年越に見るば

かり。京へ一里の道なれば女の足にても夕飯過より行歸る所を貧にからまれ、大かたの妻子は大佛の貌を見ぬ人ばかりなり。東に城跡の山深く、初茸狩りせし人も皆な遊興にはあらず、二條の八百屋よりたづねさせける。よろずの蟲を取つて賣込むなど、身過ぎは草の種ぞかし。この數千軒何をかして世を渡るとも見えざりしに、朝夕の煙立てけるは、せめても大川の舟着にて、艫から舳へ身代の梶をとつて、手ぐらまぐらと涙をわたりける。

これは、「本朝町人鑑」の中の「具足甲も質種」といふ、異國のモウパツサンやメリイメなどが何ほど鯱鉾立ちしても到底企て及ばないほどの名文の書き出しのところであるが、わづか、四百字詰の原稿紙にして六枚にも足らぬ此の一文を讀めば、唯り前掲の一節によつて、元和偃武以來やうやく五十年くらゐしか世を隔てぬ元祿時代に身を置いて、振り返へりて見たる伏見桃山あたりの榮華の廢址、人の心を悲ましむるに餘りあるばかりでなく、當時既に兵馬倥偬の世を距ること遠くして、産業漸く興隆し、經濟狀態が發達して富は增加し、殊に京阪地方にありては、經濟的に無力なる武士よりも實力ある町人の威力が次第に生じつゝあつたことを看取するに十分である。次手に前文のあとを引いてみる。

ある夕暮に時雨して風横吹きに寒かりしに、四十あまりの男、笠の代りに圓座を被つぎ、身にひとつ着たる古布子を脫ぎて、やう〳〵一匁七分借りて、その錢細き帶に持添え、丸裸になり、下帶ばかりにて歸る。又七十あまりの婆、杖にすがり庭に蹣り込み、懷中より東山時代の蚊帳の釣手二た筋をさし出しける。之にも札書く事のむづかしやといひて、錢十六文貸しければ、せめて二十と手を合はして斷りいへど、ならぬ事と、合點せれば、是非も御座らぬと、その錢持ちながら、わなわなと身ぶるひして、そこへ轉げたが最期なり、貧者の質取るから、こんなことあれど、不憫とも思はず。又船の下る時たゝき牛蒡賣りに出ける男、關ヶ原陣いひ立て、昔おどしの具足甲を置きにきたれば、亭主なか〳〵同心せず、そなたに似合はぬ物なり、取る事ならぬといふ。是は人に賴まれましてといへど、その吟味までもなし、相應の物を持つておじやれといふ。時に、門の戸明けて四方髮の男、にが〳〵しき貌さし出して、これ亭主、それは身どもが物じやが、いかにしても侍の手から具足は質に置かれぬ。慥に請人取るからは、たとへ女が置きは來るとも埒あけたがよい、殊にその甲は大江山にて正八幡宮の賴光にくだされたる物、世の寶なりといふ。それならば、尙ほむ

つかしや、寺へ靈寶によき貸し物といふ。さても口惜や、質種には木綿布子にも劣りけると悔みて持ち歸りける。

此の「具足甲も質種」の一文は、「本朝町人鑑」の中に收められて、極意は、質屋を渡世とする者の誡めに書いてゐるらしくはあるが、前に掲げた伏見の里の荒れたる敍景、後に引いた質屋の光景など、世智辛き世相を描破して眞に遺憾なき名文である。そしてそれとともに、傍ら周到なる讀者に氣の付くことは、その頃世に落魄せる者が東山時代の蚊帳の釣り手や關ヶ原陣に着たといふ具足甲に勿體をつけて金を借らうとしても二足三文の値打ちもなかつたといふことである。德川氏時代の日本が如何に平和を享樂したか。

西鶴が伏見の里の敍景によつて感得せらるごとく繁華な都會の場末ほど佗しい心地のせらるゝはない。自分は、さういふところを歩いてゐて、屢々胸のつぶれることがある。田舍ならば又田舍で野趣の味ふべきものがあるが、田舍と都會との中間を成してゐる町はづれが佗しいのである。それに類する敍景の名文は西鶴の中に到る所に發見するが「萬の文反古」の中に、

「……我等も十七年のうちに二十三人女房持ち替え見申候に、みな思ひど御座候て歸し申候。我れ、少し御座候金銀は此祝言事につかひ込み、只今は手と身ばかりに罷成候。もはや女房持ち申候力もござなく候へば、竹田通りの町はづれなる伏見に近き裏屋住ひして菅笠の骨をこしらへて其日ぐらしに、さても死なれぬ浮世に御座候。…………(中略)京も田舍も住み憂きことすこしもかはらず、今の身に比べて昔の仙臺の住所ましと存候。都ながら櫻も見ず、涼みにゆかず、秋の嵯峨松茸も食はず、雪のうちの鰒汁も知らず。やうやう鳥羽に歸る車の音をきゝて都かと思ふばかりに候。はるばるの京にのぼり、女房去つて身體(しんたい)つぶし候、耻かしきことに候。

西鶴の書を讀むに、その榮耀榮華を書いたると、その骨を刻むごとき貧窶を書いたるとを選ばず如何にも官能的(センシュアス)なるは何人も氣の付くことであるが、彼の貧苦といふは、殊に官能の縱まゝなる欲望を滿たし得ぬことの不如意を喞つ側面を敍してゐる。富むも貧しきも、西鶴に於ては物質の與ふる快樂とその缺乏とを痛切に意識するといふことである。是

れひとり西鶴の場合に限らざることのやうであるが、西鶴の穿鋭な、筆力と、徹底せる人生觀とによつて一層それが引立つて見えるのである。西鶴は何よりも物から心を見てゐる。卽ち事實についてゐる。形に先づ重きを置いてゐる。なべての藝術家は尤もさうありたい。藝術家――殊に文學上の藝術家が論理を生命とする學者にあらずして、世故人情を直覺する天分を餘計に持つてゐなければならぬのも其處にある。

　前掲の文章を見ても、自分が前にいつた、町はづれの佗しい生活が想はれるとゝもに此處にも西鶴の、どこまでも官覺的な物の見方、物質から心に入つてゆく人生觀世界觀といふやうなものゝ一端がうかゞはれるのである。繰返へして云へば、物の悲しいのも哀れなのも先づ官能の不滿足から生じ、そして其等の佗しい感情も、又その反對に陽氣な愉快なる感情も凡て物象の表に滲みついてゐるのである。

　西鶴の貧寠に惱む感覺は、實に骨を刺すごとく讀者の胸にひゞくとゝもに、又彼れの飽食暖衣、榮耀榮華に醉生夢死する生活も、迫眞の筆力によりて肉の誘惑、物の形象、色彩さながらに讀者の五官を襲ふて來る感がある。

　窮乏貧弱の反對に富裕豪奢、美を極め、善を盡した生活もまた西鶴は到る處に描いてゐるのであるが、試みに當時の服裝などについて見るも、その、眼を眩惑するばかりの裝飾的の意匠は今の世の澁味好みと比較して實に華美贅澤を極めたものであつた。「俗つれづれ」の中に、

「近くにあるほど素顏にして微塵も繕なし。まだ十四五なるべし、自然と玉を延べたる天成（うまれつき）。下には藤色に碁盤の紅縞（もみじま）つけ、中には瑠璃紺、同じ紅縞の裏つけ、上に薄玉子色に同じ紅縞の裏つけ、肩より一尺ほど靑々と御簾の模樣、唐織の緣、紅の房を下げ、さりとはさりとは臻りた物好、裾は亂萩、眞の男鹿もこれには焦れ鳴くべき、帶は黑き天鵞絨に大紋の石疊、後に廻はして御所結の端に、銀にて鶴菱の四紋、返へし褄、衽先を少し揚げて帶の下に挾み、抱帶なしに細き忍帶を締め、素き合せ湯具の裾に鉛の錘を掛け、惣淺黃金剛を踏きて擦足に步み、しめつけ島田髮、前も後も長

み同じことにして、中ほどに平元結を懸け、挿櫛白檀の木地に珊瑚樹の切入、梅の古木に氣を盡し、前髮に鯨の鰭の曲りたる物を入れ、髮の狂はぬやうに仕懸け、わづかに俯向き、首筋ありありと見せ云々……」

同じ「俗つれづれ」の他の小篇の中に又、

「年のほど十四か五にもせよ、いまだ若木の蕾、櫻色とは是ぞ、此丸額の當世顏、鼻筋次第に高く、眼ざし細きもよくや、耳小からず長みあつて、首筋立ち伸び、落し懸けの大島田、忍元結の上に中疊み平元結、先は一文字にして、庵形の挿櫛に切金の折菊、伽羅の角梅枝に青貝の折菊、水鹿子の下着、中紫鹿子、上には紅鹿子の兩面、二尺三寸の袖下、帶は樺繻子に小鳥づくしを織縫ひに散らし、白絲の網を掛けて、吉彌仕立ての後結び、括目の角に鎖を掛けて、白綸子の二重湯具、紅裏の絹踏皮に河原の野郎紐を付け、水口の八兵衛ざしの木地のつづら笠に、鼠地小模樣ある菊の金入を裏打たせ、千筋紙縷の紙紐を付けて、後なる下女に持せた、姿自慢の蹴出し歩行。」

この二體の文章は、女の容姿風俗を形容描寫するの文としては、あまりに說明が細か過ぎて、却つて技巧としては印象の鮮明を缺いてゐるが、元祿風俗の洒落れたる物好みをそのまゝに書き付けてゐるので、これによつて娘自慢の親達の心づくしを想察することが出來る。白い合せ物の湯具の角に鉛の鎖を掛けて、姿自慢の蹴出し歩みして練り步いてゐた當時の女風俗を今の世の流行と思ひくらべると、すべてが、隔世の感があるけれど、當時は當時なりに、いかに生活の樣式を多趣多樣にし、現世の生活を誘惑的な淫美なものにしようとして苦心してゐたかゞわかる。

しかし、今日では京都に行つたとて決してさういふ淫美な誘惑的な女の容姿風俗が見られるわけではない。偶に冒頭に云つたやうな容姿の女を發見することがあるばかりであるが、それが又特に京都でなければ見られぬやうな氣がするのも、西鶴などの中に書かれてゐる如き長い間の傳統的洗練を經て來た都會趣味の所產だからであらう。（十年十月十日誌。改造）

西鶴の名品

毎年今時分は秋霖が梅雨よりもひどいのであるが、今年の秋霖はまた格別ひどい。八月の末から降り出した雨が、偶々晴天を仰ぐことがあつても、それが三日と續かないで、すぐ又雨になる。しかし新聞の報道によれば、此の長い雨も、今年は別けて東海道から關東にかけて東京を中心とした地方が殊にひどいらしい。その爲に米價をはじめとし諸物價が昂騰しつゝある。此關東の暴風雨について、自分は又西鶴のある作を聯想する。

西鶴といへば、世人は直ちに彼の好色物を思ひ浮べるが、事實は好色物よりもその他の短篇の方に優れた物が多いのである。「好色一代男」「好色二代男」「好色一代女」は、いづれも相應な長篇であつて、勿論文章も西鶴の精粹をこゝに傾け盡してゐる趣はあるが、往々故意に作爲してゐる跡が眼につき、ひとり好色といふ以外に、不自然なるが反感を惹き起さしめる。之に反して「胸算用」「永代藏」「町人鑑」「置土産」「萬の文反古」「廿不孝」等

の多くの短篇には比較的誇張少く、人間を觀察するに故意に作爲する跡なく、人間心理の機微を穿ちて思はず啞然たらしめ、或は覺えず肅然として自己を反省せしむるなど、西鶴の眞骨頭は所謂好色物に非ずして、寧ろ之に在ることを思はしめる。

「本朝町人鑑」の中に、

「神武この方世の人艷女に戯れ、無明の眠の中にその家の亂るゝ事數を知らず、近年町人身體（しんだい）を疊み、分散にあへるは、好色、買置き此の二つより、損銀仇銀年々相積りて、才覺の花もちり、紅葉の錦も紙子と成り、四季轉變の乞食に筋なし。是をおもふに、それ〳〵の家業に油斷する事勿れ。」

と書き出し、攝津の國伊丹に諸白（もろはく）を造つて年久しく暮してゐる男があつたが、年々の出入りも少く、大した金持ちにもなれなかつた。するとその總領息子は親の古風に似ぬ當世氣質で、萬事に賢く、衣服などにも身を飾つて、女郎狂ひを覺えはじめ、伊丹から忍び駕籠をいそがせて京の島原に通ひ、次第に放蕩が募つて、少しの本手もつかひ減らして身上も危くなつた。二た親が歎いて意見するけれど、なか〳〵耳に入らない。ある時馴染の吉野太夫に約束を付けて丸屋七左衛門方に揚げて置き、伊丹の里から、いつもと違ひ、六枚肩の駕籠を急がせてのぼつた。やう〳〵丹波口まで來ると丁度夜半の鐘が鳴つて、そのうち明朝の八つで門が明くと、昨夜から泊込んでゐた客はまだ好い夢の果てぬうちに名殘り惜しさうに、朱雀の細道を打ち連れて歸つてゆく。自分はまだ今來たばかり、太夫が待ち兼ねてゐた顔を見るにも、戀に深さが籠つてゐて嬉しく。それから、さあお行水よ白粥よと、あとから後から種々の御馳走が座敷に運ばれ。亭主は自分で置炬燵を仕掛け、女房はお氣晴らしにと、手づから濃い茶を立てゝ進めるといふ待遇なし振り。引舟女郎は背後から側に寄つて髮を撫で付け、禿は足の裏を擦すつてくれる。太夫はしなやかな手を以つて自身で手の指を一つひとつ揉みながら引張つてくれる。折から外の通りをそゝつてゆく投け節の唄聲まで、こちの座敷の肴にして飲みかけ。榮耀榮華は大名もならぬこと。なほ此の上の願ひには我を知つたかと、京中八十二人の太皷末社、出口十七軒の茶屋までも、霜夜に裸體で起きて、旦那の御上京なされたと、嬉しがるほどの物を取らせたい。とかく欲

しいものは金銀財寳。算用なしに使ひ捨てたならば、女郎狂ひの遊興の面白さには限りはあるまい。目前の極樂とは此の里のこと。寢間は成佛と、三つ重ねの絹蒲團の上に樂枕しながら、吉野と二た口三口物をいふか云はぬに、門の戸を氣立たましく叩き明けて、

「お宿より御狀がまゐりました。」と、隣の床の客へとゞける氣配がする。何事かと、いふ聲がして、そのいふのを、こちらで聞いてゐると、

「これは目出度い。金銀捉み取りの內證の沙汰。江戸の手代より申越した關東筋大風吹て米俄に上りたれば、これより大阪に下りて、西國米大分買込み、その上りを受けたらば、太夫を根引にして我等が奧樣にすることぞ。此度の仕合せを祈れ、夜が明け次第に此處を立つぞ。」

といひて、尙ほ今少しの間の別れを惜んで、漸く寢床を離れかねてゐる樣子である。

此方は伊丹の男、その事を聞耳立てゝゐるたが、やう／＼太夫と添ひて横になつたか、ならぬに、まだ帶をも解かず起き別れ、面白い最中を思ひ捨てゝ、太夫には、たゞ我が家に失念してゐた事があつたとばかり告げて、委細の首尾も構はず廓を立ち戻り、早駕籠を急がせて伏見の濱から飛脚船を仕立てさせて、その日の四つ前にもう大阪の北濱に着くが否や問屋と密かに商談を遂げて、米を大分買ひ込むと、早やその日の晝から、どん／＼値が上つて、只一時の間に三十八貫目といふ銀を儲けた。その思ひ入れに又此度は油を買込むと、それが又四十四貫目上りを受けて、丁銀で凡て八十二貫といふ金を懐中にして涼しい顏で伊丹に歸り、親仁に小判の山を積んで見せると、世間に黄金の珍らしい時分のこととて、その悅びは一方でない。これぞ長者になる人の心掛けである、さるにても偶々逢ひにのぼつた太夫を思ひ捨て、身過ぎ大事にして思はぬ利を得たといふのが、そも／＼分限に成るべき初である。その後その男は身代（しんだい）倍々肥つて、これが後に池田伊丹の造り酒屋の榮えゆく先祖となつた。

自分は折りふし西鶴を取出し此の短篇を讀むごとに、隣の床に太夫と添寢してゐて、江戸の手代からの書狀を披いて見て、米の値の上がりを受けたらばお前を根曳きするぞ、夜

が明け次第にこゝを立つ、といひつゝ少しの間の別れを惜んでゐる心と、その、温柔を盡した歡樂に浸らうとする面白い最中を、まだ帶をも解かぬに意馬心猿を叱咤して潔く起き上つて行く心との岐路に深い興味を持つのである。誰れかよくきぬぎぬの離愁に惱まされざるものぞ。（十年十月十日森ヶ崎にて誌。改造）

光悅寺

初冬に近い、ある秋晴和（びより）の日に京都の郊外の方に出て見たくなつた。嵐山、宇治、八瀬大原、高雄の春秋も珍しくない。鷹ケ峰の光悦寺に行つてみようと思つて出掛けた。

圓山公園の見晴しに上つておちこちに眼を放つと、北山から愛宕、西山にかけて遠く西北の空を劃つて美しい山脈の蜒蜒としてつゞいてゐる中に、丁度その中間西北の一隅に圓かな形をした峰が突兀として聳えてゐるのが眼に入る。秋日和のよく晴れ渡つた日にはその峰の中腹に開展した、山畑や人家の點在してゐるのが見える。秋漸く闌けゆく頃野の面から凡ての農作物が收穫せられ取り去られて滿目蕭條としてゐる中に大根の葉の、ひとり霜にもめげず倍々青綠の色を誇つてゐるのは美しいものである。圓山公園の見晴しから鷹ケ峰の中腹に開展した臺卓地（テーブルランド）を遙かに望むと、折からの秋の陽を反射して白く光つてゐる人家の壁の點綴してゐるところに鮮麗な青色を敷き展べてゐるのは、その大根畑の色であつ

た。

鷹ケ峰は、本阿彌光悦が、三代將軍德川家光から賜はつた所領であつた。家光も「光悅は國の調法」と稱へられて、將軍の眷遇を辱ふしたのであつたが、招きに應じて江戶に下ることを肯じなかつた。そして遙かに家光の下問に應へて、日頃の蘊蓄抱懷を述べつゝ將軍より恩賜の鷹ケ峰の地に隱棲して終生その地を去らなかつた。

私は、京都の西北隅にある一條大宮で市街電車を下りて、そこから場末の街を通り拔け、緩い爪先上りの田舍道を日和下駄で、こつ〳〵歩いて行つた。道の兩側に斷續して建つてゐる軒の低い陰氣な小家の格子の中では、西陣などを織る機の音が聞えてゐたりする。こんないぶせき賤の家で織る西陣の織物が仲買の手に渡り、問屋の手に渡り、京都の吳服屋はいふに及ばず、東京や大阪の三越や白木屋、大丸、高島屋などいふ大きな小賣商の棚に陳列せられて都會の子女の眼を悅ばし、眩惑せしめるのである。

道は緩い勾配で少しづゝ上つてゆくに連れて大根畑があつたり眞靑な色の竹藪が續いてゐたりする。そして、ところ〴〵に秋陽を浴びて眞紅に輝いてゐる唐辛子の實の熟れてゐるのが大根の葉の靑綠にまじつてゐる。これこそ萬綠叢中の紅一點であるなど思ひながら、私は、十一月の中ばとも思へぬくらゐ、そよとの風も立たない、あまりの好い日和に、歩いてゐるうちに段々汗ばんで來たので夏外套を脫いで腕にかけ、額の汗を拭き〳〵歩いてゆく。太陽はやゝ西に廻はつて、左方に見える衣笠山の松の木林に赤々と照り榮えて、大空にはさながら瑠璃玉の如き光を漲してゐる。道は丁度織田信長を祀つてある建勳神社の岡の背後を上つて行くのである。もう其處まで來ると、いつの間にか土地はもう餘程高みになつてゐて、振り顧つて京都の方を見ると、丁度そこから眞東にあたつて比叡の峰が紫に霞んで、麓の八瀨の方に長く尾を曳いてゐる。如意嶽から南禪寺の山、華頂山、阿彌陀ケ峰と東山一帶の丘陵が遠く南に走つて、その手前には京都の街の瓦甍の波が煙霞の底に展開してゐる。道はそれから尙ほ遠かつた。そして兩側には相變らず綠の色の冴かな竹林と、靑綠色の大根畑と、西陣を織る機の音のしてゐる民家とが斷れ〴〵に續いてゐた。そ

して道は一歩々々ごとに展望を大きくして來た。比叡はすぐ鼻の先きに立つてゐる。その麓につゞく裙野の村々が一目に見晴らされてゐる。一方行く手の左方に聳えてゐた鷹ケ峰は段々接近して來て、やがてその麓の近くまで來ると、そこらあたりには又人家が少しづゝふえて、竹藪を背にして荒物を鬻ぐ鄙びた店屋があつて、郵便切手も賣つてゐたり、白壁の眼に着く寺の塀が道の脇につゞいてゐたりしてゐる。光悦の邸宅の跡と云はれてゐる廣い地面は、空しく大根畑になつて、わづかに道傍に立つてゐる一基の石標がそれを語つてゐるばかりである。仰いで見ると、丁度その西北を防いでやゝ圓錐形を成した圓かな鷹ケ峰が突兀として峙つてゐる。山の色はもう黃褐色にうら枯れ、松の常盤樹ばかりがひとり綠を傲つてゐる。その邊は又、人家がやゝ密集してゐて、軒先に折から盛りの菊の鉢植などを飾つて、紅殼格子の家の内で羽二重の生地を織つてゐる女が見えたりする。道はそんな山の中腹まで來ても坦々として何處までも通じてゐる。そこからまだ深く雲ケ畑の方に入つてゆくのである。裁付けの股引を穿いた老爺が天秤棒の先きに鹽鮭だの、町で買ふて來たい

ろんな品物などを括り付けて擔いで山の方に歸つてゆくのも野趣が深い。そこから俯瞰すると京都の市街は更に一と處に引纏つて見えてゐる。思ふに任かすならば、京都の此のあたりに別莊を造つて住んでゐたら好からうなどゝ空想しながら步いた。冬は寒さが嚴しいかも知れぬが、地は高燥である。夏は街にゐるより遙かに凉しいであらう。光悦が、將軍家光から、何にても望むところがあるならば、取らせる。云へ、といはれて、多く望む所無之、鷹ケ峰の地を賜はりたい、云つて、直ちに將軍の御朱印を下された。光悦はなるほど好い土地を見附けたものであると、私は思つた。

けれども、不斷東京に住居してゐる者から云へば、京都の地が旣に隱遁的で閑寂の觀がある。その京都の土地で、更に又こゝまで世を避けるには及ばないと、私は心の中で思ひ止まることにしたのであるが、私には金閣寺や銀閣寺のある邊よりも遙かに浮世ばなれがしてゐる處と思つた。

そして光悦寺は、兩側に並ぶ人家の間に左側に一寸した山門があつて、それを入つて

甃の上をつたふてゆくと、些かな寺院の玄關が取付にある。三四日前に、毎年年に一回營まれる光悅忌があつたので、寺に所藏の光悅の遺品など、まだ壁間に懸け連らねたまゝに開展してあつたりしたので、私は寺僧に乞ふて其等を一順展覽さしてもらつた。平素光悅について研究してゐる所なく、彼に關する知識が甚だ乏しいので、惜しいかな其等の遺品によつて啓發される所が鮮かつたのは、自分の咎であるが、秋寂びた境內の庭樹の中をやゝ暫くひとり逍遙しつゝ、藝術の巨匠を想ひ、藝術の生命の不朽といふやうなことを考へた。

光悅の藝術品に對する鑑賞談は、此處に、今、不用意に語ることは出來ないが、文明の華といへば、蓋し彼のごとき德川期文化の一方を代表する先驅者の隨一人である。彼は書畫、刀劍、茶儀、陶器等あらゆる方面に行くところとして可ならざるはなき造形美術の巨人であり、趣味三昧の達人であつた。繪畫の方で彼と同じ傾向を代表する巨匠俵屋宗達、尾形光琳などは彼についゝいて元祿を中心とする德川文化の實に精髓であつた。元祿の文化については既に定論のあることであるが、尾形光琳の華麗豪奢を極めた裝飾的美術と西鶴近松等の絢爛なる文學とを併せ觀る時、ある一時代の趣味好尙、氣分等は斯くまでに互に反映相呼應してゐるものかと、寧ろ驚嘆されるばかりである。西鶴の――近松でもそのとほり――文章を讀んでゐると、その豪奢で、鷹揚で、纖麗な辭藻配置の字面に、自から光琳の華麗豪快なる繪畫が聯想に浮んで來るやうである。

今の時人、口を開けば直ちに文化生活を云ふ。文化生活頗る可なり。しかも文化の極致は藝術にある。法律制度のごときは共存共助の生活に一日だも缺くべからざるものであるが、要するに人間生活の最大多數に遍通する綱概を總べてゐるものに過ぎない。文化の極致は、所詮個々人の趣味、思想、感情に深く掘り込み、洗練彫琢してゆく深度に懸り存するのである。明治大正には自から明治大正期を後世に語るべき特色ある文化が存在してゐる筈であるが、德川期文明の精華たる、西鶴、近松、光悅、宗達、光琳等の名流巨匠の流風餘韻によつて歷々指示しうべきやうなる文明の特質を成してゐる物があるであらう

か。（十年十月十日）

畿内の春

一昨年の春四月の五日であつたと思ふ。京都にゐて、一人で醍醐の三寶院まで散歩に行つたことがあつた。三寶院の中の枝垂櫻が丁度眞盛りであつた。あれは太閤が觀た櫻と同じ櫻か、どうかは分らない。第二世の櫻かも知れぬが、その枝垂櫻の爛漫たる有様は、宛として太閤の全盛そのものを聯想せしめた。祇園の夜櫻も名櫻であるが、もう大分樹齢が衰へてゐる。春風駘蕩の趣に乏しい。三寶院の櫻の方が遙かに好いと思つた。

大正三年の春ももう四月の末の、たしか二十四日頃でもあつたか、東京から立つて、奈良に往つた。もう春も逝かんとする頃で、一入春の懐しさが募るのであつたが、南圓堂のあたりには、それでもまだ山櫻が少しばかり咲き殘つてゐた。此の山櫻の、薄ら寂しい、そして褐紅の色の軟かい嫩葉とゝもに開いてゐるのが、何ともいへず優しく、しほらしい。もう長い春の日もそろ〳〵夕暮れそめてゐて、やゝ冷い風が立つてくると、その山櫻

の花片が吹雪のやうに樹下を行く袖の上に散りかゝつてきた。南圓堂の方では、鐘を打ち鳴して御詠歌を誦してゐるのが、人を淡い悲みに引入れて置いて、そしてそれを慰めるかのやうに胸にひゞいた。

吉野に行つたのは、大正七年の、もう五月の初旬であつたから、櫻はもう何處にも殘つてゐなかつた。奥の千本の西行の幽棲の趾畔まで行くと、それでもまだ少し殘つてゐたさうであつたが、それも、私が着いた晩の豪雨の爲めに、すつかり落ち散つてしまつた。その翌日は清空一碧拭うた如く、宿を出でゝ吉野行宮趾のあたりの芝生をそゞろ歩きしてゐると、ゆうべの嵐に散り落ちた花片が、二つ三つ葉櫻の蔭に散りとゞまつてゐるのが、何ともいへず佗しく、美しかつた。西行の歌に、

葉櫻に散りとゞまれる花のみぞ、忍びし人に逢ふ心地する

といふ古歌が思ひおこされた。是は戀の歌であるが、生半咲き盛つて、見物の雜踏してゐる時よりも本當に吉野の櫻を見た心地がした。そこから、ふと眼を上げて向ふを眺めると吉野の峰の彼方に高く金剛山が紺藍色に浮び上がつて聳えてゐたではないか。

楠公の菩提寺たる河内國觀心寺へ行つたのは、一昨年の四月の十八日であつたが、その時の美しい好い印象は今も尚ほ、はつきり殘つてゐる。あんな春の日もあつたと思ふと、春といふ季節は生き效を感ぜしめる。諸君は春のその頃試みに觀心寺へ遊んで見たまへ。

（大正十一年二月廿三日森ケ崎にて誌。日本人）

京の夏

どういふ廻り合せでか、私は春から夏にかけてを、よく、先斗町の妓樓を眞正面に眺める鴨涯の東岸、疏水の流れを座敷の前にした繩手の通りで過すことになる。四五年前も四五ケ月をそこで過した。今年も二月から夏の初まで四五ケ月を、宿はちがうが、やつぱり繩手通の、疏水を前にした座敷で過した。

私の座敷から心持ち西北に振つた愛宕山の丁度頂きのところに、永い初夏の夕陽が紅提燈のやうな色をして沈んでしまう頃になると、涼しい川風が鴨川の河原や、深碧を湛えて淀み流れる疏水の水の面(おもて)に湧いてきて、芝居の背景の通りの對岸の先斗町の妓樓に、ぽつぽつと明(あかり)が點く。一體繩手の通りは夏は暑くて不可(いけ)ない處にきまつてゐるのである。私も五月の中ごろまでに他へ移らうと思つてゐて遂々(たうとう)六月の初までゐたが、午後三時頃になると、窓のすぐ下を流れてゆく疏水の碧流に漾ふてゐた日光が段々這ひ上つてきて、やがて太陽

が西に廻ると、とても耐えられない、猷な射光を疊の上まで深く投げて來て、四疊半の離室は身の置き場もないまでに暑い日光で部屋中が一杯になる。私はその爲にヅキン／＼頭痛のするのを堪えて轉々身を横にして悶えてゐると、それでも六時半、七時ごろになつて、日没になる。

さうなると、晝間とは、すつかり違つた極樂世界がそこに開けてくるのである。疏水の碧流と加茂の川原との間の土手の上を三條大橋の東詰を起點として京阪電車が間斷なく馳走してゐるのは、古い京都の街としては風致を破壞するといつて非難するものもあつたが、時代の必要といふことの前には趣味も風致も大抵屈從してしまはねばならぬ。今ではもうそんなことをいつてゐても仕方がない。その代りに電車の走つてゐる堤は、殊に三條と四條との間は、雷車會社と市との方から隨分注意して電車といふ文明の利器の殺風景を補ふやうに、線路の芝生を常に手入れよく保護して躑躅を植ゑたり、水に沿ふた岸のうへに柳や櫻の並木を植ゑたりしてゐる。

三月の初私がそこの座敷へ移つてきた時分から、いつとはなく、すこしづゝ萠黄色に芽吹いてゐた河原の柳はその後春雨の降るごとに綠の色を增し、丁度京都の日本畫家の繪の如き枝葉が蕭々と降りそほつ雨の中に搖れてゐた。その頃から櫻の芽も吹いてきた。楓の嫩葉も可愛い手を出しそめた。そして春は瞬く間に去つてしまつた。降りつゞく春雨に濁つて水嵩の膨んだ疏水の水に、淡紅の花片はしばらくの間、間斷なく流れていつた。

春雨の季節が過ぎて、初夏の晴れた日が何日も照り續く頃になると、爽かな風が川原を吹いて來て、もうすつかり新綠の裝ひをした其等の木々を靡いてゐた。

まだ春寒の時分、川風を厭ふて障子を閉め、火鉢の火を掻きおこしてひとり物思ひに耽つてゐると、障子の腰硝子を透して水のうへには向岸の妓樓の火が映つて、絃歌のさんざめきが加茂の河原を渡つて聞えてゐる。さうすると無反省な陽氣な世界から響いてくる音につれて、私の心はます／＼底へそこへと沈んでゆくのであつた。すつかり春になり、やがて初夏になつてからは、一つは寒さに虐げられてゐた私の肉體は、やゝ營養がゆき屆い

て、健康を復活してくるとともに、自分もさういふ別天地から傳はつて來る人間の物音と少しは諧調を感ずるやうになつた。不思議なものである。自分の健康と氣候の寒暖とによりて主觀に映ずる同じ物も全く別様の感じを與へる。

蒼茫とした暮靄が加茂の磧を罩める頃になると、午後からの日光に苦められて呻吟してゐた私の氣分も、それとともに蘇生してくる。また其頃になると晝間一時何ゆゑかいくらか減水してゐた疏水の水も再びもとのとほりに水嵩を増して、宵暗の底を物凄いまでに淀み流れてゆく。そこから冷い夜風が水の臭ひを吹き上げてくる。そして青黑いまでに繁つた電車堤の櫻柳の葉越しに向岸の先斗町の妓樓には、もうすつかり軒並みに燈が入つて、開放した座敷に晩凉とともに酒色を樂む人間の聲々が手に取る如く聞えてくる。それが丁度好い加減の距離を置いてゐるので、どんなに燥いで騒いでゐても格別こちらの靜かさの妨げにはならぬ。さうかといつて、私にはそんな騒ぎを自からしてみやうとも思はぬ。ただ加茂川の夜景を完きものにする一つの點景として、それも惡くはないのである。そして彼等の酒興漸く闌になりて、皆一様に起ち上つて座敷踊りの亂痴氣騒ぎのはじまる頃になると河原に架け出した座敷の軒下を

「アイスクリーム！　高等アイスクリーム!!」と、高聲に呼んで歩くアイスクリーム賣りの呼び聲が聞える。それも辻占賣りの聲とともに廓の夏の夜の情景の一つである。私は次にある初夏の日の日記の一節をこゝに寫し出さう。

昨夜はやゝ更けてから空黑く、宵の口は朧ろなりし星屑さへ悉く影を潛め、ぽつりぽつり雨滴を落してきたので久し振りの雨だと喜んでゐたのに、今朝起きてみると東の障子に麗らかな朝日の影を差してゐるのをみると、今日も晴天と思はれた。降らぬとなると、あれほど頭の重くなるほど雨を模樣してゐても遂に降らぬものと思はれる。昨夜は熟睡を得て五六時とおぼしき頃一度眼覺めたるも暫らくして再び寝入り、今度覺めたる時は旣に九時を過ぎたり。

起きて疏水に面せる雨戸を推せば、毎時(いつも)こちらより遲く起きいでる向岸の先斗町の妓樓料亭の多くは旣に雨戸を開けて目覺めたるらし。六月もこゝ三四日に迫りて、そつちこつちに凉床を造る木組をはじめ、毎日大工の槌の音、木を動かす音聞ゆ。寢起きの眼には殊の外電車線路の堤に立ち並ぶ櫻柳の青葉の色淸くして快よし。櫻は濃綠。柳は淺綠ともに爽かなる朝風に搖れてゐる。

寢卷の浴衣のまゝ楊枝をくはへて近所の風呂にゆき一浴の後、牛乳を飮みて机に凭り紙を展べたるまゝ向岸に眼を遊ばせば、愛宕は春の頃の靉靆の色なくして、この二三日雨氣を帶びたる雲煙の中に黑く霞み、それにつゞく北山また一樣に、近きうちに必ず雨あるべき、たゞならぬ氣配を見せてゐる。加茂の川原には、眞向うの料亭の女中などが楊枝をつかひながら、水のところまで來て裾をかゝげて脛(はぎ)の半分くらゐまで水に漬つて顏を洗つてゐるのが見える。夕禪模樣の着物を着た舞妓も二三人そこで遊んでゐる。二階三階の屋根に造りつけた方々の物干しには女の肌に着いた赤い物白いものなどが源平の旗のごとく翻夏の風に飜つてゐる。

暫らくして眼を近くの紙の上に落し、ペンを走らせてゐたが、やがて女中を呼んで朝食を命じ、自から川柳を煎じて茶を入れ、出花を一と口二た口飮んでゐるうち漸く空腹を覺えて來る。食事をおはつて暫らく新聞を讀み、再び机に凭つてペンを動かす、やゝあつて神經衰弱の頭は漸く疲勞を感じてきたので、衣服は更めず、寢卷の浴衣をシヤツと着替へたる上にセルを着て、そのまゝ散歩に出づ、今日は遲れて起きたので、やがて暑苦しき光線が部屋を襲ふて來るのも間もない、日ざしは今しも疏水の水より漸く軒下に這ひ上らんとする處。

散歩の序に東京の某處へ送るべき手紙を投函す。四條の通一週間ばかりの晴天に、道路乾きて流石に靜なる京の街巷にも塵埃を揚けて日光の色物憂し。眞東(まひがし)に見える東山は欝蒼たる老松の濃綠色に斑々たるエメラルドグリーンを落したる如き櫻、欅などの落葉樹の嫩葉の色いつ見ても美しけれど、數日の晴天に一雨して塵埃を洗ひ落さねば鮮綠の色やゝ濁

りて見える。都踊りのある四月の頃とちがひ、街もやゝ享樂に飽きたる色見ゆ。日は眩しく照り輝き日傘翳したる女の歩いてゐるのも京の街らしい。

私はとある露地を入りて安井天神の近くなる知り人の家を訪ひ、ついでにそのあたりを一と廻りして歸る。もはや暑さ堪えがたし。今日も午後より日光部屋に闖入せんかと恐れしに半天薄墨を流したる如く雲に被はれ、愛宕につゞく北山一帶は遠く雲煙に影を沒し、雨氣を帶びたる北風颯と堤の柳の葉を吹き靡かしてゐる。燕はその風に逆らうごとく柳の枝から電線に飛んで逆とんぼを返しながら、嬉々とし又どこかへ翔つてゆく。私は空氣枕を取り出し外出の疲れを休めながら快い雨風を身に感じてゐると、果して疏水の水に波紋を描いて絲の如き細雨が降つて來た。向岸の先斗町の屋根では、あちらでも、此方でも、あはてゝ干し物を取り入れてゐる。

「あゝ雨だ。」

と、私はひとり心の中で叫んで、雨を喜んでゐると、それも暫らくの間で、雨はすぐ止んだ。降らぬ時にはよく〳〵降らぬものだ。けれども今日は暑さもそんなに堪えられぬほどではなかつた、やがて愛宕の肩のところに日が沈んでしまうと私の座敷は極樂世界になつて來た。黑い夜の暗の底を疏水の水はよどみ流れ、柳の葉を洩れて電車線路の電燈、向岸の妓樓の火影その暗の中を照らしてゐる。

夕暮れの街に散歩せんとて立ち出で、數十歩にてH氏の來訪するに會ひ、共に四條の夜の街を逍遙し橋畔の菊水に入りて莚を取りビールに咽喉を潤し、今度は橋を西に渡りて京極のあたりまで歩き、家々の飾窓を窺いてゆく、それより私の宿に歸り、夜更けるまで雜談しH氏の歸つていつたのは十二時であつた。直ちに床をのべて寢に就く。

去年の夏は、四月の末に東京から京都に來てゐて、七月の五日高野山に向つて出立するまでゐた。四季四季の衣更へに京都大阪は東京に比べて、きまりの正しい土地である。五月の月に入れば、どんなに寒くつても袷衣を着、六月になれば必ず單衣、七月八月は薄物

で、九月は六月と同じ單衣、十月にはまた、きまつて袷衣を着る。衣更えの正しいことは、そのとほりであるが、東京の如く女に中形の派手で意氣な夏姿を見ることは出來ぬ。東京くらゐ女の中形を着るところはなく、京都大阪は案外にそれが少い。もし着てゐても何となし野暮な感じがする。況んや舞妓などの厚化粧にいたつては、うんざりせざるを得ぬ。

その代りに帷子（かたびら）や上布などは東京よりも京都大阪の人間の方が多く着てゐる。加茂川の納涼ももはや語るに事ふりたが。昨年の夏の初のある晩四條大橋際の菊水の屋上の納涼臺に上つてゐると、それは七月の三日であつたと記憶してゐるが、梅雨のまだすつかり晴れぬ時分なので四方を繞らした山々も、その上に連らなる天の色も同じやうに墨を流したやうな眞黑で、背景をなせる物悉く水墨を潑したごとき雨を含める一幅の畫圖の中に、加茂川堤の柳の葉は暗綠色に茂り、電燈の火影はその間を綴つて連なり、すべての刺激を塗抹した夜の色が、何うもいへず氣に入つた。私は屋上の一隅に椅子に凭つてビールを命じ、夏には殊の外好物の一つなるトマトの清爽なる味を喜んでゐると、向うの方の椅子に來て腰を掛けた三人連れ、よく見るとそれは箱根のS氏であつた。S氏とは、その一月から二月の半ばまで箱根の家に入浴してゐて、私はその時から京都ゆきを口にしてゐたのであつたが、それ以來會はなかつたのである。私は立つていつて、

「やあ、Sさん。」

「やあ、これは不思議なところでお目にかゝりました。」

それから一つ圓卓に集り、天上より京の夏の夜の街を賞すること暫くにしてS氏は年少の二人の同伴者を先づかへらしめ、私と二人は四條の通りをぶらついて唐物屋で銘々少許りの買ひ物などをしつゝ、S氏は私を案內して床のある先斗町のとある酒樓に入つていつた。S氏はその夏京大の法科を卒業して大阪のある貿易會社に通勤してゐるのである。それで新調の洋服を着始めだといつて、窮屈さを我慢してゐたのを、座敷に通ると早速脫いで浴衣に更へた。私も浴衣になつて床の上に出ると、涼しい風が朧ろな雪洞の火影を搖つてゐる。三四人の藝者が前後して出て來た。鮑の糟漬だの、櫻桃（さくらんぼ）などの淡泊したもので、

氷で冷したビールを飲みながら加茂川の凉味を掬した。Sさんは無邪氣に、美しい聲でどゞ逸を唄つたりした。上にも下にも床から床がつゞいて、火影微かな行燈が河原の暗に朧ろに瞬いてゐる。私はSさんの唄聲も、妓どものさゞめく聲を半分の耳に聞きながら、晝間のごとく、見るを欲せざる物の眼に入る變ひなき幽暗な綠の夜の色や、東京や大阪の街では見ることのできぬ靜かに澄んだ方々の燈の影を追ふて神經を休めてゐた。東山は古い譬へのとほりに、蒲團を着て寢た姿の柔かな輪廓を成した頂線によつて微かに蒼穹の色と區別されてゐる。如意嶽、比叡はその北に連り、今も昔の如く京洛の地を鎮護するものゝ如く黑い姿が微かな天の明の下に見えてゐる。

Sさんの唄がやむと、妓は私に何か云へと迫つた。私は唄ふことを欲しなかつた。たゞ人の歌ふをきいてゐたかつた。中に私の注文によつて淨瑠璃藝者が來てゐたので、それに何か語れと命じた。彼女はさはりを二つばかり語つた。そんなにしてゐる間に夜も次第に闌けた。川原からは寒いやうな風が吹いてきた。私は明日は京都を立つて高野山にゆくつもりでゐる、高野山といへば、かなり好奇心を惹くものがあるが、この華かな京都の街を後にして必ずしも山の上にゆきたくはない。加之、はじめてゆく土地といへば何となくいろいろな不安が伴ふ。けれども暑さを避けて書き物をするには暫らく何處かへゆかねばならぬ。明日はもう此の地にゐなくなるのだと思ふと、この幽暗なる、美しい燈火の巷が懷しい。私は晝間の暑さの疲れが出て、床の欄干に肱を凭せながら、暗の方にうつとりと無心の眼を放つてゐた。私は疲れてゐるのである。早く高野山に上らねばならぬ。

するとSさんは、私の樣子を見てとつたか、

「もう歸りませうか。」と聲をかけた。

「あゝゆきませう。」

もらひの掛つた妓達もそろ〳〵歸つてゆくのがあつた。Sさんと私とは着物を着て先斗町の狹斜の巷に出た。四條の通を大橋の東まで一緒に歩いてきて、そこでSさんと別れ、私は安井の方の女の家へ戻つて來た。遲く戻つて來たので、ほかの老人は寢てゐたが。女の

みはまだ假睡（うたゝね）をしてゐたが、私が梯子段を上つてゆく物音に眼をさましたと思はれて、起き上つて褥の上に坐つてゐた。

「おかへりやす。」と睡い聲でいつた。

明けやすい夏の夜はもうひどく闌けてゐた。（大正八年五月二十九日甲涯にて誌す。早稲田文學）

煙霞

清い水の澱み流れてゐるあの宇治川べりの茶畑や麥畑に、もうそろ〳〵螢の出そめる五月の末であつた。私は昨日の晩大阪からやつてきて馴染の浮舟園に泊り、久し振りに好きな鰉やその他の味の淺い清鮮な川魚料理を食べながら、この地の風物にはいつよりも最も好適な晩春初夏の氣分に浸つて、夜の物にも薫る爽かな若葉の匂ひを齅ぎながら一夜を明かした。昨日の晝頃から稍嵐立つてゐた陽氣が、夜に入つてその風が落ちてしまふと寢る時分から青葉に降り灑ぐ靜かな雨の音が聞えてゐた。翌朝遲く眼を覺ますと、五月雨模樣の空は薄黑く曇つて、ところ〴〵に雲の切れ目から明るい日の光が洩れてゐるのに、白い雨の脚が對岸の興聖寺の甍やその背後に聳へた朝日山の青葉を濡らしてゐるのが、開放つた窓から遠く見えてゐた。時とすると雨は其等の前景を悉く掻き煙らして、その前を漲り流れてゐる川の上まで煙霞の蔽ひかゝつてくることがあつた。

私は、それ等の風景を飽かず眺めながら、朝とも晝ともつかぬ飯を濟ますと、俥を命じて降つたり止んだりする雨の中を立つていつた。そして宇治驛から汽車で奈良の方を廻つてゆくことにした。新田、長池、玉水、棚倉、上狛と、木津川に沿ふた南山城の驛々を通つてくると、藪も畑も降る雨に濡れて、油のやうな艶かな翠綠が滴つて流れるかと思ふばかりに、見る物悉く深い綠の一と色に塗りほかされてゐた。鐵橋を渡りながら眼を放つと長い藪疊の岸を洗ひつゝ、淸い砂ばかりで川床の出來た木津の淸流が、遠く加茂、笠置の方の雨に煙つた山と山との峽間を流れて來てゐる、やがて木津の停車場につく。こゝは伊賀、大和、山城の國境から流れ出て、今まで西に向つて流れてゐた木津川が、そこから急に右折して南山城の平野を北流しつゝ灌漑してゆくその曲折點になつてゐるうへに、伊賀街道と奈良と京都との交通の交叉點に當つてゐるので可なり殷賑な市邑である。また大和山城に境する山岳地方と山城河内に續く廣濶たる平野との境界地點にあたつてゐる一つの水鄕でもある。

汽車の窓から顏を出して西の方を眺めると、雨氣を含んだ深綠の野が、やゝ傾斜面をなして遠く展け、その野末の果てには河内と大和との境に跨る生駒つゞきの山々が水墨を潑した如くさみだれ空の雲の表に丁度眞鯉の背のやうに黑く浮き出でゝゐた。そのうち雨雲は漸々薄れていつて、明るい太陽の光線が雲の切れ目から縞のやうに放射して來ると、生駒の姿は一ぱいに明るい日の色を浴びて、ふつくりとした山の輪廓のところだけ、まるで黃金の緣を付けた樣に華かな金色に輝いて、此方に面した山の肌は淡藍色にぼうッと煙つてゐる、汽車が奈良の方に近づいてゆくにつれて、山の姿はいろ〳〵な色彩に變化を呈してきた。私はこの時奈良驛に下車して博物館なぞを窺いてみようかとも思つたが、法隆寺までの切符を買つてゐたので、そこまで續けて乘ることにした。汽車が郡山を通り越して大和平野の中心を駛せてゐるとき、振顧つて奈良の方を見ると、丁度春日山、三笠山のうへあたりの空が墨を流したやうに眞黑に曇つて、先刻木津から奈良への途中で生駒山から南山城と北河内の境に連互してゐる龍王、天王、國見、觀音の諸山脈にあたつて着けてゐた夕

立雲が、少時の間に此度はそつちの方へ廻つていつたものと知れた。

その眞暗な空の色を背景にして奈良の山はそれがために一層明るく間近に浮き出でゝ見えた。そして大佛殿や興福寺や新藥師寺あたりの均整を保つた堂宇の屋根が靜に立つてゐるのが、可なりの距離を置いて繪畫のやうに眺められた。大佛殿の大きな屋根の鴟尾が日を受けて金色に光つてゐる。野にはもう麥が黄色く熟しかけて、遠くの平野から渡つてくる爽かな五月の軟風が車窓に向けた顔を撫でゝいつた。やがて田圃の中に立つてゐる法隆寺の停車場について汽車を下りると、そこから俥を雇ふて法隆寺の村まで麥圃の間の田舍道を行つた。東北の奈良の方の山には尙ほ黑い雲を着けて、軟かな微風の薫る間々に忽ち嵐のやうな強い風が麥圃に波を揚げていつた。私は輕い麥藁帽子をとられないやうに周章てゝ手で抑へた、眼も霞むまで廣く開展した野の果てには遠く西南の方に葛城、金剛の山々の靉靆が眺められた。今年もまた五月の空を慕ふて歸つて來た燕が輕快な翼に風を切つて、俥の前路を地上に附くかと思ふほど低く翔つていつた。道の傍では暖く微温んだ麥圃

の間の野溝を渫え干して里の子供等が尻を捲つて鮒や鰌を捕つてゐた。やがて俥は靜かな法隆寺の村に入つていつた。そこには北畠何房などゝいふ土地の豪族の嚴めしい屋敷が廣い塀を取りまはして立つてゐた。そんなものを見た私の聯想は、五六百年も昔の南北朝時代に馳せていつた。伊勢からこのあたりにかけては北畠の一族殘黨が長く南朝の帝のために誠忠を盡してゐた地方であつた。村を通り越すと、そこには老松の欝蒼として立ち並んだ清い砂地の道路が寺域につゞいてゐる。やがて南大門に入つてゆくと、兩側に古めかしい土塀の立つた彼方に仁王門が見えて、その左の甍のはづれに名にしあふ五重塔の輪塔が高く顯はれてゐる。建築美術の智識に疎い私は專門家の立場から分析的に觀察することは出來ないが、秀麗無比なる五重の塔や金堂の様式を凝乎と見入つてゐた內に名狀し難き一種の藝術的快感が湧いて來るのを覺えた。こゝの五層塔や金堂の端麗宏壯なる恣態を仰ぎ見る者は、あの、奈良西の京藥師寺にある紫銅の鑄造佛藥師如來と左右の脇士日光菩薩月光菩薩三尊の立派なる佛體をも聯想せずにはゐられないであらうとおもふ。今を去ること千

數百年の昔、聖徳太子や聖武帝の時代に既に斯の如き進步したる工藝美術が日本に出來たかと思ふと寧ろ不思議なやうな氣がする。五重の塔や金堂の壯嚴端麗なる建築美の快感にしばし恍惚の境に耽溺してゐた私は、やがて眼覺める如く吾に反ると、又砂地を步んで、清淨閑寂を極めたその法隆寺の寺域をまた南大門の方へと出てきた。葛城、金剛の巨大な翠鬟は先刻と變らず遠く綠麥の野の果から、絕えずそよ〳〵と薰風を吹き送つてゐる。

法隆寺驛から少し南に行くと、官幣大社廣瀨神社がある。驛前の田圃の畦に丹塗の角杭が立つてゐて、その道しるべをしてゐる。私は驛前の茶屋に立寄り、赤毛布を掛けた休み臺に腰打ちかけつゝ、際涯もない五月晴れの野景色をいつまでも顧望してゐた。

茶店の女房は奥のひと間で夜具に綿を入れてゐたが、立つてきて煙盆に火を入れたり、茶を汲んだりした。あたりの野には蓮華草の名殘りが尙ほところ〴〵に點々紅紫の色を留めてゐるばかりで、一面畦から畦に眞靑な草の葉を茂らしてゐる。日は麗かに照り、田圃に續く村々の屋根は煙霞の中にちろ〳〵と陽炎を立てゝゐる。

私はあり合はせの夏蜜柑に、渴を醫しながら、さてこれからどちらへ行かうかと考へた。實に大和の此のあたりほど何處へいつても見るべき名所に富んでゐる處はない。そして其等の名邑を連接する交通機關は縱橫に往き交ふてゐるのである。新法隆寺驛から二階堂を經て丹波市に出ると、そこには有名な天理敎の本部がある。此處も一度は見ておいてもいゝ、そして其處から奈良方面より來る汽車に乘つて更に南すると、やがて古い三輪の町にゆく。そこには官幣大社大神神社立たせたまふ。三輪山近く聳え、欝蒼たる杉檜の美あり加之この町はかの近松翁の「冥途の飛脚」に名の高い梅川忠兵衞道ゆきにも唄はれたる三輪の茶屋のあるところにて、近松の作は畢竟架空に過ぎねども、この町に今尙ほ參宮街道の茶屋の殘つてゐることは事實である。それは以前畿内地方から伊勢參宮の順路にあたり三輪を經てゆく者が多かつたその名殘りである。今は多く頹廢して往昔の殷賑のさまは無いけれども、なほ昔を偲ぶことができる。

そこから尙ほ少許南にゆくと櫻井町を經て多武峰に藤原鎌足を祭る官幣大社談山神社が

ある。そのすこし西北には傍畝、耳成、香久山の大和三山がある。櫻井より汽車で東すると二里ばかりにして初瀨に有名なる長谷の觀音がある。

三輪、初瀨このわたりの鄙びた旅籠茶屋に轉々として、たとひ梅川と云ふ艶な女づれもなければ、從つて妻戀鳥の羽音におぢる氣づかひもなく、肌に適する初袷の裾も輕く、ぶら〳〵とさまようてゐやうか。そして、そのあたりに飽きると、又汽車で西へいつて高田の町まで戻り、そこから御所町、吉野口を經て吉野川の上流に沿ひつゝ上市の町までゆく事にする。そこから南朝二代の帝の篭らせたまふた吉野の宮居の跡は直ぐである。もう五月の末だから花は疾に散つて徒に葉櫻の繁つてゐるばかりであるが、生半櫻の頃は騷々しくつて下等な人種の多い大阪あたりの人間が來て俗了甚だしい。南朝の往事を偲びまらせ、または西行芭蕉の隱棲のあとを探ね、とく〳〵の露を汲んで詩聖達の幽魂と物語るには、なか〳〵に此の靑葉の季節こそ好ましい。況して、やがて五月雨のつゞく頃はもう間近にせまつてゐる。吉野川の雨景も眺めたい。妹脊山にその名の知られた妹山脊山の間を分けて川上の方から下してくる筏の雨に濡れそぼちてゐるのも風情に富んでゐる。上市の町こそ暫らく停車するに好い土地である。そしてやがて瀨々の水に若鮎の跳る頃になると滿溪の翠綠は眞に滴り流れるかの如き淸爽な感を呈するであらう。

私は法隆寺驛の茶店の臺に腰掛けながら、そんなことを種々空想してゐた。やがて長い五月の一日もやゝ西に傾きそめて、華かに大和平野の野末に照り輝いてゐた太陽は丁度生駒山の北の方に沈んでゆかうとしてゐた。丁度その彼方に大阪の大きな市街は擴つてゐるのである。私は明るい燈火の瞬くその街のさまなどを思ひ描いてゐた。

やがてまた私は、眼に見えぬ、ある魔力に引寄せられるやうな氣持ちになつて法隆寺驛からまた汽車に乘つて、やがて湊町の停車場に着いたのは、そこからはすぐ西の側の溝川ひとつ隔てた難波新地の妓樓々々の軒に明るい燈火の瞬きはじめる頃であつた。

（六年十二月七日誌。早稻田文學）

社會評論一束

年の暮れ

文士貧富論

節約宣傳、物價値下げ。追々數へ日に押迫りて木枯らし吹き荒ぶ年の暮れ。いづこも不景氣〳〵の喞ち聲を聞く中に、文化生活などといふ當世流行の大きなお題目を背景にしてゐるせいか、この文壇ばかりは存外に不景氣風も吹いて來ぬらしい。事實今日文士の經濟狀態が豐になつて來たことは、之を十五年二十年前獨步などが生活難に困窮したり、眉山が自殺したりした時代に比すれば實に隔世の感がある。あの時分には、その當時の文壇的水準からいつて、相當店出しの出來る代物になつてゐる物を書きうる文士でも、原稿の賣り口に窮したものであつたが、あの時分に比べて何十倍と出版物の盛大になつた今日では、もう書肆や雜誌社の方で、書く物にそんな贅澤をいつてゐないで、大抵の物ならば、どんどん需要して持て行くから、少し名を賣り出しさへすれば、筆を取つて、どうか斯うか生活して行ける時代となつた。今日都下いづれの新聞を見ても、その廣告欄の大部面を占領し

てるるのは殆ど七八分通り書籍、雜誌等出版印刷物の廣告である。文運の隆盛なること、日本開闢以來今日の如きは無からうと思ふ。碌々學校もやらない島田清次郎が僅に二十二か三歳で一擧にして數萬圓の印税を贏ち得たなどは、漸く十八九歳の前垂れ掛けの小僧でも巧く一つ當れば、一夜にして忽ち巨富を成すことの出來る相場師仲間以外にはとても見られぬ圖である。

先日も某所で文壇の古い連中が七八人集まつた時、そこは日本橋のある鳥料理屋であつたが、早くから、大磯からわざ〴〵出京してその席へ顔を出してるた正宗白鳥氏は、先着の秋聲氏と二人で話しながら、

「もつとほかの處でやればよかつた。僕なんぞはこんな時にでも藝者を見なければ、近頃藝者といふ者を何年見ないか分らない。」と笑つて、いふ。

「うむ、それは又二次會にするさ。」と、秋聲氏が微笑みながら應ずる。僕は、萬事の世話役とて、

「うむ、それは大いに考へたのさ。まあ併し、かうして皆が、めづらしく久し振りに會はうといふのだから、今度は成るたけ、手輕に會合出來る方法を取つたのだ。」

暫くして白鳥氏、

「文壇も此頃は、みんな金持ちになつて……」

と感慨めいた眼付をして、文壇の旣往と現在とをジツと思ひ見るやうにいふ。

すると、この僕は、すぐその言葉を引取つて、

「うむ、貧乏なのは僕ひとりだよ。」といふと、白鳥氏すぐそれに應じて、

「うむ、君だけだ、貧乏なのは。」と、氏のその明敏なる判斷力で僕の貧乏であることに保證を附けた。すると、秋聲氏は、氏の、いつもの論法の、何事につけても折衷したやうな、不斷定な物のいひ方で、

「貧乏ぢやないよ。秋江氏はなかなか贅澤の方だからなあ、結城の不斷着を着て、百圓の毛布に寢て。だからいつも金がないのだ。」

と、稍ゝ誇張的にいつたが、しかし、今日の文壇のみんなの金持ち振りをずつと見渡したところでは、僕の貧乏なことは、何といつても極印付のやうである。白鳥氏の見る所に動きがない。

さうしてゐる處へ、田山花袋氏がいそ〳〵と座敷へ入つて來て、床の間にトンビを脱いで置き、三人のゐる大きな偷臺の傍に寄りながら、例の氣の好い顔に笑みを浮べて、

「やあ、どうも遲くなつて失敬。みんな久し振りだなあ。……」と、一と膝進めて、「折角やるほどなら、もつと艶のある處でやればいゝのに。はゝゝゝ。」は、花袋氏未だなかなか老いずして頗る賴母しい。そして正に先刻白鳥氏のいつた要求と割り符を合はしたやうに一致してゐる。

その點にかけては、表べは寂びた顔をしてゐても、その實なかなか若い方の秋聲氏、今日髯を剃つたばかりのやうな顔をつやつやさしながら、

「今、白鳥氏も丁度その事をいつてゐたところなのだ。」といへば、花袋氏、

「みんな金持ちなんだもの、藝者くらい偶には見たつていゝさ。」と、大いにはづんだ調子でいふ。

それから話はいつか所得税のことになつていき、白鳥氏頻りにその事を語つてゐたが、

僕「僕はこれまで國家に、いかなる種類の税をも拂つたことがなかつたが、先日初めて税務署から決定書をさし附けて來た。僕も今度はいよ〳〵免がれまいと覺悟をしてゐる。」

といふと、白鳥氏、此方を見て、

「いくら云つて來た？」

「二千圓といつて來た。それなら仕方あるまいと思つてゐる。」

すると白鳥氏、憫然といはうか黯然といはうか、一寸愁傷を帶びた顔をして、

「君から税を取るのは非道い、君から税を取らなくつても可さゝうなものだがなあ。」と、語勢を強めて笑ふやうにいふ。

「ぢや、僕は、税務署から今度取り立てに來たら、異議を申し立てようか。」

「うむ、さうするといゝ。」

「秋江氏から税を取らないでも、政府はもつと冗費を緊縮する餘地は幾らもあるんだ。」と、秋聲氏政府の無駄使ひを憫くやうにいふ。

「いや、やつぱし政府も金が足りないんだよ。」と花袋氏がいふ。

僕「僕を税務署で、所得税調査委員に囑託すれば、文士だけには脫税させないんだが。」

いつであつたか、改造社長の山本實彥氏に前借をしに行つた時、金は、オイ來たと、容易なことでは貸してくれなかつたが、僕が、

「文壇で僕くらゐ貧乏な者はない。」と自ら笑ふやうにいふと、山本氏も微笑しながら、それには異存をいはないで、暫く默つてゐたが、

「まだある……」と一寸考へて、谷崎潤一郎さんが貧乏だ。……それから廣津さんも貧乏だ。」と、サツマ訛で無邪氣な調子にいつた。

「あゝさうだ。谷崎、廣津はやつぱり貧乏の口だ。」と、僕もそれには同意したが、しかし谷崎君の貧乏は、千圓の月收があつての貧乏である。廣津君は貧乏であつても、僕より十五年も若くつて、尙ほ大に春秋に富む。僕はもうこれ、そろ〳〵死に用意の金の事を考へて置かねば、明日の日どんなことがあるか分らない。

ところが、僕と同じ並の谷崎君は、改造社版の「愛すればこそ」が今年は大當りに賣れ、廣津和郎氏は、モウパツサン飜譯の「美貌の友」が之れまた年尾に迫つて大當りに當り、此の頃では、文壇あちら此方の噂には、廣津君は、毎日百圓づゝの印税が入るとやら、入らぬとやら。どちらにしても大福々の好景氣——活字を讀みちがへてはいけない、毎月に非ず、毎日と念を押して置く——。斯う景氣が好くつては、さすがの廣津君ももう原稿料の前借をせずに濟むといふもの。そこで只一人取り殘されて、何時まで立つても貧乏なのはよく〳〵私だけとなつた。日本の文壇も、出版界も、讀書社會も、僕一人を貧乏に置いて

けぼりを喰はすやうぢや情ないといはねばならぬが、しかし今日のやうに文壇總じて金持ちになつてしまつては、ちと負け惜みのやうではあるが、何だか文士やら實業家やら區別が付かなくなつたやうな氣もする。皆が世智辛く、たゞ悧巧にばかりなつて、少しは貧乏の脚を出すやうでないと却つて面白くない。癪に障るから、僕はいつまでも一人で貧乏してゐてやるよ。

今は參州の鄕里に歸臥して、巨萬の產を治し、納まり返つてゐる小栗風葉氏、今はそんなに物質的に富裕な境涯にゐるから、却つて面白くないが、以前氏が東京に居つて大いに文壇の流行つ兒であつた時分の生活は、それは面白かつた。今から十五年も前、その時分は幾ら流行兒でも收入は、とても今のかすく文士とも比べられなかつた。搗てゝ加へて風葉氏はあの通り流連荒亡する方であつたから、いつも方々から借金の督促に追ひ捲くられてゐた。すると、その風葉氏が早稻田の奧の戶塚にゐて、眞山青果氏、中村武羅夫氏などを部下に從へ、大に戶塚黨の氣勢を揚げてゐた時分のこと、氏が金の調達に窮した窮餘の窮策として、その頃書いてゐた、新潮社から出版契約の「終篇金色夜叉」の原稿のことで、捫着を起し、新潮社が刑事問題にするといつて、陽に怒つてみせたことがあつた。その時風葉氏は急に戶塚から當時麴町の土手三番町に在つた新潮社まで行かなければならぬことになつた。が、――それは夏のことであつたが――いつも原稿料を手に取りさへすれば酒にして飮んでしまつてゐる風葉氏は、年こそまだその頃、三十四五で若かつたが、文壇の流行ッ兒……といふよりも、もう一流の大家であつた。さてその大家が外出しようとして身に着ける物といへば、絽の羽織などは固より有らう筈もなく、今寢卷きにしたり、晝間內にゐる時着てゐる、クチヤくの浴衣が一枚と、あとは外出着の、しかし、これも當時價にして七八十錢の白地の縱縞の單衣が一枚きり。それを又、丁度その日に朝洗濯して竿に掛けたばりのところ。それを早く乾かせようとして、座敷に切つてあつた爐傍に持つていつて、女中が、夫人と兩方から火の上に引張つてゐると、餘りに火を強くしたので、

丁度背中のところに飯茶碗ほどの大きさに狐色の燒け焦げをこしらへてしまつた。風葉氏は仕方なく、その大きな燒け焦げの出來た單衣を着て、羽織もなくて出掛けていつたものだ。

氏が今日何等の財産なく、單に原稿料と印税とばかりで生活してゐる人ならば、さういつた、飲んでばかりゐて、年中貧乏してゐた時分の逸話に忽ち光彩が生じて、一段文士としての有難味が加はるのであるが、田舍では巨萬の財産家で、當年文壇の流行兒も今は貨殖の他に餘念がないと聞いては、折角の逸話を殺してしまふ。

日本の古い文人書家傳などを見ると、よく、さういふ貧にゐて貧を意に介しない奇人に出會はすが、今日の文士は多く貨殖列傳中の人である。

プロレタリヤ文學で候の、ブルヂョア文學撲滅で候のなど、いひながら、誰れも彼も錢を欲しがる分にはまだよいが、ブルヂョアの、金滿家の子弟の書いた物なら、大して感心出來ぬ物までも、イヤ今年中の傑作だの、大作だのといつて、ブルヂョア作家に、吾もわれもと唱和雷同してゐる、本當は、批評家は、親からの金持ちの息子が書いた物などは少しくらゐ可くつても、割引をして見なければならぬ筈だ。そいつを逆に、金持ちの息子の書いた物は、惡くつても好いといふのだから意苦地がない。そんな卑屈な文壇に、何のその、ブルジョア文學の撲滅が出來て堪るものかい。出來たら、この首をやる。（十一年十二月十二日誌。時事新報）

有島武郎氏の財産放棄に就いて

——（好いお道樂）——

有島武郎氏が、此度その所有財産の中から五十萬圓を放擲して勞働者階級に惠與せられるといふ事について本誌から意見を徵せられた。

……徵せられたから、差當り思つたまゝを申すのであるが、私には格別異つた意見とても無い。誠に結構な御實行であると思ふ。私は、それに關する同氏の意見を委しく知つてゐないから何と批評のし樣もないが、氏のことであるから、定めし世間爾他の富豪の此の種の特志行爲とは大分に選を異にしてゐられるお積りであらうと思ふが、委しい意見を知つてゐないだけに、私には、世間の富豪の此の種の特志行爲と、左まで異つた印象を起さない。

尤も、山下龜三郎氏が陸海軍の飛行機設備費として五十萬圓を提供したとか、內田信也氏が水戶の高等學校設立費を提供したとか。その他之に類する富豪の財産提供とやゝ違つ

て、有島氏のは、氏の思想的立場からして、私有財產制度といふことの不合理に服しないといふ、氏の哲學に淵源してゐるのであらうと存ずる。けれども、それはどんなものかと思ふ。――氏が確かにさういふ意見を抱懷してゐるか、どうかは、私自身が直接に氏から確めた譯でないから――輕斷かも知れぬが――氏はなか〳〵理想家、しかも往々生一本の理想家のやうであるから、或はさういふ意見を持つてゐるのかも知れぬ。が、私は、此の私有財產を認めないといふ事は、如何なものかと思つてゐる。私は寧ろ內田や山下等の寄附金の爲方の方が自分の常識に合致してゐるやうに思はれる。

無論私は、人間の社會生活上の經濟組織などゝいふことについては、固より何等專門的の研究をしてゐる者でないから、ほんの一と通りの常識で判斷するのであるが、私有財產といふことを認めなかつたならば、人間は餘り働かなくなりはせぬかと思ふ。人各々營々として私有財產を築き上げ、さてその上で、いろいろな、殆ど限りなき人間の欲望を滿足せしめようといふ將來の希望があればこそ大抵の人間は勤勉努力するのであつて、私有財產

を不都合又は惡の行爲として排斥するといふ事になれば、餘程篤志の人間でない限り働くのがイヤになるのは殆ど言ふを待たない。

私は、ロシヤの現狀とか、レーニン政府の政治的理想とかについては、全く不知案內であるが、何だか次のやうなことが思はれる。過般來も、折々新聞紙上で、有島氏など特志の人々がロシヤの饑饉救濟の爲めに講演會とか音樂會とか開催されてゐたのを見受けたが、奇特な事とは思つたが、私には、何だかその餘りにセンチメンタルなのが一寸厭味を感じさせられた。有島氏その人の、さういふ御事業は、それでもまだよい。何となれば、氏は豐かな境遇の人であるから、さういふ他國人――人類の博愛思想には國境も入るまいが――の救濟に餘力を用ゐられて可い。けれども、そんな餘力ある人とも覺えない人達までが、遠い距離にゐる他國の人の救濟に盡力するといふは、どんなものかと思つた。救濟事業は手近に幾らもあるではないか、見えにするものでない救濟事業の如き事は、先づ近隣から始めるのが順序である。

で、何故ロシヤの一部の人民が目下饑饉に苦んでゐるか？……私はその原因を想像してみた。勿論天災といふことも最大の原因であるに違ひなからう。が、私の想像では、之はレーニンの政治が善くないからではあるまいか。と、かう考へたのである。――繰返して斷はつて置くが、私の想像であるから、事實がさうでなければ、直ちに取消すに吝かではない。――レーニンの政治は私有財產制度を認めないといふことだ。ロシヤの農民の如き敎育程度の低い、無智無思慮の者が、一たび私有財產解放の潤ほひ(？)に際會して一度は抃舞して喜んだであらうが、私有財產を認めないのだから、彼等の如き思慮の單純な者共は働いて溜めたつて馬鹿らしい、それよりも持つてゐる者に凭れ掛つて遊んで食つてゐる方が樂だといふ氣になる。饑渇の原因が天災の不作ならば格別、さもなければロシヤの饑饉はレーニンの政治の招く禍ではあるまいか。と、かう思つた。農民は自分で働くのが馬鹿らしいから、働かないで食はうとする。從つて田園が荒廢するのだ。

且つ夫れ、人間の欲望は無限である。此の無限の欲望を充たすところに人間生存の意味興味がある。勿論その欲望には野卑劣惡なるものと、高雅優良なるものと、いろ〳〵の種類があるが、努めて野卑劣惡を去つて、高雅優良なる欲望に就くのが、人類の向上進步である。そして其等の欲望を十分に滿足せしむる事は決して惡いことではない。私の哲學によれば人類は決して勞働ばかりが生存の目的ではないのだ。勞働は何といつても畢竟手段である。高雅優良なる欲望を滿足せしめる爲めの方途、手段に過ぎないのである。何も自から好んで殊更に無資產の勞働者になる要はない。額なり心臟なりに汗する勞働をして正當なる資產を作り、以つて自己の優良高雅なる欲望を滿足せしむる處に人間の生がひがある。

私有財產を認め、手段たる勞働の彼方の目的には欲望滿足といふ標目があつてこそ、勞働に就くことを厭はないのである。之は極めて幼稚な原始的な考であつて、同時に又永劫不變の眞理である。

上下三千年、人類の思想史の變遷の跡を探ぬれば、極端な快樂派に對して又極端な禁欲主義の哲學があつて交互に一代の人心が支配されてゐた時代もあつたらうが、所詮人間の欲望を禁壓する譯には行かない。そして、それは決して悪いことではないのだ。

私有財産制度を認めない處には必ず勤勞心の消磨を伴生せしめることは眼に見えて明かである。餘程の變り者でない限りには、勞働その事のみを最後の目的とし、且つ興味としてゐる者はない。そして、特別の例外のほか勤勉なる勞働者のみが陶汰を通過して私有財産を多少なりとも貯蓄し、以つて老後を養ひ趣味欲望の滿足を果しうるのである。私有財産を否定することは、人間の本性に對して此の上もない壓迫、拘束である。

有島氏の感情が純眞なるものであることは、自分と雖も疑はないが、氏の思想の色彩は常に——私の見地から見れば——あまりにセンチメンタルであり過ぎる。私は、ゼネワの哲學者アミエルと共にセンチメンタルといふことの尊ぶべきことを拒否しないことに於ては決して人後に落ちるものではない。耶蘇も釋迦も偉大なるセンチメンタリストであつたけれども有島氏の思想の色彩はセンチメンタルであり過ぎはしないか。氏が、勞働者階級に味方し同情することに、私は異存は無いが、世界の人間が悉くプロレタリアでなければならぬことはない。プロレタリアは悉く有産者（ブルジョア）たることを目的とし、希望として働いて居つてよいと思ふ。プロレタリアをセンチメンタルの眼を持つて見る處に、往々私共と見解の相異が生ずるのではないかと思ふ。私の見解に從へば、若し此の世界が、勞働を目的としなければならぬものとしたならば、決して住むに慣しないのである。勞働を咏嘆的、讃美的の眼を持つて見るのはまだ思慮の幼稚單純の時代のことである。そして又その人が勞働のみを興味とする人であるとするならば、その人は實に不幸な人であるといはなければならぬ。何となれば此の世の中には、勞働よりもまだ〳〵面白い享樂がある筈だ。それは前申したごとく野卑劣惡な趣味ではない。高雅優良なる趣味は幾らもある。

勿論有島氏は他の滔々たる世間の富家の子弟と異り、無自覺に父祖の遺産によつて飽食暖衣、醉生夢死することを潔しとする人ではない。北海道に所持してゐるといふ莫大な莊

園を小作人に頒與することその事は、冒頭に於て述べた通り、無條件に結構なことに相違ないのだけれど、もし世間の噂の如く、氏が徹底的に、有產者では可けない、無產者でなければならぬ。徒食者では可けない、勞働者でなければならぬ。といふ理由から自家の財產全部を拋棄するのだとすると、その理由には、私は無條件では贊成しかねる。前述の如く、たとへば內田信也氏が水戶に高等學校を設立する爲めに五拾萬圓を寄附したといふ如き意味で、——少くとも、無產の水呑百姓を自作農の境遇に置き變へてやるといふ意味で所有地を解放するのは可いが、もし噂を事實とすれば、何も殊更に御自分の立派な邸宅があるのに、それまでも放棄して借家住居までも爲さらずとも可ささうなものである。尤もトルストイの哲學からいへば、それが可いのかも知れぬ。有島氏も亦た凡庸通俗な人生哲學及びその實行では氣が濟まないのかも知れぬ。けれども私の凡庸通俗なる人生哲學から申せば、それは偏奇な行爲とほかいはれない。

今日金まはりの好い文士の中でも、新潮社經營の富士印刷株式會社の株を一株すら所持し得ない私自身などは、實に綺麗さつぱりとした、逆さまに振つても錢の音のしない無產者である。そして、若し文筆の仕事をも勞働とすることを得べくんば完全無缺なるプロレタリアである。けれどもプロレタリアであることは名聞でもなければ光榮でもない。それどころか、貧乏は罪惡の一種である。少くとも醜惡である。トルストイは彼自身考へる所があつて家出をした。有島氏も亦た自から見る所があつて、折角の自宅まで持ちながらそれを棄てゝわざ〳〵借家住居をなさらうといふなら、それもお心のまゝに任かして他人が敢て兎角容嘴すべき事ではない。乍併それを以つて、他の凡ての人の行爲の規範標準とする譯にはまゐらぬ。東海道を西する者もあれば、東するものもあるのが人の世の相である。私などの如く五十年の貧乏暮しが骨身にしみて跪いてゐる者は、どうかしてせめて、最後の死の床を安らかにする爲めに四疊半一と間の家でも自分で所持したいといふ渴望から、有島氏が折角所持してゐる家屋敷まで放棄しようとするのを不可とするのではない。人間の悉くが何にもトルストイに倣はなくともよいと申すのである。貸し家住居は有島氏

などにはめづらしくつて氣が變つてよからうが、私共には貸し家住居はめづらしくも何ともない、飽き〳〵してゐる。そして、その貸し家さへ容易に目付からぬので、殆ど半生の長き間の宿屋暮しだ。けれども世には西行ばかりでも爲方がない。芭蕉ばかりでも爲方がない。ロシヤの革命はまだ途中にあるから、その成果は容易に判斷しかねるが、少くともトルストイのその方面の思想は、今日のロシヤを幸福にしてゐるか、不幸にしてゐるか分らない。

假りに家まで無くして借家生活をするにしても、そんなら借家生活だからプロレタリアで、俯仰天地に恥づる所なしとするか。それは自から欺くの類である。その借家生活にも種々の程度がある。芭蕉などは、ほんとに此の世を幻住庵のつもりで、五十年の淡い一生を天地の間に托してゐた。併し何人もそこまで徹底して物資から身を遠ざかる必要はないのだ。有島氏も序のことに其處まで徹底出來たら、喝采してもよい。その反對に有産と徒食とがある無産と、手段たる勞働とは決して好ましいことではない。

る意味で人生の最後の目的である。財産があつて遊んで一生が通れゝば、これほど幸福なことはない。しかし、有島氏は、あまり生まれながらの境遇が幸福であつて、遊んで一生を通らうと思へば通れた。そして今までにも既に富貴の人が享樂しうる幸福を或る度まで享樂して來てゐるのだ。假りに今日の小說家だけについて見ても、多くは自力では自分の家さへ所持してゐない者が多い。又自力で海外を漫遊した者も少い。家族が病氣になればその醫藥の代を心配せねばならぬ。つまり渡世に悄々としてゐる。有島氏はそんな缺乏や配慮には微塵も累はされてゐない。つまり富貴に飽いたのだ。富貴に飽いた人が、借家生活をしてみたくなるのも無理はないかも知れぬ。毎日々々料理屋の物ばかり喰つてゐると、偶にはつまらぬお總菜が食べたくなる。富貴に飽きて貧乏がして見たいとは、吾々プロレタリアからいつたら、夢にでもいゝから一度そんな目に遭つてみたい。

理論を前に引戻して、それで、財産があつて、遊んで一生が通れるのが人間の最後の希望であるといふ、私の人生哲學と有島氏の人生哲學とは丁度正反對のやうである。財産を

所持しようとすれば搾取者たることを覺悟しなければならぬ。人々の多くが遊んで通ることばかりを考へたら、その社會組織には必ず被勞役者の存在を豫想せねばならぬ。昔ギリシヤの市民は幸福なる生涯を享樂した。隨分と、社會の上流者は貴族的の生活をしたが、半面には非常に暗い處があつて、奴隷制度が些の反省痛苦なしに行はれてゐた。三千年後の今日の社會組織でも財産家ばかりで遊んで食はうとしたら、當然被搾取者や被勞役者が存在しなければ日が立たぬといはうか。此の點にはいろんな難題があるであらうが、世の中は隨分複雜であつて、且つ幸不幸は主觀的の物でもある。そして此の難題の解決が附かぬからといつて、私有財産を所持し、遊んで食ふことの幸福であることを否定する理由にはならない。父祖の遺産に飽食暖衣することを潔しとせぬならば、それは有島氏の如く、一應綺麗さつぱりと吾々御同樣の裸一貫の素寒貧になつてしまひ、そして自分の精神勞役の結果たる著作から入る收入で以つて、樂しみうる限りの幸福を享樂するのがよいと思ふ。之は何も有島氏に對つていふのではなく、有島氏を例に引いていふのである。吾々無一文

で出立してゐる者が、雀の涙のやうな零細な資金を勤儉貯蓄して身分相應の住宅を構へるとか、甘い物を食べるとか、樂しい旅行をするとかするのが人生の歸趨の一つではあるまいか。何と考へても勞働は手段であり、遊びが目的である。

資産家がその富貴に飽いて、わざ〳〵借家生活をするからといつて、無資産者までがお調子に乘り、輕率に附和雷同して貯蓄心を放棄したり、折角所持した家屋を賣り飛ばすことは千萬無用である。それは天理教の信徒が夙に實行してゐることである。

趣味の乏しい人ほど手段を目的と誤解し易い。所謂社會主義も畢竟するに手段に外ならない。その主義者等は社會を現狀よりもより善き社會に改造しようとて、種々の考案を立てる。そして、より善き社會とは何か。彼等が思ふとほりの社會が出現したとしたならば、その上で人間はどんなことをしようといふのか。昔は戰爭が藝術であつたり、又目的であつたりした時代もあつたが、今日では段々そんな未開時代から遠ざかつて來た。社會の改造は、窮極するところ目的ではなくして手段である。手段の彼方には別の目的がある筈だ。

それは前來度々申す如く遊ぶことである。その遊びには種々ある。昔に戻つて一例をいふならば光悅や乾山の如く凝つた陶器を作つて茶儀を樂むのも遊びである。大雅堂、蕪村などの如く畫を書いたり、俳句を作つて自然を樂むのも遊びである。その他音樂を聽くのも、綺羅を裝ふのも、戀をするのも皆な樂みであり遊びである。此の遊び、此の樂みは決して手段ではない、目的である。社會改造を宣傳する人達は、手段ばかりを喧しくいつて、肝腎の目的に重きを置くことを忘れがちである。

有島氏などは父君の遺產に飽食暖衣することを潔しとせぬといふ心掛けは立派であると思ふけれど、往々、人間生存の目的と手段とを穿き違へられてゐるのではないかと思ふ。無論趣味なども相應に豐富な人であるだらうが、折角、人生を享樂し得られる幸福な境遇に居ながら、手段方法のことに、あまりに心を用ゐ過ぎはせぬか。少くとも私自身などは努めて手段の奴隷となることを避けようと思つてゐる。社會主義者などは悉く手段の奴隷である。前申すごとく改造は、より善き社會の實現を望むからであつて、そのより善き社會とは、その社會に生息する人が遊んでばかりゐられることでなければならぬ。況んや勞働の如きは決して目的ではない、手段中の最も嫌惡すべきものである。戰鬪艦を建造する三菱や川崎の造船所で鐵を錬るの勞働は目的ではない、人間の高遠なる理想からいへば手段である。之に反して乾山や光悅の如き陶工が土を練るのは直ちに目的である。そして遊びである。

文學藝術にしても傾向や主張のある者が低級だといふのは其處にある。人間として目的のみに生きうる人は、それぞ最も幸福な、完全な人である。政治家としての渡邊華山よりも畫家としての華山の方が人生の目的に合致してゐるのだ。華山の政治的努力功績は過去の價値だが、その畫は今日尙ほ價値がある。

論理が橫の方にそれたが、又立ち戻つて、有島氏が莊園を解放するのは、思想的背景もあつて、惡い事ではないが、全く吾等同然の無資產者になつて、借家生活をしようといふのは少しく可笑しいと申さねばならぬ。そんな資產を擁してもつと凡百の事を樂まれたら

どんなものか。その樂みにも飽いたといふなら、押返へしていひ様もないが、氏の行爲を凡ての人間の規範として推奬する譯にはゆかぬ。

次のやうな事を申すのは、有島氏の人格や個性を聊か無視した言ひ方で失禮であるが、氏は察する通りの生一本な、正直な、良心の感念の強い人であるから、無資産の、鼻端の強い、社會主義者や勞働運動の連中から、

「君は、そんなプロレタリアに味方する様なことをいつてゐるが、それが眞劍なら、君の持つてゐる財産を全部投け出してから物をいへ、さうでないと、言ふことに權威を認めぬ。さあどうだ。」

と凄味なことをいはれて、自分で自分の言說に束縛されて、遂に財産を放棄したのではあるまいか？　と。

之は餘りに皮肉な穿ちで、氏の人格や個性を無視した批評であるが、此の大森近在には有名な社會主義者で、立派な邸宅を構へて廣々と住んでゐる人間もあるやうだ。私一個の持論からは、誰れであらうと、それは結構な事とばかり思ふが、社會主義を唱へ、私有財産に反對する人としては、口と實行とか矛盾してゐる。其處らが所謂英雄人を欺くものか？

そんな連中もゐるのだから、何にも有島さんが正直に邸宅まで放棄して、物好きな借家住居などなさらずともよささうなものだ。

それ等に比べると、社會主義も唱へず、逆さまに振つてもチャランともいはない私などは、お蔭で、あゝ寢覺めが好い！　（大正十一年三月十七日誌。新潮）

予の勞農主義

此の頃政友會憲政會を始め、各種の公共團體などで大分農村救濟問題が具象的になりかかつて來てゐるらしい事が先頃來新聞紙上に出てゐる。實際今日の農民ぐらゐ割に合はぬ職業はない。文學者の中で、その點に相應深い知識を有つてゐるらしい人は、去年の十一月の「中央公論」が「豐年なるが故に農民却て苦む不合理なる現農村制度の革新」といふ問題について、諸家の解答を求めた時に白鳥省吾氏が「農民の生活に對する悲み」といふ頗る同情あり。知識ある研究を發表してゐた一文を讀んで、今まで單なる詩人としてのみ知つてゐた氏がさういふ方面の精しい研究家であることを始めて知つた。

聞くところによると、氏は大地主ださうである。その大地主の氏が專ら小作人の境涯に同情してゐるのは、一と口にいへば美しい心事といはなければならぬのであるが、私は、それが、あまりに詩人らしいセンチメンタルな氣分に過ぎてゐはしないだらうかと思つた。

私自身は、もう約三十年來故鄕の地を離れ、鄕里の人間達とは全く類を異にした生活をして、わづかに一管の筆を命の綱と頼み、文を賣つて口を糊してゐる境涯であるが、元を糺せば生れは農家の出で、稻の香や麥の綠の中に幼時を過ごして成人した者である。

無論私共の生まれた地方には一人にして五十町歩も百町歩も所有してゐるやうな豪農はない。從つて小作人水呑み百姓の境涯と大地主の境涯と非常に懸隔してゐる有樣を目擊する場合はあまりに無い。やゝ大きい地主といつたところで二十町歩か十五町歩くらゐのもので、多くは三町とか五町とか、乃至七八町から十町くらゐのものである。それゆゑ地主の生活と自作農や小作人の生活と比べて、その間に左まで逕庭はないのである。

なるほどたゞ一概に簡單に考へれば小作人は、純然たる無產階級の筋肉勞働者であつて、憫むべきもの、又たとひ些少なりといへども三町なり五町なりの土地を所有してゐる者は資本家階級に屬する者と見るを得るが、白鳥省吾氏の論文で見る如き事實は、まづ私共――中國地方――の鄕里には餘り無い圖であると斷言出來るのである。白鳥氏の引證してゐら

れる實例は主として宮城縣即ち東北地方仙臺あたりの田舍のことであらうと思ふが、私は別に農業經濟や農民生活の研究者でないから、甚だ狹い、殆どそのために勞しない、たゞ居ながらの見聞によつていふだけの事ではあるが、私共の生まれた地方では白鳥氏の引例に在る如き宮城縣地方のやうな、ひどい慘めな生計をしてゐる小作人または水呑百姓は餘り見當らないし、また日露戰爭當時とかに一家の働き人が壯丁として兵役に徵發せられて、いたく農村が疲弊したり、或は三十九年の東北大凶作の際に一反の田地をわづかに八圓か十圓で抵當に入れて借金をし、それが抵當流れになつて、大地主のために土地を併有せられたといふやうな話も遂に聞かぬ。勿論人の大身代を築き上げるには、いろ〳〵の智慧才覺を絞つてすることであり、中には隨分生き馬の眼を拔くやうな惡辣手段を用ひる者もあるだらうが、それは必ずしも地方の豪農に限つたことでもなく、都會の富豪が身代を拵へた根原を糺せば、それよりも、もつと〳〵非道いのも出てこようと思ふ。とかく詩人などゝいふ者は、その感情は極めて純眞であるが、複雜極りなき社會の狀態を一本調子に觀察

する弊があつて可けない。そして得て、センチメンタルな同情を寄することに逸り過ぎる遺憾がある。

成るほど五反や一町或はそれよりもまだ多くの地所を親の代から所有してゐた百姓が、何かの機會にそれを安く抵當に入れて金を借り遂に借金を濟し得ないで親代々の田地を人に取られたといふやうな例は到る處に有ることであるが、それは必ずしも取られた百姓が正直に勤勞してゐて天災等のために凶作に遭つて手放したとばかりはいへない。百姓をするのが厭であつて、酒ばかり喰つて怠けたり、博奕を打つて借金が嵩み、たうどう田地を賣り飛ばしたといふ例の方が先づ、私共の地方には多いやうである。それどころか、私共の地方では、早くから霜を戴いて野に出で、夜は月を踏んで歸るといふやうにして働いてゐる百姓は必ず年々一段か二段づゝは田地を買ひ殖してゐる者が多いのである。

前申したとほり、私共の地方は同じ中國地方でも山間に開けた百姓所とて、五十町歩百町歩の大地主はないので、高が多くて二十町か三十町ぐらゐの所有者に過ぎない。その中には成る程强慾非道な高利貸根性の奴が往々あることもあるが、その他段々所有町歩が低下するに從つて、却つて餘り不評判の地主はなさゝうである。勿論人間の事は一概にいへぬが、身上の大きい者ほど貧乏人に憎まれるのが、世間の已むを得ぬ人情であつて、身上の無い者には、却つてそんな强慾の者は少い。

そこで、小作農、自作農がいかにして、年々勤勞の結果、たとひ一反なり二反なりといへども田地を買ひふやすかといふに、人間が皆な賢くなりて身上の事に大事を取るやうになつてからは、滅多な事で持ち地を賣り放すやうな者は少くなつたから、幾ら買ひたいと思つてゐても賣り手は少いが、どうかすると、他村の大地主で、その村に大分纏つた田地を所有してゐた者が、製造工業などの會社事業に手を出して失敗し、家産整理のために他村に所有してゐた田地を賣却するといふやうな場合に、村の者がいろ〳〵金策をしてそれを買ひ戻すのである。勿論さういふ事は度々ではないが、先づ私共の生まれた村でいつても、

私共が子供の時分に聞いて知つてゐた他村の大地主が所有してゐた田地は、近年殆ど大部分、村の自作農や小作農が粒々辛苦で蓄積した金を以つて買ひ取つたやうに聞いてゐる。

今申すことは、極めて狹い一村内一字内の事であるが、それと非常に反對した現象を呈してゐるやうなことは附近の村落でも餘りなさゝうである。自作農小作農で、田地を一段二段買ひふやさぬやうな百姓に限つて怠け者で、酒喰ひであつたり、生まれた村に居着かないで、都會地に飛び出していつて、また舞ひ戻つたりするやうなノラクラ者である。私の老母は明けて今年八十二歳になるが、時々歸省すると、

「今、この村につらい者は(プアな者の謂ひ)餘計ない。どこの家もよく働くから困らない。」

といふのをよく聞かされる。

そこで、さういふ困らない半小作、半自作農は、單に農事ばかりでなく、いろ〳〵な土木工事に稼ぎに出たり、またいろんな家内の手内職の副業をしたりして、それによつて得た勞銀を貯蓄して置き、それを以て田地の賣り物が出た時に買ふのである。もし一段歩の田地を買ふのに金が不足を告げた時は、買ひ受けると同時にそれを抵當にして金を借り、追々にその借金を返濟する。さういふ借金などの世話を誰れがするかといふに、村内でも生計に餘裕のある人間がする。それ等は、まあ三町なり五町なりの田地や山林を所有してゐる者共である。それとて、何も近ごろの通り言葉の勞資協調とか何とか斯とかいふやうな新らしい意味や思想から思ひ付いたものではない。全くの相互扶助、近隣相救濟する親切心からの世話である。先祖代々何十年は愚か、何百年の昔から同じ村内に住み馴れた者がお互にさう薄情な事が出來るものではない。若し、他人の困窮に附け入つて、足許を淩ふやうなことをして自分の身上を肥らす者があつたら、非常な惡評を招くから、そんな恐ろしいことをする者など、殆どありはせぬ。

こんなことをいふと、白鳥省吾氏が詩人的の感情から、ひどく地主を憎み、そして水吞み百姓を憐んでゐると正反對に、自分はまた詩人的にひどく樂天的な見方をして、世智辛

い當節に珍らしく溫情主義の黃金世界を眼前に眺めてゐるかのやうに、人は思ふかも知れぬが、私共の生まれた村では、事實さうだから爲方があるまい。私共の村は貧乏な村であつて、田地を二十町歩か十五町歩か所有してゐる者が村一番の大地主で、それから段々少く十町歩、八町歩、五六町歩といふやうに所持してゐる小地主が多く。それから五反歩三反歩を自作しながら小作を少しぐらゐしてゐる者が最も多く、全くの小作農も隨分あるやうだ。其等の水呑み百姓とて、忠實で勤勞する者は決して困りはしない。勿論美衣美食をするといふ譯にはいかぬが、それが出來ぬとて彼等をセンチメンタルに哀れみ過ぎるといふは如何がなものかと思ふ。

それどころではない、やつぱり五反歩三反歩の自作農、全くの水呑み百姓よりも二町三町五町以上を所有してゐる些やかなる地主の方が、どんなに多くのかゝりが掛つて、經費に苦んでゐるかわからない。地租や、地方稅、村費、附加稅等は、白鳥省吾氏もいつてゐられるとほり。その他私共の生まれた村は、昔から水利灌漑の便の乏しい土地とて、子供の時分によく覺えてゐるが、每年夏季稻作の頃になると、水田の用水のことで村民は非常に緊張して來る。古來の習慣律の如きものに從つて夏季は、勝手に我田引水が出來ない。殆ど軍律の如き嚴重さを以つて、用水の番人が鍬を肩にして組織的に晝夜を分たず每日々々村の水田を巡視してゐる。それには上番といふのが二人、年々村内の信用あり譯の分つた人間から選ばれ、その下に小番が一日交代で村民順繰りに每日、――用水の急を告げて來た時には七人でも八人でも――田を巡視に出て、水田に水の有無を調節し、水利組合内の村民は決して自分の田へ自分で水を灌漑するの自由は與へられてゐない。それ等の水番によつて公平に水を灌がれるのである。かくの如き習慣は、ひとり私の生まれた村ばかりでなく、日本全國到る處に見られることであるかも知れぬが、とにかく、よく行き屆いた古來の習慣律だと思つて、私は感心してゐる。

少しく餘談にわたつたが、凡そそれくらゐ灌漑用水の乏しい土地とて、村は昔から水にはいつも困窮してゐた。それでまた近年大きな溜池を一つ築造した。その他に溜池は昔から

三つか四つあつたらう。中には三里も山の奥に設置してあるものがあつて、それは遠く舊藩時代から、藩政上、藩主が保護を與へて築かしたものらしい。それについても、いろんな口碑などが殘つてゐる。——それで近年また〳〵大きな溜池を築いたりしたので田地を所有してゐる者の頭に掛つて來る出費といふのが層一層嵩んで來る譯となつた。今一反歩に付き、どのくらゐ掛るか知れぬが、とにかく、ひどく掛るといふ話であつた。そんな譯で些少たりとも田地を所有してゐる者は、まるでしめ木に壓搾される如く四方八方に經費を課せられてゐるのである。それゆゑに各方面の關係からいつて、事實純然たる水呑み百姓——小作農——よりも自作農や、小地主の方が生計は困難である、寧ろ厄介千萬であるといふのが私共の生まれた村の實狀だ。詩人的のセンチメンタルな、過同情の沙汰所ではないのである。

さういふところへ持つて來て、近年小作爭議といふものが始まり、いろ〳〵の複雜な、千差萬別の情狀をも酌量、洞觀せずして、例の賀川豐彦などゝいふ、センチメンタルの大專賣業者が出て來て、用のない處にまで農民を煽動し、村民古來の良風美俗を攪亂するといふは、聞いたゞけでも苦々しくて堪らない。

この頃では、殊に昨年度などは豐作であるにも係らず、小作人は、賀川等の思想に惡くかぶれ、年末に至つてもまだ一俵も小作米を納入しなかつたさうである。

僕は決して、無自覺の溫情主義を謳歌する者ではないが、生半賀川等の思想が、通例質の好い宿俥の車夫をして、驅つて質の惡い夜働きの車夫か、又は昔の講談によくある熊谷堤の雲助根性に趨らしむることを痛嘆するものである。

それと同じ關係に於て、自分は、白鳥氏が引證して非難を加へてゐる法學博士氣賀勘重氏の說に贊成加擔するものである。博士が、

「……彼等地主及び小作人の双方が共に同情に値ひするものではあるまいか、言葉を換へていへば、國民分配の取り前を、彼等双方に一層增加してやる必要はあるまいか。……」

といつてゐるのは、「あるまいか。」どころではない。確かに「有る」と肯定すべきだ。

そして「中央公論」のその誌上に意見を述べてゐた、白鳥氏の他の諸氏、法學博士堀江歸一氏の說の結論に見るも、また大原農業研究所の有元英夫氏の結論に見るも、今日は、徒らに農民が地主と小作人とで互に鎬を削りて爭議してゐる場合ではない。それよりも彼等は一日も早く一致和合して、農業以外の商工業者――殊に商業者――に對抗して、自分の產出した物ばかりを安く買はせぬやうに、そして彼等商工業の產出した物ばかりを高く買はされないやうに策應するのが何よりも急務であると信ずる。（十二年一月十一日誌。朝日新聞）

安田善次郎の横死

「命長ければ恥多し」と云ふ言葉は、特に今度の安田善次郎の爲めに云はれたる言葉のやうな感がある。三億圓の金を持つて冥途へ行けるものでもなし、八十四迄も生きて不慮の横死を遂げ、吾々傍の者からみると、この三億の金は、その持主の犬死をも救ふことが出來なかつたのである。

然し、何につけスケールの小さい日本人の中で、あの人程強い意志と、その意志を遂行するが爲めには、苟くも失敗しないといふ周到なる思慮分別をもつて、八十年の齡と三億の金を殘して犬死をしても厭はないから、出したくないと思へば鐚一文も吝んで、人に與へないといふ、著しく一貫した性格的の處は、人間としても珍らしいと思ふ。

安田は遂に人爵を貰はなかつたが、安田以外の富豪の中には男爵を贏ち得るために、いろ〳〵の公共事業、慈善事業に巨額の金を寄附した者がある。吾人は一向實業界の事情に

は通じて居ないが、話に聞く所によると、安田は、時の官權の保護によつて富を作つた所謂政商と稱されてゐる物とは異り、彼は本當の赤手空拳を揮つてあの富を蓄積したのである。安田以外、今日天下の富豪と云はれる人は政府の保護の下に要路の人々と結托して成した富を誇つてゐるのである。つまり安田に比べると、富を造るの難易は到底一日の比ではない。無論公共事業に多額の金を喜捨するといふのは、彼等富豪の性質にもよるが富を蓄積した難易から云つて、安田以外の富豪は金を惜まず出せる譯である。蓋し、安田の心に、俺は政府の保護によつて金を造つたのでは無い。自分が富を成すには、何等の他人の手に依賴することをしなかつたのである。時の官權が、百萬圓出せば男爵にしてやらうと相談を持掛けた折にも、そんな人爵などを土芥視して寄附を拒んだのである。

さういふ點に對しては、私共は寧ろ安田の心事を痛快におもふ。只政府の庇護によつて巨額の富を成したのではないけれど、弱い者をいぢめるといふ惡辣なことをしてゐる。細かく立入つて解剖してみると、安田が蓄財する計りで、金を散ずることをしなかつたことには安田の主義や、その富の來歷からみて、必ずしも無理ではないと云つてもいゝ。けれども評判といふものは仕方が無いもので、その評判の方に無理な所があつても、本質に何處かよくない所があると、先方の理由の立つた道理などを無視して、そんなことには一向遠慮なく、一圖に薄德だと、惡評を浴せかける。僕の所見によれば、安田が金を散じないと云つて、憎んだり恨んだりするのは、する者が無理である。けれども、富を成した手段に、政府の御用では無かつたが、それとちがつた意味で惡辣なことをして、弱い者をいぢめたと云ふことは、安田の富の一番の缺點で、一番濁つてゐる點であると思ふ。安田の方は自己に偽らざる富豪であつて、政府の御用を勤めて、成し易い富を成し、それを晴がましく天下公共の爲めに淨財を喜捨するのだと云つた顏をして、そして男爵などと兩換して貰ふ。さういふ連中の方が僞善で無いとは云へまい。

兇漢朝日某の平時に就ても、勿論私は知る所は無いが、資本家を呪ひ、守錢奴を憎んで公憤を發してこの企てに出たといふ動機が背景に成つて居るものと、大いに朝日に讓歩し

て考へても、新聞でみる所の彼の平素の行狀などから、同じ刺客でも彼の森文部大臣を刺した西野文太郎、又は大隈外務大臣を狙擊した來島恒喜、その外大久保利通を斬つた島田一郎、星亨を刺した伊庭想太郎などに較べて、動機の高潔といふ點に於て、大いに劣る所がある。今回の安田の悲慘なる最後は不言不語の中に、天下の人殆ど悉く痛快を感じてゐる傾があるやうだ。併しそれは畢竟暗殺の結果のみに就ての感情であつて、朝日の動機は前申した場合の暗殺と大分異つてゐる。故に私はその結果によつて、決して朝日の行爲を微塵だも是認する事を肯んずる者ではない。

前申したやうに私は財界の事情などに全く門外漢であるが、嘗て新聞で見た事があるやうに思ふ——或は新聞で見たと思つて、自分で想像して考へてゐるかもしれないが、日露戰爭の時の總理大臣桂公が、國費の融通などに就て安田に相談をしたと云ふ事は、無論只貰ふといふのではなく、軍事公債などの形で融通してもらふ事でせうが、その時安田が喜んで桂の要求に應じたかどうかもしらないけれども、一國に安田の如き纒まつた巨富を積んで、三菱や三井よりも更に自由に、一朝國家有用の際に、オイソレと右から左へ巨費の融通のつく富豪が存在して居るといふのは、獨り安田一人の私有とばかりいへない。安田の財産は直ちに國家有事の日の金である。僕は美術品を愛する者であるが、然し贋物の金佛や茶器類に、巨財を消耗して一朝事ある際、纒まつた融通の出來る者の少ない時に、安田の如く三百圓の書にも金を惜むといふ心掛けの堅い人があつて、何時でも間に合ふやうに用意されたる金を持つて居り、つまり金の番人である。國家の爲めに金の番人として安田善次郎位な適任者は六千萬人中彼の右に出づるものはない。日露戰爭の時に桂の相談に應じて、多少の融通はしたのであらうし、又、もうこれが戰爭の見切り時であらうといふ時分に、安田が桂に忠告したとも聞いた事があると思ふ。安田の八十幾年の經驗と周到なる思慮とは、その巨億の富と共に、國家にも不必要では無かつた。又かういふ事も聞いてゐる。日本が日露戰爭によつて二十億の借金を背負つた時、その借金を、年々の償還額を增大してもつと早く還してしまう事に努力しなさいと桂に忠告したといふ事である。それ

も、安田の分別は國家の爲めに有利なる忠告であつた。勿論、安田以外にもさういふ事の判つてゐる者はいくらもあつたか知れぬが、日本金融界の支配權を握つてゐる安田の言にして始めて權威がある。

去年の四月あの日本國中の人間が誰れも彼も好景氣に醉つてゐる時に當つて、專ら世間の噂では、皆な損をして、獨り儲けたのは安田だけである、安田はひどい奴だと云つて、憎惡する聲が巷に聞えた。その時私は云つたのである。何も安田が惡いのではない。欲の深いといふのは安田でなくつて、好景氣に醉つてゐる、目先の利かぬ奴等のことである。彼等がいつまでもいゝ事が續くものと有頂天になつてゐた場合に、獨り安田は目先が利いた。この景氣はいつ迄もつゞくものではない。もう此處らが引締める時だと思つて財布の紐をしめたのである。つまり安田は高い絶頂を賣つたことになるので、日本國中の金が安田銀行へ洪水の如く流込んだ。之とて恨むのは彼等自らを恨むべきのみで、安田を恨むのは下根の沙汰である。然し、私はかういふ事があつたから云ふのでもないが、近來社會の思想がとかく不穩になつたについて、細かく立入つて考へれば前述の通りであるが、滔々たる世間の感情といふものは大雜把なものであるから、道理も糸瓜も無く、ひたすらに金が出來たものは憎まれる譯も無く憎くまれる。安田家には、何だか、かう災難でも來さうな豫感を抱いてをつた、果して今回の事があつた。

死んだあとで云ふのである。けれど、あの時大磯の別莊であんな大家の老主人であるにもかゝはらず、未見の者の訪問に接して、番頭とか家扶とかいふ屈强の男が居つて、一應來意を訊ねる事をしなかつたのは不覺である。さうしてむざ〳〵と、夫人の病室よりもまだ奥の間へ通して差向ひで會見するといふのは、別莊などは、どこの家でも生活を簡易にしてゐるといふ事情もあつたらうが、何としても不用意といふ事を云はざるを得ん。この事があつてから外の富豪には好い一つの戒ともなるだらうが、僕はやつぱし安田を殺したくなかつた。(十年十一月。人間)

文士の觀たる普選運動に並議會解散

一

騷々しい普選運動などは私の趣味に合はない。私の趣味に合はないといふことは、同時に私の理論に合はないといふことになる。

權威ある學究の說が悉く推服するに足り、且つ採用す可きものならば、今日の我が邦の東西兩京の帝國大學をはじめ、その他公私の大學に於ける政治、法律等の專問學究等は殆ど悉く普通選擧の卽時施行論者のやうであるから一見する處、學理上から、及び學者その人の見た實際上からも共に、或は普通選擧を卽時施行して不可なきものであるかも知れぬが、私自身の考察するところに依れば、普通選擧は未だ早いと思ふ。

私は前述の如く政治法律等の專問研究家では、無論ないし、また勿論實際政治家でもない。さうかといつて、商工業の資本家でもなければ、地主でもない。同時に勞働者でもな

い。强いて云へば、この泰平の天下の逸民である。故にどちらに轉んでもさういふ様な利害關係や、偏見からは全然超越してゐることの出來る素綀(しろぎぬ)の如き普通人である。その何等の利害關係や私見に囚はれない普通人の私が、恰も小兒のそれの如き白紙の心に省みて判斷するところに依れば、どうあつても普通選擧はまだ早いのである。

東京帝國大學の吉野作造博士とか、京都帝國大學の佐藤丑次郎博士とか、末廣重雄博士とか早稻田大學敎授の北澤新次郎氏などの所說を讀んで見ると、是等は悉く熱心なる普選卽施論者のやうである。苟めにも、自分も平常書を讀むことを以つて職としてゐる者である以上は、何はさて措き、先づ、實際政治の利害關係や情實から離れて、比較的公平無私の立場に在るそれらの學者の說に敬意を表して熟考三たびしてみるのであるが、成る程理論上からは、窮極するところは普通選擧に到達せねばならぬものかも(ものかも)知れぬ。が、今差當つての問題は、今年——卽ち第四十二議會に於て是非とも普通選擧案を通過しなければならぬものであるか、どうかといふ問題になつてくると、政治、法律專問の博士、帝國大學の敎授、普選派の代議士、それに附和雷同する日本全國の新聞記者を擧つて、悉く、此の天下の逸民たる素寒貧の拙者ほどの思慮分別も持つて居ない様である。

二

僕は繰り返しいふ如く政治、法律の專門研究家でもなければ、政治家でもないから、その邊の情僞には甚だ疎いが、その代りに、平凡な學者やガサツな政治家などの持つて居ない文學者の直覺といふものを所持してゐる。併も選れたる文學者の直覺を持つてゐる。この直覺によつて判斷するところに依れば、有無をいはずに普通選擧は現在の日本の國情に照して未だ〳〵早いといはざるを得ない。夫れ故に、今次の衆議院の解散は極めて至當である。

議院の解散は、今回で十回目だ相であるが、その十回の解散の中で、凡そ今次の解散位國民全般的に有意議で思想的背影を以つてゐる解散はない。從來の解散はいはゞ悉く些末

な政治的事務をどうするかとか、或は時の政府當局が議員に過半數の與黨を有することが出來ない、又反對する者も徒らにたゞ多數黨を擁するのみで、當局者に向つて反對せんが爲に反對するといふやうな風があつた。比々としてさうであつた。然るに今回の場合はさうではない。今回の解散に就ては既に所感の一端を「改造」四月號にも洩したが全く原首相、床次内相のいふ所が一々理の當然であると思ふ。

本來自分は政友會をば餘り好かない。どちらかといへば憲政會に多く同情を持つてゐた。好き嫌いといつても、吾々門外漢の好惡であるから、それは單なる氣分に過ぎないものゝやうではあるが、全くさうとばかりはいへない。政友會が、元の自由黨を雪達磨のやうにして膨大にしたものである如く、憲政會は元の改進黨が幾度か變遷して、政友會の伊藤公と同じく、後者は政黨の敵であつた軍閥の桂公と苟合したものであるから、全然政治政黨などいふものに無關係であればあるほど、吾々の立場からは、どうしても要求が絶對的になつて、至純とか誠實とかいつたやうな理想的なものを欲し、從つて憲政會の如きその成

立ちの不純な黨派には、あまり好感が持てない筈であるが、併し何となく私には、政友會よりも勘忍が出來た。深く立ち入つて見たら實際はどうだか知らぬが、暫らく、遠くに離れて居る者の眼に映ずる處によつて印象を語ると、政友會は唯々政權に阿附して利權を貪るその日暮しの無理想な朋黨のやうに思はれてゐる。これに反して憲政會は兎に角理想があるらしく見えてゐた。私黨としての利害よりも政治上の理想に依つて進退する政黨の如く映じてゐる。政友會が一黨の結束が强固なのは、黨員に出色の人物が乏しく個性がないのであつて、憲政會内に兎角議論百出して、船頭多くして船を山に上ほす弊の止まないのにも困るがそれは何といつても個性の顯著な人物が多いのであると思はれた。

三

それは、勿論一つは總裁の統制力如何にもよるので、原政友會總裁が制御の力と術とに於て加藤憲政會總裁に比して遙かに優れてゐることは明かな樣である。けれども加藤氏も

考へて見れば氣の毒でもある。實際憲政會内には尾崎行雄氏を筆頭として思慮の渾熟しない、輕噪で、口數ばかり多い人物が澤山ゐる。

詮じ詰めたところで政友會は無理想、憲政會はともかくも理想があるらしいといふ意味に於て自分は多年後者に同情を抱いて居たのである。そして政友會がそんなに嫌ひで、而もその嫌ひの理由は無理想でその日暮しだからといふのであれば、その無理想の政友會を宛らに一人で代表せるかの觀をなせる原敬さんは大嫌ひでありさうなものだが、不思議に原さんは元からさう嫌ひではなかつた。個性の無い、蚯蚓を胴中だけ切り放したやうな政友會は積極的に嫌ひだ。今でも嫌ひだが、案外原さんと野田大塊老とだけは嫌ひではない。無理想その日暮し主義にも、原さんには何處か大きさが思はれる。無理想その日暮し主義を推行するにも、紛々たる世評などには頓着しない、自信の堅い剛腹さが眼に立つて、斯ういふ人には安んじて國政の任され得る頼もしさがある。憲政會の總裁加藤さんも、原さんに比べては理想があるらしく見えてゐるといふ相違を除けば、自信の強い剛腹な處は二人酷似してゐる。一例を擧げていへば、外交調査會などへどうしても入らなかつた處などは面白い強い性格である。兩方共詩味は極めて乏しいが、犬養や尾崎等といふ人達に比べて此方が一國の大事を安心して委ねることが出來る人のやうな氣がする。

四

それで、二人とも下手な俳句しか作らない無趣味の原さんと野田遞相とだけが幾許好きでも、武藤金吉君や松田源治君などが幅を利かす政友會そのものは依然として今に今でも嫌いであり乍ら、その嫌いな政友會が、大多數を以つて當選することの殆んど見越しのついてゐる今囘の總選擧を招來して解散の理由には、僕は正面から無條件の贊成を表するものである。昔のギリシヤの政治、それどは大分違つては居るが、いくらか哲人政治めいてゐた我が北條氏の政治などゝ違ひ、哲人政治らしさの全く缺けた、政治を無趣味な俗務にして了つて屁とも思はない樣な政友會が議會の過半數を占めたならば、從來の自分の氣持

ちからいへば、私は氣絶する程厭になると思ふが、不思議に今囘は、どうぞ政友會が絶對多數を占めればよいと念じてゐる。前述の如く今囘の解散は從來幾度びの解散に比べて、政爭問題として最も有意義であるのみならず、解散の仕振りも物凄い。それは政府與黨の方が議會に多數を占めてゐるので今囘は何人も豫期しなかつたによるのみではない。從來の解散を斷行した時の總理大臣に比べて原總理大臣の斷行は實に論理を極めたものであつた。單に解散を斷行した手際だけ見ても、原さんは從來の金ピカピカの總理大臣に比べて一段政治家としての大きさを示現してゐる。その喜怒を表はさない處は大きい。併し解散の手際だけを感心するのは唯だ附けたりで無意味であるが、自分は元から、今日の普通選擧の可否に疑ひを抱いてゐるのが根本の原因をなして原さんの擧措に一段の賛成を表せざるを得ないのである。

反對派の首領は、加藤、犬養、尾崎諸氏悉く異口同音に解散の非立憲を攻撃し、某々政治家等の匿名を以つてする諸政客の談話及び天下の諸新聞等に表れる所謂輿論などに就て見ても、解散の動機を、政府が解散當時即時發表した理由書にいふ所や、原總裁が即日院内の政友會前代議士會に於て述べた所と全く相違した點に置いてゐる。即ち、政府は諸々の政治問題の解決に行き詰つた結果止むを得ず今囘の措置に出でたものであるといひ、或は又、さう解釋するは、原首相を餘りに正直者に解釋するので、横着な原は、もう四十二議會の當初から今囘の解散を豫定の筋書にして、黑い腹の底に深く藏つて居たので、唯その口術を普選案に借りたに過ぎぬ。國家の政事の重きを以つて、一私黨の黨利の輕きにかえたものであるといふ。……併し、原氏はそんな馬鹿であらうか、そんな淺薄な、何人にも直ぐ觀破される樣な動機に依つてのみ解散を斷行したであらうか？　いくら詩のない、ローマンスの乏しい原氏でも國民の爲に善を圖つて、少數の政友會員ばかりでなく、多數の國民に悅ばれたいといふくらゐの功名心はあるだらう。今囘の解散は、政府の解散理由書に先づ發表するところ、それに引續いて原首相や床次內相が前代議士會や地方長官會議に於て訓示した處を正面からそのまゝ受け取るのが妥當だと、私は考へる。

五

犬養氏など飽くまで猜疑心の強い人の解散動機說に、假りに數步を讓り、政府が全く黨利黨略のために今囘の擧に出でたとするも、之れは政黨相互の事であつて、吾人國民は暫くそんな立ち入つた處まで考へて見る必要はない。唯だ解散の正面の理由を首肯して總選擧の結果を靜かに待つて居ればよい。

床次內相の地方長官への訓示演說にもいふ如く、滔々たる附和雷同の論者等は、普通選擧萬能の空想に驅られてゐると思ふ。それは、普選派の犬養さんなども夙に道破してゐる所であつて、納稅資格撤廢の普通選擧になつたとて、無分別な雷同者等が夢に見てゐるやうな黃金世界が明日から直ちに出現するものではない。犬養さんは何時だつたか、今日普通選擧を實施しても、十年位先にならねば、その效果は現れないといつてゐた。夢の如き黃金世界を無理やりに出現しようとする處に、卽ち危險思想がある。不合理な階級破壞思想がある。それならば、原首相がいふやうに、去年四十一議會で十圓から三圓まで低下した改正法を一囘も施行しないで、又直ぐ慌てゝ四十二議會で三圓を全く撤廢しなければならぬ程國情は急直轉下してゐるものとも思はれない。先日も普通選擧委員會で藤澤憲政會總務は此の急轉直下の意味を反對派に質問せられ、愛嬌のある言葉で、終を滿場哄笑の中に消して了つたが、去年から今年への國情を――ロシヤや獨逸ではあるまいし、西施の顰みに倣ふて――さう慌てゝるほど急變激化してゐるとは斷じて認めない。

六

況んや三圓の納稅資格は、原さんもいへる如く、今日の社會の實情を仔細に見て、殆ど全く資本家階級ならざる者と雖も平等に均霑されてゐる選擧資格である。政友會は農民に媚びるといはれてゐるが、そんなら農民の地租でなく、暫く有識無產階級たる洋服細民の、月給取りや、工場勞動者等に就て見ても、所得稅法の最低免除點たる年收額五百圓の所得あ

ゐものは、六千萬の國民中婦女幼若者を除き、少くとも七八百萬人の日本男子が悉く年收五百圓位は働いてゐる。此の意味に於ても、先頃の憲政會提出普選案中の問題になつて「獨立の生活を營む者云々」の條件はさまで問題にならないのである。車夫だつて荷車引だつて、今日は皆な年收五百圓を遙かに超過してゐる。貧乏を賣り者の文士だつて年收五百圓以上の人間はそこらに轉々してゐる。多いのは長田幹彥から、この頃賣り出しの宇野浩二だつてその位は勿論ある。小川未明だつてある。恐しい社會主義の文士だつて、當節は原稿が飛ぶやうに賣れるので年收五百圓はさて置き、多いのは數千圓に上らう。何と好い時節になつたものではないか。日本の社會主義者も何時までもヒネクレてばかり居ないで、少し聖世に感謝したが好い。

文士で年收五百圓にも達しないのは、斯く申す拙者と、阪木紅蓮洞ぐらゐのものだ。そんな生活不能力者に、堂々たる天下の政黨の首領が寄つてたかつて、何も、あわてて選擧權を與へてやる必要は毛頭ない。紅蓮洞などに選擧權を與へたとて仕樣がありやしない。文士でも法被を着た連中でも、正直に自己の年收額を屆け出でさへすれば、所得稅に依つて金三圓也以上の納稅資格者になれるように、去年の四十一議會で旣に己に殆ど普通選擧は實施されてゐるのである。これを是れ篤と思はないで、唯ワイワイ附和雷同して普選々々と口にしさえすればよいやうに考へてゐる者こそ誠意の程が疑はしい。故に、僕は原さんの今回の措置に無條件に贊成する者だ。自己の所得額を正直に屆け出でない、國民の義務を蔑ろにするやうな人間に選擧權を與へて見たつて、そんな誠意のない人間に國政に參與されたら、それこそ國民の迷惑この上もないことである。僕など五百圓の年收額のない人間は、却つて、そんな不正直な人間に國政に容喙せられることを好まない。金參圓の納稅資格を此の上に尙ほ低下することは當分は絕對に無用です——と、更めて原首相閣下と床次內相閣下に進言して置くものなり。

終りに臨み、昨年末「大阪朝日」紙が文士の普選觀を徵した時、文士は殆ど悉く普選に雷同してゐた中に、德田秋聲、岩野泡鳴、長田幹彥の三氏（多分三氏だけ）はオイ來たと

ばかりに雷同してゐなかつたことを認めて、流石に、その思慮のほどに感心したことをば序に記して置く。（大正九年三月二十一日誌。讀賣新聞）

近事偶感

この夏の頃の事であつた。自分は本紙本欄で、世間の富豪が、多々倍々所有の庭園や空地をどんな形式のもとに於てゞも解放したり、又は府市に寄附し、或は貸渡して市內公園地にすることを希望した。近頃特志の富豪か相踵いでそれを實行するのは悅ばしい。東京市內何れの區から其等の公園に出て行くのでも、それが一日又は半日の仕事になるやうな遠距離の公園では無意味である。上野公園に臙布あたりから出掛けたり、明治神宮神苑に下谷から出掛けるといふは滿員々々の電車に乘つて行くと、その往復に疲勞して、公園が公園の意味を成さない。各區共少くとも四つや五つの小公園が到る處に存在して、區に住する市民は、恰も富豪が自家の庭園に休憩逍遙すると全く同じ意味で、寸尺の土地をも所有せぬ民衆が氣樂に市內公園の綠蔭に疲れたる精神を休養なしうるやうにあらまほしい。美麗なる園囿を天下萬民とともに樂めばこそ、その所有者自身もはじめて枕を高うして

樂むことが出來るのであるとは、孟子が第一に云つてゐることである。

先日横濱の本牧に行つて、名高い、原富太郎氏の三溪園を始めて見物して、天下の富豪に卒先して夙に庭園を解放した原氏に對し私かに好感を抱いた。徹底的の社會改造家から云へば、富豪のそんな行爲を僞善とか、或は鬼の念佛とか、何とか斯とか、皮肉なケチを附けたがるだらうが、自分は五十にして尙ほ家無き無産階級でも、さうまでヒガミ根性は持つて居らぬ。それでは富豪も立つ瀬がない。金を吝めば吝むと云つて憎まれ、どうかすると終には暗殺されたりするし。出せば出すで、鬼の念佛の樣に云はれては、何方にしてよいか分らぬ。富豪が富豪に成り、立派な庭園を建築したり、或は美術骨董の類を蒐集して樂むのは、彼等が勤勉努力の成果でもあるのだから、人間は何處かにさういふ希望の標的を置かない以上みんな懶怠漢になり、他人の努力に依賴する心を生じ、人間社會の健全なる組織は到底成立たない。此の道理は實に簡單明瞭にして、如何に極端なる說を持する社會改造の專門家が百萬遍繰返すとも、天賦の能力の不平等なる人間個々の努力の報酬たる私有財産の不平均は何とも致方がない。既に出立の第一歩に於て不平等が止むべからざるものたる以上、それを推擴めて行つた先が甚だしき差等を生ずるも亦止むを得ないことである。自ら努力することをせずして、徒に富豪を憎むのは卑屈である。吾人は、理由もなく、たゞ富むが故に富豪を憎むことはしないが、富豪に在つても、その代り、自分が千人萬人中の選ばれたる幸福者である悅びを他の、不運にして幸福ならざる者に分つことに喜びを感じてもらひたい。

私有財産や、一般經濟組織に對する社會の思想が今日のごとく兎角不穩の兆候を未だ來さざりし以前既に本牧の三溪園を汎く民衆に解放した園主の心掛けは當代富豪の須らく模範とすべきである。

深川區では岩崎家が近日からその淸島遊園を解放した。近いうちに行つて見ようと思ふ。

新聞の種は盡きないものだ。白蓮夫人對伊藤傳右衛門の葛藤は婚姻の當初から既に業に今囘の小說を豫想し、同時に又十年の長い間の小說を綴つてゐたとも云へる。天下の人殆

ど擧つて夫人の境涯に同情したいと思つてゐても、新聞紙上に公表せられたる、あの絶縁狀を見ては、夫人に對する同情の大半を能く失はざるを得る者果して幾人かあらう。あの絶縁狀の後部に告白するところは、正直と云へば正直である。

自分には愛人が出來た。この上長く貴下の妻でゐては、勢ひ貴下に對して罪を犯さねばならぬことになるから、その以前に絶縁して、自分は新なる幸福の道を辿りたい、といふのは、何も斯も打ちまけた正直さはある、そして寧ろそれを、夫が長い間自分に加へた侮辱と冷遇とに對する復讐の意味にて面あてに書き送つたとも云へるが、たとへ熱情の婦人にしても十分思慮分別のあるべき年齢であるから、離縁がしたければ、極めて穩和なる手段方法によつて幾許も交渉は出來たらうと思ふ。況して愛人が出來てゐるなら、一層穩かなる擧に出て話を着けねばならぬ。然るにあれでは、局外者は却つて伊藤氏に對して幾分同情の念を生ずることになる。いくら正直とはいひながら、婉曲に啖呵を切つたやうな絶縁狀を投げ付けられてみると、大抵の男なら意地になる。

福岡の伊藤家はその前生涯はどうであつたらうとも今日では大家の事である。まさか、そんな旋毛の曲つた擧にも出まいが、自分は平素、平安朝の才媛達に對すると同じ興味を以て見てゐる白蓮夫人の將來の幸福の爲めに、その擧措を誤つたことを返す〴〵も惜むのである。

眞實なる情熱より出でたる行爲ならば、藝術の領域に在つては、どんな非違の行爲でも寛恕する。優れたる藝術の創作者は聖に似たる慈悲忍辱の心を以て、彼の小宇宙に取りも直さず一つの世界を形ち造るのである、如何なる罪惡もその世界の中では赦される。自分は有夫の身でありながら他の男に通じたアンナ、カレンナさへ寛恕と、同情の心を以て見る。乍併、今回の白蓮夫人の取つた方法はあまり巧みであつたとはいへない。（大正十年十月號。時事新報）

『軍縮會議』の一考察

これよりも、もつと高遠を理想的な事を云ふ日になれば何とでも云へないこともないが差詰めワシントンに於ける列强軍縮會議は將來世界の平和人類文化の進步に貢獻するところが頗る多大でありさうに思はれる。

本欄の同項記事を見てゐると、列國今回の商議をば、甚だ白眼に冷視してゐるやうな人もあるやうだが、小生の見解は頗るそれと異つてゐるのである。當面の事實問題に對して空粗な理想的なことを云つたつて、それは眞面目な批評としては脫線と云はざるを得ぬ。トルストイなどは夙に軍備全廢を唱へたかも知れぬが、高遠な思想と實際問題とを混同したのでは、それは妥當なる批評とは申されない。

暫く新聞紙の傳ふるところによりてワシントン會議の狀況を思つて見るのに、米國國務卿ヒューズ氏の海軍縮小に關する提案は、實に米國人らしい英斷眞卒な提案であつた。日

本の當局者乃至全權委員諸氏は、果して如何なる程度の提案を抱いて、横濱から上船したか知れぬが、恐らくは、十一月の十七日を以て進水する巨艦加賀乃至土佐までをも些の未練なく廢艦にして意に介しないほどの果斷なる案を携へてワシントン會議に臨んだものではなかつたらうと想像せらる。

それは無理もない事であつて、一方アメリカ合衆國などは大金持ちの息子が遊獵の爲めに五百圓千圓の獵銃を金に絲目を付けずに買ふ。それに反して我が日本などは恰も生業の爲に獵師が價の低廉な鐵砲を所持してゐるやうなものであつて、金の澤山ある者は高價な物品を買つても、飽いて厭になればすぐ人に遣つたり放棄したりして苦痛を感じない。然るに、自己が生存の爲めに血の出るやうな金を工面遣面して必須な物品を買つた場合にはそれを思ひ切つて容易に放棄する譯には行かない。

アメリカの軍艦はそれと一般、恰も金持の息子の遊獵銃の如きものである。故に六十萬八十萬噸の軍艦を何の惜氣もなく廢艦にしたとて一面には金持息子の氣隨氣儘と見られぬこともない。假ひ日本の當局乃至全權委員が今回ヒユーズ氏の提案の如き英斷な原案を用意してゐなかつたとしても、それは我が日本としても無理のないことであるが、新聞紙の外海電報によれば、我が加藤全權は協議の基礎案としてはヒユーズ氏の提案に贊成してゐるのである。誠に吾人も同感で贊成である。

歐洲大戰の干戈はおさまつても、その影響の名殘りなる世界の思想上の變革は尙ほ動搖しつゝ而も少しづゝ善き方に向つて動いてゐる。今回の軍縮會議などにヒユーズ案の如き果斷な、惜氣のない、思ひ切り方をした縮少案の提出せられたのも、歐洲大戰以前には、とても望むべからざることで、無論歡迎贊成すべき、人類文化史上に特筆すべき世界的協議といはなければならぬ。（大正十年十一月中旬誌。時事新報）

小說商賣の產業化

谷崎潤一郎氏と佐藤春夫氏とを特にかう取り出でゝ云ふと、人は、近頃の二氏の關係の奥に妙なことを聯想するかも知れぬが、自分は少しもそんな二氏の近況に關する著作をまだ讀んでゐないくらゐだから、そんな問題とは全く別である。

近頃所謂中堅作家とか花形とかいふ人達は相變らず多々倍々辨じてゐるかのやうではあるが、少し不躾な申分のやうであるけれど、其等の人々は多く近來錢取りに甘い味を覺えて、眞純な藝術的といふよりも通俗物――新聞の續き物や、月に幾十萬部と賣れる婦人雜誌の續き物――などに沒頭し、ほんとうに自己の精神力や僞らざる性格を印してゐるやうな藝術品に精進する人が少くなつた。

少し極端にいへば、今日中堅作家といはれてゐる、一番原稿料の高い人達は殆ど皆な所謂通俗的讀物に全力を傾倒してゐるかのやうに見える。今日は文學藝術も、とても紅葉山人

の時代のやうでは遣つてゆけなくなつた。紅葉山人が今日に在つたならば、彼は遂にあのやうな作家として生存する事は出來なかつただらう。紅葉は、とても小説商賣が今日の如く產業化してきた時代には適者生存の理法から見ても存在出來ない人であつた。月に幾十萬といふ大部數を印刷して、〆切の峻嚴な發行の期日正しい時代には小說家も紅葉の時分に比べて生計が大分樂になつたとともに純粋な藝術家氣質ばかりぢや、とてもやつて行けない。半分ボール函を製造する職人と同じやうな手業を所有してゐなければならない。それも時代だから止むを得ぬといへば、それまでゝあるが、何となく殘念なやうである。

今日の小說界の狀況がそんな場合に當つて、最も私の眼に付くのは卽ち谷崎潤一郞君と佐藤春夫君との存在である。谷崎君も近年は活動などに關係して錢取りに急がしかつたやうであつたし、又嚴正なる意味の文學の標準から云つて、（私自身の標準から）氏の藝術的立場には無條件に同意することの出來ない點もあるが、氏の錢取り行爲は何となく、ぢゝむさくなくそして私の志す藝術とは少し行き方を異にしてゐても、そんな內容は暫く措き、ともかくも一個の藝術家としての氏の如き、同じく通俗受けのするとはいひ上、一寸他の續き物とは趣を異にした、飽まで藝術を大切にして、孤往獨尊四邊を顧みて時流に迎合するといつたやうな醜體の少しもないのは實に氣持ちがよい。特に今年の氏は、どんな物があつたといふわけぢやない――無論十二月號の「改造」の「愛すればこそ」なども文壇で本年卓尾の力作ではあつたらうが――個々の作品に就いて云々するよりも、谷崎君の藝術家として流行に汚されない態度が、私に特に眼について、それが嬉しく賴母しかつたのである。

その點に於ては「新思潮」派の谷崎後派の所謂文壇の中堅作家は須らく三思して可也。

次に佐藤春夫君の書く物は、依然として高踏的のものであるが、如何にも淸純である。そして、それが層一層純化されて來た。技巧的にもエピセットが次第に富豐になつて來て、所謂今日の產業化されたる臭い散文小說――三文小說――の卑しい態がないのが喜ばしい。氏は生活の爲めに齷齪原稿を稼ぐ必要のない人であるからだが、その書いた物が少し

も銅臭を帶びてゐないのは眞に當代稀有の作家と云はざるを得ぬ。氏は年尙ほ三十を出づるか出でないのに係はらず、その筆致がいかにも悠揚として高雅である。假ひ激越の感情を抒してゐる時でも、氏の性格を裏づけてゐるので筆が穢苦るしくない。芥川龍之介氏にも稍さういふ點があるが、氏は江戸つ兒で、いさゝか茶目式な味が加はり、且つ餘り才人過ぎて色々な事に手を出し、その結果往々江戸式の輕さ（純化はされてゐても）などころがないでない。之に反して佐藤春夫君のは一段誠實の氣分が横溢してゐる。餘りに自分の趣味や感情に浸りすぎてゐる點もあるが、それは廣い、客觀的な藝術的でない、止むを得ぬ點で、汚れてゐないものであることはその特色である。

佐藤君がまだ名を成さぬ、鄕里から出京して間のない時分は、當時根津の生田長江氏の宅に同居してゐたものであつたが、生田氏のニイチエかぶれのしたパラドツキシカルな言ひまはし方を、また眞似て、人物評や文藝評めいた短い物を書いてゐたことがあつた。ニイチエの本家本元のパラドツクスは無論誠意の有り餘るほど籠つてゐるものであらうが、生田氏の、その模倣には、何となくその言ひ廻しばかりに得意がつてゐるかのやうな、本末顚倒の態がないでなかつた。そして、その生田氏を又模倣した佐藤君にも、「どうだ、巧いいひまはしだらう。」と、それを得意にしてゐるかの點が先きに眼につき、私など、少し厭であつたが、それは、何人にも得て有りがちな若い時分のことで、氏が生田氏から獨立して、氏自身の獨色のまゝを書き出す今日となつては、小さい寶玉の觀がある。

あまりに年々產業化しつゝある不淨の文壇にあつて、谷崎潤一郎氏と佐藤春夫氏との二人は、その文壇生存の態度に於ても、はた又その藝術品についても、產業化に累はされざる點に於て、私には、本年中著しく眼についたのだ。（大正十年十二月八日誌。時事新報）

山茶花の蔭より

其角と近松

先日三越樓上に近松遺品展覽會を一寸覗いて見た。私は近松翁の作品を愛讀し、翁に私淑してゐるが、考證學者ではないから、たゞ一と通りの傳記以上に、翁の生涯について委しい知識をもたぬのであるが、時々ふと思ひ起して興味を持つことは、同時共存の元祿の三大家たる西鶴と芭蕉と近松とが、どんな關係であつたかといふことである。西鶴と芭蕉とは二人とも五十か五十二で死んだが、生前の年齡もあまり違つてゐなかつたと記憶してゐる。そして近松はひとり前二者に比して、たしか若かつた筈だ。若くつて七十二歲までも生きてゐたから西鶴や芭蕉よりも年代的に云へば後進である。たとへば尾崎紅葉と芥川龍之介といつたやうな年代的關係である。精密にそのとほりか何うかはくはしい考證に待たねば分らぬが、まあざつとそんなものである。

芭蕉は俳人であり高士であつて、西鶴も亦た俳諧では當時の浪花で鳴らしたものだ。二人はどんな關係であつたか？　多分交際などはなかつたが、相互にどういふ風に眼に映つたか？

それから西鶴は後には、主として草紙の作者が本職であつたから、後の近松が西鶴をどう見てゐたか、之も考へてみると興味あることである。

すると、先日、近松の遺品展覽會で、硝子戸棚に入れてあつた貴重品の中に、近松から江戸の其角に送つた手紙があつた。其角は芭蕉の弟子で、ほゞ近松と同年くらゐ——少くとも芭蕉よりは、相互に同時共存の人であつたらうと思ふ。あの手紙を眞實のものとすれば、近松と其角とは交際があつたにちがひない。それは單に手紙のみの交際であつたか又は直接の交際もあつたものか、近松も江戸へ來たことがあつたらう。そして其角が京阪に遊んだことはめづらしいことではなかつたらう。

その手紙には、赤穗義士のことが書いてあつた。

それは、何でも、其角から赤穗の義士が切腹した前後のことを浪花なる近松へ書いてやつた手紙に對する返事らしく、——かの事件もいよ〳〵二月四日を以て落着いたしたよし、當地にても、その噂とり〴〵、何處へゆくも、上なき忠臣との評判云々の事が書いてあつた。そして、東都其角樣としてある。

之によると近松と其角とは交際があつて、元祿の天下を騷がした赤穗義士の事件には俳人なり淨瑠璃作者なりとして深い興味を持つて見たものと思へる。

その手紙を一つ見たゞけで、私には、近松の事が一段明るくなつたやうな氣がした。そして其角とそんな交際があつたくらゐだから、近松の眼には芭蕉といふものが映つてゐたにちがひない。それが、どんなに映つてゐたか。今のところたゞ想像してみるだけである。

馬琴とゾラ

上司小劍氏が先日本紙の白雲生處獨語の中で、曲亭馬琴を以て、古い日本に於ける良民

的作家の模型であるといつてゐる。そして氏の所謂良民的作家といふのは、改革者の意氣を缺いでゐる作者を指していふのであつた、フランスのゾラなどはその正反對に、改革者兼創作家であるといふのは。ゾラと馬琴との話ならば丁度いゝ、私もいつかずつと前、新潮誌上であつたかへ雜感を書いた時、馬琴とゾラとの事を聯想して書いたことがある。なるほど白雲生處主人が、ゾラは改革思想家の作者であり、日本の馬琴は良民的思想の作家であるといふのは、一應肯づけないこともないけれど、それは馬琴とゾラとの思想の傾向が違つてゐるのであつて、馬琴もいはば一代の思想家であつたことは爭はれない。彼は單なる當時の戯作者の儕僔とはその選を異にしてゐたのである。日本は中古以降儒佛の教に化せられた國土であつて、しかも徳川氏の政府は、その官學として儒學を以て國家を治めやうとした。馬琴はその儒教に對して敢へて背叛しようとはしなかつたのみならず、當時の社會組織の根柢を成してゐる儒教をそのまゝ體現した八犬傳その他の作を成してゐる。此の點に於ては決して改革家であつたり、叛逆思想家ではなかつたが、併し彼を以て無理想の、吹けば飛ぶやうな戯作者肌の作家と等しなみに見ることは出來ない。彼は自から當時の戯作者輩と伍することを甘んぜず、ひとり昂然として創作を以て一代の思想人心を敎化せんとの抱負を有してゐた。坪内博士の「小說神髓」の主張によれば、馬琴の書いた物は近代寫實派のノベルではないことになるが、日本國民の持つてゐる、ある時代精神を描き、國民思想をその創作によつて統一してゐる點に於ては――たとひ純藝術品としては西鶴や近松に劣るとも――其點に於ては日本が上下二千年の間に有した最も大いなる創作家であつた。故に高山樗牛氏も其點で夙に馬琴を推賞して居る。小司君は又反對にその點が氣に喰はぬのであらうと思ふ。馬琴が日本國民のある時代精神を體現してゐるのが氣に喰はぬのであらうと思ふ。しかし、それは僕が――いくら良民的作家といはれても――反對する所である。無論馬琴によつて創作の上に統一された日本の、ある時代精神は最早今日では過去の用具となつてゐるのであらうが、我々の祖先が歷史的に生きて來た道程にはそれが必要であつた時代もあつたのだ。なるほど改革思想家、叛逆思想家ではないが、少くとも理想的作

家であり、統一思想家であつて、輕浮なる戯作者ではなかつたことは何人にも解せられる。僕は、日本に、フランスのパンテオンの如きものがあるならば、自分の好きな近松や西鶴よりも或は先づ此馬琴を其處に埋葬することを主張するであらう。一國は、その國家を國利民福の爲に組織永續せしむべく何等かの方法によつて偉功を奏した人を旌表せねばならぬ。馬琴は如上の意味に於て尾崎紅葉よりも遙にフランスのゾラに近い效績があつた。明治維新の際の思想的動力では賴山陽の日本外史、瀧澤馬琴の八犬傳とどちらが強い感化力を持つてゐたかと、よく云はれる。無論山陽は馬琴よりも意識的にあんな物を書いたのであらうが、それにしても山陽に贈正四位の恩典があるのに馬琴にそれがないのは、日本の文化思想の程度がフランスよりも劣つてゐるからか。

良民的作家

ロシヤの革命はまだ試驗最中であるのだらうが、今日尙ほ若しトルストイやツルゲネーフなどが生存してゐたならば、そもく現狀を何と見るか。しかし、今でもゴルキイは生存して當面の事實を目擊してゐるのであらうが、吾々ロシヤ學の知識乏しき者には、彼がどんな役を働いてゐるか一向分らない。今春四月號の新潮誌上でもいつたことであるが、ロシヤの知識の乏しい吾々にも、大抵想像は違つてゐないらしい。卽ちロシヤの飢饉は、之を極めて端的に云へばレーニンの政治が招いた禍である。レーニンに共鳴する者共は、今は政治的大外科手術をしてゐる場合であるといふけれど、一千萬も二千萬も無辜の生民を窮乏饑渴に陷れておいて何の外科手術ぞや。レーニンは大なる政治的藪醫者である。

それから上司氏がこの私を、叛逆的藥味の利いてゐない良民的作家だといつてゐたのは甘んじてそれを受入れる。叛逆などゝいふことを考へるだけでも骨が折れて厄介である。ずつと若い頃には高野長英だとか渡邊華山だとか賴三樹三郎だとか梅田雲濱などゝいふ人が好きであつたりした。殊に國内關係の革命者でなく、高野とか渡邊とかいつたやうな人々の西洋文明輸入の先覺者の事蹟が何となく好きで、その爲に身は囹圄の苦楚を嘗めても、

その志は金鐵の如く堅かつたヒロイックな行爲が慕はしかつたこともあつた。藤田茂吉といふ、報知新聞初期の主筆であつた人の高野長英と渡邊華山との事蹟を書いて「文明東漸史」などゝいふ古本を探し歩いて買つて讀んだりして嬉しがつてゐた時期もあつた。末廣鐵腸の「四十年後の日本」とかいふ政治小說を非常な情緒を以つて讀んだのは明治二十七年の一二月の頃大阪にゐる時であつた。丁度その歲の夏から日清戰爭が始まつて、日本の勝利となり、更に十年後三十七八の日露戰爭があつて、又日本海々戰の大勝利となり鐵腸居士が小說の中に書いてゐるとほりの光景を新聞の號外で見た時には、私は何より十年前に讀んだその「四十年後の日本」といふ小說のことを思ひうかべた。けれどももう十九か二十歲の頃鐵腸居士の政治小說を非常の情緒をもつて愛讀心醉した時のやうな愉快はそれ以來一度も味ふことが出來なくなつた。

梨園の落葉

近松が背景を成せる時代姿

西鶴を讀んでもさうであるが、近松の世話物を讀んで、しばらく藝術的鑑賞といふ立場を離れ、之を歴史的に、國民生活の狀態如何を研究する場合の材料として觀察してみるに、毎度ながら、さう思ふことであるが、元祿時代と云へば今を距ることを約二百餘年の昔でありながら、當時の民衆生活が案外複雜の程度に進んでゐたといふことである。吾等は少年時代からの學校教育法の習慣によつて、日本の歴史といへば、常に社會の上流を組織してゐる階級の人物の生活狀態やその利害損得乃至鬪爭葛藤の模様を聽かされてゐるのであつたが、夫等の上流社會の人間の私生活を描いてゐるのは平安朝に源氏物語があるきりで、その他には彼等の公生活の記錄はあつても私生活或は個人の心理狀態などを描いてゐるものは甚だ乏しいのであるが、徳川期に入りて平民文學が發達し士流の生活狀態を描くよりも一般民衆——農工商就中都會生活の中樞を成してゐる商人の生活を描いて讀者を喜ばし

むるに至つたのは、時代の大勢が自から、一般社會の生活の中では商人をはじめ民衆生活が重要な部分を占めてきたことを言外に語つてゐるものである。勿論權力階級と云へば、依然として士流であつたが、世が泰平になるにつれて、士人の必要は次第々々に乏しくなつて來りつゝあつた。武士は長い間歴史上の立役者であつたが、彼等によつて平定せられた泰平の國家は自然の理法に從つて漸次彼等を要しない時代に進んできたのである。

文學も亦た、たゞ單に上流社會の公的生涯を記錄した歴史物語や英雄傳の類から一層細かくなつて平凡なる個人の心理やその個人の環境を描いて、夫等の個人と共通の生活を成しつゝある一般民衆の娯樂に供せらるゝことになつた。その最も著しい代表的な作物が卽ち西鶴と近松なのである。

上代や中世では、殆ど物の數にも入れられなかつた下層階級――經濟的にでなく――が德川期の平和時代に入りて漸次社會の重要なる部分を形造くるに伴ひ、從來殆ど士人の優れたる特色としてゐた道德觀念が段々夫等の百姓町人にまで敎化を及ぼし、所謂衣食足つて禮節を知るの格言のとほり、庶民の經濟狀態が發達するにつれて百姓町人の間に社會生活を圓滑ならしむべき道德思想――義理人情の實踐、辨識といふことが重要視せられて來た。

今更事新しくいふまでもないが、近松の世話物の傑作は、此の經濟的、道德的に發達せる大阪の市民が世間の義理、人情の柵にかゝつて喩喁煩悶せる狀態の急所を掴んだものである。近松の悲劇を讀むと、如何に當時の町人が道德觀念を重んじてゐたかといふことをつくぐ〵と思はせられるのである。

勿論今日の進步した標準から云ふと、隨分、男尊女卑の舊式道德ではあるが、いかに、社會生活の一員としての恥辱を恐れ、面目を重んじてゐたか。其等の點は今日の、專ら權利とか義務といふ文字によつて云ひ表はされてゐる殺風景な氣持ちのものよりは遙かに感じの好い道德觀念であつたことを思はするのである。尤も優秀なる創作家は、小宇宙を創造するので、近松は卽ち彼自身の獨自の社會と人間とを創造したのであつて、取りも直さ

ず近松翁の創造した世界が、しかく心持ちの好いものであつて、當時の現實世界（リヤルワールド）は必ずしも、近松の作に於て見られる如きものではなかつたかも知れぬが、その割引をして考へてみても當時の社會がいかに圓滿に且つ秩序が重んぜられてゐたかといふことを思はせられる。

人々熟知のとほりに、近松の世話物の多くに、殆ど、金錢上の義理に詰つたことの鋭く書かれてゐないためしがない。金錢を生命とする大阪の町人生活を書く場合には止むを得ぬことでもあるが、偶々以つて、それに依つて、いかに當時の人間が金錢のことに物堅かつたかといふことが解る。近松作品の多くは、卽ち金錢上の事から一曲の悲劇の破綻を招來する一原因を成してゐるのである。金錢の事だからとて卑んでは當らない。金錢の義理に堅いといふは取りも直さず凡ての事の物堅いのである。今日でも金錢の事に物堅い人間は人としても最も信用の出來る種類の人間である。彼の近松の傑作の一つであつて、又ナチユラリズムの作風に近い「女殺油地獄」の與兵衞などを見ても、彼は兇暴無頼の靑年であるがお茶屋への勘定、高利の借金の辨濟といふやうなことにひどく心を苦めてゐる。勿論その仕拂ひを濟まさねば遊蕩が出來ない、その遊蕩をしたさに、從つて金錢が大事なのでもあるが、いつも借金の事をいはれるたびに男の面目といふことを言つてゐる。凶惡彼の如き人物でさへも當時の社會の風化の外には出づることが出來なかつたのをみても略ぼ推想出來る。今日でも諺に錢には親子がないと云ふ。つまり金錢上の義理の事は人間相互の社會生活に於ての、あらゆる義理信用の中樞神經である。つまり人間相互の急處の一つである、その急處を近松は捉へた。

更に人間相互生活の急處の一つは戀愛である。そしてその性的愛情のほかの、も一つの急處は親子の愛情である。此の愛情の急處をも近松は好く捉へてゐる。彼の戀愛悲劇には必ず金錢の急迫、男女異性間の愛、親子の恩愛。この三つの物が常に相絡んでゐる。金錢の事と共に、他の二者とても必ずしも、それが近松の特色とはいへない。今日の世とても是等の人情に變化はないのであるが、近松は特にその點を高調してゐるのである。そして

高調してゐるのは取りも直さず、それが彼の時代の特色の一つであつた。人情に脆く、戀愛に對して熱烈奔放で、誠の心が深かつた。

詩人には誠實（シンセリチイ）が何よりの生命である。近松は現實家（リヤリスト）である半面には詩人（ポエット）であつた。そして最も誠實の心に富んだ詩人であつた。彼の偉大なる胸に育まれた多くの性格は種々の方面の人間の相を示しながら、それ等が悉く誠實の心の持ち主であることは否まれない。近松の眼に映つた當時の民衆は實に義理に堅く、人情に脆く、慈悲憐憫の心の深い人間であつたのだ。私は、それを、近松が理想主義に由來する誇張とばかりは思はない。確かに當時の人間は、――よし幾多の弱點も有ち、又いろんな不平不滿もあつたかも知れぬが、主として彼等は好き生活をしたといはざるを得ぬ。彼等は、時しも徳川期の黄金時代に遭過し、概して幸福なる生涯を過した、豐富な、生き效ひのある生活をすることが出來たのである。

即ち近松の悲劇に表はされたやうな生活と、性格の矛盾や破綻は、取りも直さず餘りに好き時代であつたための犧牲の一例にほかならないのである。彼等は不幸なる、時代の犧牲ではあつたが、偶々それによつて、彼等の時代が、いかに生活を享樂した時代であつたかゞ思はれるのである。（十年十一月二十九日。新演藝）

新富座の近松記念興行

新富座十一月の近松二百年祭記念興行は何といつても近年で好い芝居であつたことは爭はれない。

しかし、大阪朝日新聞社の近松記念懸賞に當選した脚本である「二つの櫓」といふ一幕物は、又、近頃これくらゐの愚劇はなからう。朝日社がこんな物を當選にしたとすれば朝日社の不見識を笑はざるを得ぬ。否な、小生の如き、不肖ながら飽くまで嚴肅なる意味に於て、平素より藝術としての近松物に限りなき敬意を表してゐる者には、苟めにも近松二百年祭記念興行に當つて、斯の如き愚劇惡作をば開幕第一に持つて來て据ゑたことを非常に不快に感ずるものである。近松門左衛門といふ人は、時代物の中で隨分と荒唐無稽な筋を仕組んでゐるけれど、現代の作でありながら、一人竹本義太夫といふ者を偉大なものにせんがために、日本演藝史の事實を無視して、宇治加賀掾の一家をあんな悽慘な悲劇に終

らしめたのは、返へす〴〵も淺薄極まる、智恵のない作意である。近松を記念するは、それに伴れて勢ひ竹本義太夫を記念することになるのだが、こんな記念のされやうでは、彼れ義太夫は芝居の舞臺で悔み惱むばかりでなく、近松翁と共に今頃さぞ地下で泣いてゐるであらう。

かういふ淺薄極まる、俗惡無比の作を近松二百年祭記念に當選しそれを上場した所などに、今日の一般大阪人の藝術の標準がうかゞはれて、私はそゞろに二百年前の大阪が慕はれるのである。近松の如き藝術の大天才も、何等時代の背景なしには世に出でるものでない。あのやうな藝術の偉人の生まれたのは、當時の京阪がそれだけの物を生むだけの下地を作つてゐたからである。今日の大阪には、近松半二ほどの者も生まれさうにない。

中幕の「大晏寺堤」は玩辭樓十二曲の一つほどあつて、見ごたへのする物であつた。鴈治郎が必ずしも和事師ばかりでないことを、これによつて遺憾なく説明してゐる。彼の他方面の長所を十分發揮してゐる。何といつても彼は東西を通じて現代の名優であることは爭はれない。「紙治」や「梅忠」が鴈治郎の特技のやうになつてゐるが、私は度々いふごとく「梅忠」なぞは寧ろ我童などが鴈治郎よりは好くはないかと思つてゐるのであるが、「大晏寺堤」の春藤治郎右衛門の如き役は、ずつと東西の俳優を見渡したところ、やつぱり鴈治郎に優る者はなからう。故人市川團十郎を除いては彼の專賣といふに異存はない。左團次、幸四郎、中車や又は吉右衛門でも何處か不足が生ずる。今日東西の俳優でその體の形顔の造作輪廓、大小、長短などをじつと思ひ比べて見るに、東の歌右衛門は何といつても上品無類の顔である。身體も、男に扮してもそんなに小さくはない。その古典的な容貌は昔の錦繪に見る古名優の面影が何處かに偲ばれるのであるが、それでもまだその豐圓で、いくらか丈の詰まつたところが、扮する役によつては現代的に過ぎる。雁の顔は歌の顔ほど中高でなくて、まだ長い。その長いところに、古い錦繪にあるやうな昔の面影が豐かに偲ばれるのである。そして上品な點は、歌のとは品は變つてゐても、いづれ劣らぬ氣

品を具へてゐる。

從來「紙治」や「梅忠」や「半七」を演じて彼の餘りに、上方趣味を發揮して色つほ過ぎる臭味を不快に思つてゐたが、「大晏寺堤」は役柄が役柄であるばかりでなく演出振りがなか〳〵深沈な趣を表はしてゐたのは好いと思つた。非人に零落れてゐても、元は武士の品格ある處もよく出てゐた。

一體かういふ芝居の、最も觀客の興味を緊張せしめるヤマは、終りの仇敵と相討ちになる——即ち殺傷の場ではなくして、その仇討ちの大望を抱ける者が、その本志を遂げ得る前に、思ひも掛けぬ災難に犬死でもすることがあつたりすると、どんなに無念であらうといふ洞察を觀客が心に持ちながら、ヒーローがその危急の場を難なく切拔けるところに無限の味があるのである。春藤治郎右衛門は、初は、わが素性を包み隱して只管助命を哀願しながら、段々その場の對話の進展につれて鰐の口の危難を免がれ得た代りに、高市武右衛門の立派な武士の心に對して遂に訊ねらるゝまゝ仇討ちの大望を打ち明ける。こゝでこの素性と本志とを打明けるのは、實に背に腹は替へられぬ羽目になつたからである。その邊の呼吸、下手に弱く出て何處までも哀みを乞ひつゝ、その奥に強いものを深く藏してゐるのが、對話の進展の關係で次第々々に表面に出て來るところが息も吐かさず能く演出された。あの場合のヒーローは巧みな腹藝である。たゞ三寸の舌一枚の言ひ廻はしで、危難を遁がれねばならぬのであるから、その科白には渾身の精神が集中せられてゐなければならぬ。ヒーローの一生懸命な、そして、弱味を見せてはならぬといふ凛然とした氣魄が遺憾なく容貌や言語に溢れ出てゐたのはよかつた。對手の言葉の句切り〳〵を抑被せて言ひ立て、辯明するところに強い張りを見せてゐた。私はかういふ芝居を好む。

「天の網島」は、何處までも近松翁が原作の情調を出さうといふのが雁治郎は申すまでもなく、大阪の二百年記念祭近松研究會の目的なのであるが、それは勿論望ましいことであるにしても、かうして實際に舞臺に上ほしてみると、やつぱり原作を讀んで想像し又味は

つてゐる近松情調に比べて何だか不滿な點があるのは止むを得ないことなのである。三味線の伴奏を待つて半分曲節を附けて歌ふ物を、大部分科白でいかうとするのであるから情調が稀薄になるのは致方もない。河庄の治兵衛の出の處にしても今度ぐらゐに行けばまあよいとして置かねばならぬ。私は雁治郎の「紙治」や「梅忠」には飽いてゐるのであるが、しかし今度のは、そんなに惡い「紙治」ではなかつた。劇通連の癖として、あゝでもないかうでもないと、いろ〳〵難點を見付けて鬼千匹のやうな小言をいつたところで始らない。所謂自分が近松の原作を讀んで想像の美を描いてゐるほどのものが實人劇の舞臺の上に見られるものではない。私は、例の「河庄」の場の小春の口說きを先年大阪の近松座で大隅太夫が繁太夫節で語つた人形芝居で見たが、魂のない操り人形でありながら、近松情調を十分味ふことが出來た。それは、大隅の聲樂に引入れられて、そんな幻の境地に入つて行くからである。今度雀右衛門の小春の口說は、舞臺裝置が從來と異つてゐるので、格子の中で腰から半分上しか見物席から見えてゐない。此の點に非難があつて、やつぱり從來のまゝの店の間で演て見せた方がよからうといふ說もあるやうだが、私は、あそこは、あれでよいと思ふ。あそこは原作にも、たゞ小春と孫右衛門とが對座して意見をしたり口說いたりする處になつてゐて、格別身體の動きのない處であるから、あれでも必ずしも惡くはない。たゞ床の太夫の聲樂と舞臺の小春の口說との受け渡し、繼ぎはぎの處がメロヂアスな情調を促すに缺けてゐる憾みがあつた。雀右衛門の藝はよいが、どうも語調があの通りなので、小春が「いつ何時を最後とも、その日送りの敢ない命」といふあたりの哀れな情味が詩的に表はれて來ない。こゝらが卽ち、人形振りにつれて淨瑠璃を主にして語つたり唄つたりするのと、實人劇の科白で散文化してしまふのと、所謂近松情調の出せる出せない別れ目の處である。だから雁治郎以上の名優天才が出て、又今後どんなに近松を仕生かすか、どうかは知らぬが、今のところ、實人劇では、遺憾なきまでに近松原作の味は出せるものではあるまい。やつぱり越路太夫が文樂座で語る方により多く原作情調が出てゐるのは止むを得ない約束である。

で、店の格子の間の、雀の小春の口說はそんな理由から哀れ味が乏しかつたやうである。けれども誓紙の取り返へしの處になつて、此の一幕では、こゝが段々上りにヤマになつて來てゐるのだが、雁の治兵衛の動きにつれて、小春がいかにも、紙屋の女房おさんからの文の一件で、今、口にはいへない悲しい苦衷を一人小さい胸に押包みながら、思ひ惱んだ心を、顏をそ向け、體をひねり、婀娜たる姿態の上に描いて見せた風情は、千兩とも萬兩とも申したい。治兵衛に、ヤイ畜生といつて、座敷から下へ引摺り落されて地上に這ひ轉んだところを足蹴にせられたあたりの形も好かつた。

しかし、前にもいつたごとく、本來朗吟する淨瑠璃劇を散文の實人劇に轉用するのであつてみれば、そこに、あまりに原作に拘泥し過ぎるのは、却つて原作の精神を不自由な物にすることになる。治兵衛が出の處で、花道の途中で例の「粪賣り屋で聞けば小春が沙汰云々」あれはやつぱり、そんな一字一句まで原作に拘はらずに、もつと委しく「今そこの粪賣り屋で――」といふやうに增補した方がよい。そんな不滿は到る處に發見せられた。誓紙の取り返へしの處でも、もつと自由に原作を解釋した方がよからう。治兵衛が、兄の孫右衛門の制止切諫を、「はい〳〵」といつて聞きながら、戀慕の未練止み難く、又しても小春を思ふ存分毆り付けて溜飮を下げようとする。彼處が此の一と場の、一面から見た中樞であつて、今度の雁には、それが每時ものやうに輕浮にならなかつたのは好い。

卯三郎の孫右衛門は少し貧弱だ。やつぱり故人梅玉の方が好い。こゝは孫右衛門が一等好くないと引立たない。新升の河庄女房は、大晏寺堤の弟新七の二役共に困つたものだ。

紙屋の女房福助のおさんは、專賣物で申分はないが、あの質草を取り出すところなどの情調が、小春の口說の場と同じくやつぱり足りなかつたやうに思ふ。が、これも實人劇で止むを得ない。それから增補の方とちがひ、何だか、しつとりした味もいつもより乏しかつた。增補が必ずしも原作より惡くばかりはなつてゐないのだ。「一昨年の十月中の亥の子に炬燵あけた祝儀とて」前後の口說きの處も美しい芝居にはなつてゐたが、それだけいつもの增補よりは情味が乏しいやうに思はれた。

三幕、大和屋の場も好かつたが、卯三郎の孫右衛門の爲すことは一々ソツがないにしても何としても貧弱である。之は役者の柄であらうから、それをいふのは氣の毒であるが、梅玉の亡き今日、雁治郎が今後も「天の網島」を演じようとするなら、孫右衛門役者を探し出すことに苦心すべきである。

要之今度の新富座は、近年の好い芝居であつた。（大正十一年十一月十二日。新演藝）

片岡我童の忠兵衛

近松物は、何といつても東京役者よりも大阪役者でなければ可けない。

梅忠は、先年、羽左が歌舞伎座で演じたのを見たが、その時私は、何かに批評を書いてあれなら、かく申す私自身の方が巧いだらうといつたことがある。たしかに羽左よりは此の近松秋江の方が巧く演つてみせると思つた。

鴈治郎福助の梅忠をその後見た時——前述の羽左の時よりも、まだ〳〵ずつと以前に仁左衛門の梅忠を見たこともあつたが、その時もあまり感心しなかつた。——鴈福のは流石に羽左ほど悪くはないと思つたが、その時は鴈の忠兵衛よりも福の梅川が好かつた。

そんな、朧ろな記憶を、比較の標準の背景に持つてゐながら今度の本郷座の我童の忠兵衛は、どんなに演ずるであらうかといふ好奇心も抱いて、一寸覗いてみたいと思つてゐた。

そして偶然の機會で一日見てしまつた。我童の忠兵衛は、前三者の忠兵衛に比べて優る

とも決して劣つてゐるものではない。少くとも、たしかに羽左、仁左のよりも好いし、それから——之は私の主觀的の感情かも知れないが、鴈の忠兵衛よりも我童のそれの方が何となしに同感が出來るやうに思はれた。何故といふのに、勿論藝で行くのであつて、生地で行くのではないから、役者の年齡やその他を鑑賞や批評の考慮に算入することは無益のことなのではあるが、私は、何となしに、もう鴈の忠兵衛でもあるまいといふ氣がしてゐるのだ。鴈と我童と年齡はどのくらゐ違つてゐるか知らぬが、幾ら生地で見せるのでなく、藝で見せるものであるにしても、思ひなしにか我童の方により多くの潤ひがある。

そして、こんな事を申しては、觀せる芝居には困るかも知れぬが、近松といふ人の作は度々申すごとく後の出雲や半二以後の作者とちがつて、藝術的に、不朽に、人間の眞の胸に觸れてゐる物であるだけに、作中の人物が生一本の性情を備へてゐる。決して上滑りのする——所謂芝居者式の輕薄さなどはない。

もう、所謂在來のお芝居も末になつた當節のことゆゑ、原始近松の復活があつても可いのだ。その點からいへば、無論我童だつて、あまりに芝居になり過ぎてゐる處はあるが、それでも處々に近松固有の生一本のところが見えてゐると思つて、見てゐた。

二三年前雁が新富座で少し工夫を變へた封切りを演じた時にも思つたが、誠にあらずもがなの工夫變へであつた。あれでは、倍々近松固有の生一本の性情が表はれて來ない。肝腎の封切りが、まるで戯談になつてしまふ。雁もあまりほかの芝居のない人だから、同じ物を色々に工夫を變へようとして、倍々惡くしてしまふと思つた。おつと雁のことを云ふ場合ではなかつた……それで我童の忠兵衛だが、素直に生地で行つては、見物が承知しないといふなら、爲方もないが、我童とて——私の理想の標準からいへば、やつぱり芝居をし過ぎるのだ。

淡路町龜屋宅の入口を入つて、吉三郎の丹波屋八右衛門に對ひ、五十兩の爲替の金を、川の手附の爲めに、無斷で使つた詫びごとをいふあたり、忠兵衛の姿態にふつくりとした柔か味があつて、見てゐて美しい快感を與へる。けれども、現實味の注文からいへば何と

なく、あまりに遊びがあり過ぎて、切迫した趣を稀薄にしてゐると思つた。が、もと〳〵此の芝居は寫實的の物でありながら、それが段々藝術的に洗練され、圖案化されて來てゐるのだから、必ずしも切迫した寫實味は出ない方が芝居その物としては寧ろ好ましいのかも知れぬが、私は、あまりに忠兵衛を從來の型の物の通りにして置きたくない。ふつくりとした圓味を持ちながらも、原始的に近松の生一本の處を見せて欲しいのである。で、その注文から申せば、雁よりも我の方が私にはより多く好ましい。第一生れながらの容貌からして我には神經的に急性な處がある。「忠兵衛もとより堪えぬ蟲」と近松の原作にある、あれだ。

西横堀の信濃橋の袂で、羽織おとしの前後の容態動作もなかなかに美しかつた。そして心理の表現もそれに伴つてゐた。

新町越後屋の場は前の場よりも一層よかつた。が、私は、此場を芝居で見るたびに、何とかして、もつと近松の原作の情調は出せないものかと思ふ。「えい〳〵烏がな、烏がな、浮氣烏が月夜も闇も首尾を求めて逢はう〳〵とさ……」から、竹本の淨瑠璃に、悲しい遊女の戀ひを利かすあたりの高調した感情を舞臺に横溢せしめる工夫はないものか、私は、それは出來ないことではないと思ふ。

去年の春歌舞伎座で「博多小女郎」の時、博多柳町の奥田屋の幕明きは好かつた。この新町越後屋の幕明きも、何故下座で「えい〳〵烏がなあ」を、陽氣な中にも悲しい情けをこめて唄はせなかつたか。それは芝居によつてはやる時もあるのだが、此度の本鄕座ではやらなかつた。原作のその邊を喰つてゐるので、ひどく物足りなかつた。八右衛門の出がその爲めに、全く母親妙閑に頼まれて、その事ばかりで越後屋へ話しに來たやうに思はれる。もとより、さうでもあらうが、しかしあの八右衛門のやつし方からいへば、どうしても原作のとほり、其の前後がもつと〳〵廓情調があつてよいのだ。原作の梅川の、あの悲しい戀ひに思ひ窶れた風情は、龜藏の潤ひの乏しい藝では表はし難いかも知れぬが、竹本の淨瑠璃の前後の音樂的、詩的氣持ちを舞臺に漲らすことを熱心なる役者は工夫し試みて

ほしい。

我童の忠兵衛――心の氷三百兩、身も懐も冷ゆる夜に越後屋に走りつき――の氣持は可なりに表はれてゐた。格子戸の外で、中で八右衛門が自分の棚下ろしをしてゐるのを立ち聽きしながら、いろ／＼に表情を變へての仕草も雁治郎などよりもよく利いてゐたと思ふ。それから、がらりと格子戸を開けて入つてゆき、八右衛門の膝に乘つ掛らんばかりにして悲憤の怨みをいふところもよい。封を切る仕草や表情も急迫切實の趣があつた。

あとで二人ばかりの舞臺になつてからの龜藏は、惡くもなかつたが、雁福の時ほど舞臺に面白味はなかつた。それは、いつの芝居であつたか、隨分前のことだが、福助の梅川が今の金は堂島のお屋敷の急用金の封を切つたのだと聞かされて吃驚りし、雁の忠兵衛と舞臺中を轉ろけ廻はるやうにして、狽へ戰くところ、あれは少し芝居をし過ぎたとも思つたが、福助の梅川の、いかにも遊女らしい風情が表れてゐたのが、まだ美しく記憶に殘つてゐる。

此度の梅忠は、あまりに舞臺をうろたへ廻らずに、じつと熱情を籠めた抱擁をしながら覺悟を定めるところに二人の戀の眞心の極致を表はさうとした。

福助と龜藏との比較は、すこし無理のやうだが、福助の梅川でも芝居になり過ぎたが、原作に近い味はその方にあつた。今度龜藏のは、ちと動きが無さ過ぎはしなかつたかと思ふ。そして本當の原作の味は、まだまだ工夫の餘地がありさうだ。之を要するに、近松物は何といつても大阪の俳優諸君の方が巧いのだから、益々原作に就いて近松の原始的の人生味を舞臺の上に横溢せしめる工夫をせられんことを囑望するのである。

（大正十一年三月中旬。新演藝）

吉野山その他

夢幻的な舊い歌舞伎劇、抒情詩的な近松の世話物、青史に依つた活歴物。さういふ樣々の芝居の舞臺になつてゐる古蹟遺址を、偶然から又はわざ〳〵往つて觀たことを思ひ出してみると、なか〳〵興味がある。

さすがに丸本物の舞臺になつてゐるのは多く畿内諸地方にあるのだが、私は、就中妹背山の背景になつてゐる吉野川一體の谿谷を單に自然そのものゝ鑑賞としても好む。千本櫻の吉野山、その古い川に沿ふてゐる。秀次自害の高野山、苅萱道心石童丸の架空的遺蹟のある高野山、近松が心中萬年草の高野山も吉野川の下流が紀の川と名を變へるあたりの南方に聳えてゐるのである。それから又之は芝居よりも寧ろ講談物でお馴染の大阪陣の軍師眞田幸村父子が隱棲の九度山の遺蹟も紀ノ川の南岸、高野山登道の途中、九度山と申す處に在る。千本櫻の作者は竹田出雲、妹背山の作者は近松半二で、此の作者達がいかに吉野

川の流域に沿ふて生じた傳說史實を採つて奔放なる夢幻的空想を驅り、荒唐無稽なる美しい芝居を仕組んだかといふことは、一とたび吉野川の谿谷に足を踏み入れた者には彼等が左樣なる美的幻影を思ひ描いたのも必ずしも無理ではないと合點出來るのである。金剛山の東麓に近い、吉野口から乘る吉野輕便鐵道は吉野川の北岸、吉野驛を終點としてゐるが、吉野山に登るにはその終驛から吉野川の南岸に渡らねばならぬ。それは古來柳の渡し又は六田の渡しと申したところで近頃は鐵橋が架つてゐる。その渡しを渡りながら上流の方を眺めると、遠く霞を罩めた山又山が伊勢の國境の方に當つて折り重なつてゐる。その手前六田の渡しから二里餘り溯つた處に小さい圓形をした妹背山が川の兩岸に立つてゐるのが見える。その山に關する古い傳說を採り入れて作つたのが妹背山である。芝居に現實の背景などはどうでも可いといふものゝ、其處らに行つて見ると、全く舞臺の背景に適した美しい處である。そのあたりは和歌山の市に近い紀ノ川口から二三十里も深く山に入つた處とて舟揖の便は少い。そして筏が多い。有名なる吉野木材の產出する處であるから杉丸太の筏が澤山川岸に繫つてゐるのを見た。六田の渡しから一里足らず上流に上市の町が立つてゐる。そこは大和國の林業家で金持ちの多い殷賑な町である。材木屋が多く入込むので金も集散する。從つて料理屋の大きいのがあつて、內藝者などがゐて、そんな山の中の町にしては案外に垢拔けのした都會的洗練の感じのする處である。「……頃は彌生の初めつ方此方の亭には雛鳥の、氣慰めの雛祭り、桃の節句……谷川を見晴らし櫻の見飽き……」と妹背山の淨瑠璃にいふのが眞景である。奧大和の大臺ヶ原山の雪が解けて春の川水が增す頃ともなれば吉野の櫻が山の麓の方から段々奧へおくへと咲いては散つてゆくのである。西行法師の歌に、

吉野山花の盛りはかぎりなし
　青葉の奧は櫻花にて

といふのがありますが、そのとほりである。吉野川の溪の奧から、春の水嵩の出まさる頃木香の高い吉野杉の筏が絕えず流れて下る。花吹雪がして筏の上に散りかゝる。花筏とい

ふのは吉野川を流す筏のことをいつたと申しても過言ではない。上市の處を櫻の渡しと申し、それから下の千本はすぐ向岸の山の裾に見えてゐる。

義經千本櫻の繪畫的夢幻劇の舞臺は此の川に沿ふて背景を採用してある。吉野下市といふのは上市と對した町の名で、今の吉野驛から一つ下の驛にもその名を取つて、下市口と稱してゐる。輕便鐵道の其の驛は吉野川の北岸になつてゐるが、そこで汽車を下り、吉野川に架つた板橋を南へ渡ると古い下市の町が立つてゐる。釣瓶鮨を賣る鮨屋彌助の店は町の名物の一つとなつて今でも尙ほ存在してゐる。昔から此の橋の上を一日に米穀が千石通るといふので千石橋と名づけられてゐる。上市に讓らぬ、山の中にはめづらしい繁華な町で、白壁や大きな甍の家が建ちつゞいてゐる。

「立歸る春は來ねども花咲かす娘が漬けた鮨ならば、なれば宜かろと買ひに來る。風味も吉野下市に、賣りひろめたる所の名物、酌瓶鮨屋の彌左衛門、留守の内にも商賣に拔目も内儀が早漬けに、娘のお里が肩襷、裾に前垂ほや〳〵と、愚に愛もつ鮎の鮨、押さへて締めて、馴れさする。廿味いさかりの振袖が、釣瓶鮨とはものらしい。」

釣瓶鮨は「千本櫻」の名戯曲によつて全然事實化されてしまひ、釣瓶形の箱に詰めた鮎の鮨が今でも賣れてゐる。吉野の櫻花が咲く頃から若葉青葉にかけ、この美しい吉野川の谿谷に雪解水が增さつて、木香の高い吉野杉の筏に、落花繚亂と散り敷く頃、やがて名物の鮎の大きくなる頃、いかに此の川が自然に惠まれた川であるといふことを思はしめる。一體川といふものは多くの自然の姿の中で最も惠まれたる地質上の形體である。凡そ河川ぐらゐ自然の風趣の豐かなものはない。それゆゑに古來文明は常に河川の畔から興つてゐる――此處ではそんな話をするのではなかつた。いかに吉野川の上流を背景として「千本櫻」だの「妹背山」だのといふ美しい夢幻劇が起つたに道理があるといふことを申したまでゞある。もしそれ櫻花爛漫たる吉野山を遠見に描いた道行の場、靜と忠信との絡みになつた美しい所作もあの山の實景を一とたび見た者には、あの芝居の美しさがなるほどと肯かれるのである。

その他吉野山は幾多の活歴物の題材を供給してゐる。福地櫻痴居士によつて取扱はれた村上義光父子の忠死、大塔宮の十津川落ちなど、少し櫻花の盛りの過ぎた頃に吉野山に來て、たゞ一人舊蹟をあちらこちらと徘徊してゐると感慨無量である。

南無網島の大長寺へ往つたのは大正二年の春であつた。――その頃私は大阪の方に放浪してゐて、泉州堺の港に流れ繋つてゐた。「堺は太閤時代から頓に開けた海外との貿易港であつたので、何かに懐古の感のする處であつたが、長くなるから、それは差し措き、一日堺から大阪に出て、小春治兵衛で名高い南無網島の大長寺を訪ねて見た。近松が、

野田の入江の水煙、山の端白くほの〴〵と、あれ寺々の鐘の聲、かう〳〵かうしていつまでか、とてもながらへ果てぬ身を、最期急がん此方へ、

といつた野趣の多い大長寺の面影は、今はもう跡形もなく失せてしまつて、藪の外面のいさゝ川の風情もなく、聞くところによると、古くから其處に宏大なる邸宅を構へた富豪藤田家の邸内に、昔の大長寺の敷地は取り入れられてしまひ、今ある寺は、藤田家がその代償として提供した隣地に建つてゐるのである。東京ならば丁度龜戸か柳島あたりによく見るやうな、つまらない寺で、廣からぬ境内の一隅になるほど形ばかりの小春治兵衛の石碑が立つてゐる。小春治兵衛が心中の昔を偲ぶよすがもない殺風景の地であるが、その方が現實の姿かも知れない。今日でも心中する場所は必ずしも鹽原や箱根と定つてゐない。しかし寺には半紙に刷つた短かい物がある。それは心中と覺悟した小春治兵衛の兩人がその晩宵の中に寺に來て折柄佛の說教を聽いて一片の感謝の意を陳べて死後のことを賴んだ、寺僧へあてた書き置きの文である。

吾等兩人今宵ありがたき教へを蒙り云々。といふ、その全文は卽座に思ひ出せぬが小春治兵衛が本當に認めたものではあるまいが、簡古な文章で、おそらく昔の此處の寺僧でも書いたものか、それともその他の近松を追慕する者が書いたものか、極く短かい文章ではあるが素樸な中にも覺悟して、靜かに死んで行く者の淨い心持ちが表はされてゐると思つ

た。

活歴物の私の好きな芝居の一つは、大德寺燒香の場であるが、私は紫野の大德寺へ往つてみる度に何よりも燒香の場の活劇を思ひ出すのである。大德寺の伽藍とした大講堂の中に入つて、ひとりで靜つと立つて高い天井の方を見てゐると、塵埃臭い大きな建物の臭ひ、死灰の如き冷い空氣中に元龜天正の頃の英雄豪傑の面影が綺羅星の如く、そこに歴々と見えてくるやうである。あれは、羽柴秀吉は故團十郎が演じてこそ活躍してくるものであらうと思ふが、私の見たのはたしか八百藏（今の中車）のと、羽左のとであつたらうと思ふ羽左よりも中車の方がよい。そこで自分の眼に殘つてゐるのは、中車が秀吉を演じた時に幸四郎（その時高麗藏）が佐久間玄蕃を勤めたが、あの柄といひ、音聲といひ、丁度その頃は年配も玄蕃を演ずるに好かつた。勝家は故人段四郎（その時猿之助）で、あのとほり聲が鼻にかゝるのが勝家の品格を損じたけれど、演技に氣が入つてゐて、これ又惡くなかつた。私は何となくあの芝居が好きである。幸四郎の玄蕃は丁度そんな人間でもあつたらうかと思はれた。そんなことを頭に思ひ描きながら大講堂の敷瓦の上に突立つてゐると、成程主將信長亡き後の燒香の際の群雄の心理はあゝもあつたらうかと思はれた。

「こゝでやつたのだな。」

と私は口の中で獨り言をいつた。建て物が伽藍として古めかしいだけにそんなことを回顧するによい。そして、つい去年の五月に歌舞伎座であつた時にもさう思つたが、何としても役者が不足である。それは故團十郎が由良之助や秀吉を演ずることばかりはいつてゐられないが、それでももつとどうかならぬものかと思ふ。あんな活歴物はもつと豪壯にやつたら、一層引立つのだ。紫野の大德寺に遊ぶごとに私は當年の群雄が覇權を爭つた意氣とその巧拙とをも思ふて、實に痛快を覺えるのである。俳優がこれを演じてゐるといふことを忘れさするほどに潑剌とした英雄の風貌と意氣とを表現して見せてもらひたいものである。因にいふ活歴物、史劇も今の菊五郎のやり方ではあまりに世話になつて可けない。

文藝雜感

西行の歌

自分は此頃、好んで時々和歌を諷誦する。和歌といつても勉强して、諸書を涉獵するのではない。唯、意の向ふ處に任せて時々西行の歌を讀んで見るのである。古來日本の文學者の中で西行ほど自然に溺れ、自然を愛し、自然を悲んだ詩人があるであらうか。西行ほど幽遠な人生觀に到達した文學者があつたらうか。西行の前身は佐藤憲淸といふ北面の武士であつた。それが二十五歳の頃一朝頓悟して、俗を棄てゝ山林に入り、八十餘歳を以つて身を終ふるまで山水に憧がれ、諷誦を事とした。

佛教傳來以後の日本の古代の歷史には、宮廷の貴人または上流士人の間に落飾して遁世するといふことが頻々として行はれた。西行もその一人であつたらう。が、山家集一卷の語る處によれば西行はその頓悟脫俗の精神に於ても、その佛教思想を體達してゐた點に於ても、日本の思想史上に於て稀に見るほど深い處まで入つてゐた人であると思ふ。

日本に渡來した印度思想が日本民族を感化して、日本人によつて咀嚼された佛教思想となつて詩歌に讀まれたもので西行ほど渾成されたものはあるまいと思ふ。

德川時代の日本は、儒教に感化された功利主義の哲學が興隆した。吾等は此の德川時代の功利主義の哲學を、日本の文明史上に於て頗る意味あることゝ思ふ。乍併上世奈良朝を中心として佛教思想の流布してゐた時分ほどローマンチツクな時代があつたらうか。美しき憧憬と、深遠なる厭世哲學と、慈悲深き人生観とに支配せられた聖武帝及び光明皇后の時代よ。それより藤原氏の華美なるハイカラ時代を經て外來の思想は漸くに日本民族固有の心に渾和した。西行は日本人に依つて日本化せられた佛敎的厭世思想の詩人であつた。

吾等は英國の文學史を讀んで田園詩人バーンスを知つた。自然詩人ウォヅウォスを知つた。さうして西行を熟讀することを怠つた。日本には西行のやうに田園を樂み、自然を愛した詩人があるではないか。

輓近西洋の文學詩歌を言ふものよ。卿等は暫らく泰西の詩人の糟粕を甞むることを休めて吾が西行を味へよ。西行は俗世を遁れた。遁れたけれども遂に俗世を忘れることが出來なかつた。彼は閑寂を樂んだ。けれども閑寂を寂しがることを禁じ得なかつた。

西行の歌の詩想が清高にして秀抜なのは今更らいふまでもないが、何よりも今日の吾等の趣味に合つてゐるのは、歌詞の使ひ方が自然で素撲であるが爲に技巧の勝ち過ぎた言葉使ひの爲に内容の思想を明瞭に言ひ表はすことが妨けられてゐないといふ一事である。

私は和歌には全くの素人であるが、素人が日本の和歌に對する要求は、平安朝の佳人才子が歌つたやうな技巧の勝つた、當時の交際社會の樂屋落ちを歌つたものでなくつて、直ちに自然人生に打突つて、詩人が本然の感懷を流露したものに在る。事實、平安朝の佳人才子等が歌つたものには、當時の交際社會の內情に通じてゐなければ、その歌の意味を、一通りは解しても、その上に成程と興味を感ずることの出來ないものが多い。然るに西行の歌にはそんなのは比較的に少い。それといふのも、詩人が浮華なる都會を棄てゝ孤獨自在行かんと欲する處に行き、感ぜんと欲するものを感じ、歌はんと欲するものを歌つたから

である。

西行は俗世を棄てゝ山林に入つたけれど、人の世の戀や情といふものを知つてゐた。彼は戀をも詩にした點に於ては、彼の生存した武士時代の一つ先の時代たる平安朝の詩人と異らなかつた。が、彼の詩は、前にも言つた通りに、廻りくどい言葉使ひで巧みに戯れ言ひ倣すといふ弊が少い。戀の哀れと歡みとを感ずれば、その感じたまゝを卒直に流露してゐる。平安朝の詩人の多くが歌つたやうに、ある特別の戀人同志の經緯を歌問答にして喜んでゐるのでないから、時世を超脱してゐる處がある。それ故に今日の吾等が讀んでも清新な興味を感ずることが出來る。

葉がくれにちり止まれる花のみぞしのびし人にあふこゝちする

世の中は何を見ても興味がない。人は多勢ゐる。けれども誰と逢つて話をして見ん樂みとても無い。花は散つて了つて、見る限り皆な青葉となつた。互に心と心と打明けて許し合つた男女でなければ逢つて見ても唯路傍の人に接する感じの他はせぬ。その公けに明らさまに普通に談笑してゐる多勢の用事も興味もない人間の中で、誰知らず一人私かに忍んで逢引をする戀人がある。恰も落ち散つて青葉ばかりの世界となつてゐる處で葉蔭に隱れて花片が散り止まつてゐる、その花片を見るやうに、興もない世間の蔭に隱れて一人戀人に逢ふ樂しい心地を歌つてゐる。

ともすれば月すむ空にあくがるゝ心のはてをしるよしもがな

理由もなく自分の心は、唯その遣り場に迷つてゐる。さうして動もすれば、あの月の冴かに澄んでゐる大空に憧れて餘念もなく眺め入ることがある。此の理由もなく憧れ、さ迷ふてゐる心の果ては何處を求めてゐて落着かうとしてゐるのであらう。それが知りたい、といふので矢張り戀を歌つてゐるのである。

西行は人の世の戀の感情を懷かしみ、哀んだ。

また次のやうな歌がある。

つく〴〵と物をおもふに打そへて折あはれなる鐘の音かな

はらはらと落つる涙ぞあはれなるたまらず物の悲しかるべし

木枯に木の葉のおつる山里はなみださへこそもろくなりけれ

またれつる入相の鐘のおとすなり明日もやあらば聞かんとすらん

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ

西行が木枯の風の音、入相の鐘の響、秋の夕ぐれの寂びたる光景に人の世の寂しみを感觸せられて歌つた詩は珍らしくない、西行の思想が寂しみを以つて成つてゐたのは今更述べる必要はない。彼は此の點に於て後世の俳人芭蕉と近い詩人であつた。

彼は都を去り雲水に托して遠く諸方を行脚した。けれども時々その遠くの都の空を思ひ起して戀しい懷しい想ひに漂泊の旅の寂しさを感ぜずにはゐられなかつた。

秋はくれきみは都にのぼりなば寂しかるべき旅の空かな

近江ぢや野路の旅人いそがなん野洲がはらとて遠からぬかは

此後の詩は多分、自身ならぬ近江路の旅人の暮れ近き寂しさを歌つたものであらう。今

近江の國の野洲の原を急いで行く旅人がある。暮れ早い秋の日のことであるから、例へ野洲が原のやうな大して遠くない野路とてもうつかりとしてはゐられない、急いで行かねば途中で暮れて了ふといふのである。唯それだけではあるが、野路の行人の寂寥の感が表はれてゐる。

近來よく文學批評の上で、自覺とか反省とか意識とかいふ言葉が用ゐられる。さうして此の自覺とか、反省とか、意識とかは近世思想の特質であるかのやうに云はれる。けれども自分は必ずしもさうと信じないのである。古來人生批評の上で印度の釋迦ほど偉い人があつたであらうか、また佛教ほど人生を批評して深奧を極めたものがあつたであらうか。私は西行の脫俗超世の思想を考へて、日本には既に今日を去る七百年前の昔時に於て斯の如き人生批評の文學が發生したかと思つて驚喜の感に堪へないのである。彼には次のやうな詩がある。

いつの世にながき眠の夢さめておどろく事のあらんとすらん

自分は、かうして、唯うかうかと活きてゐる。昨日と過ぎ、今日と暮らして活きてゐる。人間は生きるといふ習慣に馴染んで、此の生活の不思議といふことには嘗て思ひ及ぼさない。が、考へて見れば此の世は實に長夜の夢を夢みてゐるやうなものである。今は斯うしてゐるが、何時になつたならば、此のながき眠の夢が覺めて、飜然として驚異の念を以つて此の人生を自覺し得ることであらう。吾等は餘りに生活の因習に慣れてゐて人生を反省するの心が足りない。といふ精神である。

私は、此の詩の中で、「おどろく」といふ語句に最も斬新な興味を以つてゐる。國木田獨歩の「牛肉と馬鈴薯」の中に、岡本をして、自分の願といふのは、「喫驚したいといふのが僕の願なんです」と言はしめてゐる。

Awake, poor troubled sleeper: shake off thy torpid night-mare dream.

自覺せよ。憐れなる昏睡者よ。汝の痲痺せる惡魔を振り去れよ。

ダーヰンが進化説を發明したやうに、常に驚嘆の心狀態で居りたいといふのが國木田獨歩の常に口にすることであつたのは、氏の作品に散見する思想であつた。西行の如く恩愛のきづなを斷つて、妻子を棄て、發心遁世した人々は、斯の如き驚異頓悟の因縁がなければならぬ。西行の行跡は、遠き古の印度の聖人の行跡に似てゐる。

世の中はゆめと見るみるはかなくも猶おどろかぬ我こゝろかな

此の詩は前に引いた詩と同じ意味のことを歌つたものである。此の世の中は夢だ。が、さてその夢だとは知つてゐながらも、果敢なき今日明日と過して、まだ廓然として悟り切ることが出來ぬ。何といふ愚な吾が心であらう。といふ意がある。

哀れ哀れ此の世はよしやさもあらばあれこん世も斯や苦しかるべき

これは戀を歌つたものであらうが、しかし法師特有の悲觀詩と見るのが妥當である。哀れ哀れといつて、先づ、果敢なんでゐる。此の世は假ひさうならばさうで仕方も無い。が來世までも此の現世のやうに苦しからうや、定めし斯くばかり苦しくはあるまい。

（明治四十四年五月。新潮）

「狂亂」樂屋話

○

岡榮一郎氏に――

「改造」の拙作「狂亂」御高評をたまはり、難有し。作の好評と不評とに關しては、毛頭陳辯の要なし。あれは創作といふよりも、小生の痴情の實錄です。しかも、小生は、他人の見て以つて痴情と笑ふところのものを、自分の眞面目の經驗、感情であるとして肯定することを否むことが出來ないのであります。故に本當は、あんな恥づべき事柄は、生涯、原稿などにして發表しないつもりであつたのですが、雜誌社からかねて宿題の如く他のある原稿を依賴されて、その原稿が出來ないで、非常に迷惑を掛けてゐたお詫びの仕樣がないのと、一つは、自分の生活との爲めに、たうどう、終生再び筆にすることを欲しなかつたあんな事を書いてしまつたのです。

○

たゞ一つ貴兄に御聽き置きを願つておきたい事は、御說の如く、小生は屢々秋聲、幹彥兩氏の作風を好むことを申しますので、今回の小生の實錄をも、貴兄は、小生の平素の持說で行つたものと御鑑定のやうですが、失禮ながら、それは大した御見當ちがひで、本來は、貴評のとほり、「秋聲、幹彥兩氏に倣ひました。」と申せば、兩氏に對して敬意を表する譯でありますが、此の「黑髮」「狂亂」の實錄物には、些かの秋聲も幹彥も混入してゐない。生一本の、本當の近松秋江で、つまり十餘年前の拙作「疑惑」（貴兄の多分お讀みになつてゐない）當時の依然たる近松秋江で行つてゐるのです。それは色々の點から左樣申されます。たゞ單に、京言葉の女が出て來るから幹彥だの、作の筋の發展に時間の轉換があるから秋聲だのと思ふのは、小生の平常の說話が先入見となつてゐるから來た皮相の御見解で、十餘年前の「疑惑」にも、丁度今回のとほりの時間の轉換を用ひてゐます。それは無論秋聲氏の如き藝術の鮮かさの物ではないが、最初、日光の宿屋を軒別探ねて歩くところを現

在として書き出して、それから後ずつと過去に後戾りして過去のことを現在にして書いてゐます。今回のが恰もそれと同じ行き方で、その點では決して今回の物が秋聲氏に倣つてゐないことを明示してゐます。僕は、自から信じて、參考となるべき他人の長所は虛心平氣で倣ふに吝かではないが、一から十まで兩氏に傚はなければ、一本立で文章の作れぬ人間でもないつもりだ。

○

實は、前申した通り、自分の實錄など、生涯決して再び書きたくなかつたので。卽ち全く自己を離れ、ひたすら人生世相を靜觀し、且つ將來婦人雜誌や新聞の續き物を書いて華やかに氣樂に小說を賣つて喰はうとするには秋聲幹彥の「第三人稱式小說」が好いと思つてゐるので、かねがね知友との間に小說の話が出た時、常にその事を申してゐるのでありますす。然るに今回の擧は、その近年の堅い心掛けを又もや破つて、十餘年前と同じ眞實の「私は」をやつた譯で、幹彥式は勿論樂にしたくもなく、秋聲式も全然混つてゐない。兩氏の作

風には、こんな「狂亂」などの如く、自分の直接經驗を、生地のまゝ暴露するなどといふやうな處は微塵もない。況んやあの人達本人が其樣な「狂亂」に表はれたる小生の如き性格は持つてゐない。と同時に、小生には他人の作風を眞似たりする小說以上の苦しい實驗でもある。

○

いかに「黑髮」と「狂亂」とで小生が思ひ切つて、第三人稱式を離れ、純粹の自己の直接經驗を有體に記錄しようと覺悟して取り損つたかは、最初、昨年の秋、それを書かうか書くまいかと思案してゐた時、恰も秋聲、久米正雄の二君も此處に滯在せられて居り、二氏から小生自身の、その事件を書かぬのは、ウソだ、是非それを書けと勸められるまゝに、ぢや、又恥曝しをしようかと決心し、それに就いては、

「私はにしようか、何吉にしようか。」と兩氏に諜りしに、秋聲氏は、「何吉の方がよい。」と申され、久米正雄氏は「僕は、私はの方がよいと思ふ」と申され、而して、小生自身の

意見でも、どうせ、自分の臟腑を恥かし氣もなく紙に打突けるのだから、生半の何吉は不徹底である。「私は」の方が、眞實の感情が乘つてくると思つたので、後に久米氏と私と二人ばかり此の宿に居殘つた時にも「私は」で遣る積りです、と申したやうな次第で、今回の拙作は凡そ其れ程までに常に三人稱の幹彥氏や秋聲氏と遠く離れたものであつて、二氏等に取つても、又、御迷惑の事と察するのであります。乍併、「私は」にしたがために、物を主觀的に見てゐるとは信じない。むしろ事實を客觀的に見てゐると思つてゐる。

○

貴兄は、「愚痴は一寸くらゐは利き目がある」と申されたが、私は、その愚痴の人並ならぬところが目付どころとして書きたかつたので、それがなければ、小生の考へでは、書くに價せぬので、讀者には御迷惑でも、そんな一方ならぬ愚痴や、他人が見れば馬鹿けてゐるところが、書いて見たかつたのでした。けれど、愚痴といつても、それは事實であるから、通例いふ所の愚痴ではない。事實を書くのが、何の愚痴である。

○

正宗白鳥氏は、屢々小生の「疑惑」畑のものを激賞してくれるのですが、正宗氏の心持ちは、小生にも、よく分つてゐるので、氏は小生の、多少でも作爲の跡のある第三人稱式の小説よりも「私は」の、小生の自己の實錄を書きつゞつたものに興味を持つてゐるやうです。既に今度の「狂亂」についても、雜誌が市に出て、三日と立たぬに、めづらしく、わざわざ左の如きハガキをくれました。氏には無斷だが、此處に全文を公表してお目にかけ且つ斯の如き理解者もあることを擧げて、小生が、貴兄の御高評に不足などを申すのでないことの一端を示すことにしませう。

「雜誌小説はこの頃殆ど讀まなくなつたが、今月の改造は武林と君との長篇が出てゐるので、わざわざ雜誌を買つて讀みました。兩方對照して、人となりが活躍してゐて、甚だ面白い。君のは、例の如き筋立てゝあるが、人間の苦惱が僕にはよく感ぜられる。徒らにこれを嗤ふ者あれば、人間の本心を知らぬものです。この次が讀みたいやうに思ひ

ました。かういふ作は、小説讀者の多數である二十前後の若い男女の好みに叶はざるべく、批評家の受けもどうかと氣遣はれるが、小生はこれを近來の誌上の傑作と推す。」

○

ここに正宗氏のハガキの中に「君のは例の如き筋立であるが」といつてゐるのが、即ち氏が以前にも推賞してくれた「疑惑」の類ひを意味するのであつて、今回の「黑髮」「狂亂」がいかに「疑惑」系統の物であるかといふことの暗證になつてゐることになります。決して秋聲氏幹彦氏の作風とは似ても似つかぬ物であることを語つてゐると共に、小生は、正宗氏に直ちにハガキで返事を書き、自分が、十餘年前と同じ情事の經驗を、又數年前にも繰返さゝるを得なかつた運命の奇を溢してやりました。幹彦氏は、小生の親しき友であります。小生には實業家にも親しき友があります。が、それは、小生と幹彦氏との交際であつて、斯ういふ近代式實錄小説の點までが氏と似てゐる筈もない。幹彦氏は至極賢明、健全なる通客で、小生の如き野暮な、愚呆な深入りはせぬのであります。

小生の、近年の心願から申せば第三人稱小説を書き、自己を離隔し、人生世相を靜觀しようとする志であり、自分の情事の苦しき經驗などを書くのはふるふる厭だとは、小生に近親の青年文士などに向つても度々述懷として洩らしてゐたのでありますが、今回の「黒髮」「狂亂」は、そのふるふる厭やなことを再び行つたので、それを正宗白鳥氏に激賞せられたのは嬉しいわけであつて、その實、自分の本願とせぬ方面を賞められたことになつて、情ない。

○

今回の拙作が秋聲幹彥氏を惡く眞似てゐるなどゝいはれたのは、小生に取りては、丁度此の森ヶ崎大金あたりの女中が、小生等、文筆の仕事に來て滯泊してゐる者をも、他の單に遊興に此處に來て、大森海岸の藝者を呼んで鴨綠江節や大島節を放歌したりする、黃金の指環などをテカテヵ光らしてゐるお客と同じ連中のやうに誤解して、「あなた方はいゝわねえ、かうしてゐてもお金になるんでせう。」といつたりして、火鉢の向にぺつたり坐はり込まれた時のやうな感じがした。但しそれは、小生の日頃敬意を表してゐる秋聲幹彥兩氏を、そんなお客に比したわけでなく、たゞ誤解せられた場合の不愉快を比譬したのみである。（大正十一年三月三十日。讀賣紙上）

本年の、自作に對する世評

――新潮の問ひに答へて――

小生の書く物など、月評子には、殆ど全部默殺されて、たゞ僅かに知人數氏の間に、偶々「あの作はどうであつた。」などと云はれることがあるのみで、從つて世評に就いての感想などは全くありません。それで流行文壇と殆ど絶緣した如き狀態でゐながらも、自分のうぬぼれかも知れぬが、案外小生を買つてゐてくれる人が有力筋にあるのを見ると、所謂「人に知られざるを怨まず。」といふ古の聖賢の格言を守つて泰然自若として安心してゐることが出來るのは難有い仕合せと思つてゐます。

勿論、碌に何にも書いてゐないのですから、世評も、自分評もあつたものではない。そして特に本年の作といふ譯ではないが、折角のお問合はせに應答しようとすれば、正宗白鳥君が、本年四月の「新小説」の評論で、永井荷風氏と並べて藝術の人間としての小生に就いて云つてゐた感想は過分な賞讚と存じたわけです。それから、之も特に本年の創作に

對してゞはないが、故人の理學博士の三宅恒方氏が小生の小品文の類ひを賞めてゐて下すつたのに氣が付いたのも本年の事でした。

私は御承知の通り古い早稻田の出身ですが、私の價値——價値ありとすれば——を雷同的にでなく獨發的に認めてゐてくれるのは、何と云つても、やつぱり前記の正宗白鳥君でせう。故の島村抱月氏だつて、正宗白鳥君が認めてゐてくれる程度には僕を理解してゐなかつた。その點は、甚だ自分勝手の見解のやうだが、やつぱり正宗君が島村氏よりも遙かに見識家として獨特的に優れてゐるからだと思つてゐます。正宗氏は島村氏以上の文學者である。僕は事實、故人島村氏にいくらか賞められた場合があつたとしても、それは常に甚だ頼りない氣のするものであつた。僕は早稻田派の後押しによつて文壇に出たとは思はない。

書くことがないから、ツイ餘計なことをいつてしまつた。（大正十年十一月。新潮）

二十歲時代の不安と迷妄

——婦人公論の問ひに答へて——

私の青春時代は回顧してみても何等の興味も懷かしみもありません。殊に二十歳時分からヒポコンデリイで、病氣を恐れることが一と通りではありませんでした。しかし、それは何の原因なしにさうであつたのではなく、性來の病弱であつたり、將來自分は何をして身を立てようかといふやうな迷ひ、不安の爲に常に焦燥を感じてゐました。勿論青春時代の常として情欲も萠し、戀ひも思はぬではありませんでしたが、正直に小心に考へる性質の自分は、今そんなことを思つてゐられる境涯ではないといふことが、いつも頭を支配してゐたので、そんな餘裕など無かつたのです。

丁度マウパツサンの、ある短篇の中に、年老いた夫婦が、若い新婚當時から老境に入るまで何十年の間、一心不亂に、ずつと働き通しに働いた、彼等は生活の爲に忙がしかつたので、人生の歡樂を、その最も享樂するに爲し效ひのある若い時代に味はゝなかつた遺憾

といふやうなことを老いての後、せめて埋め合はせをしようとして春の野邊に歡樂に耽つてゐるといふ意味のことを書いた物がある。大抵の人はそんな經驗のあることだと思ふ。卽ち老後の享樂は、ともかくも、若い時分に、自分は、將來どうかなりたいと思ふ人間は、勉强盛り、向上の最中に、うつゝを拔かして戀愛三昧に耽つてゐられるものではないのだ。況んや私には、戀愛といふ心理狀態の波瀾は少し刺激が强過ぎて、苦々しい味は殘るが、到底甘い追憶など殘つてゐません。

十代、二十代、三十代、四十代と、十年づゝの各期を振顧つてみて、――少し問題外であるが――十代は流石に純な空想に富んでゐて、又懷しくもある。次に二十代の青春時代が自分には最も忌はしい。一番不安と迷妄との時であつた。無論學問などはその時期に大に進歩したにはちがひないが、その半面には、次の三十代以上に不安に充されてゐたことを思ふと最も厭な時代であつた。何をするにも思ひ切つて樂むことが出來なかつたのは、その青春時代なのだ。文筆で生活するといふことは、最も危險な道であつたが、到頭その道へ入つていつたのもその時代であつたが、それが常に不安と迷ひとの間に仕方なくさうなつていつたので、確乎たる自信があつたわけでなく、殆ど冒險であつたことを思ふと、實にその頃の心細さは名狀することが出來ないばかりであつた。

若々しき青春時代は、絶えず惡夢に襲はれてゐたと申してよろしいのである。

（十一年四月。婦人公論）

竹內秀才の心事を悲む

（間貫一、源頼朝、自分の經驗）

去る十一月十日の初夜小石川區高田老松町で行はれた秀才の慘劇は、思つてみるだけでも被害者加害者共に慘鼻の極みであるが、個々の場合を深く窮めてみたならば、如何なる類似の事柄といへども、全然同一の事といふものは此の天地間にないのであるから、一概にいつてしまふことは出來ないけれど、あの樣な慘劇及びそれに類する動機より生じた怨恨といふやうなことは、これまで世間に甚だ類似の多いことである。今回の慘劇が特に世人にショックを與へたのは、申すまでもなく、そんな兇暴なる慘劇が、最高學府の、しかも、人間の行狀品性について是非善惡を研究する倫理學專攻の秀才によつて行はれたからである。自分はそれこれを思ひ合はせ、斯の如き慘劇が決して善であるとは聊かも考へないが、殆どそれは、普通の場合の批評を超越したことで、遂行者がさうと最後の覺悟をしてしまへば何とも致方のない事である。

娘を某に嫁せしめた。某は怠惰漢で末の見込みがないから、本人の娘もつくぐ〳〵御亭主に愛想が盡き、娘の兩親は尚ほ更のこと、某に見切りを付けて娘を離縁して取戻してしまふ。ところが某の方では何處までも女房に未練があるので幾十度となく兩親に哀願し、後には脅かしたりなどして元の鞘に收まるやうに頼むが、兩親は頑として應じない。さういふ場合に、某の心事は倍々荒寥として胸の傷は何としても癒やすことが出來ない。さういふ心の狀態でゐる時に双方きしみ合ひ、昂奮の結果は極度の憎らしい賣言葉、買ひ言葉が一層劇しく胸に喰ひ入り怨恨骨髓に徹して、「畜生どうしてくれよう。」と、こゝに漸く殺意の萠芽を兆す。こんな、場合もし兩親は某と仇敵の仲であつても、本人の娘が一點……眞に一掬の溫味たりとも某に對して抱いてゐたら、彼の心は大に救はれるのであるが、本人の心が全く某から遠く去つてゐたとしたら、到底行き着く處まで押していつて最後の慘劇に終らざるを得ない。知識階級ならざる階級には比々として此の種の出來事がある。個々の場合は仔細に見たなら、いろ〳〵異つてゐても、大體そんなものである。

竹内秀才の場合といへども恐らくそんなものであつたにちがひない。無論あの場合には金錢や財産のことは少しも混つてゐなかつたと想像せられる。竹内秀才は窮極するところ唯單に、はる子の心を自分の物にしたかつたのであつたといふことは疑ひを容れない。自分は三四の新聞に散見するところによつて想像するに過ぎないが、たしかにその通りであらうと思ふ。娘の父母を慘殺したといふので、感じがいかにも兇暴で、荒寥としてゐて色彩に乏しいけれども、これも畢竟するに灼熱せる戀愛悲劇である。戀愛悲劇であるが故に自分は竹内秀才の心事に同情の涙なき能はぬのである。直接行動の暴擧は對個人的であつても對社會的の場合であつても、自分の最も反對する所であるが、個人的の憎惡怨恨の感情は——殊にそれが戀愛に關係した場合、異性の問題である場合くらゐ深刻なものはないので、直接行動の暴擧は絕對に反對しつゝも、自分は、その當事者の心事を嚙み分けて、一點「無理もない」と思ふことがある。

社會的感情に發した直接行動といふのは、申すまでもなく、大鹽平八郎の爲たことなぞ

が最も好い實例であつて、一般世人の常識から云つたならば、個人的感情によつて暴擧を敢てした者に比較して、前者の方に倫理的價値を餘計に置かうとするのが常である。そして、それが戀愛の悲劇であつた場合などには、殊に嘲笑的に、一婦人の爲に堂々たる男子が自他を害して貴重の生命を果たし、醜名を世人に歌はれるなぞといつて、殆ど一と口にケナしてしまふ。

無教養の者の場合と高等知識ある者の場合とは、こんな時に、娘の父母の肉を喰つても尚は飽き足りないと思ふ心は同じやうであるけれど、その心の内容が多少相違することは有り得べきことである。殊に高等教育を受け、倫理學を修め、人間の行狀の是非善惡を攻究してゐる者などは反省や洞察が人一倍深刻で緻密である筈だから、同じ兇暴手段に出るにしても、そこに倫理的批判が一層嚴正に明確に自他の言動に對して加へられたらうと思ふ。しかしさうは思ふけれど、今度の事は、何度もいふとほり、無教養の者の上にも屢々起る、戀愛に絡まる慘劇であつたことは何としても否定する譯にはいかないやうだ。又さう見るのが、竹内秀才に同情するに一番同情し易いことにもなるのである。單に倫理的意味から、嚴正なる批判、つゞいてその膺懲のつもりで橋本夫婦を殺害したとか、社會改進の爲めに頑迷なる舊思想の徒を滅ぼさうとしたなどゝいふのは、あまりにおこの沙汰といはねばならぬ。さて戀愛の感情が變にこじれ、極度の憤激から遂に堪へんとして堪へ切れず、遂に兇行に及んだものであるとして、それまでになるまで、竹内と娘春子との感情の交錯はどんなものであつたか、それも吾々直接關係のない者には、いさゝかも知る由もないが、貴重な一命を棄てゝ、あれほどの慘劇を敢行するくらゐだから、二人の關係は相當深かつたものであつたと想像される。

一體許嫁（いひなづけ）といふことが、そもそも可くないことで、尤も竹内と春子との場合は、竹内の方で深く春子を思つたものとすれば、竹内にとつては初のうちだけは許嫁が不都合を招來しなかつたかも知れぬが、最後があんなことになつてしまつたのでは、やつぱり許嫁といふことが不可であつたといはざるを得ぬ。無論その相談が、双方の親達の間に成立した時分

には、少くとも一方の竹内の方は相當思慮の熟した青年であつたから、當人の意思をも篤と訊いてみての上で爲た約束であつたらうが、片方の娘春子はまだほんの子供であつた。そこにもう一つの最も大なる破綻の原因が伏在してゐた。前にもいつた如く、あんな場合、たとひ兩親の意向はどうであらうとも、當の本人同志さへ感情が一致和合してゐたなら、そして意思が堅かつたならば、いかなる他からの障害をも斥けることが出來るのである。然るに最初からもう娘春子の意思は親達によつて左右されてゐた。そして竹内が、段々橋本夫婦の期待に反し、その氣持ちと相容れぬやうになるに連れて、春子は又兩親の氣持ちに同化されてしまつたやうである。それとも彼女は父母と反し最初から竹内を好まなかつたのか。まさか、さうではなかつたらう。否な此の少女が追々物心が付くに從ひ、きつと一度は春子自から竹内を愛する心になつてゐたに相違ない。それ故にこそ、竹内の心では、たとひ兩親と自分とが氷炭相容れぬ仲となり、感情の確執があつても當の春子は自分の方に心を寄せるに違ひないと思つてゐたかも知れぬ。

生活上の狀態や、その他の境遇にいろ〳〵の違つた處は多いが、やゝ竹内と春子との場合に似た、著名な、文學上の事件としては例の「金色夜叉」の間貫一とお宮とがある。又日本歴史上に有名なる人物の逸事として源頼朝の若い時にそれに類例した事があつたのは人の熟知せる所である。

貫一も頼朝も遺恨骨髓に徹したが、女の兩親を殺害しはしなかつた。こんな場合怨む者を殺害したからといつて、殺害を敢てした今囘の竹内の方が、貫一や頼朝の無念憤怒よりもその深度が高いとは必ずしも云へない。否な或はその反對に直接行動の復讎を敢てしない者の方に或は一層怨恨憤怒の感情が深く内訌する場合もあらう。しかし貫一は幾度びか自殺を思つたか知れなかつたが、その自殺をすることも出來ず、却つて自殺を斷行する勇氣があれば、此の懊惱はせずとも濟むであらうにとさへ思つて慨き悔んでゐる。お宮の兩親は春子の兩親橋本夫婦と異り、初から眞綿で首を締めるやうな、飽くまでも婉曲なる態度で貫一の手から、一旦與へたお宮を奪ひ返さうとしたのであつた。けれども、いくら婉曲なる

態度であるにしてもお宮は遂に貫一から取り返されてしまつた。貫一の恨み知るべしである。彼は遂に一婦人の爲にその前途多い一生を棒に振つてしまつた。竹内の如く、殺人は敢てしなかつたが、その爲に高利貸しとまでなつてしまつた。實に金が敵の世の中であると骨に徹して知つたのである。

よく、貫一とお宮とは許嫁の仲であり一旦は相思の仲であつたが、貫一とお宮とはもう肉體上の關係があつたらうか、どうであらうなどゝいふ物好きの讀者があつたものだが、今度の竹内と春子とはその點はどうであつたか。それは外部から知るよしもないが、もしそんな關係でもあつたとしたら、いよ〳〵以つて春子はあまり賢い女性とはいへない譯であるけれども、そんなことはなかつたやうにも思へる。しかし、そんなことはまあ何うでもよい、たゞ世上には竹内と春子以上にもつと深い情交がありながら、終ひには之に類する慘劇を見る例が頗る多いのであるから、竹内が、果して若しそんな關係もなく、只管橋本夫婦の剛情、冷酷、食言を怨み憤つた一時の感情に驅られて爲たものとすれば、（これは竹内の眼に映つたものとしての）何としても、あまりに兇暴であり、又餘りに思慮が無さ過ぎ、あまりに意志の制止力が足り無さ過ぎ、あまりに陰忍といふものに缺けてゐた。

陰忍！　自分はかういふ場合は陰忍といふことが最も大切であると思ふ。その陰忍の最も好い實例は卽ち源賴朝の場合であつた、賴朝が伊豆國に流罪せられてゐる時分、その國の豪族伊東祐親に賴つて居つた。祐親には四人の娘があり、その三人めの娘と兵衞佐と人を忍ぶ仲となつた。すると娘はいつしか兵衞佐の胤を宿し、生まれたのは玉のやうな男の子であつた。兵衞佐は殊に悅んで寵愛してゐた。字を千鶴と呼んでゐた。それがやう〳〵三歲になつた春の頃、乳母に懷かれ、多勢の幼いお供などを具して前栽の花を折つて遊んでゐると、祖父に當たる祐親が丁度京都の大番が果てゝ東國に歸つて來て、ふとその幼い子供を見付けて、「その子供はどうした子だ、たれぞ。」と訊ねた。傍に付いてゐた乳母は、卽座に答ふる術を知らないで、自分はその場を向ふに逃げてしまつた。祐親は家に入つて、妻女にそれを訊ねた。妻は隱さんよしもなく、「あれぞ、入道殿が京洛に上りておはす留守

の間に三女がさるやむごとなき殿との仲に設けたる幼き者にておはす。」と、實を明かした。祐親入道怒つて、「誰れぞ、そのやむごとなき殿とは。」と責め問ふた。「兵衛佐殿」といふを聞いて、祐親はます〳〵立腹し、今平氏全盛の折柄、商人修行者など名もなき者を男にしたといふならば却つてそのまゝにさし置いてもよいが、源氏の流人を此の祐親が婿にとつたと知れては平氏の咎めのほどが恐ろしい。といつて、雜色三人、郎黨二人に嚴命して、やう〳〵三歳になつた可愛さかりの千鶴をば縛して水底に沈めて殺してしまつた。そしてその母親なる娘を同じ國の住人江間小次郎なる者に嫁せしめた。兵衛佐の憤りと悲しみと思ひ知るべしである。愛兒は慘殺され、愛人は奪はれて他の男に與へられた。萬事が專制主義抑壓主義のその時代のことであるが、賴朝はつく〴〵と流人の身の甲斐なきを悲み歎いたことであらう。彼は激怒の情止み難く、祐親入道を討たんと思ふ心、千度百度も逸つたけれど、そのたび每にぢつと煮え立つ胸を撫でゝ、無念の頭を張り、「いや〳〵自分は大事を思ひ立つ身である。その事を成さずして、今婦人の事を以て私の仇を報じ、身を亡ほし

命を失ふ事愚かの至りである。大なる志ある者は、少しの怨みを堪へねばならぬ。」と、吾れとわれを制止し、無念の齒を噛んで時節の來るのを待つてゐた。

賴朝の如き男性的の英雄偉人とて、やつぱり凡夫と同じ煩惱はあつたに相違ない。それを賴朝は陰忍した――。賴朝の如き鐵の意思の人間を例に引いて來て何故その通りに出來なかつたかといふのは少しく比偏を失してゐるやうであるが――賴朝の憤恨は、祐親入道を討ち果たして當座の無念を晴らさなかつたからと云つて、必ずしも、橋本夫婦を慘害して無念を晴した竹内秀才の場合の方が、その憤恨が一層深刻であつたとは斷言出來ない。

成程祐親は賴朝に娘を嫁せようと約束したものではないから、食言といふことはなかつた。橋本には食言といふ背德（といへば、いはれるやうなもの）があつた。けれども、それが爲に祐親入道の場合より一層怨み強く、彼れ討つ可しといふ理由は加はらない。寧ろ祐親の取つた爲行の方が遙に殘忍であつた。少しく主題を離れるやうであるが、興味あるまゝ、もう少し源賴朝の事をいはう。「源平盛衰記」に尙ほ次のやうなことがある。

入道が子息伊東十郎祐兼竊に兵衛佐に申しけるは、

「父入道老狂の餘り、便なき事をのみ振舞ひ候ひし上、猶ほも惡行を企てんと仕る。心の及ぶ處制止仕れども、若し思ひの外の事もこそ出でき侍れ。立ち忍ばせたまへ。」と申しければ、兵衛佐は、

「嬉しくも申したり。是れ年來の芳心也。入道に思ひ懸けられては、いづくにか遁るべき。身に誤なければ、自害をすべきにも非ず、只命に任せてこそはあらめ。」とぞ答へける。

大鹿毛といふ馬に乘り、鬼武といふ舍人ばかりを具して夜半にぞ遁れ出でける。道すがらも「南無歸命頂禮八幡大菩薩、義家朝臣が由緒を忽ちに捨て給はずば、征夷將軍に至つて朝家を守り、神祇を祟め奉るべし。それ猶ほ叶ふべからず、伊豆一國が主として、祐親法師を召捕つて、其の仇を報い侍るべし、いづれも宿運拙うして神恩に預るべからずば、本地は彌陀如來に御座します。速に命を召して、後世を救け給へ。」とぞ祈誓し申しける。

そして頼朝の戀の憤怒は此の一度ばかりではなかつた。伊東祐親を遁れて北條時政に投じ、又時政の娘と通じた。時政も祐親と同じく平氏の咎めを恐れてその娘を奪つて他の男に與へた。けれどもその娘は、先の祐親の娘と異り佐殿を想ふ心が殊に深かつたので輿入れのその晩新夫平兼隆の館を夜によぎれて脱出し頼朝の許に身を寄せた。兵衛佐は此處に始めて戀の勝利者となつた。彼は政治家として又武將として七轉八起の波瀾を凌いで來たが、戀のローマンスに於ても亦たさういふ數々の憂き目を見てゐるのだ。事情は多少の相異はあるが、竹内の春子、貫一のお宮、頼朝の祐親の娘、此の三人の女性は一人の北條政子と異つてゐた。政子は凛然として自分の意思を持つた婦人であつた。お宮は後になつてあの通り後悔してゐる。祐親の娘についてはそれ以上に多く知る所がない。當面の橋本春子についても多く知らぬが、彼女の今度の慘劇に際しての役廻はりは、外見如何にも意思のない、泥工の坊のやうな、食ひ足りない女性と見えるが、彼女もきつと後には竹内の性情を忌み嫌つたのではあるまいか。必ずしも父母のいふがまゝになつて竹内を避けたのではない、自分からも竹内を嫌つたのであると思ふ。それは、どうも竹内の性癖が招いた自業

自得といはざるを得ぬ。新聞紙の記事のみでは當てにならぬが、竹内の性癖に、天才肌の人間に得て有り勝ちな偏執な處や、剛情な處や、又、女からいつて、何となく面白くもない好かない男といふやうな處が多くあつたのではないか、果してさうであつたとすれば、それは何うも仕方のないことで、女に嫌はれたのは男彼れ自身の不覺、碎いていへば色修養が足りないのだ。況して素人娘の、世間を知らない普通良家の兒女であつてみれば、たゞ優しい深切な溫情の籠つた、その上美男子を好くのが通り相場である。北條政子の如き巾幗者流に稀れに見る、目先きの利いた意思の女にして、始めて並はづれた男を選定するのだ。時は平氏の天下、祐親や時政の如き武人ですら危險視する、流人の賴朝に何處までも心中を立て通したといふのは、どうして何うして大變な大賭博を打つたものだ。そんなことはお宮や春子には望めない。

それから又斯ういふこともいへる。竹内は眞個に春子を心から愛したであらうか、それは凡ての物を犧牲にすることを厭はない、唯一人の春子さへ得れば吾が生涯の望みは足る

といふまでに春子を自分の物にしたかつたであらうか。若しその通りであつたならば、如何なる陰忍をしても、屈辱に甘んじても、他の凡ての自我を殺して、春子を自分の物にする爲めに彼女の兩親の前に從順であるべきだ。しかし、竹内にはそんなことをする氣は少しも無かつたらう。女の兩親に對して動ともすれば高壓的な態度で臨みながら、尙ほ且つその娘を得ようとしたのであらう。それでは若し春子に少しの蟲でもあるなら、自分の親を粗末に思ふやうな男は賴母しくない、厭だといふ氣にもなるであらう。

竹内と春子との場合は、度々云ふ如く、自分は何等の委しい内情に通ぜぬのであるが、一何としても竹内は餘りに若氣の至りであつた。世間に傳ふるところによれば、彼は思想界の新人であつたといふが、書籍と、人間の實生活とは又別物である。空想の世界ばかりに住み馴れたハムレットが、一度現實世界の幻滅に面して爲す所を知らなかつたのにも類してゐる。ハムレットが身を滅したとほりに竹内も遂に現實に打つかつて身を滅ほした。けれどもハムレットの運命は十重二十重に彼の身を縛してゐて、あれ以外に爲すべき術はなかつ

たのだ。竹内秀才の事情は遙に簡單である。それくらゐの憤りや艱難を陰忍し、踏み越して進むほどの意思や耐忍力が無くして何うする。

喧嘩をしつゝ人の娘を貰はうなどと思ふのは餘りに人を馬鹿にしてゐる。いくら舊式の頭の持主であつても人間には皆な蟲がある。眞實に女を愛する心が深いものならば、その兩親の爲に履物を揃へるくらゐの忍辱がなければならぬ。一人の婦人の爲に人を殺し自分も死ぬほどならば、餘程一本氣に思ひ詰めてその女に愛着してゐたものと見なければならぬのだが、それほどまでに強い愛着があるならば、自分の他の自我を抑制してその女を得ることに努めねばならぬ。それはせず、毎時も驕傲な顔をしてゐて人の親の手からその愛兒を獲得しようとする、昔の暴君と雖もしなかつた、極めて愚かな方法である。新思想、自由思想の先驅たらうとする者の行爲として、これくらゐ矛盾したことはない。

竹内の殺人及び自殺の原因が、私の最屓目に見る通り專ら戀愛にあつたか、どうか知らぬが――、私は强ひても戀愛であつたと解釋するのが一番同情のし易い事のやうに思ふのである――。そして果して戀愛であつたとすれば、彼の戀愛に對する修業や實に齒痒いほど幼稚なものであつたといはねばならぬ。そもく\戀愛といふものは實に神變不可思議なもので、生きた人間の心理を捉むのである。そして戀愛の場合くらゐ人間の心理が男女に係らず、機微に、活潑に働くものはない。高が一婦人を對手にするなど何でもないことのやうであるが、その實、兩性の關係がうまく調子が合はなかつたら、高等學校の入學試驗や大學の卒業論文などに比べて其の難易到底一日の談でない。昔時は前述の如く源頼朝の如き大政治家の武將でさへ悲戀の苦味を認か嘗めてゐる。失戀は必ずしも恥辱ではない。自分など餘程女の親を殺さうと思つたことが幾度もあつた。而してそれを爲さずに過ぎたからといつて、その悲憤の程度が低かつたとは斷じて思へない。何處を突いても自分の體は戀愛で鍛へ上げた體のやうな氣がしてゐる。竹内秀才などは、まだく\戀のイロハである。

（大正十一年十一月中旬。女性改造）

文壇偶語

エヌ君

新らしき文壇に對する忌憚なき批評と云つたやうなものを書けとの御下命でしたが、私は生憎その新らしき文壇の諸士の物を餘り見て居りません。

いつか、貴兄と秋聲氏と三人で街をぶらついてゐた時、秋聲氏が、私に向つて、「主觀的な人間だなあ。『紙治』か『新ノロ』でなければ聽かうとせぬのだから。」と言つて笑ひました。その時は、何處か寄席に入つて女義太夫でも聽かうといふ相談が、歩きながら持ち上つたのでした。すると僕が、彼處も此處も出し物が惡いから厭だと駄々をこねたのです。私は屢々、人から主觀的と見られる。併し又大に客觀的と見られる場合もある。自分ではむしろ人に比べて大に客觀的だと信じてゐるのですが、主觀的な處もありませう。例へば、私の好きな古人の俳句にしろ、私は芭蕉だけは可なりよく玩味いたしますが、その他其角と

か嵐雪とかはさまで熱心になりません。これ、恰も大近松は熟讀しながら、出雲や半二がそれほどにないと同じ道理でありませう。

勿論大なる理由の一つは、私の頭が近來ひどく衰弱して來て、とても根氣ある讀書に堪えられないせゐも有りますが、本來私は、例へば芭蕉の俳句の味によつて名狀し難い好い氣持ちになられたとすれば、その好い氣持ちを、他のそれほどでもない、劣い俳句の味によつて傷けることを甚だしく好みません。俳文などを比べて讀むと、一層その區別が明瞭です。芭蕉だけは、どうしても正風と云つた處があります。銀座の松喜や本郷の豊國などへ秋聲氏と三人で度々行きましたが、あの美味(うま)い出汁(だし)でも後からあとからいろんな物を注込むと段々不味くなります。

極端に申せば、淨瑠璃の丸本の興味は大近松一人で澤山。俳句ならば芭蕉一人で結構。明治の邦畫では橋本雅邦一人で、他の畫家は一切無用。と、かういつた譯で小說も下手な作品を數多く並べられたのでは閉口です。貴兄は私の平素の心持ちを諒解して下さる

から誤解はありますまい。上手下手と申しても、決して單なる技巧のみについて云ふのではない、例として芭蕉と爾餘の俳人との比較を持ち出した一事でも分りませう。

その意味に於て私は、十數年前自然主義の新に勃興した當時の作品に就いても多くは慊焉ないものがありました。成程自然主義の說には首肯し賛成すべき處がある。――往々極端に走つた田山氏等の獨斷說には首肯しかねるとしても――說はよいが、實際の作品になると、いかにも愚劣な物が多かつた。自然主義運動の、又早稻田派の寵兒であつた正宗白鳥氏などの其頃の作品について見ると、どんな投げやりの物を書いても、それが殆ど絕對無條件的に歡迎され、傑作として通過したものだ。私はあゝいふ、狐にとり憑かれたやうな文壇の風潮を甚しく好みません。

一體早稻田では故人島村抱月氏が最も明かに次の如き論理を持してゐた人です。

新しい物には、どんな劣(まづ)い物にでも意味がある。

斯ういふのです。成程それには半分の眞理はあるが、全部の眞理はない。一寸見には溫

順しい、隱遁的な、書齋の人らしく見えてゐて、その實案外、世俗的な、仕事師であつた抱月氏の事だから、當時の文壇を飽くまで機略的な立場に在つて取扱つたものとして見れば、抱月氏の心持ちも全然首肯出來ぬこともない。卽ち當時尙ほ尾崎紅葉などの系統を引いた、舊い技巧の勝ち過ぎた作品が專ら文壇の中樞勢力を成してゐたのを破壞し改造して、新しい物を產み出さうとする企てとしては時宜に適まつた態度であつたかも知れぬ。けれどもそれは極めて外部的な仕事であつて、仕事といふ文字の聯想から譬へて云へば畢竟仕事師——卽ち植木職の仕事に過ぎない。植木屋は種々な花卉が銘々に造化の惠みによつて發芽し成育する爲にその外部の援助を與へてやるに他ならぬ。

さて一應舊物を破壞してみて、——舊物を破壞するには、策略としてゞも下手な新しい物をも優れた物として押立てねばならなかつたが、いつまでもその劣い物では困る。俳諧史の上でも芭蕉以前には破壞せねばならなかつた舊物があつた。淨瑠璃史の上でも大近松以前には破壞せねばならぬ物があつた。自然主義運動は果して破壞とゝもに其後に俳諧史の芭蕉、淨瑠璃史の巢林子ほどの結實をして見せてくれたでありませうか？

私は、此の點に於て、是が非でも新しい物ならば、劣い物でも好いとした、先に申した如き島村抱月氏等一味の論理の缺陷の可なり大きなものであつたことを悲まずにはゐられませぬ。當時それを飽くまで徹底して云へば、色々な世間的の事情で抱月氏と私との間が不味なものになる。私も當時大分遠慮はしてゐたもの丶、さういふ理由に於て、抱月氏とは三分の好感は保留してゐても、あと七分は好感ならざるものでありました。

エヌ君足下。私一個の場合にては、人生五十功無きを耻づとかや。私もやがて五十に近づいて來ながら、碌な小說一つ出來さないのは誠にお耻しい次第でありますが、あの自然主義時代のやうに、我れ勝ちに、どんな劣い物でも書いて早く名を賣り廣めさへすればよいといふやうな態度は、私は餘り好みません。小說のみではない、演劇でも何でも兎角、早稻田の仕事師じみた遣り方は私は好かない。

これだけ申して來ると、私の、新しい物や時代に對する意見は略ぼ御諒察になるだらうと思ひます。茶器か骨董品のやうに、無意味にたゞ古くさへあれば宜しいと云ふのではない。抱月氏の論理の如き、新しい物ならばどんな劣い物でも推奬するといふのが、私の趣味にも論理にも合はないのです。自然主義時代の作品を今日取り出して讀んで御覽になるとよく分る。前述の意味即ち機略的の關係から、否でも應でも傑れた作品として持ち上げたといふ條件附の意味にては文學史的に多少の價値はあるかも知れないが、その時代的背景から切り放して見て、果して傑作かどうかといふ鑑定になつて來ると頗る怪しいものでありませう。淨瑠璃の巢林子や俳句の芭蕉は半面文學史的に破壞と改造とを行つてゐると同時に半面に於て完成されたる物を殘してゐるではありませんか。

自然主義時代の粗製亂造に寛裕であつた文壇は、義理にも今日の新しい文壇の粗製亂造に對して六ケしい事は申されますまい。自分達の物も、さまでにもない物を無上に賞讚せられて今日までやつて來たのであるから、今の若い人達の書く物だつて初から傑れた物の書けぬのも無理はない。といふ一種の思ひ遣りには、私も全然反對する者ではありませんが、しかし、いつまでもそれでは困るぢやありませんか。批判は寛嚴並び行はれねばなるまいと思ひます。

エヌ君

當面の新しき文壇に對して忌憚なき批判を試みてくれないかといふ依賴は、ほかの處からも一二ケ處より註文がありますが十餘年前の自然主義の昔から、少しく忌憚なき事を明らさまに云ふと、すぐ動機を不純な理由に曲解せられて、文壇的に、功利的の意味で損失を重ねて來てゐる私ですから、今はもう隱居の身分であり、以前がどんなに身知らずであつたにせよ。この年になつて、年甲斐もない、若い人達の折角苦心慘憺の餘に成つた作を無下にコキ下ろすといふことは、入らぬ罪つくりで、もう是れ、そろ〳〵死に用意をしても早くない時分に、そんな事をしては後生の障りになります。

併し、一つの運動（ムーブメント）を起さうとして、機略的に、一時の風潮を推進めようとする島村氏式

の立場は別として――さういふ立場は、ひとり靜に完成圓熟の藝術味を味はうと欲する僕の好尙とは兩立しません。藝術の園に青い葡萄が房々と實つてゐる。その葡萄をば香ばしく熟した時分を待つて徐ろに味はつてみようとするのは私の平素の心掛です。そいつを、まだ紫玉の如く熟するを待たないで、まだ澁い酸つぱい時分から行儀惡るく手出しをして捥りとつて、ぴちやぴちやと喰ひ散してしまつたならば、折角實の熟する初秋の清風が渡る頃になり、裸になつた樹枝を見上げてどんなに淋しいことでありませう。

俳諧にも淨瑠璃の丸本にも、はた草紙類にも芭蕉と巣林子と西鶴と、一人づゝあれば澤山だとする私のことでありますから、實を申せば今の小說界にも優れた作家が多くて、精々二三人あればそれでよろしい。お先ッ走りをしたい、功名心に燃えてゐる人があるなら、勝手になさい。私は退いて靜に、完成された藝術を與へてくれる人を待つてゐませう。ですが、

エヌ君。

私は時々斯樣な事を思はせられるのです。今日の新作家諸氏の多くが書いてゐられる物をちよいちよい眼にして「これで、此の人達は、今はよいが、年を取つてから、どうするつもりであらう?」と。

それは、キイツは二十五か六で夭死し、シエレイも二十八歲で死にました。それにも拘らず若い二人の天才は英國の文學史上に不朽の名篇を遺して去りました。いづれ日本の今日の文壇にはキイツやシエレイのやうな天才が雲霞の如く群つてゐるのでありませうから斯樣な事を申すのも、五十才に手が屆きかけてゐながら、何一つ出來かし得ない私の如き敗殘者の經驗からのみ割出した愚說であつて、世間に無數の天才達は、明日の日死なうとも、遺憾なきやうにチヤンと日本文學史上に手廻はしよく不朽の紀念碑を築いてゐられることゝお察しする。若し又そんな、緣起の惡い、早くから死んだ後の事まで考へるやうなことをせずとも、雀百までとかや、隨分長命して六十七十まで永らへても不相變今日のやうな若い作品を以つて傑作なりと心得てゐられたならば、それに優した氣樂な考はあり

ますまい。私どもは、さういふ樂天家になれませんので、當節ぱつたり行き詰つて、老後になつても耻しくない物を書かねばならぬと、そればツかりを氣に病んで居ります。

個人々々に明らさまに名指しをして云ふのは甚だアクスケな事になりますが、私は、新進諸家の中にもつと自分の天分について反省熟考してみることの必要のある人が可なりに多からうと思ふのです。誰れしも自分こそは創作家になりたいと思つてゐる。うぬぼれはありますが、今日の如に各人が或程度まで筆が進歩して來ては餘程秀拔なる才分のある人でないと出色の物は書けない。加之狹義にいふ自分の經驗ならば今日大抵の人が書きうるのだ。狹義の自分の經驗を書いても、それが强ち藝術として劣等な物とは限らないが、それをいつまでもやつてゐると種が盡きる。種が盡きた處で行き詰まり、その邊でどうしても新局面打開の必要を意識して來る。それを意識しないし、得ないやうな頭の人は、よつぽど批評感の鈍い人といはねばならぬ。併し强ち今日に始つた事ではないが、批評にお座なり多く、詰らない物にまで、センチメンタルに安々と直ぐ同感してしまつて、廣く見渡した眼の標準からは、實に々々無價値の物ですら、傑作とか何とかで、どん／＼通過するのであつては、眞實小說は進歩しないと思ふ。

全體批評家がよくない。創作の批評をするのでないから、妥には名をいつても、さまで當り障りはあるまいと思ひますが、何時だつたか、宮島新三郎君が、「讀賣」紙上でアメリカのダビツドかの批評論を引いて、日本の現今の創作及評論壇を論じ、批評は須らく嚴正公平でなければならぬことを云ひ、今日の狀態を慨して、人を責むると共に宮島氏自己をも鞭韃してゐた。私も頗る贊成に思ひ、氏の勇氣のほどに感心したのであるが、その宮島君が殆ど同時に「時事」紙上に發表したその月の小說評を見てゆくと、先日「讀賣」紙上で折角雄々しく揚言した覺悟が全然取消されてゐた。宮島君はそれでも自身ではダビツド式に忌憚なく遣つた積りかも知れぬが、見たところ、さうでもなささうであつた。私共は詰らないと思つてゐる物まで愛相よく激賞したりしてゐた。で、若し氏にして眞に立派な作品と信じて賞讚してゐたとせば、氏の批評眼たるや甚だプアなものであるし、腹ではさまで

に思はない物をも、如才なく賞讃したのだとすれば、折角ダビッドを揮り廻はしたのは一場の芝居であつたとしか受取れない事になつて來る。

創作家に向ひ、君の作品は劣いと露骨に云ふよりも、まだ幾許か、批評家に向つて、前述の如きことを責めるのは、對手の氣を惡くさする度が低いと思つて、宮島氏に對して斯んな事を申した。私自身が既に直言を憚つてるるのに、他人に向ひ、直言をせよといふのは、難きを人に求むるわけですが、しかし、私共は最早老骨である、氏の如き新進氣鋭なるべき批評家がそれでは困る。屡々故人の島村抱月氏を引合に出すが、故人は、私共のずツと若い頃、文壇に顏が廣くなつて、方々に氣を兼ねて物を云はなければならぬやうになつては、もう批評家も駄目だ。君達は今の内に眞實の事をいふやうにしなければならぬ。と語つた事がありましたが、何人に對つてもそれは困難な要求である。さうかといつて唯慢罵でもいけない。今日の新思潮一派の作家も隨分と相互扶助を行つてるるやうであるが、早稻田は昔から、相互扶助は餘り行らない、暫く行つてるても、後は喧嘩別れに終る場合が多いが、他流試合の場合に丁度宮島式に、片方「讀賣」では雄々しい覺悟の程を披瀝して慷慨淋漓たるものがあるかと思ふと、片方「時事」紙上に於けるその批評の實行に臨んで忽ち意氣挫けて、ヘナヘナとなつてしまふといふやうなのは、由來相馬御風君などの癖で、其の衣鉢を正しく繼承してるる點に於て宮島氏などは所謂早稻田臭い正銘の早稻田畑の批評家である。何だか宮島氏一人を名指しにして槍玉に上げたやうであるが、批評家としては、氏などは――内實は知らず――創作に對して二心なく、今のところ專ら批評家で立つてるる人だから敢て囑望した次第であります。

エヌ君。

貴兄などこそ今や最も大にその稀有の大才を發揮するの時と思つてるるのです。今日の新しき文壇には短篇向きの器用の人には乏しきを憂ひないが、それは丁度五月三日より五日まで夏物大賣出しの小切れ類のやうな物であつて、着物や羽織になるやうな反物が乏しいではありませんか。私共は昔から藝術を困難な仕事だと心得てるます。全體私自身を省

みて、私の如き者の書いた紙片が四百字詰一枚が幾許(いくばく)の錢に値するといふことは、假令米價一升が六十錢の時代とはいひ乍ら不思議に堪へない。尤も折々周圍を見廻はして、それでは自分の物も錢に換へてもよからうと、つい太い量見にはなるやうなものゝ、本當なら技巧に着想に、ずつと本磨きのかゝつた立派な藝術になつてから錢にすべきものと思ふ。藝術の創作は、本來の理想をいへば金錢は第二第三の結果に過ぎないので、譽れそのものも亦た第二位にある。第一義は作家が、本當に意に充ちた物を作り得たといふ滿足の感じで報ひらるべきものと思ふ。そして餘程自惚の強い人間ならば——尤も、今日の新らしき文壇にはさういふのが多いやうだが——詰らぬ駄作にでも滿足して安心してゐられやうが古今東西の名流大家に伍して文學史上に不朽の名を輝かすほどの傑作佳品を拵へるのは、生やさしい辛苦ではない。その辛苦の結果、古今東西の名品佳作に比べて、必ずしも遜色のない物を作り得た滿足と譽れとを高遠の理想として努力する所に、可惜男一匹、五十年の生涯を此の事に擲つて敢て遺憾なしとするのではありませんか。然るにです、しかるにです、今日の文壇の如く、安々と、毎月幾十篇となく佳作名什が出來、友達が少しくその月で眼に立つ物を書いて噂に上つたからとて、自分までがお交際(つきあひ)に文壇の新進作家に祭り上げられるとは、此のくらる手數のかゝらぬ、骨の折れぬ、氣樂な仕事はありますまい。世間の阿呆の親御達は、ほんとの親馬鹿チャンリンで、友達つき合ひとも知らず、內の伜の名が新聞や雜誌の活字に載れば、大層な事のやうに心得て嬉しがつて御座るだらうが、誠に笑止の至りです。苦心努力の結果、少數の選ばれたるものしか容易に到達し得ない光輝ある仕事ならば苦心の爲榮えもあらうが、斯う天才の値が暴落又慘落しては、僕が宿昔の願ひも今日となつてみれば、畢竟少年の稚き空想に過ぎなかつたといふ感じのみが殘つてゐる次第です。

エヌ君。

新しき文壇の忌憚なき批評に代へて舊い文壇の人について云へば、それが自から新しき文壇に對する註文にもなりませう。最後にそれを一と口申して責任を塞ぎませう。私があ

なたに向つて秋聲氏の物を賞揚して語るのは、餘り珍しいはなしではない。決して清新な感じを第三者に與へないが、秋聲氏が四月に「改造」と「中央公論」とに書いた二つの短篇。「改造」の「ある些やかな恥」は大したものではない、藝術品と稱するほどの物でもない。「讀賣」紙上の月評で、上司小劍氏、「時事」紙上で加藤武雄氏は共に之を激賞してゐられましたが、どうも激賞の言辭以外に激賞の內容の意味が私には不明であつた。私は、其激賞の辭を寧ろ兩氏が「或る賣笑婦の話」の批評に用ゐられたならば、兩氏の激賞は正當に適中してゐたであらうと思ふのです。かういふ事は何でもないことのやうであり、殊に秋聲氏の如き間違ひの少ない作家には、どちらを賞めて置いたつて差支へのない事かも知れぬが、併し斯ういふ作家の物に對しても批評の選擇は嚴正にすべきもので、さうでないと平常秋聲氏の作に腹から感服してゐない者や、その他未だ批判選擇の見識の發達しない後進に對して、批評の信用を確實にすることが出來なくなりはしないかと思ひます。上司氏が本年の一月の「讀賣」紙上だかに書いた、秋聲氏五十年の讚辭は名文で、上司氏其人の秋聲觀を遺憾なく披瀝してゐたと、私も同感を以て讀みました。文學――小說の姿そのまゝを彫刻に移されるのは、ひとり秋聲氏です。「中央公論」の短篇「或る賣笑婦の話」などは、その技巧氏にとりては、敢て珍らしいものではなく、氏の長篇の中を探せば、あんな巧い技巧は到る處に散在してゐるのだけれど、私は、これを讀んでもやつぱり巧いなあと思ひました。無駄な、洗煉の足りない、燒點の分らないやうな物を書いて、それを非難せられゝば、腹を立てるやうな未熟で、驕慢な作家などは、かういふ物を熟讀玩味して、さらに一段の工夫を自己に加へる必要がありませう。

御下命の、新らしき文壇に對する忌憚なき批評がかくして舊き文壇に對する讚辭になつてしまひましたが、幸に御諒察をねがひます。（大正九年四月十六日。新潮）

女子教育と問題

昇格問題

目今議會では、貴族院あたりで高師、高工などの昇格問題が沸騰してゐる。もし、それを上院議員の間に政爭問題として利用しようとする者がありとせば、甚だ怪しからんわけだが、流石上院には、まさか、そんな不眞面目な人はない筈だ。故に上院に於ける其等の議論は、飽くまでも議員各自の眞面目な意見の發表として見てよい。

つひ先達ても、教育問題で質問演説をした高田早苗氏も、特に教育上の問題だから、政爭などといふ意味を避けたいと斷つてゐた。

上院では、その高田早苗氏と岡田良平氏とが此の學校昇格問題について、全然正反對の意見を抱いてゐるのが面白い。いづれも前の文部大臣である。

ところが、此の昇格問題について、私の意見を率直に云はしむれば、明かに「昇格不贊成」である。即ち岡田前文相の意見に贊成なのである。

自分は、高師、高工などの教職員並びに學生達が白熱して馬鹿騷ぎをするのが、本當に馬鹿らしくつて堪らない。私が、あの「寡默英斷」の原首相の地位にゐたら、中橋文部大臣などは何うなつたとて構はない。

……只今研究調査中だなど、、よい加減な事を云はないで、簡單明瞭一言の下に「高等專門學校の昇格は斷じて致しません。」と云つて退けるのだ。

歐米の教育制度はどうだか知らんが、我が邦には既に立派な大學がある。世上の子弟及び父兄にして、大學教育が受けたいならば、進んで大學に行つたがよいではないか。何者も公等の大學教育を授かるを妨げる者はないのである。

然して、高師、高商、高工等の高等專門學校の存置が國民の教育制度の上に、種々複雜なる理由や關係上、如何に必要なるものであるかは、殆ど贅するを須ゐないではないか。

之を一個人の立場に在つて假りに云ふも、自分が嘗て若し、其等の高等專門學校に修學したりしことを今に及んで悔ゐるならば、自分の子弟をしては、將來大學に學ばしむれば可いではないか。何人もそれを妨げる者はない。又、嘗て自分が高等專門學校を修學したものであつたならば、今になつて、其等の學校が昇格したからとて、彼れ自身の閲歴の上に何等の加ふべきところはないのである。

國家は國民を教育する上について、色々な手段方法を講ぜねばならない。大學教育ばかりでなく、高等專門學校程度の教育も必要なのである。

大塚や藏前の健兒諸君よ！　公等は須らく藏前の高工、大塚の高師出身たることを以て誇りとする程の意氣を持つべきにあらずや。

僕は嘗て早稻田大學の前身なる、東京專門學校の文學科に學んだ。僕の履歷は依然東京專門學校文科修業にて足れりと思ふのである。

それ故に、「文章世界」の「文士錄」編輯係りなどから屢々訊いて來る履歷などに、僕は常に依然として、東京專門學校文科修業と書いてやるのであるが、毎時も向ふで「早稻田大學」文學部と書き換へてゐる。僕は寧ろ、それを以て潔しとせぬのである。（大正十年二月初。讀賣新聞）

女子の高等教育

女子に、今よりもつと高等教育を施さねばならぬことは、今日何人も反對する者はなからう。今日の高等女學校の教育程度が如何に低いものであるかは、自分共、比較的、さういふ教育を修了した女子と會話を交へる機會が乏しいせゐか、偶〻共等に接してみて、寧ろ意外の感なきを得ぬのである。勿論今日の女子の中には、私共の出來ない、フランス語を流暢に話しうるやうな女も尠からずあるにはちがひないが、一般の婦女子の教育が案外にまだ低いのを認めて、私共、教育事業といふやうな仕事から甚だ遠ざかつてゐる者には、今日の女子教育といふものは、まだ此のくらゐの程度のものかと思はざるを得ぬのである。

生活改善といふやうな近頃流行の標語が、極めて物價的な、――例へば家庭生活に於ける女中廢止とか、衣服の改良とか、その他いろんな贅費の節約とかいつたやうな意味の事に用ゐられるのも、必ずしも惡いとは云はぬが、それが專らであつては好ましくない。物

質的改善も可いし、諸事節約も可いが、賢さうにいふ婦人の常識がそこ迄では甚だしく此の世界が殺風景である。

文物欝然として興隆してゐる時である。今の世にも、それは、成程才媛がもう既に鮮くないかも知れぬが、まだ〳〵もつと輩出してもよいと思ふ。そして、それを造り出すには一代の水準が相應に進歩してゐなければ望めぬことである。女子の一般教育の度を高めなければならぬ必要ある所以である。

專ら狹義の文藝についてのみ思つて見ても、今の女流歌人には才媛も相當に少くないのであらうが、小説などの作家は、今のところ一寸頓挫の氣味である。今や一人の一葉女史の如き者もなければ、納言、式部の如き才媛は到底望むべくもない。明治大正の文學は、女流の側に於て確かに平安朝の女流に比べて劣つてゐる。併し男子の手になれる文學は、思想や手法に近松西鶴等に比べて固より異つてはゐるが、確かに彼等よりも或物は進歩してゐるのである。

私は、斯の如く女流の振はざる事を以つて、確かにそれを、今日の一般女子教育のあまりの常識と平凡とに歸すべきだと信ずる。

數年前、一時浮薄なる文壇に線香花火の如き名を馳せた某女流作家の如きも、その作品に就いてみると、宛然是れ、普通の高等女學校に於ける校長先生の講ずる倫理觀程度の思想を背景とせるものに過ぎなかつたではないか。

此の際、昨年の新學期から東京帝國大學の文學部が卒先して女子に聽講を解放したのは最も時宜に適したことであると思つてゐたが、それに倣ふて早稻田大學の文法學部や、東京美術學校などが今春の新學期から門戸を解放して、女子に入學を許さうとしてゐるのは最も好ましい、女子教育の一進歩であると思ふ。

從來は、文藝等に對しても女子の理解力が餘りに單調で、脆弱で未婚女であつたと思ふ。從つて女子に悦ばれるやうな物は、吾々男子から看て、あまりに甘過ぎてゐるのである。借問す。「枕草子」の作者は、そんなに甘かつたらうか？　（大正十年二月三日。讀賣新聞）

女子の爲めに

――敢えて苦言を呈す――

過日も本紙本欄で申したことだが、女流作家の振はないのは、一體どうしたといふのだらう。今日になつてみると、やつぱり田村俊子は巧かつたが、俊子が一度び文壇を去つてから、今、文壇(創作)にゐるのは僅かに野上彌生子一人である。

中條百合子よりも吉屋信子の方が小說では本筋である。吉屋信子はたしかに巧い。「大阪朝日」の當選小說「地の果てまで」は、ところ〴〵だれてゐる處もないではないが、巧いものだ。作者の頭が、なか〳〵機敏に働いてゐて、そして性格を描き別ける手腕もある。觀察が細心で、又なか〳〵人の悪い(賢い)ところが見えてゐる。就中私は「地の果てまで」を一讀して、貧しい牧師の家庭を書いてゐる處が巧いと思つた。

先づ今日では、新しい女流作家では吉屋信子一人を推さねばならぬ。

「新小說」四月號の高群逸枝といふ少女の新詩は、いくら割引して買つても詰らぬ物だと

思つた。詩人らしい感操（センチメント）といふやうな物が少しもない。之れも小說の中條百合子のやうに談理である。倂も幼稚なる談理である。

○

あんな新詩を問題にするよりも、文壇は何故、國木田虎雄氏の新詩（「新潮」數月前所載）を愛讀しないのであらう。虎雄君の新詩はその着想といひ、感情といひ、文字の取り扱ひといひ、確に新時代の獨步だといふ感じがする。可愛い丘に寄する感懷、冬の曇り空を映せる水田の荒凉とした野景色に對して思ひわびたる感情など、どうしても乃父を聯想せしめる。そして獨步よりも一層近代的に神經が弱ゝしく、細つてゐるところがある。虎雄君には確かに故人の血が流れてゐる。

○

女流作家が振はないのは。――今より振つてゐた時分には、今より一層女子敎育が振はなかつたけれども――一つは女子敎育が振はないからであると思ふ。そして女子敎育はあつても、その精神に破格な處が缺けてゐるからだ。勿論女子敎育が女流作家を養成する事を目的としてゐるものでないことは、恰も男子の敎育が小說家を養成することを目的としてゐないと同樣であるが、今日の如く男子に小說家が叢生してゐる時に當つて、女流作家が曉天の星の如く乏しいといふは如何にした事か。家庭及び學校に於て、女子に小說の繙讀を禁ずる爲か？　非ず。父母が女子の才藻を嬉ばざるがためか？　否！　今日一般、相當敎養ある家庭に於て、いかなる父母が、吾が家の子女の才藻に富む者を認めて、之を喜ばざる者あらんや。今の場合、唯一般に女子の頭が男子に比べて、遙かに低能なるが故に才媛を出さぬのである。いかに女權仲張を喋々喃々する巾幗者流が、女子の側の辯護をしても駄目である。女子は今のところ、少數の例外を除いて、一般に低能である。そして女子敎育の方針――敎育者流が凡庸で、識見に乏しく破格の精神がなく、姑息因循であるが爲に、敎育せらるゝ子女も亦その通りの鑄型に箝められるのである。

小說脚本を創作するは、斷はるまでもなく藝術衝動であるから、それによつて金錢を得

ようとするのは卑しいなど丶、上品な家庭や臆病な女子教育家は思ふかも知れぬが、女でも創作に依て金錢が得らるゝくらゐならば鳶が鷹を生んだやうに、今日一般の父母から云へば、似ても似つかぬ才媛を生んだ名譽である。又創作によつて金錢を得なければならぬ窮乏を感じないやうな家庭であつても、男子であつたならば、徒食してゐるのは恥とせられてゐる。女子が職業によつて金錢を得る事は少しも卑しい事ではない。古俗な習慣から女子は男子を離れて、金錢――職業的に獨立せず、一生の禍福を擧げて他人に依つて怪しまぬやうに教育されてゐる。それゆゑに女子は常に男子に對して弱者の地位に置かれてゐる。

暫くさういふ一般論は措いて、手近に具體的に事實を語つても、今日物價も騰貴してゐるが、文士の原稿料といふものは相當に上つてゐる。女子に若し、雜誌の賣り物になるほどの小説脚本の書ける才媛があるとしたら、それが妻君であつても、未婚者であつても可なりの收入があつて、女子の最大審美欲なる三越や白木、松板屋などへ行くのだつて、さう一々旦那樣やお母さん、お父さんにおねだりをしないで、雜誌社から受取つた原稿料で隨意におほつぴらに長襦袢やお召のコートが買へるといふものだ。併かも箸よりも尙ほ輕い筆一本。資本といつたら、インキに原稿用紙位の物。こんなうまい商賣、一度覺えたら止められやしない。道理で男子には此の頃の筍の樣に簇々叢生するが、女流作家といつたら一人か半人くらゐしかありやしない。奥樣内職にしたつて、此の内職ならば下駄の鼻緒をすげたり、經木さなだを編んだりするのと違つて世間體も惡くはない。こんな好い商賣があるのに、藝者になつたり、タイピストになつたり、女車掌になつたり、交換手になつたり、妻君――その實、下婢兼子守女兼淫賣になつたりする婦女はあつても、女流作家にならうといふ心掛けの好い婦女の乏しいといふのは、愈々以つて女子はその能力を疑はしめる。淸少納言にこそ頭を下げても可いが、今日の女に頭を下げてよいのは一人だつてありやしない。

こんな事で女權伸張も糞もあつたものでない。一般にもつと女子の教育が進歩すれば、從つて、いはずと女權は伸張して來る。今日の女子は權利を伸張してやつたつてそれを運

用する頭がない。

尤も、男子の作家ばかり、ウョウョ出て、女流作家の出ないといふのも、一つは、男子の作家といふ奴が大抵その賣り出しの初めは、自分の道樂や失戀を賣り物にして文壇に乘り出す。流石に愼ましい女にはそれが出來ない。それで女流作家の賣り出す機會がないとも云へようが、そんな事をいつてゐては、倍々女流作家が臆病を好い氣になつてゐる。本當に女にしては好い商賣なのだから、もつと振興してもらひたい。死んだ大塚楠緒子さんは、臺處で煮物をしたり、いろんな家庭の用をしたりする間々にノートに誌して書くといふ話しを自分でしてゐたが、楠緒子さんは、一葉亡き後の唯一の才媛であつた。女の仕事として、こんな好い仕事はないのに、餘り女流作家の出ないのは、度々繰り返へすやうだが、女の頭が低能だからだ。職業婦人としての女流音樂家も段々多くなつたし、繪畫をやる人も多いやうだが、小說脚本の創作には餘り手を出さない。偶に出しても容易にある點までより上達しない。多くは、古い感想文めいた物を綴るくらゐが關の山だ。

併し和歌には才媛が多い。自分は、その中でも火の國の女王白蓮女史の歌を最も好む。女史の情想は狂熱で、大膽で、奔放である。女もあの位の年配になり、あの位の人生經驗（ヒューマン・エキスピリエンス）をせねば駄目かな。公卿華族の柳原家も、白蓮女史を出すに至つて、貴族院議員としての義光伯を出してゐるよりも、數等遙に平安朝の大宮人を聯想せしめる。上流の婦人にしては確かに月並以上、稀有の女性である。今日の女の中の花といふ氣がする。

今春になつて、帝國大學ばかりではない、早稻田大學でも女子に聽講を許すことになつた。女子は職業婦人になると、家庭の婦人になると、如何に係らず、もつと高等の教育を受けねば、とても吾々のお話對手にならぬ。花柳界などで年の效、人生の經驗を經た婦人は又その立場に立つて一種の哲學を持つてゐるから、偶に、話に一種の味のある婦人がある。けれども、それとてダメだ。本來無教育だから。良家の婦人にはそれがない。

それゆゑに、もつと教育の程度を高め、その點から吾々男子の談敵たりうるやうになつ

てもらひたい。

女子に對しては甚だ失敬だが、自分は、女子といふ異性が、吾々男子から見ると、一寸日本人が他の東洋國人に對するやうな氣がする。どうしても幾許か劣等であることは爭はれない。それが口惜しくば、もつと教育を受けなさいと申したい。富士川游博士は賞めたのか、貶したのか、何處かで、女子は被暗示性に富むといつてゐたが、私の見る所では、それは女子の教育が乏しいから、批判力が發達してゐないのだ。恰も大阪の市民が始終二大新聞の暗示にかゝつてゐるやうなものだ。東京の市民は容易に新聞くらゐの力でさう單純に暗示にかゝりやしない。(大正十年四月初旬。讀賣新聞)

上品な女と羽織

夏はもの疾うに過ぎて秋漸く深くなつた。服裝の事をお話をするにも夏衣のことは季節はづれとなつたが、これは、自分の毎年夏になると思ふことである。

私は、男でも今年の夏は殆ど夏羽織を着ずに通した。勿論多少でも儀容を正さなければならぬ場に臨むには男で羽織を着ないのは習慣上餘りに粗略に失するが、東京に一寸買ひ物があつて、丸善に行くとか、資生堂に入るとか、雜誌社に原稿を屆けて、ついでに金を受取つて來るとか、そんなことには私は、いつも羽織を着なかつた。夏の羽織ほど無用の物はない。況んや日光に避暑に出掛ける汽車、電車の中、山道を登る際など常に單衣の着流しで、おまけに奥日光の戰場ケ原を往く時には尻端折りでスタスタ歩いた。

毎年夏になると、きまつて、女の服裝で、私の氣になるのは、然り他人のことでも、ひどく氣になるのは女の夏羽織のことである。女でも五十前後から年上の老婦人が夏羽織を

着てゐるのは習慣からか、何からか、兎に角上品に見えるものであるが、近年猫も杓子も着る、若い女の夏羽織は、六月九月の頃に着る絽縮緬のたぐひ、七月八月の盛夏に着てゐる、紗のやうなものにしても、殆ど十中の九まで、却つて羽織を着ると下品に見えるのは不思議に思ふくらゐなものである。

日光の湯元は、東照宮のある日光の町から尚ほ七里の山奥で、中禪寺湖からも三里入らねばならぬ不便の地であるが、それでも近年次第に東京あたりの上流の客も往くやうになつた。私は八月から九月にかけ、その地に二十日餘り滯在してゐたり、又東京への往復に多くの遊散の旅客を見たが、女で上流と見える婦人に限つて羽織を着てゐなかつた。そして卑しい商賣をしてゐるらしい婦人とか、又、それでなくとも、そんな卑しい商賣の人間のする風俗を眞似てゐるやうな婦人が特に夏季の羽織を着てゐるのを見た。その區別は、私に可笑しいほど、そして、麥と米とほど明瞭に區別されて見えたのであつた。

私が箱根の宮の下で年々よく見受ける、ある家族多勢づれの、たしかに有產階級らしい浴客がある。その人達は、五十五六のお母さんも、三十餘りの娘も、その妹達も、弟達も悉くよく肖た上品な、クラシカルな容貌をしてゐるので、特に、それが物持ちの一家族であることが看取されるのであるが、中にもその三十餘りの一番姉さんで、もう夫のあるらしい婦人は、弟妹達とゝもに宮の下を散歩してゐる時、折々着物を取替へてゐる。富士屋ホテルの舞踏會で見た時には、お召の單衣を着てゐたが、晝間暑い處を散歩してゐる時などはよく紺絣の上布を着てゐるのを見受けた。彼女は甞て一度も夏羽織を着てゐなかつた。そしてお召や上布の着流しは彼女をして、決して彼女の境遇が貧しいといふことなど思はしめないで、一層裕福にさへ思はしめるのであつた。

不思議にも彼女の一家族を今年の夏は、日光の湯元で見た。箱根の時も彼女達の父親らしい人も見ず、又彼女の夫らしい者も見なかつた。いつも三十餘りの彼女を一行の年長者にして、あとは多くの妹や弟達である。そして彼女は日光でも箱根の時と同じやうに羽織といふものを甞て着ず、不斷は木綿物の縮の縞を着て夕方など、そこらを散歩し、八月の

末日光を出立して歸京する時には、中宮祠までのガタ馬車一臺に、その一家族が七八人ばかり乘つてゐたが、三十餘りの婦人は例の上布を着て、羽織は着てゐなかつた。妹達は明石の矢絣を着たり、弟達は一高の學生の着るやうな霜降りの粗末な洋服の汚れてゐないのを着て、帽子は、中には一人ヘルメットを冠つたりしてゐたが、なか〳〵好い階級の人と見えた。寫眞機など遠くから見ても精巧な物を幾つも持つてゐるらしかつた。兎に角そんな一行の婦人であるが、夏羽織を着てゐない。

八月十五日の夕方、上野驛を乘車して日光まで一つ汽車に乘り通した同乘者は多くなかつたが、一組三人づれの客があつた。華族か左もなければ非常な資産家の主人らしい三十歲ばかりの洋裝の紳士と、二十二三のその妻君と、小使らしい十五六歲の少年を供に連れてゐた。青年紳士は極めて靜淑な人で、上野から日光まで妻君とも餘り口をも利かず四五時間ずつと本を披いて讀み通してゐた。妻君は頭髮の眞上を大きく平にした、何といふか、私ども男には名の知れぬハイカラな、上品な束髮（中分けに非ず）に結つて、細面の顎の長い、色の白い、脊のすらりとした上品な階級の婦人であつた。彼女はお召の絣の單衣を着て、羽二重の、たしか更紗型の丸帶を締めてゐたが羽織を着てゐなかつた。そして此の一行が乘車した時に、プラットホームには三四人の袴を着けたりした見送り人があつたことなど思ふと、決して中産以下の人ではない。

すると不思議に、行く時に同じ汽車に乘つたその青年紳士夫婦と九月の七日日光驛から歸る時も同じ汽車に乘り合はした。その時は少年の小使の代りに中年の物馴れたらしい女中を供に連れてゐたが、端嚴なる青年紳士は往く時と同じやうに、車中何か研究雜誌をずつと讀み通して、若い妻君とも、携帶して乘つた洋食の辨當を取出して食べてゐる時のほか殆んど口を利かないで雜誌を見つめてゐた。若い美しい妻君は、今日は、柔かい水色の勝つた絽縮みのやうな、立てしぼの、しなしなとした單衣に、木槿か何かの大きな淡淺黄の染模樣のある白地の勝つた幅の廣い羽二重の丸帶を腰のまはり豐かに締めて、頭髮は此の婦人の好みと見えて、やつぱり過日の通りの束髮であるが、毛が濃く多いのと、顏の色が

冷えてゐるのとで、いかにも引立つて見える。けれども彼女は今日も羽織を着てゐない。そして縮緬の伏紗を解いて、白い毛絲の玉を轉がしながら、長い象牙の針で頻りに子供のシャツのやうなものを編んでゐる。彼等は私とさまで離れた處に腰を掛けてゐるのではなかつたが、折々二人で話す話聲さへ聞えて來ぬくらゐの低聲で靜かに口を利き合つてゐる。日光驛でもその二人が乘車する時に、プラットフォームに、袴を着けた鄭重な見送りが四五人あつたことを思ふと、上流の人に相違ない。日光驛から乘つた客の中にもう一と組みの男女二人づれがあつたが、それは、もう一二等待合室にゐる時から男は酒機嫌でクションに横はりながら、女の膝を枕に假睡をしてゐた。無論その女はクロト風の女で、暑い、むう〳〵するのに羽織を着てゐた。そして、どうしても、誰れが眼にも前者が上流の淑女であつて、後者が卑俗であることは一目瞭然たるのであつた。

更に、それよりも、もつと顯著な實例を語れば、八月の末四五日ばかり、山下の日光町東照宮の山内にこの一と夏避暑ましますある宮樣が湯元溫泉に遊散においでになつてゐるのを拜した。その宮樣は、臣下の舊大名の家から宮家へ御入嫁遊ばした方でなく、畏多くも今上と最も御近親の御間柄で、今は未亡人にておはします方である。私は、ある朝散歩しようとして、宿の入口を表に立ち出ると、そこへ毛色の綺麗な怜悧さうな小犬が二匹來かかるところであつた。綺麗な犬だなと思つて、私はそちらを振向くと、好い溫泉客らしい婦人が先きに立ち、それに若い女中らしいのが二人、學習院の制服を着た少年には、傍に洋服を來た事務員のやうな男が附いてゐたり、あとから二三人のお供のやうな男が附き從ふてゐる。先きに立つた三十五六と見える婦人は背のすらりとした、鮮麗な藍色の勝つた縱縞のセルの單衣を着てゐるのが、そのセルが、肩の折り目の處などが、たらりとして、いかにも上等の品である。私は華族などの上流の客であると思ひながら、犬が可愛いので、その一と連れと後になり前になりして歩いて行くと、學習院の制服を着た十二三歲の少年の傍に附いてゐた洋服の男は、少年の顏を窺くやうにして、

「殿下、舟にお乘りになりますか。」といつて訊いた。

私はその殿下といふ言葉が耳に入ると、ついと、その一行から脇へ退くやうにして後に下つた。華族と思つたのは宮樣であつた。

それから宮樣は湯の湖の岸までおいでになり、そこから和船を仕立てゝ湖水にお遊びになつたが、船におのりになる處に、湯治に來てゐる田舍の爺さん婆さんなど多勢手織木綿のコツ〳〵した着物に細帶のまゝ、湯疲れのした身體で、そこらに蹲まつて手拭を疊んで頭髮に載せたりして、宮樣の船に召すところを見てゐる。すると、汚い五つばかりの男の子と七八つの女の子供が傍にゐたが、宮樣の愛犬がその子供の傍に寄つて行つて嗅ぐやうにした。男の子供は恐がつてワアッと聲を上げて泣いた。姉らしい女の子が恐かないといつて聞かす。それと同時に、宮樣のお供の女中や、宮樣お自身もそちらを振返つて、

「これ〳〵まあちやん」と犬を呼び「大丈夫々々どうもしやしないよ……ふざけてゐると思つてゐるんだ。」と仰せられつゝ、なほも子供の傍から犬が離れぬのを見ると、女中より宮樣御自身で、二三歩、汚い子供の傍にお寄り遊ばして、小さい愛犬を横抱きにお抱き上げになつた。

「そんなにふざけるものぢやありません。」と仰有りながら、又舟の方にお戻りになつた。

それから三四日の間、度々そこの舟の處で宮樣のお姿を拜したが、單衣のお召物やお帶は時々變つてゐるが、それとて普通そこらの婦人が着る通例の明石とかお召とかいつたやうな縞の物と少しも代りはない地味なものである。帶なども通例の極めて目立たぬ物である。湯元をお立ちになる日、乘合馬車に若宮やお供と御一緒に窮屈を忍ばせられてお乘りになるのをお見受けしたが、その日の御身裝も極々質素におはした。そして、お櫛なども、ほんの手束ねにしたやうな微塵も裝飾のない、たゞ一と通りの束髮である。以前御所の風だとかいつて流行した、大きな庇髮などゝとは雲泥の相違で、誠に目立たぬ御風俗であつた。勿論夏羽織など召さない。恐多くも宮樣が、夏ばおり一枚お不自由遊す筈はない。

私は如上目擊した事實から歸納して、上流の婦人、困らぬ人達ほど、女は夏の羽織を着ないといふことを、前からさう思つてゐたが、今夏一層さういふ確信を得たのである。

歸る時湯元から中禪寺湖に出て來て、そこから馬返しまで男體山の中腹を歩いて下つて來たが、遊覽者は季節が九月に入つても、尙ほ絡繹として續いてゐたが、時々出會はす女で暑いのに夏羽織を着て登つて往く者を屢々見掛けたが、其等は田舍者らしい不恰向な丸髷を結ひ、田舍じみた手柄をかけた素人の女か、或は一見すぐ卑しい稼業の、だらしない女であるかゞ見分けられた。今年はもう夏も過ぎたが、凡そ女の夏羽織ぐらゐ無益で、そして下卑てゐて、人柄を惡くして見せるものはないと思つた。

そして又かう思つた。如上私の見たやうな羽織を着てゐない婦人が羽織を着たならば、或は上品に見えるのかも知れぬと、しかし、着てゐるやうな婦人は、着てゐても、着てゐなくてもダメな婦人である。彼等は憂き身をやつして精一杯身裝を凝らすのであるが、所詮ダメである。(大正十一年十月十五日。婦人公論)

人物の印象

岩野泡鳴氏

ある人が、泡鳴氏が何か云つてゐるのを見ると、塚原卜傳のために島に置き去りにせられた、何とか云ふ淺慮の侍を思ふと云つて笑つてゐたが、僕にもそんな感じがするのである。

一體創作家でゐて評論家を兼てゐると、その評論が他人の創作評にわたる以上一種の强味であると同時に弱味でもあつて、あんまり他人の創作について兎角云ふと、「ぢやお前の作品はどうだ？」と反問せられた時に、平素他人の作品をツケ〳〵酷評してゐると大抵の人はギヤフンと參らざるを得ぬ。これは併しさう反問する人が必ず正當とは云へない。批評は假ひ眼には見えなくとも、朧げながら一つの理想を標準にして云つてゐるのであるから、他人の作品に對して種々な注文を付けてゐたからとて、その人はある程度まで自作の缺陷をも意識してゐる場合が多い。さういふ際に「なら、お前の作はどんなものだ？」といふのは、銳い皮肉のやうではあるが、併しそれは一種の橫紙破りといふものである。

けれども岩野泡鳴氏の場合に於ては、人をしてその横紙破りを敢てせしむる心に、勢ひならしめるやうに泡鳴氏の方から水を向ける傾きが多いのである。何となれば、氏は他人の創作乃至評論を批評する場合、常に自作を標準にして持ち出す。その點飽くまで自信の强いのは驚くべきだが、對手をして「ぢや貴公の作はどんな物だ？」と思はしめる。思はしめたり、口に出してさう云はしめたりするどころにあらず、氏自身から些の臆面もなく自作を標準に持ち出すのである。是等の點、その態度の飽くまで徹底してゐる風のあるのは、勇氣と自信とに富むと云ひ得られざるにはあらざるが、氏の理窟はどうであらうとも實際の作品が何と云つても人の鑑賞眼を首肯せしめ得ないのは、これ亦た爭ふべからざる事實である。併しさう云ふと、自信の强い氏のことであるから、そんなことを云ふ人間は乃公の作品を味ひ得ないのであるとして傲然自足してゐるであらうが、そこが氏の氏たる所以で、同時に人をして首肯せしむる能はざる所以である。

印象を語るつもりで、これは創作家兼批評家としての氏の態度論になつてきたから、此の邊で話頭を轉じまして、私は泡鳴氏の近況をとんと知らない。泡鳴氏とはもう何年にも會はぬやうな氣がする。私が泡鳴氏に比較的繁く會つたのは、明治四十二三年の頃で、今から八九年も前のことである。氏も自信と自惚れの强い點では、生田長江氏と相似たところがあるが、その傍若無人の態度は生田氏以上に鼻つ端しの强いにもかゝはらず、何となく生田氏ほどの厭味がない。それは泡鳴氏が細かい才子がりの技巧を弄しない爲であらうと思はれる。小說を書いても評論をしても隨分粗枝大葉であるかと思ふと、又存外細かいところのあるにも拘らず、才子がりの厭味がなくつて、擧止言容が荒削りである。それなら厭味がないから人物に灰汁が脫けてゐるかといふに、さう禪脫してゐるとも思へないが、生田氏の如き修飾（アフエクテーション）がない。

さうかと云つて、氏は徹底的の强い人であるかといふに、又さうでもない。先年氏が大阪の新聞社に勤めてゐた時分の事であつた。私は鄕里へ歸省したその歸京の途中、大阪の新聞社に氏を訪ねると、其處へ小川未明氏も關西遊覽の途次立寄つてゐたが、泡鳴氏は深切に

僕を案内してくれて、その日は僕に勸めて、他の人々は一應見たからといつて、僕一人文樂座にいつた。そして泡鳴氏は僕の鞄を箕面電車の池田新市街なる氏の宅にまで持つて歸つてくれた。その晩文樂座が果てゝ私は一人あとから池田の氏の宅まで戻つて來ると、氏は淸子女史と二人で僕を歡待してくれた。折しも六月初旬の事で、大阪郊外の淸凉なる初夏の宵を三人で歡談の中に酒食した。そして夕飯が果てると、氏は尙ほ私を歡待するつもりで、池田から尙ほ先きの寶塚の風呂へ案內すると云つて、淸子女史と三人で電車で入浴に出掛けた。風呂は電車會社の營業で、大きな立派な風呂であつた。その歸途電車の中で――箕面電車は郊外電車でも禁煙であつたと思はれて、乘客の一人が喫煙してゐるのを、車掌が注意を與へて、止めさせてゐた。その乘客は何か屁理窟でもいひさうな面をしてゐたが、車掌がいつたくらゐでは素直に止めさうにない。すると泡鳴氏が私と並んで腰を掛けてゐる此方の方から突如大きな聲で、

「毆つちまへ、毆つちまへ。」と怒鳴つた。それをきいて滿車の乘客は一度に泡鳴氏の方に

視線を凝集した。私も自分の同伴者が耳の傍で大聲を發したので、ちよつと赤面する心持ちになつてゐた。すると泡鳴氏は稍々間を置いて再び「毆つちまへ」と怒鳴つた。

私も低聲に「不可ない奴だなあ」と應援をした。

泡鳴氏はその時大に不作法なる大阪人に對して禮節を辨へたる東京人の意氣を見せようとしたものであつたらうと思ふ。

すると、その羽織を引掛けて素足の大阪の男は、

「毆るんなら毆れ」とぶつ〳〵言ひながら、長いボギー車の眞中のところで、凄じい劍幕をして、腰を掛けた片足をほかの膝の上に載せて、今にも喧嘩をはじめさうな面構へをした。

「毆ぐるなら何で毆らんか」といふやうなことを猜立つた聲で、何時までもブツクサいつてゐたが、向でも立つて來てまで喧嘩をしようとはしなかつた。煙草は此の時もう止めてゐた。

泡鳴氏は此の時もう死んだやうに默込んでゐた。此の場合を想像するに、多分先方より

泡鳴氏の方がより多く敎養のある人であつたゞけに、最初の凄ごい劍幕にも似ず、內心は泡鳴氏の方が餘計に痺んでゐたに違ひない。さういふ所に泡鳴氏が平素鼻つぱしの强さうなのに似ず、その實氣が弱くつて存外臆病な點のあるのが窺はれる。氏の多血質もホンの初に二た口ほど怒鳴るくらゐのものである。

そして、その時電車が池田に來て停車するのをさながら待ち兼ねてゐたやうに、泡鳴氏は淸子女史よりも僕よりも一番先きに逃げる如く電車から降りた。そして「あんな奴は顏を覺えてゐて、あとで又何處で不意に復讐的行爲をするか分らないから、恐れなければならぬ。」と、夜道を歩いて戾りながら、氏はいつた。さうして暫時の間氏は心持ちが惡さうな風で、默つて步いてゐた。

私は思つた。それくらゐなら、初め怒鳴らなければ可いんだが、そこが泡鳴氏の泡鳴氏たる所以である。氏の此の鼻つぱしの强くつて、その實、內心正直で、臆病な處のあることを知つてゐて、評壇の諸士、泡鳴氏を對手にしたまへ。(大正八年。新潮)

田中王堂氏

田中さんが今回五十二歳にして始めて花婿の、樂しい結婚生涯に入られたことは、私をして種々な事を聯想せしめずには置かない。

五十二歳の花婿、三十四歳の花嫁といへば、日本人の傳習からは隨分の晩婚で、花の盛りは兩方とも疾の昔に過ぎてしまひ、姥櫻の、共白髮。老後の茶呑み友達といつたところであるが、何がさてお二人ともアメリカ仕込みの泰西流の人生觀の人達であらうから、吾々が思ふやうに日本流の茶呑み友達など〻退嬰的な若隱居じみた考へなどは、毫頭ない、——日本の西鶴は田中さんと同じ五十二歳で死んだ時の辭世に「浮世の月見過しにけりあと二年」といつてゐるが、王堂先生は、まだ此の先き二十年や三十年は長命して、夫婦共に日本の勞働者のために大に精神的活動をつゞけようとせらる〻御存意と察する。どうか是非さうあつてほしい。

實は田中さんが今回結婚せらるゝといふ、お目出たい報告を先頃、東京の新聞で見て私は、早速、田中さんを知れる某氏の許へ、暑中見舞の繪葉書を差出した、その端に、一寸感想を誌したほどであつて、長い間の一つの懸案が、やつと解決されたやうな、頼まれもせぬ安心を覺えた次第であつた。東京とは長い間離れてゐるので、田中さんの結婚が、どんな經緯を經て運ばれたものやら、また、それについて、どういふ岡焼連の噂が取り交はされてゐることやら、私は一向不知不案内であるが、尤も東京にゐたとて、近ごろ十年位も同氏の宅へは訪問を怠つてゐる私の事ゆゑ、氏の身邊にどんな出來事が生じつゝあるかといふことは知らずにゐたであらう。

私はある場合に於ては、人を隨分理想化し、美化してその美點をばかり認める傾きがある。——僕自身、それを、僕の善良なる部分だと思はぬこともないが、その爲にまた屡々人を觀察しそこなつたり、或はそれが自分と關係ある婦人であつたりする場合だと、飛んだ馬鹿な目を見ることがある。近來つとめて男女に係らず人との交渉を避けてゐるので、さういふ事も少くなつてきたが、就中故島村抱月氏と田中王堂先生との婦人に關する脱線の場合に對して、さうであつたことを熟々と感ずる。文士として、また性格の人としての抱月氏には私は隨分慊らぬ點をも認め、その爲めに私は晩年の氏と可成相離れたやうな理由もあつたが、ひとり、婦人に關して脱線する抱月氏を見出さうとは、私のどうあつても思ひ設けぬ事であつた。田中氏の近狀に不知不案内であるごとく、抱月氏のその頃の事情にも一向不知不案内であつたので、氏に、先頃、中山晋平氏によつて書かれたる「ある一夜の出來事」の如き事件が持ち上つてゐようとは夢にも知らなかつた。それは、大正と明治の間即ち四十五年の七月三十一日の次の日、八月の二日の夜のことだつたさうであるが、僕は其時分は東京にゐたが、少しもそんな事が戸塚の諏訪の森に生起しつゝあらうとは思ひもかけなかつた。そして、其年の八月の二十五日に東京を立つて關西に來り、九月の十五六日のころ大阪郊外池田の岩野泡鳴氏の宅をおとづれて、氏から、さういふ噂の近頃專ら傳はつてゐることを話されて、且つ眞否如何にと訊ねられた。泡鳴氏はもう長く大阪に來てゐて

東京の樣子を委しく知らない筈であつた。――尤も新聞社員だから東京にゐるも大阪にゐるも、あまり違ひはないが。その九月の「早稻田文學」に、例の抱月氏の優れた抒情詩の三十一字の歌が載つてゐて、泡鳴氏は、その歌の事なども交へて話した。

「さうかねえ、僕はちつとも知らないが」

と、いつて、私は頻りに小頸を傾けるよりほかなかつた。そして始終否定的に疑つてしまつた。ところが事實の眞相は中山晋平氏の書いた如き異常なる出來事が、既にすでに八月二日の眞夏の夜、諏訪の森を不思議の暗黑に鎖してゐたのであつた。抱月氏にそんなことがあらうとは私はかけても思はなかつた。

實のところ、私自身は、從來屢々女の事で馬脚を露はしてゐるがゆゑ、且つ又度々さういふことがあつたために、ひどく謙遜して、婦人の事で脫線したりなどするのは、廣い世間に數多い文士といふものゝ中で、僕一人きりであらう、自分くらゐ阿呆な者はほかにはあるまい、とさへ思つてゐるのであつた。處が詩歌小說の專門藝術家ならばいざ知らず、冷靜なる思索解剖を事とする批評家、哲學者にして女の事で足場を踏み外づす人々を、併も私とは、他の其等の學者批評家よりも、遙かに昵近なる筈の島村抱月氏及び田中王堂先生の場合に發見せんとは！

私に取つては、實に天地が處を變へたくらゐの驚心駭目的異常なる出來事といはざるを得ない。蓋し人間觀察に於て、私一己にとりては、少くともコロンブスのアメリカ發見、コペルニカスの地動說ほどにも思ひ比ぶべき事柄なのであるとさへ思つても見たが、久米の仙人の寓話こそ、いかなる冷靜なる哲學や、精細なる思索にも優して人間不朽の眞理を語つてゐるものであるといふことを忘れて、一向に其等の人々の行狀を、理想し美化して考へてゐたのであつた。

抱月氏は、去今、約二十年前早稻田に於て私達のために美學を講じ、王堂先生は、人間行狀の規範たる倫理學を敎說して下さつたのであつた。

十年以上も王堂氏の宅に、頻繁に往訪せぬ樣になつた――其以前は實によく往つたもの

であつた。――私は、恰も抱月氏の當年の事情について前記の如く疎かつた如く、王堂氏の近年の事情についても極めて不知不案内である。加之、その以前私が最も親しくお邪魔をしてゐた時分でさへ、先生と弟子である――併も倫理學の――といふ關係の別もあり、一つは田中さんの性格もさうであつたらうが、極めて美しい學問上の清談のほかには、その以外の私事に渉る事には、餘り打解けた話を交はしたことがなかつた。その頃の田中さんは、私にとつては實に、讀書家の書架に飾られた美しいプラトーの書册のごとく小綺麗な物に思はれた。實際その頃の田中さんは、今より若く（私も若かつたが）して美しかつた。房々とした漆黑の頭髮は、大理石の彫像のごとき白い額に雲の如く生ひかぶさつて、上品な學者らしい、黑色のモーニングなどを着て早稻田に來てゐた。私宅に訪ねてゆくと――その頃牛込揚場の高等下宿にゐて、大きな室二た間に住んでゐた。學問を愛好する高尙な青年學者として、私の眼を悅ばしたものであつた。純文藝にこそあまり渉らなかつたが、アカデミックな學者からは聞くことの出來ない、カルチユアの廣い會話で、西洋の諺や泰西の偉人哲學者などの逸話や金言などを引いて語るといつたやうな會話ぶりであつたから、私は氏の宅に遊びにゆくたびに、毎時も智識を開發され、物識りになつて、一日狩くらした獵夫が夕方重い獲物袋を肩にして歸つて來る時のやうな、喜悅と希望とに滿ちてゐたのである。

そんなわけで、田中さんの私事にどんな久米の仙人――その實その方が却つて血と肉のある哲學思想に充實してゐるのであるかといふことを露知らう筈もなく、またそんな事を意地惡く探知したいなどゝは毛頭考へなかつた。すると、氏の暗い半面を最もよく知つてゐるといはれてゐる、また自分でもさういつてゐる中根岸の千葉さん、この人は江戸ッ兒の、一寸惡謔氣分のある、面白い人で、私が田中さんの處へよく遊びにゆくことを知つてゐて、「田中が君をほめてゐたよ。君はひどく田中を崇拜してゐるが、先生あんな顏をしてなか〳〵隅に置けないことがあるんだ。」

と、さも〳〵人の好奇心を惹くやうな調子で、千葉さんは、よく水を向けて來たものだ。

成程さういへば、私達がまだ學校にゐた時分の事、田中さんのその揚場の寓居に一度、一同で行つてみやうぢやないかといつて、多勢で押掛けていつた時、先客でもあるらしく私達は暫らく玄關に待たされて、やがて田中さんが廊下づたひに送つて出て來た一人の美しい婦人があつたことを記憶してゐる。それは去今約二十年位の昔であるから、田中さんが三十二くらゐの時のことだ。その婦人は丸髷に結つて、中形の單衣を着て、中肉のスラリとした好ましい姿をして、一瞥した顏附はいかにも怜悧さうで、愛嬌があつて、口元の少し横の方にたしか金歯が輝いてゐたと思ふ。その時はそれつきりで、何の事も、私は思はなかつたが、前述の千葉さんの、妙に田中さんの暗い影（私にいはせると、却つて明るい艶麗なる部面）に通じてゐるらしい口吻によつて、今のやうなことが思ひ出された。

「君が田中の處にいつてゐる時に、女が來てゐるやうなことはないかね？」

「まだ學校にゐる時分一度こんなことがありました。それつきり一度もそんなことはありませんねえ。」

「そんなわけはない筈だがなあ。君は田中を餘り崇拜してゐるから氣が着かないんだ。」

と、いつて、千葉さんは、私を冷かすやうに笑ふのであつた。が、事實、私は、田中さんのそんな場合に出會したり、目撃したりしたことは長い間に、前掲の外は一度だつてなかつた。僕には、人のさういふ半面を故意に意地わるく猜察しようといふやうな性質は持つてゐないことを、此處に餘計な事ながら自白しておく。千葉さんは、田中さんの朋友として江戸ッ兒の惡謔に出たのであつたらうが、僕はなるべく、田中さんの、さういふ噂には、ぢつと眼を瞑むつてゐたかつた。

すると、前述の如く、恰も抱月氏の場合と同じやうに、私が田中さんに頻繁に往訪せぬやうになつた最近數年來、どうも變な風聞を耳にすることが屢々ある。實際田中さんのところへは、この十年來あまり訪ねて往かない。その以後田中さんの交際範圍は大分多くなつて來た——或は變つたらしい。それは浮田博士や桑木博士や千葉さんなどは、耐久的に變らなかつたらうが、「征服被征服」を書いた泡鳴氏などゝ交はるやうになつてから、田中

さんの所謂暗い方面（その實明麗なるべき方面）が屢々傳へられた。私はその際に於いても、恰も抱月スマ子の場合と同じやうに、毎時小頸を傾けて、否定的に疑問におはるのであつた。……私は、自分では色々な噂の種、浮名の種を蒔いてゐる。雜草の種の如く無數に蒔いてゐる。が、私の尊敬してゐる田中さんには希くはそんなことがなくつて欲しい。すくなくとも二十年前に氏の玄關で瞥見した美しい、中形の、ある婦人のごとき女との艶聞ならば何となくプラトニックでもあり、ウオタア・ペータアの美論の定規にも合致してゐるやうで、頗る美的生活であるが、（その時の婦人が、國木田獨歩のお信夫人であるといふ者もあるが、田中さんに訊いてみないから、眞否は分らない。）どうも「征服被征服」の女主人公の、あの美の程度では一寸困る。そのほかまだ色々な事を噂する者があつた。田中さんにも丁度島崎藤村氏の「新生」の事實と同じやうなことが潜在してゐると、さも〳〵見て來たやうなことを言ふものもあり、又中學校を卒業するやうな大きな隱し子があつて、田中さんは、その爲に大分生計を苦められてゐるといふやうなことを傳ふるものもあるが、私はどうもそれ等については疑ひを抱いてゐる。またそれがどうあらうとも構はない。婦人ほどではないが、男子も長く獨身でゐると、得て色々な噂が眞實化してしまふ。況して藤村氏や田中氏や故島村氏などのごとく、手輕氣輕足輕に遊里などに出入することのできぬ人達に對しては、噂する者の自身の下根な性情から推量して、それで無事で往ける筈がないと思ふ。そして色々な噂を生む。

で、私は、そんなわけから、例の「征服被征服」の女主人公の一件も、第一近年長らく田中さんに接近せぬことでもあり、一向様子を知らないところから、まさかと思つて、天から嘘にして、あられもない噂に過ぎないと、ひとり定めにしてゐたのであつたが、ある年の歲晩ジイ君やエム君やチイ君と忘年會の會食をした時に、ジイ君エム君などが、その噂は本當だといふやうなことを語り、少くとも女主人公と一緒に中野の方を歩いたことだけは疑ひを容れない事實であるとも語つた。さうなつては私もそれを事實と信ぜざるを得なくなつた。

女の好き不好きほど（戀ほど）主觀的のものはないから、次ぎのやうな論理は成立たぬかも知れぬが、田中さんもあんな女にちよつけを出すやうでは、餘程女に渇してゐるのであらう。實に慘澹として傷むに餘る事である。私の田中さんをして、どうかそのやうな人であらしめたくない。けれども田中さんも不運である。既に「征服被征服」の作者の如き斟酌のない幻滅家、不躾なる偶像破壞者にかゝつては、――況してそれが三角的に、作者自己の戀愛と關聯してゐる以上は、一層手酷しく現實の醜事實を暴露せずにはおかない。田中さんは「征服被征服」の作者と交際するやうになつて、少くとも私には、ひどく偶像を破壞された人の如く思はれて來た。天上から足場を踏みはづして人間に落ちて來た久米の仙人のやうなものとなつた。田中さんもそれ位なら、女もあらうに、「征服被征服」の女主人公の如き婦人に關して醜聞を傳へらるゝほどならば、もつと早くどうかなつて置けば、不躾なる偶像破壞者の手にかゝらないで、永へに私の美しい田中さんで居れたのである。同じ婦人でも二十年前の玄關で見た婦人に關する事は、本來醜くゝはないのである。同じ婦人でも二十年前の玄關で見た婦人ならば美しい、然るに「征服被征服」の女主人公では、どうも美的でありやうがない。いな、田中さんは、此の私よりもその事にかけては遙かに若輩である。と思つて、內々田中さんを傷み、つまらぬ事で襤褸を出した田中さんの爲に私は眞實、人知れず同情し心配してゐたのである。高慢なる田中さんは、私からさういふ同情を求める人ではないけれど。

然るに、近來遠く東京を離れてゐる私には、突如として田中さんが、某家の令姪と、閨門の譽れある婚姻を結ぶといふ新聞（ニュース）に接し、流石に田中さんは、女道にかけてもやつぱり私などよりは先生であると知り、此度は內々田中さんの爲にお悅び申してゐる次第である。どうかこれから先き二十年も三十年も百歲も友白髮の末長く幸福であつて、ちと塵埃つぽくはあらうとも、日本の勞働者の爲に手を取つて共に御盡力あらんことをお願ひいたすのである。――實際勞働問題なんて、ちと塵埃つぽいよ。まして新婚早々工場の視察などゝはいくらお互にシカゴ育ちであらうとも餘りに野暮らしい。函嶺にでもおいでになればよいのに。（大正八年九月七日塵埃の立たぬ比叡山延曆寺畔にて。新潮）

無類の善人長江夫子

従來、貴誌の、諸家の印象には顏などのことも多く書いてあるやうであるが、こゝには特に顏のことは云ふを避けて、長江夫子は——僕の知れる限り——無類の善人であるといふことは大抵外れない印象であらうと思ふ。夫子の如何なる言容も、また、いかなる、躍起となつた論文も——その實僕はさうたんと拜見してゐないが——此の善人であるといふ全體の印象を裏切るもの、又裏切る場合には嘗て接したことがない。文壇由來多士濟々なりと雖夫子くらゐの善人は類を見ないと申しても云ひ過ぎはせぬだらうと思ふ。

そのいかに善人なるかは、夫子は如何なる場合に於ても人と對話をする時、嘗て滿面の微笑を傷けられたことがない。その微笑は、アンナ・カレニナが、顏を紅ゐにするの技巧に巧みであつたごとく、夫子も亦た機に處し時に應じて、故意に笑顏を容づくられるかといふに、さうでもあるが、また必ずしもさうでないやうでもある。さうであるといふは、蓋

し夫子の無類の善人であると殆ど同じ程度に於て比類稀れなる自尊心を傷けない事になるであらうと想像する。何となれば夫子は、それほどの善人であるにも拘らず、夫子自身は嘗て善人を以つて居らない、夫子の意、多分人から善人と云はれることを以つて恰も矜持高き自己を輕侮せられたやうに感ぜられるであらう。

蓋し夫子の意に、自分は臨機應變、應病與藥的に故意に、心にもなき微笑を面に湛へ得るほどの才略あり、技巧あり、腹藝のある、淺薄ならざる一代の才人であるとの強い自信は炎々として常に胸中に燃え、嘗て消滅したことはなからうと思ふ。此の腹藝あり、技巧あり、才略あり、以つて女學生、女流文學者乃至女弟子の心を捕へるごときは朝飯前。世人は、己れを以つて嘗て風流粋事を解せざる野暮な不風流の木强漢とのみ一圖に見て誤れるやうであるが、自分はそんな角の除れぬ、融通の利かぬ男ではない。さういふ手合は、この自分が内々――いや、時時それを人に示すから公然だが――下町の春陽堂などへいつた歸途、洋服姿のポケットに活字版の稽古本を潜ませて長唄の師匠のもとに通つてゐることを知つたならば、從來生田長江より得てゐた印象が芝居の回り舞臺のやうに、ガラリと一變して來るに相違ない。多くの人は、自分がザラツッストラなどを翻譯してゐる概念より推して、只管に自分をば、ニイチエのごとく色消しの、無愛嬌者と思つてゐるだらうが、自分にはさう解されるのが遺憾千萬である。見よ、自分は歐洲近代文學では最も濃艶無比なるダンヌンチオの代表的傑作「死の勝利」をも譯して發賣部數既に數版を重ねてゐる。これを以つても自分は決してニイチエの寫眞の如く、毎時も睨んでばかりゐる人間ぢやない。ダンヌンチオの寫眞の如く、常に滿面に溢るゝばかりの微笑を湛へたる愛嬌のある面であるぞよ。

併も、此の微笑は、世の善人に得てあり勝ちの屬性たる人の好さから發露してゐる微笑にあらずして、人の惡さから由來してゐるものである。自分の微笑には深味もあれば、また裏がある。冷靜なる打算以外に、聰明なる文壇的理解も、同情もない書肆などに向つて、何か交渉ごとでも開始せんとする時には、口を利く前に先づ默つた儘四五分の間たゞ滿面に

微笑を湛へて、さも〳〵意味ありげに對手に氣を持たしてゐることである。その際の長江夫子の微笑には、なるほどアンナが顏を紅るにせんと欲する時に發揮するくらゐの技巧と才略とが夫子にも蓄へられてあるやうに看取されるのである。少くとも夫子自身では、此の自分の魅力ある、そして複雜なる意味の籠れる愛嬌笑ひを用ゐて對者に接する時は、いかに金城鐵壁と誇れる敵の陣容も、先づ其の第一陣に於て崩れそめるとの自信を抱持してゐられる。この祕術たるや、唯り木屋の主人、番頭に對して用ふべきのみならず、女學生、女弟子の類より、昔しは富士見町あたりの苦勞人筋に對しても用ゐた祕術なのである。そして、夫子、近來はそれを自分の下生に對つて主として應用せられるやうである。下生とは喬木の下に生えたる灌木である。それ松柏の緣は灌木の下生えを待つて愈々欝蒼たり、文壇の大家は、周圍に文學中毒の青書生を以つて圍繞せられざるべからず。先生の氣宇性格の寛仁大度なるや、他の神經質の文學者などに多く見る如き、疾言勵色して訪ひ寄る文學書生などを殘酷に罵倒するやうなことは嘗て無い。終始一貫常に溫容を以つて彼等に接し、彼等の如何なる愚劣なる文學談にも微笑を湛へて耳を貸し、彼等の如何なる愚作にも溢れるほどの讃辭を浴せかけて、彼等の自惚れと妄信とを昂奮なさしめ、或はそれを雜誌を掲載すべく安々と紹介の勞を厭はず引受けて、彼等に滿足を與へられるのである。

夫子は、しかし微笑法なる夫子特得の祕術を用ひて優に一世を籠蓋せらるゝかのごとき才略を以つて自から任じてゐられるやうであるが、假りに傍人の見る所をもつてすると、夫子は才人であるよりも一層善人である。夫子ほどの善人が、その天賦の善人を保全することを心掛けないで、無暗に才人がらんとせられるは、そも〳〵何たる心得ちがひの事であらう。可惜々々。即ち僕が前述の通り、故意に笑顏を容づくるの人たらずして、自然に微笑を含む、夫子天禀の善人たることを全うせられんことを希望するのである――斯う云つては印象でなくて希望になるが――併しながら、こんな希望を傍人に起さゞるを得せしめないくらゐに、夫子の才人氣取りその事が、既に夫子の善人たることを裏切り示してゐるからである。夫子は自から才人氣取りになれば、なるほど、一入善人であるといふ感じを傍人に

抱かしめる。すると此の廣い世間に人もあらうに凡そ長江夫子くらゐな幸福人はセルヴンテスのドン・キホーテを除くの他、三千世界に又と見附らぬ譯である。何故と云へ、古來世路艱難。世の中に處する一擧一動は、惡意でなくてさへ得て惡意の動機と誤解され易いものなるに、夫子は御自分で如何に才人を氣取り、總ゆる腹藝、技巧を用ゐて、――若し先生をして女性ならしめば正に傾國の微笑とも稱すべき其の魔力を發揮しようとせらるゝにも拘らず、夫子の云ふ事、書かれる事、悉く夫子の善人にして無類の樂天家なることを語つてゐるからである。夫子の無類の樂天家（オプチミスト）たるや如何なる運命の悲劇をも、また如何なる境遇の艱難をも意に介せず、恬として、それを自己の個性化（インヂビヂユアライズ）、性格化（カラクタアライズ）することをせずして、毎にそれを以て、自己と風馬相關せざる他人の事でゞもあるかの如く、遠く突き放して、唯單に概念としてのみ取扱つてゐられるやうな態度の見えるのは、一通りの樂天家（オプチミスト）を超越して了まつて、實に些々たる運命などに拘泥せざる古の哲人聖者の風ありとも申さねばなりますまい。（大正七年八月高野山上にて。新潮）

小川未明氏

矢來の通りを童顏巨軀の小川君が犬殺しの持つてゐるやうな太い櫻(?)のステツキを杖ついて散歩してゐる姿が東京を離れてゐる私には屢々偲ばれる。

無くて七癖といふが、小川君も隨分癖の多い方である。その癖は過を見て仁を知ると孔子も云つた如く、小川君の場合に於ては特に一種の愛嬌味と無邪氣さと不思議な神經質と子供らしさと、その他色々の屬性を成して一個の小川未明なる人を造り上げてゐる。

去年の五月私が宇治にゐる頃であつた、東京を立つてまだ一と月にもならぬ時分であつたが、一日島田賢平氏からのハガキの端に小川君の長女春代孃が不治の病氣に冒されてゐるといふ事を書いてあるのを見た時私は、昨秋の島村抱月氏の急逝や今年正月の松井スマ子の縊死以上に吃驚した。何故なれば、私は、小川君の平素の性癖、生活(ライフ)といふものに對する君の感じ方(つまり小川未明君の人生哲學)をよく知つてゐたからである。その小川

君の長女が恐るべき不治の病魔に襲はれた!!

小川君くらゐ病氣を恐れる人はない。誰れしも病氣を恐れぬ人間はないが、小川君になると、實に常識を逸脱して病氣を恐れる。日常座臥君と對談する時文學藝術、女性等に關する歡談に交りて、小川君が異常に黴菌を恐怖することを口にせぬことは少いくらゐである。小川君は夏に足袋を用ゐぬ時分など、外出から歸つて來るとすぐ臺所の流し場にいつて先づ足を洗つてから座敷に上る。冬季足袋を穿く時分ならば外出の際穿いた足袋を玄關のところの、上り框の隅に脫いで決して座上に置かぬ。トンビなども玄關から奥にはあまり通さぬやうである。先年ペスト病が流行して、小川君のゐる、すぐ隣町に一人患者が出來た時など、今度死んだその春代孃が通學する小學校がその近くに在るので、小川君は春代孃に夏、足袋を穿かして學校にやつたものだ。すると學校の先生が、「小川さんは皆な足袋を穿かないのに、あなたは一人足袋を穿いてゐますが、どうかしましたか。」と訊ねたので、「お父さんが、ペストが流行つてゐるからつて、足袋を穿かすのです。」と答へて、先生も思はず破顏したといふはなしがある。凡そそれくらゐ黴菌を恐れる小川君の愛娘がさういふ不治の病に罹つてゐるといふことを聞いて、私は驚かずにはゐられなかつた。驚くといふよりも私は、つくぐ\とさういふ不幸に出會つてゐる小川君の心の中を思つてみた。娘を最も恐るべき黴菌に襲はれた君の感情を考へてみた。風呂の湯の中に黴菌が幾許居り、雪ぎ水の中に黴菌がどうなつてゐるかといふやうなことを氣にしてゐる君が、その憎むべく、厭ふべく、恐るべき黴菌に愛娘を奪はれようとしてゐることを思つてみたならば、いとし兒を亡くする、いかなる親の悲痛にも倍して君の悲痛は慘憺たるものであらうと、私は思つたのであつた。

かくの如く異常なる、寧ろ不思議なる、病的の、黴菌恐怖家なる小川君が、如上の事實とはまた頗る矛盾して、幽暗なる狹斜の陋屋に人一倍の興味を刺戟せられる人であるとはこれまた不思議の上の不思議と云はざるを得ぬ。小川君はどちらかと云へば、某處よりも某處に行く途中のいぶせき陋屋の淪落せる女に、不健全なる興味を持つた人である。私が

戯れに笑つて、その事を語り、君の平素の潔癖に矛盾してゐるぢやないかと云へば、

「うむ、……それは構はんよ。何ともないよ。」

と、いつて笑つてしまふ。此の點に於ては、流石の小川君も平素の潔癖以上に超越してゐる。

小川君はまた頗る造形美術にも興味を持つ。自分がこれは欲しいと思ひだすと、もう矢も盾も堪らず、それを所有したくなる。嘗ては、あの常に貧苦を叫んでゐる生活難の中から、凡ての欲望を犧牲にし、あらゆる生活の不自由を忍んで、高價なムーテルの近世繪畫史だの、ロダンの傳記などを丸善から買つて來て、日夕、落莫たる人生行路の座右の慰藉とし娯樂として置く。それが白樺一派の、二萬圓の家屋を新築したり、遊んでゐても月々親元から數百圓の生活費を支辨されたりしてゐる富裕なる青年公子の身なら何でもないことだが、毎日々々一年三百六十五日、一日とて筆を執つて何か書かずには生活してゆくことのできない小川君にして此の事あるは、餘程の篤志と藝術に對する情熱なくしては叶はぬことである。親の讓れる巨萬の富によつて遊惰な日を送つてゐるに反し、小川君はその中から又深い雪の中に埋つてゐる越後の國に老いてゐる兩親の許へ月々數圓の金を仕送つてゐる。

その藝術愛好者なる小川君は、ムーテルの近世繪畫史よりも、ロダンの藝術傳よりも更に強烈直接にして、一層不健全なる繪畫的刺激を欲求して、一ところ例の繪を頻りに探求してゐた。その頃はもう夙にムーテルの繪畫史も、ロダンも賣り飛ばして無くしてゐた。

「君、この頃好い繪はないかね？」

「君、遊びに行くよりも好い繪を見て想像してゐる方が快感が強いからねえ。現實はそんなに面白くないよ。」

と泣くが如く、訴ふるがごとき歎聲を發する。

數年前のことであつた。小川君のところへいつて、

「小川君、好い繪があるよ。」といふと、

「ふむ、好い繪があるかえ！　何處に？」

といつて、早速私と一緒に近處の某古本屋へ見にいつた。そこの家には先日から一種の繪があつて、一寸葛飾北齋の筆致を眞似たやうな珍奇な繪であつたが、あんまり辛辣に過ぎてゐて、醜感を起さしめるところがあつた。それは私も小川君も氣が進まなかつたが、もう一つ新しく本屋が手に入れたのは、繪としては前者に劣つてゐるが、古本であるにもかゝはらず、珍らしく汚れてゐなくつて、色彩なども極めて鮮麗、それに紙の地質が白いので、女の肌などもそのとほりに眞白く、襦袢の廠の薬しぼりの淡紅色の染色などが眼のさめるやうに鮮麗であつた。三册の本が桐の箱に入つてゐて、前者が五圓とか七圓とかいつてゐるに、此の方は拾圓は少しもまけないと云つた。私も昨日それをみて、實はどうかして樂しみにそれを我有にしたいと思つてゐるところであつたのを、つい小川君に口をすべらして話すと、早速見に來て、小川君の性急なる占有慾を忽ち強く刺激した。小川君はもう頭からすつかり惚れ込んでしまひ、

「これを私に賣つてくれませんか。」

と、小川君は、此の氏特有の、何人に向つても用ゐる、同じやうな鄭寧な言葉で、本屋の新公に掛合つた。

新公は、ほゝゝと笑ひながら「えゝ賣つてもようございます。」といつてゐるが拾圓は一文も讓らない。

私も傍にゐて、實はそれは僕が買ふつもりだとも云へない。他の人間ならば兎も角も、小川君が一見するや、突如もう極烈なる執心で欲しがつてゐるものを、私が小川君に渡すまいとすると、殊に小川君の性質も知つてゐることなり、若し強ゐて爭ふことになると、恰も先年私と正宗白鳥と忌はしき浮名を流した蠣殼町の私娼爭ひのやうな氣まづい感情を催起せねばならぬことになるので、私はじつと我慢の蟲を耐えて、たゞ〳〵小川君のなすを傍觀してゐた。

「これは僕が買ひますよ。」とばかり、小川君は私への心遣ひなどは全然考へないで、本屋

の新公に向つて一と筋にさういつてゐる。だから新公はくす〳〵笑ひながら更に讓步しない。小川君は拾圓の金策を立どころに工面してゐる。

「君、私のところに源氏五十四帖の錦繪があるんですが、あれと換えてくれませんか。」

「えゝ、都合によつたら、さうしてもようございますが一度拜見しないと分りませんが。」

それから小川君は、「君も來てくれたまへ。」と私を誘つて、本屋の新公と三人で少川君のところにいつた。新公は源氏の錦繪を見て六圓とか六圓五拾錢とか値を附けた。それでまだ拾圓には三四圓足りない。小川君はそこらの書棚を漁つて、ストリンドベルグの本だの色々な書物を取り出した。つい二三日前も私の紹介で小川君はその本屋にストリンドベルグだの、ロシヤの作家の物などを貳參圓賣つて、通寺町の山ニバーで蟹や豚カツで私にも突合へといつて奢つてくれたのであつた。その時ストリンドベルグの「馬鹿の懺悔」だけは惜しいといつて賣らなかつた。此度はそれをも割愛した。私が笑つてゐると、

「君！ フールス・コンフェツションよりも、これの方が刺戟が強いからねえ。本など讀んだつてもう興味はないよ。」と、愁訴するやうにいふ。

擦つたもんだの揚句新公は拾圓を五拾錢だけまけて九圓五拾錢にしたが、それでもまだ五拾錢足りない。小川君はそこで、その五拾錢の不足を補ふために、つい昨日新しく買つて來た片上伸君譯の博文館發行泰西名著集中のドストエフスキイの「西比利亞の追放」を最後に取り出して、一つ舌打ちをしながら、

「ぢや、これで好いでせう。」といつた。

「えゝ、ぢやさうして置きませう。」新公は、始終ほゝゝと笑ひながら肯き、そこで商談が調ひ、三册の繪本は遂に小川君の物となつた。

翌日の晩また小川君の家に行つてみると、床に妙な浮世繪のやうな胡粉の白く剝げた詰らない女の立姿の繪を掛けてゐる。

「君これはどうかねえ、好いだらう。」

「少しも好くないねえ。これはどうしたの。」

「昨夕、あれから僕の知つてゐる友人が來て、あの繪を見て、これはよくないといつて、それから又二人で、その友人の處へ出掛けていつて、此の繪と交換したんだ。此の繪は好いんだよ。」

「馬鹿云つてらあ、こんな詰らない繪が何だ。」

私は吐き出すやうにいつた。そして小川君の、その友人といふ人間の心持を疑つてみた。小川君に對して、不良の書畫屋などがよくする詐欺をしてゐるのではないかとまで私は思つた。

「一と晩も置かないで、二時間も置かないですぐ手放すくらゐなら、あれは僕が買つて置くんだつた。」と私は殘念さうにいつたが、エゴイストで且つ正直なる小川君は、そんなことは何とも思つてゐないらしかつた。

植木や盆栽などを愛好するにも又これと同じやうな直情的なやり方である。（大正八年。新潮）

牛門の二秀才

青大將のやうな廣津和郎

今更新人といはれて不服かも知れぬが、廣津和郎君は此頃何處をごろ〳〵してゐるか、三月の末に妻君を伴れて三四日森ヶ崎に來て寢床を敷つぱなしにして、女中に『座敷の掃除が出來なくつて困るわ。』とこぼさしてゐたが、いつか東京へ一寸行つてくると云つて出て往つたきり戻つて來ない。その時『中央公論』に書くのだといつて、二三枚書き出したまゝ、書けない、かけないと繰り返してゐたが、その間に私の持つてゐた『眞田三代記』の長篇講談を、妻君に腰を揉ませながら瞬く間に面白い〳〵といつて讀んでしまつた。それきり何にもしなかつたやうであるが、東京へ行つてから『ひとりの部屋』といふ可なり長い物を書いたものらしい。もうやがて丁度一年が廻つて來る、去年の七月の中ごろ、ふらりと森ヶ崎にやつて來て、それから私が八月に箱根に行くまで隨分長く一つ家にゐた。彼と

は、それまで顔は知つてゐても餘り口を利く機會がなかつた。大金に一緒にゐて互に大分知るやうになつた。私は、ぢり〱暑いのと、偏頭痛の持病の發作とで、いつも半病人のやうに惱んでゐたが、彼は今晩夜半に起きて書くんだといつて、いつも女中に握り飯をこしらへさせて、蚊帳の中に机を入れて、その上に原稿用紙にペンと、その握飯を載せて置くが、決して夜半に起きはしない。眞青な葭が熱い夏の日を受けて、そよ吹く南風に白い葉裏を返して、ギラ〱光つてゐる眞晝間から、「どうしても眠られない。」と時々起き上つていひながら、一日萬年床に横はつてゐるが、夜が來て、さて翌朝になつて、そつと緣側づたひに音せぬやうに窺いて見ると、蚊帳の中の握飯は鮑の鹽蒸と一緒に昨夜から思ひをしてゐる。それが殆ど連日連夜にわたつてゐる。

私は、何の事はない、まるで青大將を見てゐるやうな一種の物凄さを感ずるのであつたが、この男、それでゐて、膂力衆を絕してゐるには驚いた。大金には海軍の下士をして南洋の舊獨領諸島に三年も行つてゐたといふお帳場だの、湯番のとくさんだの、多勢の筋肉勞働者がゐるが精神勞働も碌にしないで毎日夏草の中の青大將を極込んでゐる彼が二時三時といふ日盛りになつてやつと目を覺まし、長い廊下を渡つて、のたり〱とお帳場の方に表れてくると、腕力を自慢に其處等にゐる者を誰れ彼れの區別なく腕相撲を挑むのである。

「一日寢てばつかりゐる廣津さんが！」

と、唯れでも初は、せゝら笑ひをしながら對手になつてみると、これは不思議、一人として敵する者はない。いつも眠れない〱といつて青い顏色をしてゐるので、どんなに身體が惡いのかと思つてゐると隣の病院の院長は、私との健康を比較して、『近松さんは廣津さんの三分の一しか抵抗力がありません。』といつた。

晝寢てゐなければ定つて將棊をやつてゐる。それが對手は何人變つても一方は常に彼れであつた。でなければ釣魚だ。大金の淺黃つぽい貸し浴衣を着て、麥藁の海水帽を冠り、濁つた溜堀のふちに踞んで大公望をやつてゐる。萬物靜死した眞晝間、默り込んで半日ぐらゐ濁つた水の上を見つめてゐる。私はあまりにその淺黃の貸し浴衣を見馴れてゐたので、

後に廣津君がゐなくなつても、その淺黄の貸し浴衣を見ると、すぐ背の高い廣津君の顏が思ひ浮べられるのであつた。

彼は、私が常に見馴れてゐる、他の早稻田出身の人――所謂早稻田らしい人とは、すつかり觸感の違ふところがあつた。生活の無興味に倦怠し切つたやうなことを口癖にして、一日それを繰返してゐながら、氣性がさつぱりとしてゐて、少しもぢゝむさく、人に臆したやうなところがない。かくいふ私以上の怠業者であるが、何處か俊才といふ感じがしてゐる。あんまり爲事はしなくつても「改造」「中央公論」等に書くべき人である。

今日では、婦人雜誌へ續き物を書くのが一流であるやうな狀態になつてゐるが――その癖長田幹彦君には兎角ケチを付けながらも――獨り廣津和郞君は、昂然として、婦人雜誌に書くことを以て藝術家の侮辱であるかの如く氣慨を帶びて斥けるのである。尤もそんな長い物は辛抱して書く心にもなれないであらうが。

老廣津柳浪氏、後ありといふ氣がする、尤も私は、今のところ、やつぱり、老廣津氏の作品の方がまだ文學的價値が多いとは思つてゐるが。

今頃は何處にゐるかと思つてゐると、東京に出て行つた時出先きで何處かで偶然出會はすことがある。三月の末に森ヶ崎に三四日ゐて東京へ行くといつて往つたきりであつたか先日牛込の中町で三上於菟吉君の宅へ訪れると、又偶然廣津君に行き合はした。牛込の中町には同じ番地に長田幹彦君と三上於菟吉君が住んでゐる。序に長谷川時雨女史も同番地に住んでゐることは、更めてことはるまでもない。此頃の婦人雜誌の素晴らしい廣告を見てゐると幹彦氏と於菟吉氏とが同番地に居を定めてゐるといふことは、いかに博文館あたりの婦人雜誌編輯者をして便利を喜ばしめることであらう、しかも家主までが同じであるに至つては奇緣といはねばなるまい。そしてそこへ無宿者の私が偶に往訪すると、兩家で『今日は私の家で飯を食つていつて下さい。』といふ。けにや積善の家餘慶ありとかや、兩家とも筆硯の業倍々繁昌するはむべなるかな。

靑春そのものゝ如き三上於莵吉

三上於莵吉君は多年の雌伏、最近やうやく芽を吹いて、今や婦人雜誌界の流行兒の一人である。三上君は遂に早稻田は卒業しなかつたけれど、多分廣津君とあまり遲れぬ時代の人間であらう。私とはじめて知つたのは、早稻田文科の豫科にゐて、學校へは殆ど行かずに、通寺町を一寸横に入つた處にあつた素人下宿に構へ込んで、舶來の文學書類を大きな本箱にずらりと飾つて、同輩の文學靑年と大いに文學を談じてゐた。埼玉在の舊い醫家の息子らしい、色の白い、いかにもお坊ちやん〳〵した美少年であつた。夙に柳暗花明の趣味を解する方で、その頃神樂坂の校書に耽溺してゐた。それはもう丁度今から十年ほど前のことで、廣津君との場合とちがひ隨分古くから三上君とは妙な因緣が斷續してゐた。十年前の、お坊ちやんらしい鷹揚な美少年は、その後も私の知らぬ間に紅燈綠酒の間にいろんな女に憂身を窶して三年目四年目に久し振りで會つた時には、歷々と以前は處女の如くほんやりしてゐた顏に劍が出來て、鹿の樣に無邪氣であつた大きな眼が妙に智惠で光るやうになり、淡紅色を帶びてゐた頰から顎のあたりに髯を剃つた跡が靑く〳〵顏の色もいたく褪せたのが眼に付いて、私はうたゝ、歲月の靑春を蝕むことの劇しきを心の中に歎いたのであつた。私は自ら省りみて自分は靑春といふ時がなかつたやうに思はれるが、三上於莵吉を初めて知つた時分から、いかに彼がうら若い戀をして來たかを思つてみると、彼は實に靑春そのものゝ感があつた。

彼は廣津和郎と共に、他の多くの早稻田の人のやうに、決して生活に臆病な人間ではない。二人とも根が良家育ちが變性して、不良性を帶びた坊ちやんであつて、ほんとの不良兒にならなかつたのは無論、教育と智識の調劑が利いてゐるからである。二人とも所謂精神的冒險家であつて、自分の心に照して決して虛僞の生活をしてゐない。對座接觸の間にどこか性情の眞摯なところが感じられるのである。

葛西善藏君や宇野浩二君が時々やる樣に、是等の人達の逸事を原稿に書き、小說にして

賣るのは、もう私のやうな年になつてすることではない、のみならず、三上君とは、そのとほり可なり長い間の知り合で、向ふの方から見ると、私の事にもいろんな觀察があらうと思ふ。

自分で云ふのも妙だが、島村抱月氏が門下の有象無象を率ゐて、頼まれもせぬのに自然派軍の一方の壘を堅めてゐた頃、私は、それが島村氏自身を低小にするものだと思つて、寧ろ氏の爲めに喜ばなかつた。それが度々筆になつて外に出た。そいつを狹量の島村氏は、私が何か他に含む處があつて、さうするのだと思つて、氏を取り卷いてゐる左右の有象無象に洩す。左右の有象無象は倍々忠義振りして、陰に陽に私を敵視してゐたが、自然主義の全盛は決して長くは續かなかつたのである。

早稻田に來つて學ぶ者も數が多くなつた。寧ろ自然主義の末流に對して慊焉たらざる、自由な學風をさへ生ずるに至つた。乃ち三上於菟吉君などを始めて見た時分に、彼の輩儕は殆ど悉く、もう自然主義の早稻田を繼續する者でないことを看取して、私は獨りで心に肯いたのであつた。そこで意外にも彼等は、陋巷に窮居してゐた私の斷簡零墨までも興味を以て讀んでゐてくれたのであつた。僕は決してその爲めに有頂天にはならなかつたが、一葉落ちて天下の秋を知る。「自然派の橫暴はもう長くはないよ。」と、當時矢來山里の寓に蟄居してゐて、さう思つた。それから私は間もなく東京を去つて關西の方へ放浪の旅に出掛けた。その留守の間に所謂文藝協會の分裂も起れば、自然派の大本山「文章世界」から田山花袋氏が退く時も來たのであつた。(尤もそれは別な事情からであつたらうが)少くとも偶然にせよ、總本山が從來の勢ひを繼續しない時が來た。又その頃谷崎潤一郎氏は自然派と全然相關せざる「刺靑」「幇間」を以て、突如として文壇の一方に興隆し、些の自然主義の風化に浴せぬ長田幹彥氏は「零落」「旅役者」によつて一時に名を揚げた。之より先「白樺」の一派に、夙に、無理想沒人道の自然派に對して、反對を聲明して起つてゐたものがあつたが、まだ天の時到らざるものがあつた。しかし時は遂に來つたのである。

つい話は大きくなつたが、元に戾つて、私の一年間編輯に從事してゐた、第二期「早稻田文學」の第一年――明治三十九年の頃には、島村抱月氏は、明かに文學上の理想主義を

聲明したのであつた。私は後進として島村氏と田山氏とを殆ど同時に知つた。田山氏が自然派を稱へたのは、その前から長い間の自修教養で、自ら發明して其處に往つたのである。然るに島村抱月氏は、英國四年間の留學中の修養から言つても、又留學前、極初期の早稻田文科の教育から言つても、抱月氏が自然主義を口にするのは、あまりに盲人の一足飛びであつたのだ。私は、早稻田を背負つて立たねばならぬ抱月氏の威重の爲めに、切にその輕擧を悲しんだのであつた。諫言耳に逆らひ、忠臣遠ざけられるではないが、早稻田が文壇で鼎の輕重を問はれるやうになつたのは、島村氏及びその黨與が「文章世界」の田山氏に應呼して自然主義を唱和した時に始まる。私は一日、そのいかにも從來の島村氏の調子にしては、あまりに皷から棒の如き文學思想の豹變の甚だしきを發見して驚いたことのあつたのを記憶してゐる。何だか餘計な事をいつて死屍に鞭つやうであるが決してさうぢやない、むしろ追惜するのである。

之を要するに早稻田の空——牛込近在にごろ〳〵してゐた若い人の中で、附燒刄でなく性格や本能から所謂早稻田の風化から自由に解放せられてゐる人を見たのは三上君などが始めてゞあつた。

廣津君と三上君と二人の秀才があつて、私は始めて稍々賑かさを感ずるのである。

（十一年六月初旬。時事新報）

大正十二年六月二十日印刷
大正十二年六月廿五日發行

秋江隨筆
定價金貳圓參拾錢

著作者　近松秋江

發行者　東京市神田區表神保町十番地　福岡益雄

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴卷町四百三番地　谷口熊之助

印刷所　東京市牛込區早稻田鶴卷町四百三番地　金星堂印刷部

發行所　東京市神田區表神保町十　金星堂
電話神田　三八五三番　四八三一番
振替口座東京三三二八番

隨筆感想叢書

一家一卷、各獨自の色彩と主張を持つて、讀者をして宛も著者その人に面接するの感あらしむ。近來創作物よりも賣行熾なる叢書は是也。

三六版ボプリン表紙新裝美本
各卷共ポイント組四五百頁
定價 各冊不同 送料金六錢宛

1 三筋町より

森田恒友氏裝 價一圓八十錢 久保田万太郎氏

氏こそはまことに詩人であるあえかにも古り朽ちてゆく夢と傳統の姿に最後の悼歌を捧ぐる詩人である。氏のユニックな筆は珠玉のやうに寂しくつゝましく光つてゐる。

2 藝術を生む心

森田恒友氏裝 價一圓八十錢 藤森成吉氏

氏は若き時代に最も鋭き理解を有する人である。その敏感な藝術的良心に充ちた文藝評論と、細やかな神經の行き亘つた人生批判は、現代人の胸に深き共鳴を呼ぶであらう

3 文藝春秋

森田恒友氏裝 價一圓七十錢 菊池寛氏

現下文壇の第一人者たる氏が最近の感想全部を收め添ふるに世評高かりし小品戲曲各數篇を以てした。氏の雄勁潑溂の筆は何人の心にも強き印銘を殘さないでは止まぬ

4 藝術家の喜び

佐藤春夫氏裝 價一圓六十錢 佐藤春夫氏

その眞摯な考察と近代的の憂鬱、而も纎細なロココ風の情緒、——殉情の人としての著者の風格はこの集に於て最もよく現はれてゐる。——こよなく藝術的な一卷である。

5 點心

森田恒友氏裝 價一圓八十錢 芥川龍之介氏

點心とは定食以外の小餐である。小說戲曲を飯とすれば「私は點心でも喫するやうにこれらの隨筆を草した」と著者は序文で言つてゐる。此滋味と香氣に溢れた一餐をすゝむ

6 文藝夜話

鍋井克之氏裝 價一圓八十錢 宇野浩二氏

宇野氏は叫ぶ人ではない。然し氏は微笑する。或は微苦笑をする。凡てを理解し凡てを味到してその印象をペーソスに充ちた筆で語り出る。氏の隨筆は隨筆中の隨筆である

7 朱き机に凭りて

森田恒友氏装 價二圓二十錢　里見弴氏

著者唯一の感想集として最も珍重さるべき一卷である。一念藝術の道に思を潜めて常に精進怠ることなき氏の全面容は悉きて悉く本書中にある。心讀して得る處多き書だ

8 人間雜話

森田恒友氏装 價一圓八十錢　久米正雄氏

眞情流露といふ言葉は本集の形容語として造られたものゝやうだ。明るい快活な、才氣に溢れた、而も優しみに充ちた氏の姿は何の虛飾もなく是等の雜文に泌み出てゐる

9 塵勞

森田恒友氏装 價一圓五十錢　山本有三氏

劇作家として新劇界の指導者として近來目覺しい活躍を示しつゝある著者の感想評論集である。主として演劇に關する評論を收め、加ふるに二三の小品飜譯を以てした。

10 秋江隨筆

森田恒友氏装 價二圓五十錢　近松秋江氏

秋江氏は夙に隨筆家として名を爲せる人である。眞に日本人的な、純粹な、淸雅な興趣は、本書に收めた氏のもの寂びた紀行、隨筆のうちに、掬めども盡きぬものがある。